

僕と戦極姫と召喚獣

京勇樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼、吉井明久はある少女を守りたくって剣を振るった

だが、その行動は明久の心に大きな傷と闇

そして、悲しみを産んでしまった

そして、少女が転校してきたことで

止まっていた時計の針が動き出す

2018年、1月6日完結

皆さん、ありがとうございました

目次

試験召喚戦争編

プロローグ 動き出す針

設定（6月8日追加）

始まるAクラス

自己紹介 Fクラス編

Dクラス戦 その1

対Dクラス戦 終

驚愕の帰宅 道しるべ

転校生 再会

恐怖の昼休みに守護神現る

Bクラス戦 開戦！ そして……

対Bクラス戦 打倒キノコ!!

Bクラス戦終了！ そして、戦後対談

Aクラスへの宣戦布告

Aクラス対Fクラス その1 双子

Aクラス対Fクラス その2 軍師

Aクラス戦 その3 寡黙と開放

Aクラス戦 その4 悲劇

悲劇の後

病院 過去話

病院 決意を固める者たち

Aクラス対Fクラス 再開

A対Fクラス戦 終

おまけ

138 134 130 118 112 101 96 87 83 79 72 64 52 45 38 29 26 20 13 10 6 1

おまけその1 王様ゲーム	146
シスタークライシス	152
休日デート	162
文化祭編	
出し物の決定と騒動の始まり	168
取引	175
試食の悲劇	180
始まる文化祭	185
営業妨害	190
新たな仲間との共同戦線	196
誘拐事件	200
黒幕の正体	207
二日目の始まり	210
決勝戦	214
解決	219
打ち上げ	229
おまけその2	
二人の出会い	234
二人の出会い その2	239
二人の出会い その3	247
オリエンテーリング編	
オリエンテーリング 始まり	251
伝説の傭兵?	257
救助活動	261
如月グランドパーク編	

如月グラウンドパークへ	267
現代の忍者	270
お昼の攻防戦	274
アーチャー、現る	278
追加戦力	281
昼食	287
デートの終わり	291
強化合宿編	
始まりとトラブル	295
いざごぎの始まり	299
バカ共の騒動	303
反撃の狼煙	306
作戦会議	309
出陣	312
解決	315
夏休み編	
夏休み、始まる	320
一日目、前半	325
一日目、中	329
一日目、後	334
沖縄旅行 二日目 1	338
沖縄旅行 二日目 2	343
沖縄旅行 三日目	348
殴り込み	352
始まり	357

変態	363
怒りの一歩	368
決着	373
復讐者	378
幕開け	381
軍師の休息	386
水族館エリア	389
軍師と弓使い	392
帰路へ	395
進展	398
最終章	
招待	402
始動	405
復讐者の宴	408
絶体絶命	411
推参	415
エピソード 未来へ	419

試験召喚戦争編

プロローグ 動き出す針

「……また、この季節か……」

そう呟きながら歩いているのは、左目に眼帯をしている茶髪の少年だった。

少年が見上げている視線の先には、桜が満開に咲いている。

しかし、少年にとってはどうでもよかった。

「……は……元気かな……」

そう言いながら少年、吉井明久よしいあきひさは歩き始めた。

そして、歩いていると進路上に校門が見えた。

その校門のところには、筋骨隆々の巨漢が立っている。

明久は男性の前で止まり、

「おはようございます、西村先生」

と、礼儀正しく挨拶した。

彼の名前は西村宗一にしむらそういちと言い、通称〈鉄人〉である。

その理由は、彼の趣味にある。

彼の趣味は、筋トレ、トライアスロン、レスリング。なのである。

「おはよう、吉井……どうした？ 酷い顔だぞ？」

西村は挨拶すると、心配そうな表情で明久を見た。

「あはは……ちよっと、昔の夢を見まして……」

と、明久が暗い表情で言う

「そうか……無理はするなよ？ なんだったら、早退してもいいが……」

「初日から、そんなことはできませんよ」

「そうか……ほれ、お前の組分けだ」

明久の言葉を聞くと西村は、脇に抱えていた箱から一通の封筒を取り出して、明久に渡した。

「ありがとうございます。しかし、なんでこんな面倒な方法で発表してるんですか？」

明久は貰った封筒を開けながら、問い掛けた。

確かに、疑問に思うだろう。

普通ならば、大きな掲示板等にクラス毎に掲載して、発表するのが一般的なのだ。

明久の質問に、西村は頬を掻きながら

「この学園は世界で初めて、試召戦争システムを採用しているからな。その一環だ」

「お疲れ様です」

試召戦争システムとはなにか？

それは、生徒本人のテストの点数を使って行われる戦争である。

しかし、戦うのは生徒本人ではない。

戦うのは、生徒が召喚する〈召喚獣〉である。

この召喚獣、生徒が受けたテストの点数が直接、力になるのだ。

そしてそれに伴い、この学園は世界で初めて、テストの上限を決めてないのだ。

そして、成績優秀者から上はAクラス。最下位はFクラスまで分けられるのだ。

そして、クラス分けされるに辺り

クラス設備も変えられるのだ。

そして、試験召喚戦争はそのクラス設備を賭けて戦うのだ。

しかし、下位クラスが上位クラスに勝つのは容易ではない。

そのため、下位クラスは勝つために

策略を巡らせ

召喚獣の操作技術を向上し

そして、テストの点数を上げるのだ。

この学園は、それを用いて勉強意欲を上げるのが目的なのだ。

そして、明久は封筒を開けて、中から一枚の紙を取り出して、広げた。

そこには

吉井明久 Aクラス

と、書いてあった。

それを見た明久は、紙を畳むと封筒に仕舞って

「それじゃあ、行きますね。西村先生」

「ああ……」

西村は明久を悲しそうな顔で、見送った。

「誰か……あいつを助けてくれ……」

そう言ってる西村の顔は、悲壮感がアリアリと刻まれている。

そして、しばらくそうしていると

「あ、あの……すいません」

気付くと、西村の背後に1人の女子が立っていた。

髪は腰まで伸ばしており、それをリボンで1つに纏めている。

その雰囲気は大和撫子と言えるが、どこか凛とした雰囲気纏っている。

「おお！ すまん、少しボーっとしていた。ん？ 見覚えのない顔だな？」

「あ、はい。今日付けで編入してきた者です」

と、女子はペコリと頭を下げた。

「ああ、話は聞いている。2階の職員室に向かえ。場所は分かるか？」

「はい、大丈夫です。あ、それと、1つ聞きたいんですが」

「なんだ？」

「あの………のクラスはどこですか？」

「なに？ お前はあいつの知り合いなのか？」

西村は少女が告げた名前を聞いて、眉をひそめた

「はい、幼馴染みで………命の恩人です」

「そうか、お前が……あいつが助けた……」

西村は少し考えると

「本来、教えるのはいけないのだがな。特別に教えてやる」

「あ、ありがとうございます！」

少女は西村の言葉に、目を輝かせながら、頭を下げた。

「いや、一度しか言わんぞ？ あいつは だ」

西村の告げたクラスを聞いた少女は、嬉しそうに微笑むと

「ありがとうございます。それでは、職員室に向かいます故」

「ああ」

西村が見送るなか、校舎に向かった。

「……あいつならば、助けられるかもしれんな……」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

教室に向かっていると明久は、クラスの前で見慣れた姿を2つ見つけた。

「霧島さん、雄二。おはよう」

「……おはよう、吉井」

「明久か、おつす」

「雄二がここに居るってことは、雄二もAクラス？」

「いや、俺はFクラスだ」

明久の質問に雄二は、首を振って否定した。

「え？ 雄二がFクラス？」

「ああ、やりたい事があるからな」

「そっか、下剋上だっけ？ 頑張ってるね」

「ああ、そういやあ、お前はAクラスか？」

「うん、そうだよ。だから、Aクラスで待ってるから、頑張ってるね。それじゃ」

明久はそう言うと、教室に入った。

それを二人は見送った。

が

「翔子……明久の顔」

「……うん、辛そうだった」

翔子の言葉に雄二は、右の拳を左手に叩き付けた。

「くそっ！ 俺達は明久に助けられたのに……俺達は、何も出来ないのかよ！」

この二人は以前、ある理由により仲違いをしていたのだ。

それを明久が仲介して、仲直りして、現在は付き合っているのだ。

二人はそれを恩義に感じており、時々、明久をカバーしている。

しかし、二人は気付いていた。

明久の奥底には、とても深い闇と悲しみが潜んでいることを

設定（6月8日追加）

吉井明久よしいあきひさ

2年Aクラス所属 次席クラス

得意科目 世界史 日本史 家庭科 平均500点台

苦手科目 英語 数学 科学 平均200点後半

左目に眼帯を着けているが、圧迫感は一切無い

剣を使わせれば、右に出るものは居らず通称〈剣聖〉と呼ばれるほど

しかし、ある理由から今は剣は握れないでいる

握ると、動悸が早まりまともに立っていられなくなる

上杉謙信とは幼馴染であり、ライバルでもあり、婚約者

心優しき少年で、〈守るためならば、剣を取る〉と決めている

〈観察処分者〉ではあるが、それは自ら立候補してなった

召喚獣

蒼い侍の鎧を着ており、腰には大小二本の刀を装備している

手甲は攻撃にも防御にも使える優れもの

腕輪 切断 20点消費

あらゆるものを切れる能力（腕輪の攻撃だろうがなんだろうが切れる。手刀でも使える）

上杉謙信うえすぎけんしん

2年Aクラスに編入された女の子

腰まで伸ばした黒髪をリボンで纏めている（そのリボンは明久から貰ったもの）

大和撫子という表現が似合う少女だが、凜としており、一本芯も通っている

剣でかなりの腕を誇り〈青の軍神〉と呼ばれている

正義を重んじているが、かたつくるしい所はない

明久に会うまでは自分が一番強いと思っていたが、明久に負けて、明久の強さを知ってからは惹かれて

明久が左目を負傷したのと、剣を握れなくなったのに関わって、気にしている

スリーサイズ&体重 書かせるか！（作者はログアウトしました）

得意科目 古典 現国 家庭科 保体 軒並み平均400点台

苦手科目 英語 化学 平均300点前半

召喚獣

原作の戦装束を着ていて、腰には刀を装備している（わからない人はp i x i vで検索をお願いします。それでも出てこない場合は、ググってください）

腕輪 氷結 50点消費

氷を操る能力で、武器を作ること可能。広範囲に展開も可能で、相手を凍らせることもできる

原作との相違点 雄二と翔子が付き合っている

雄二はFFF団に所属してなくて、明久を助けたいと思っている

明久は……………童貞では……………無い

たけだのぶしげ
武田信繁

2年Fクラスに編入された男子

ショートカットに切りそろえられた黒髪に、人当たりの良さそうな

感じの好青年

しんげん
双子の妹に信玄という妹が居て、自他共に認めるシスコンである。
ゆきむら
幸村と付き合っていて、その仲は良好。

明久の知り合いにしては、武道よりも知識面に長けており、幼馴染内では軍師という通称もあるほど

常に二手三手先まで読んでいるために、作戦立案に長けている。

得意科目 古典 世界史 日本史 平均400点後半

苦手科目 英語 科学 平均300点台

腕輪 ???（アイデア募集中です）

召喚獣

原作の着物を着ていて、手には槍を背中には火縄銃を装備している。

たけだしんげん
武田信玄

2年Fクラスに編入した女子

武田信繁の双子の妹

小柄な体躯に長い薄紅色の髪の毛が相まって、希薄な印象を受けるが、真逆で一本太い芯が通っている

武田家の次期頭首で、本人も英才教育を受けている。

ただし、ドが付くほどのブラコンである。

本来だったら、家督は兄である信繁が継ぐ筈だったが、父親は信玄を選んだ

兄もそれを了承して、信玄を補佐する道を選んだ。

得意科目 現国 古典 日本史 保険体育 平均400点台

苦手科目 家庭科 数学 科学 300点前半

召喚獣

原作の戦鎧を纏っていて、腰に刀。右手に風林火山と書かれた采配を持っている。

腕輪 風林火山

風 味方の移動速度を倍にする（自分も可能） 100点消費

林 相手から味方の召喚獣を認識し辛くする（自分も可能） 10

0点消費

火 味方の攻撃力を倍にする（自分も可能） 100点消費

山 味方の防御力を倍にする（自分も可能） 100点消費

このように強力な腕輪だが、同時発動は不可能。

さらには、それぞれ弱点があり

風は防御力が下がり、林は急に動くで見つかりやすく、火は移動速度が下がり、山は動けなくなってしまう。

しかし、状況を見極めて発動すれば強力なのは変わらない

さなだゆきむら
真田幸村

2年Fクラスに編入した女子

信繁の彼女

膝下辺りまで伸ばした薄紫色の髪をツインテールにしている、体は小柄

しかし運動能力は高く、槍を使わせれば随一の腕を誇る。

信繁と信玄に絶対の忠誠を誓っている。

冷静に行動しようと心がけているが、時折熱くになってしまうのが玉に瑕。

得意科目 家庭科 保険体育 現国 平均400後半

苦手科目 英語 数学 科学 平均300点前半

召喚獣

原作の戦装束を身に纏っていて、手には月型十字槍を持っている。

腕輪 ??? (アイデア募集中です)

始まるAクラス

明久は教卓の近くに立っている少女
上杉謙信を見て、驚いている。

そして、そんな明久を翔子は見逃してなかった。

(……あの子が、吉井の幼馴染?)

「では、上杉さんはあの席に座ってください」

と、高橋女史が示したのは、明久の左隣だった。

明久は死角になっていて、気付かなかった。

「はい」

謙信は頷くと、ゆっくりと歩き出した。

そして、明久の隣に到着すると

「……………久しぶりですね、明久……………」

と、辛そうな眼で、明久を見た。

「……………うん、久しぶりだね。謙信」

明久も目を細めて、挨拶した。

その表情は、複雑な感情が入り混じったものだった。

そして謙信は、明久の左側の席に座った。

「それでは、設備の確認をしたいと思います。リクライニングシートにシステムデスク。個人用冷蔵庫にパソコン、冷暖房。これらの設備に、不備はありませんか?」

(あるほうが不思議だよ……………って言うか、どんだけお金をつぎ込んだのさ?)

明久は確認しながらも、そう思った。

「皆さんの教材はもとより、冷蔵庫の中身に関しても支給します。もし、他に欲しいものがあれば遠慮せずに申し出てください」

(そこまでするか)

「それでは、自己紹介を始めたいと思います。廊下側の人からお願いします」

高橋女史の一言で、自己紹介が始まった。

「木下優子です。よろしくお願ひします」

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
そして、明久の前の生徒が終わった。

(僕だな)

「吉井明久と言います。趣味は料理で、特技は剣術です。今は握れませんが……………」

と、明久が苦笑いしながら言うと、謙信は辛そうな表情をした。

明久が座ろうとすると、教室内が騒がしくなった。

「吉井明久って、あの〈観察処分者〉か？」

「なんで、Aクラスに居るの？」
等々だった。

すると、高橋女史が手を叩いて

「皆さん、静かにしてください。彼は自ら立候補して、観察処分者になったのです。ですから、皆さんの思ってるような、マイナス要素は一切ありません」

高橋女史の説明で納得したのか、全員黙った。

そして、自己紹介が再開されたのだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
「それでは、最後にこのクラスの代表を紹介します。霧島さん。お願いします」

「……………」

高橋女史に呼ばれると、霧島が前に出た。

「…………霧島翔子です…………よろしくお願いします」

(短いよ!?)

明久は、霧島の自己紹介のあまりの短さに、驚いていた。

「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表に協力しあい、研鑽を積んでください。これから始まる〈戦争〉で、どこにも負けなないように……………」

戦争の言葉に、明久はあるフラッシュバックが起きた。

目の前には

真っ赤に染まって倒れている、男…………

そして、自分の視界は真っ赤に染まって

手には、血に濡れた……………

「明久！」

気付けば、明久の両手を謙信が握っていた。

「……………ごめん、ありがとう」

明久は、脂汗を滲ませながら、謙信に微笑んだ。

「それでは、自己紹介も終わったので、授業を始め……………失礼」

高橋女史は一言謝ると、携帯を取り出した。

「はい、高橋です……………はい……………はい、わかりました」

通話が終わったのだろう、高橋女史は携帯を仕舞うと

「FクラスがDクラスに宣戦布告したそうです。ですので、これから自習にします」

と言うと、教室を出て行った。

恐らく、呼び出しに対応するために待機するのだろう。

すると

「ごめん、僕は少し休むね……………」

と謙信に言うのと、明久はリクライニングシートに身を沈めた。

そして、少しすると、静かな寝息を立て始めた。

謙信はそれを見て

「あなたは……………まだ、囚われているのですね……………」

辛そうな表情をして、辛そうに呟いた。

自己紹介 Fクラス編

(さてと、現状の戦力だと厳しいな……………)

坂本雄二は教卓の位置から教室を見回してから、そう思った。

(秀吉に、島田。それにムツツリーニが居るのは思ったとおりだ……………)

雄二が居るのは、最低成績の生徒達が集められるクラスのFクラスだ。

(俺は本気を出せばAクラス並だが、最低でも後一人は欲しいところだな……………)

そう考えていると、ドアが開いた。

「坂本くん。机に座ってください。自己紹介を始めたので「了解」

雄二は入ってきた先生の指示に従い、机に座った。

(席順は決まってねーがな)

「皆さん、おはようございます。私の名前は……………福原慎ふくはらしんと言います」

先生は少し黒板のほうに向いたが、名前を書かないで名乗った。

(チヨークすらねーのかよ……………)

あまりにも酷すぎる設備に、雄二は頭を抱えた。

(なんだろうか……………頭が痛くなってきたぜ……………)

勉強させる気があるのかよ。と、雄二が俯いていると

「それでは、設備の説明をします。ちゃぶ台と座布団です。これらの設備に不備はありませんか？」

(ありまくりだろ!!)

雄二のちゃぶ台は穴が空いていた。

「先生！ 俺の座布団、綿がほとんど入ってません！」

「我慢してください」

「せんせー！ 窓が割れてて、風が入ってくるんですけどー！」

「後でゼロハンテープとビニールを支給するので、自分で補強してください」

「先生、俺のちやぶ台。脚が折れてるんですけど?」

「我慢してください」

「出来るか!!」

「冗談です。これで直してください」

と、先生は木工ボンドを置いた。

予想外すぎるこの酷さに雄二は

(こんなんでいいのかよ!!)

と、思っていた。

「他にはありませんね? それでは、自己紹介を始めます。廊下側の人からお願ひします」

そう言われて、女に見える男が立ち上がった。

「ワシの名前は木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。よろしく頼むぞい」

(秀吉、お前の演劇能力はあてにさせてもらうぜ?)

「……土屋康太……」

(相変わらず無口だな、ムツツリーニ。保健体育の帝王)

「島田美波です。日本語は読み書きが出来ません。趣味は……」

(島田か、こいつは数学だけならBクラス並だから使え……)

「吉井明久を殴ることです☆」

(テメエは戦力外だ、バカヤロウ)

その後も自己紹介が続けられたのだが

(正直使い物にならねえ……どうすっかな。これだと、下克上ができねえんだが)

と雄二が考えてると、ドアが開いて女子が入ってきた。

「はあ、はあ……お、遅れてすいません……」

(おいおい……とんでもない切り札だぞ)

雄二は、入ってきた女子の名前を知っていた。

「ああ、ちょうどよかった。今、自己紹介をしているところなので、あなたも願ひします」

「は、はい! ひ、姫路瑞希と言います! 皆さん、よろしく願ひします!」

(しっかし、なんでこいつが?)

雄二は彼女、姫路瑞希が居ることに首を傾げた。

(こいつは確か、成績は次席クラスのはずだぞ?)

「はい！ 質問です！」

「は、はい！ なんですか？」

「どうして、ここに居るんですか？」

(おい、その質問の仕方は失礼だろ)

しかし、その理由を雄二も聞きたかった。

「え、えつと……試験中に熱で倒れてしまいました……」

(なるほど、途中退席か……)

ここの試験は、途中退席は無得点扱いなのである。

「ああ、なるほど。俺も熱(の問題)が出たから、Fクラスに……」

「ああ、化学の問題だろ？ あれは難しかった」

「俺は、弟が前日に事故にあったって、聞いて……」

「黙れ、一人っ子!!」

「俺は、前日の晩に彼女が寝かせてくれなくつてさ」

「今年一番の大嘘をありがとう！」

(こいつら……なんだろうか、目標が遠のいた気がする)

クラスメイト達のあまりのバカさ加減に、雄二は眩暈を覚えた。

「坂本君、君で最後です。お願いします」

「ういっす」

雄二は先生に促されたので、立ち上がると、教卓の位置に立った。

「俺の名前は坂本雄二だ。代表とでも坂本とでも、自由に呼んでくれ」

そして雄二は、教室を見回すと

「Aクラスはリクライニングシートに冷暖房完備らしいが………不満はないか？」

「大ありジャアアアアアアアアアアアアアア!!」

雄二の問いかけに、クラスほぼ全員の心の叫びが返ってきた。

(うおー！ 窓が揺れたぞ!! こいつは予想以上だ!!)

だが、今は使える！

と、雄二は思った。

「Aクラスだって、同じ学費だろ!!」

「改善を要求する!!」

(まあ、気持ちはわからんでもないがな)

「そうだろうそうだろう! だから俺達はAクラスに試験召喚戦争を仕掛ける!!」

と雄二が言った。その瞬間

全員一気に、静かになった。

(つて、おい……)

その落差に、雄二は内心突っ込みを入れた。

「勝てるわけないだろ」

「無理に決まってる」

「これ以上、設備を落とされてたまるか」

「姫路さんが居れば、他になにも要らない!!」

(最後の奴、表に出ろ)

「無理じゃない! その証拠を今から教えてやる! おい、土屋。姫路のスカートを覗いてる場合か」

雄二は冷や汗を流しながら、ある一人の男子に向けた。

「……………っ!」

(首を振って否定してるがな、頬に畳の跡がくつきりと残ってるからな?)

「は、はわ!」

(気付けよ、姫路)

「さて、こいつの名前は土屋康太。もう一つの名は、かの有名な寡黙なる性職者だ!」

雄二が土屋のもう一つの名前を言うと、ざわめきが起きた。

「……………事実無根!!」

と、土屋は首を振って否定するが

「バカな! 奴がそうだと言うのか!」

「見ろ! 覗きの証拠をまだ隠そうとしてるぞ!」

「ああ、ムツツリー二の名に恥じない行為だ!」

クラスの男子達は興奮気味に喋った。

(本来は、恥ずべき名だがな)

土屋康太

またの名を、寡^{ムツ}黙^{ツツ}なる性^リ職^ニ者

本名はあんまり知られてないが、この名前は全学年の全生徒が知ってるだろう。

男子からは畏敬と畏怖の感情を込めて、女子からは侮蔑の念を込めて呼ばれている。

(名前の由来は、ムツツリスケべなんだがな)

「姫路のことは皆も知つての通りだ」

と雄二が言うと、男子全員の視線が姫路に集中した。

「おお！ そうだった、彼女が居るんだった！」

「え？ わ、私ですか!?!」

「ああ、うちの主戦力だ。頼りにしてるぞ？」

「彼女ならば、Aクラスに引けをとらない!!」

「姫路さんさえ居れば、なにも要らない!!」

(おし、お前。こつちに来いや)

そして、一旦視線を島田に向けるが、雄二はスルーした。

「ちよつと！ ウチは!?!」

そのことに島田が抗議するが

(知るか)

雄二は無視した。

「それに、木下秀吉も居る！」

「む？ ワシかのう?」

(おう、お前だ。演劇のスペシャリスト)

「おお！ 演劇部のホープ！」

「確か、双子のお姉さんがAクラスの……………」

「木下優子……………だったか？」

(その通りだ)

「ねえ、ウチは!?!」

「黙ってる」

雄二は島田にきつく言い放った。

「な!？」

「島田……お前は確か、数学だけならBクラス並だったな？」

「そうよ！　ウチは数学だけなら、Bクラスの上位並みよ！」

「そうかそうか……話になるか」

「なんでよ!？」

「俺の言葉を聞いたか？　俺達はAクラスに戦いを挑むんだぞ？」

「聞いたわよ！　だから、ウチも十分に戦力になるわよ！」

「たかが、Bクラス程度の数学でか？　相手はAクラスだぞ？　どん

だけの点数さがあると思ってるんだ？」

「だ、だったら！　木下はどうなのよ!！」

「秀吉には、天才的な演劇能力がある。だから戦争以外でも、十分に役

立つ。だけど、お前はどうか？　頼みの綱はBクラス並の数学だけ。

しかも、他の科目はFクラスでも最低ランクだ。そんなお前が、役に

立つか？」

「グウ………」

雄二の正論に、島田は唸ってから俯いた。

(ふん……それに、お前のことは個人的に嫌いだ)

雄二は島田に敵意を向けていた。

(俺達の恩人の明久を殴るだど？　そんなこと、許すか)

雄二は視線を前に戻して

「少しわき道にそれたが、俺も本気を出そう！」

「そういえば、坂本は昔、神童って呼ばれてなかったか？」

「凄い！　それだったら、Aクラス並が複数居るのか！」

「勝てる！　この戦争、勝てるぞ!!」

(まあ、お前達は捨て駒にしかならんがな)

雄二はもはや、クラスの男子達（一部を除き）を見限っていた。

「そうだ！　俺達は勝てるんだ！　手始めに、Dクラスに宣戦布告す

る！　その大役は……島田、行ってこい」

「なんでよ！　それに、下位クラスからの使者は大抵、酷い目にあうん

でしょ!？」

雄二からの指名に、島田は非難めいた視線を雄二に向けた。

「大丈夫だろ。流石に、女には手出ししねえだろ」

「本当でしょうね？」

「大丈夫だから、行ってこい」

と、雄二がなんの根拠もなく言う

「わかったわよ……」

と、島田は渋々で行った。

(さて、島田は行ったな。まあ、安全性は皆無だが)

と、雄二は黒い笑顔を浮かべると

(さて、作戦はシンプルに行くか)

と、作戦立案を始めた。

数分後、島田はかなり疲れた様子で帰ってきて、Dクラス戦には参加したくないとダダを捏ねたが、雄二が黙らせて、参加が決まった。

Dクラス戦は、午後からの開戦になった。

Dクラス戦 その1

時間 午後1時

場所 廊下

ここでは今、Fクラス対Dクラス戦が行われていた。

しかし、状況はFクラスが劣勢だった。

しかも、副隊長を任せられている島田は……

「だ、誰か助けて！ このままじゃ、色々危ない！」

「フッフ……無駄ですよ、お姉さま。豚共は今、全員足止めされてます！」

Dクラス所属、清水美春に連行されかけていた。

隊長の秀吉はDクラスの男子の一人と戦闘中で、助けには来れない。

「い、いや〜！」

半ば半泣きになった。

その時

「危ない島田！」

どうやら、戦闘を終えたらしい須川が手助けした。

すると

化学

Dクラス 清水美春 VS Fクラス 須川亮

0点 50点

どうやら、島田との戦闘でギリギリまで減っていたらしく、一撃で0点になった。

すると

「戦死者は補習——！」

と西村が、物凄い勢いで走ってきた。

「た、助かった……ありがとう、須川！ 西村先生、早くその危険人物を連れてってください！」

「おお、清水か！ 戦争終了まで補習漬けにしてくれる！」

「お姉さま！ 諦めませんからね！ 卒業までに、お姉さまを美春の

ものにしますからねー！」

なにやら不穏当な発言をしながら、清水は西村に連行された。

「島田。お前、苦勞してんだな………」

「なんか、居た堪れない気分になるから、それ以上言わないで………」

須川の一言に、島田は涙目で俯いた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、しばらくすると

「木下、大変だ！」

「む？ 須川か。どうしたのじゃ？」

戦線も大分落ち着いたのか、秀吉が休んでいると須川が慌てた様子で走ってきた。

「Dクラスの奴ら、船越先生を呼びやがった！」

「なんじゃと!? 一気に勝負を仕掛けるつもりじゃな………仕方ない、雄二に対処を聞いてくるのじゃ！」

「わかった！」

須川は廊下を走って、Fクラスに向かった。

そして、しばらくすると

ピンポンパンポン♪

と、放送が始まった。

〈船越先生、船越先生〉

「む、この声は須川じゃな」

スピーカーから須川の声が聞こえて、秀吉はどうするのじやろうか？ と首をかしげた。

すると

「Aクラスの吉井明久くんが体育館裏で待っています。男と女の垣根を越えた話があったいそうです。繰り返しします」

「須川!? あ奴、なんてことを!!」

秀吉は須川のしでかしたことに、慌てた。

船越先生は45歳の独身女性で、仕事に熱中するあまり婚期を逃してしまい、最近では成績を楯に生徒にすら迫る始末なのだ。

つまり須川は、明久を生贄にしたのだ。

「こうしてはおれん！ 早く須川を止めんと!!」

と秀吉が駆け出そうとした、その時だった。

〈須川ー！ 誰が明久を使えって言ったー！ー！〉

〈だ、代表!? なんでここに!?〉

〈てめえが明久を使うからだろうが!! 誰が明久を使えって言ったー!〉

〈え、えっと、島田だ!〉

〈あいつは……っ！ とりあえず、お前は寝てろ!!〉

〈ゴフっ!?〉

須川のくぐもった声の直後、ドサリという音が聞こえた。

〈あーあー、船越先生。ここに寝てる須川^{バカ}を好きにしているですよ。それと島田、教室に戻れ。以上〉

「雄二よ、ナイスじゃ!」

雄二の采配に、秀吉がガッツポーズをしていると

〈フッフ……ここかしら〉

どうやらマイクの電源が切れてないらしく、船越先生の声が聞こえてきた。

〈見つけたわよ、須川くくん〉

〈ヒ、ヒイ!? 船越先生!〉

〈さあ! 今から、婚姻^こ届^れを提出しに行きましょう!〉

〈やめて! 来るな! 来るなあ!〉

〈ウッフッフッフ!〉

〈ひぎやアアアア!〉

その悲鳴を最後に、放送は途切れた。

「自業自得じゃ」

そして、そんなFクラスの行動にDクラスに動揺が走って、Dクラスは軒並み浮足立っていた。

「今じゃ! 一気に切り崩すのじゃ!」

秀吉の号令に全員従い、序盤はFクラスが制したのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

時は戻り

場所はAクラス

「明久……………」

眠っている明久を、謙信が憂いを含んだ顔で見ている。
すると

「こんにちは」

気付けば、木下優子、霧島翔子、工藤愛子の三人が居た。

「確か、木下さんに霧島さん。それに工藤さんの三人ですね」

「ええ、よろしくね」

「……………よろしく」

「よつろしく」

三人はそれぞれ、謙信に挨拶すると

「にしても、吉井くん。自習時間なのに寝てるのね」

「本当だね」

「……………今は、少しでも休ませてあげて……………」

優子が明久を起こそうとすると、翔子がその手を止めた。

「代表？」

「……………吉井は、闇を抱えてるから……………」

「闇？」

「っ！ あなたは、知って……………るんですか？」

翔子の言葉に、優子と愛子が首を傾げたが、謙信は驚いた表情で見た。
た。

「……………過去に助けられたの……………そして、吉井の歪いびつさと、悲しみを知った

……………」

うなずくと翔子は辛そうな顔で、明久を見た。

その明久は今安らかに寝ているが、少し、汗を掻いている。

「……………それで、あなたが吉井が話してた幼馴染？」

「そう……………ですね。確かに私は、明久の幼馴染で……………婚約者です」

「こ、婚約者!？」

謙信の言葉に、優子は驚いている。

「はい。家同士の取り決めですし、私達もお互いが好きですから
謙信はそう言いながら、ハンカチで明久の汗を拭いた。

しかし、その表情はとても悲しそうだった。

「明久は……私を守るために……とても大きな傷を負ってしまいました」

そう言いながら謙信は、明久の左目の眼帯にそつと触れた。

「この左目？」

「左目だけじゃありません。心にも、大きな傷を作らせてしまいました……」

と、話していると

ピンポンパンポン♪

「ん？ 放送だネ」

「なにかしら？」

〈船越先生、船越先生〉

「船越先生とは？」

「数学の先生よ。最近は悪い噂が多いけど」

謙信の質問に優子が答えていると

〈Aクラスの吉井明久くんが体育館裏で待ってます。男と女の垣根を越えた話が見たいそうです。繰り返します〉

「え？」

「よりによって、あの船越先生!?!」

「……こうしちや居られない!」

放送を聞いた翔子はその場で反転して、教室を飛び出そうとした。が、それを優子が止めた。

「代表、駄目よ！ 試験召喚戦争に関係ないクラスが干渉すると、ペナルティが科せられるのよ!?!」

「……そうだけど、このままじゃ!」

優子が必死に翔子を抑えていると

〈須川……！ 誰が明久を使えって言った……！〉

「……雄二？」

〈だ、代表!?! なんでもここに!?!〉

〈てめえが明久を使うからだろうが!! 誰が明久を使えって言った!〉

「え、えっと、島田だ!」

「あいつは……っ! とりあえず、お前は寝てろ!!」
「ゴフっ!」

須川のくぐもった声の直後、ドサリという音が聞こえた。

「あーあー、船越先生。ここに寝てる須川《バカ》を好きにしてくださいですよ。それと島田、教室に戻れ。以上」

「……雄二、グツジョツブ」

と、翔子が手を握っていると

「フフフ……ここかしら」

どうやらマイクの電源が切れてないらしく、船越先生の声が聞こえてきた。

「見つけたわよ、須川く〜ん」

「ヒ、ヒイ!! 船越先生!」

「さあ! 今から、婚姻届を提出しに行きましょう!」

「やめて! 来るな! 来るなあ!」

「ウフフフフフ!」

「ひぎやアアアア!」

その悲鳴を最後に、放送は途切れた。

「人を貶めようとするからよ」

優子の一言に、その場の全員は無言で頷いたのだった。

対Dクラス戦 終

午後4時頃

場所 廊下

そこでは、Fクラス対Dクラスの戦いが終わりを告げようとしていた。

「あれ、姫路さん？ Aクラスはここを通ってないよ？」

背後に居る姫路に対してそう言っているのは、Dクラス代表の平賀である。

どうやら、姫路がFクラスだとは思ってないらしい。

「え、えっと……Fクラスの姫路がDクラス代表の平賀君に現代国語で勝負を挑みます！」

「は、はあ……？」

「試獣召喚！」

そして、平賀の召喚獣を姫路の召喚獣が文字通り、一刀両断で撃破したのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「まさか、Fクラスに負けるとはな……」

「予想外だったか？」

「まあな。それと、姫路さんが居るとは」

平賀が視線を向けると、姫路は頭を下げた。

「す、すいません……」

「いや、予想外だったただけだ。それに敗因は、Fクラスを侮ってた俺にある」

平賀はそう言うと、多少落胆した様子で

「設備の交換は明日でいいな？」

と聞くが、雄二は首を振って

「いや、設備の交換はしない」

毅然と言い放った。

すると、Fクラスの面子に動揺が走ったが

「落ち着けお前ら！ 俺達のゴールはここじゃないだろ！」

雄二が大声で言うのと、落ち着いたのか静まった。

「設備交換をしないのなら、なにが目的だ？」

「ああ、合図をしたら、あれを壊してもらいたいんだ」

「そう言いながら雄二は、窓の外を指差した。」

「あれは……Bクラスの室外機か」

「ああ、先生には目をつけられるかも知れないが、設備の交換よりはマシだろう？」

「そうだな。じゃあ、これは和平交渉ってことになるのか？」

「ああ、そうなるな」

「狙いはAクラスか？」

「ああ。どうせ勝てないと思ってるんだろ？」

「ああ、だが、社交辞令として言わせてもらおう。勝てよ」

「は、本心じゃ違うくせによ。まあ、礼は言っておくぜ」

「ああ、じゃあな」

戦後対談が終わったのだろう、雄二たちは解散したが

「さて、島田」

「なによ」

雄二と島田だけは、Fクラスの教室に残っていた。

「なんで残されてるか、わかるか？」

「知らないわよ。それより、早く帰りたいんだけど」

「そうかい。そんじゃあ、教えてやろう。お前、今日の試召戦争で船越先生を呼び出すのに、なんで明久を使った？」

「ああ、あれ？ 吉井がAクラスに居るのが気に食わなかったから、オシオキしようと思ったのよ」

「あ？ オシオキだ？」

「そうよ。吉井の癖にAクラスに行くなんて生意気なのよ！」

島田がそう言った瞬間

雄二が島田の襟首を掴んで、壁にたたきつけた。

「がはっ!？」

島田は突然の事態に眼を白黒させた。

「お前、何様のつもりだ？」

「ぎ、坂本？ な、なにを!？」

島田は雄二の腕を掴みながら、非難がましい視線を雄二に向けた。
が

「もう一回聞けど。島田、てめえ、何様のつもりだ？」

「ど、どういうことよ！」

「明久はてめえの所有物だつて言いてえのか？ フザケんのも大概にしろよ」

「な、なんですって!？」

「お前になんの権限があつて、そんなことをするんだ？ お前は明久の彼女かよ？ あ？」

雄二はそう言いながら、島田を睨みつけた。

「な！ ウチが悪いって言うの!？」

「てめえのは、ただの独りよがりだ！ なんでもかんでも思い通りになると思ってたんじゃないぞ！」

「な、なんですって！」

「それに、他のクラスの奴に迷惑を掛けんじゃないよ！ てめえは常識のカケラもねーのか！」

「アンタになんの権利があつて、ウチにそんなことを言うのよ！」

「んなもんねーよ！ 俺が言ってるのは、常識で考えろって言うてんだよ！」

そう言い放つと雄二は、手を離れた。

すると島田は、咳込みながら座った。

「いいか、次に独断であんなことをしたら、問答無用で罰則を与えるからな。そのつもりでいろ」

雄二はそう言うと、鞆を持って教室を出た。

少しの間、咳込んでいた島田は、呼吸が落ち着くと

「吉井……………あんたのせいよ……………」

と、恨みがましい目つきで呟いた。

驚愕の帰宅 道しるべ

FクラスがDクラスを制した日の放課後

「なるほど、あんたが明久の幼馴染みか」

「はい、上杉謙信と言います。よろしくお願いします」

「おう。俺は坂本雄二だ。好きに呼んでくれ」

雄二達は帰り道で自己紹介していた。

雄二と謙信はお互いに握手すると

「そーいやあ、明久。昼間はすまなかったな。俺のクラスの島田が迷惑をかけた」

と雄二は、明久に頭を下げた。

「え？ なにがあつたの？」

明久は雄二の突然の謝罪に、困惑した。

「……吉井は寝てたから、知らないのも仕方ない」

「私が教えます」

謙信は明久に昼にあつたことを説明した。

すると明久は、顔を青くして

「よ、よりによって……あの船越先生なんて……」

と震えた。

「本当に悪かった！ 島田には厳しく言つといたし、次に同じようなことをしたら、厳罰をするって言つといたから、それで勘弁してくれ」

雄二はそう言いながら、両手を合わせて頭を下げた。

「ああ、大丈夫だよ……それにしても僕、島田さんになにかしたかな？」

と明久は頭を抱えた。

すると、十字路に差し掛かり

「んじゃあ、俺と翔子はこっちだ」

と雄二は、右の方を指差した。

「……吉井、上杉。また明日」

「またね」

「また明日」

「じゃあな」

挨拶をすると、雄二と翔子は右に明久と謙信はまっすぐ進んだ。

そして、若干気まずいのか二人は黙ったまま歩いていた。

すると、明久が

「そういえば、謙信の家はどこなの？」

と問い掛けた。

すると謙信は顔を赤くして

「え、えつと……………」

と下を向いた。

「謙信？」

「……………です」

「うん？ ゴメン、よく聞こえなかったから、もう一回言ってくれる？」

明久が催促すると、謙信は深呼吸して

「あ…………明久の部屋…………です…………」

と呟いた。

それを聞いた明久は、しばらく固まった。

そして、数回瞬きをすると

「謙信、ごめんね？ なんか聞き間違いしたから、もう一回教えてくれる？」

と明久が再度聞くと、謙信は顔を赤くして

「だから、明久の部屋です…………」

「リアライ？」

「なんで英語なのかわかりませんが、本当です」

明久が呆然としてみると、突如、明久の携帯が鳴った。

明久は携帯を開くと、画面を見た。

そこには

〈母〉

の文字。

「…………もしもし？」

『あ、明久？ 謙信ちゃんには会えたわよね？ っわけで、今日から

「一緒に住みなさい」

「なんでさああああああああ!？」

母親、吉井明恵よしいあきえの言葉に、明久は叫んだ。

『なによ、うるさいわよ?』

「なんで、そんなことになったの!？」

『ふむ、綺麗事で固めた言い訳と本音、どっちを先に聞きたい?』

「じゃあ、まずは綺麗事で」

『じゃあ、言うわね? あんた、いい加減へあの事へに決着をつけなさい』

「……………」

母親の言葉に、明久は口を閉じた。

『別に、全部を忘れるとは言わないわ。けど、いい加減に乗り越えなさい。あれが理由であんたと謙信ちゃんが不幸になるのは、吉井家うづちも上杉家あつちも容認出来ないの。あんた達には幸せになってほしいから』

「そう……………」

母親の言葉を聞いた明久は、そこで深呼吸をすると

「で、本音は?」

と問いかけた。

『いやあ、早く孫が見たいなあ〜って』

「そんなんだと思つたよ! こんちきしょう!!」

シリアスが台無しである。

『あ、でも、学生のうちに産むのは無しね? 避妊はきちんとしなさいね?』

「とんだ母親だよ!」

『なによ、何時ものことでしょ? あ、それと』

「今度はなに!？」

『玲は縄で縛って、鎖で雁字搦めにしたから。安心しなさい』

「それは、心の底からありがとう」

母親の言葉に、明久は思わず頭を下げた。

明久の姉、吉井玲よしいあきら
彼女は頭脳明晰でスタイルもいい。

だが

一般常識がまったく言っていないほど、無いのだ。

しかも、実の弟の明久を

家族としてではなく、一人の異性として愛している。

と公言しているのだ。

それが理由で、明久は何度も彼女に襲われて（比喩に非ず）

そして玲は、謙信に何度も襲撃をかけているのだ。

しかも、料理の腕はある意味

必殺仕事人レベルなのである。

明久は以前、それを食べさせられて、一週間の間、生死の境を彷徨ったのを覚えている。

閑話休題

『まあ、謙信ちゃんの荷物はあんたの部屋に送つといたし、仲良くしなさいね〜』

とそこで通話が切れた。

通話が切れたのを確認した明久は、携帯を閉じて

「……それじゃあ……行こうか……」

と、謙信に手を差し出した。

「はい……」

謙信は明久の手を、顔を赤くしながら掴んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、明久の住んでアパートに到着。

「うわあ……いつの間にか、荷物が」

どうやら、親が一回来て鍵を開けたらしく、居間には大量の荷物が置かれていた。

それらは全て、謙信の荷物だった。

ダンボールで10箱ほどだろう。

明久はそれを確認すると

「それじゃあ、空いてる部屋に案内するね」

明久は廊下に出て、右側のドアを開けた。

「ここを使ってね。僕の部屋は目の前のドアだから」

と、明久が指差した先に、もう一つドアがあった。

「わかりました」

謙信が頷いたのを確認すると、明久は居間に戻って、ダンボールを持ち上げた。

「あ、いいですよ！ 自分で運べます！」

謙信は慌てて近寄るが

「ううん、大丈夫だよ。それに、女の子に重い荷物を運ばせるわけにいかないでしょ」

と明久は、微笑みながら拒否した。

「あ、ありがとうございます………」

「どういたしまして」

明久は返事をする、一気にダンボールを運んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、数時間後。

「それじゃあ、そろそろ、ご飯にしようか」

と明久は、水色のエプロンを着た。

その時だった。

「あ、私も手伝います」

と、謙信が手を挙げた。

「え？ でも………」

「さすがに、明久程ではないですが、私も料理は得意ですよ」

と微笑みながら、蒼いエプロンをつけた。

「それじゃあ、一緒に作ろうか」

「はい」

明久の言葉に謙信は、微笑みながら台所に立った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、夕食。

机の上には、肉じゃが、鮭の塩焼き、みそ汁に白米と純和風な食事。

「うん。謙信の肉じゃが、美味しそうだね」

「あ、ありがとうございます………」

明久に褒められて、謙信は顔を赤くした。

「いただきます」

そう言うと二人は、料理を食べ始めた

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
で夕食後。

「それじゃあ、僕が片付けるから、謙信は先にお風呂に入って」

「いえ、明久が先にどうぞ。ここの本家の家主は明久なんですから」

「え？ でも……」

「大丈夫ですよ。それに、急に来たのは私ですから」

と謙信は微笑みながら、明久の背中を押した。

「う、うん……それじゃあ、お言葉に甘えて」

と明久は、居間を出た。

「……………」

謙信はそれを見送ると、急いで自分の部屋に向かった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

風呂場

明久は湯船に浸かっていた。

そして、気付けば左目の眼帯も外れており、その左目は閉じられていて、まぶた瞼の上には縦に傷が走っていた。

「はあ……………」

明久はため息を吐くと、湯船から出た。

そして、体を洗っていた。

その時だった。

ガラッ

突如、ドアが開いた。

「し、失礼します……………」

まあ、開けられるのは彼女しかいない。

「なんでさああああああああああ!!」

風呂場から、某赤い弓兵風の明久の悲鳴が轟いた。

明久は慌てながら、タオルで股間を隠した。

「なにをそんなに慌てるのですか？ これ以上も経験していると
うのこ」

謙信は微笑みながら、明久に近づいた。

「い、いや…そうだけどき！　つてか、謙信がこう来るなんて予想外デスヨ!」

「え、えっと……………明恵さんから、こうしたほうがいいと聞きまして……………」

「あ、あのバカ母親は……………」

謙信の言葉に明久は、頭を抱えた。

明久の脳内では、母親が笑いながら親指を立てている絵が浮かんだ。

「と、とりあえずは、背中を洗いますね」

謙信はスポンジで、明久の背中を洗い始めた。

「明久の背中……………大きいですね…」

「そりゃ、男の子ですから」

謙信の言葉に、明久は苦笑いしながら答えた。

すると、謙信が明久の背中に額を当てた。

「謙信？」

不思議に思った明久が声をかけると

「明久……………あの時は、ありがとうございました」

謙信はポツリと呟いた。

「え？」

明久はなんのことも分からず、首をかしげた。

「あの時、明久が居なければ、私は今ここに居ませんでした……………」

〈あの時〉で分かった明久は、うなずきながら

「ああ……………あれは当然だよ。好きな女の子を護るのが、男の子の勤めなんだからね」

「でも……………そのせいで……………明久は左目を……………それに……………心にまで傷を負わせてしまった……………」

そう言っている謙信の言葉は、震えていた。

「謙信……………」

「それになにより……………〈あれ〉以来……………明久は剣を振るってないと聞きませんでした……………」

「……………」

謙信の言葉に、明久はなにも喋れなかった。

「明久の太刀筋は綺麗だったのに……私のせいで、あなたから剣を奪ってしまった！」

それは謙信の心からの慟哭だった。

「違うよ謙信！ あれは僕が護りたかったから！」

明久が否定しようとするが

「そもそもの原因は、私が作ったんじやありませんか！」

謙信の言葉に遮られた。

気付けば、謙信の目から涙が流れていた。

「謙信……………」

「明久は！ 私のために、本来、傷つく必要はなかったんです……それなのに……私が愚かだったから……明久に剣を振るわせてしまい……その手を……血に濡れさせてしまった……」

謙信は泣きながら、明久の背中を叩いていた。

明久は少し考えると、体を謙信に向けて

「違うよ、謙信……………」

「あ、明久……………」

謙信を優しく抱きしめた。

「僕はね……護るために、剣を振るうって決めてたんだ」

「明久……………」

「だから、あの行動自体に悔いは無いさ」

明久は微笑みながら、そう告げた。

すると、謙信は明久の胸に顔を当てて

「明久……………」

「ごめんね、謙信……心配させてたね……」

明久はそう言いながら、謙信の頭を撫でた。

「明久……明久……」

明久は、謙信が泣いてる間

ずっと、頭を撫でていた。

◇

◇

◇

◇

◇

◇

夜

場所 明久の部屋

そこには、明久の他に謙信も居た。

謙信の寝巻きは浴衣らしく、淡い水色の浴衣に蒼の帯が栄えて見える。

今回は謙信たつての願いで、一緒に寝ることになったのだ。

「え、えっと……………どうぞ……………」

「お、お邪魔します……………」

明久が先に入って、布団を持ち上げながら言うと、謙信は緊張しながら入った。

そして、謙信が入ると、明久は持ち上げていた布団を下ろした。

「明久は暖かいですね……………」

「謙信だつて」

二人は布団の中で抱きしめあっていた。

「謙信……………僕、頑張るよ……………」

「明久……………」

「まだ剣も握れないけど……………それでも、少しずつ頑張るよ」

「はい……………」

「僕の剣が……………謙信を……………皆を護るから……………」

「はい……………」

「だから……………一緒に居てくれる？」

「愚問ですよ、明久」

「謙信……………」

「私は常に、明久とともに居ます。それが私の誓いなんです」

謙信は微笑みながら、明久を見つめた。

「ありがとう……………」

明久は謙信を強く抱きしめた。

謙信もそんな明久を抱きしめた。

これから二人にどんな試練が待ち受けているのか
それは、誰にも判らない。

転校生 再会

翌日

場所 Fクラス教室

「えー……点呼をとる前に、転校生を紹介します」
そう言ったのは、教卓の位置に立っているFクラス担任の福原慎だ。

「女の子ですか!?!」

須川が手を挙げながら、先生に質問した。

「はい、女の子も居ますよ」

「ビヤツハアアアアアアアア!!」

先生の言葉に、全員狂ったように雄たけびを上げた。
窓が揺れるほどだった。

まあ、無理もないだろう。

このクラスは圧倒的に、潤いが足りない。

女子は実質、2名のみ。

ほとんどの男子は秀吉すら、女扱いするほどだった。(秀吉本人にとっては、重要課題)

「はいはい、静かに……それでは、入ってください」

先生は机を叩きながら注意してから、ドアの方に向かって声をかけた。

するとドアが開き、3人入ってきた。

「それでは、それぞれ自己紹介をお願いします」

福原先生が促すと、3人は頷いて

「私の名前は真田幸村さなだゆきむらと言います。以後、よろしくお願いします」

「ヨロシクウウウウウ!!」

幸村が名乗ると、男子達が歓喜の声を張り上げた。

真田幸村と名乗ったのは、膝辺りまで伸ばした薄紫のツイントールが特徴の女の子だ。

見た目はかわいい少女だが、その気配は凜と張っている。

「私の名前は武田信玄たけだしんげんと申します。よしなに」

「うほっ！ お嬢様キャラだ！」

「かわいいな」

数名の男子達が下心丸見えで、信玄を見つめていた。

武田信玄と名乗ったのは、薄紅色の髪に小柄な体が特徴の女の子だ。

手には〈風林火山〉と、書かれた扇子を持っている。

「俺は武田信繁だ。よろしく頼む」

最後に自己紹介したのは、ショートカットの黒髪に人当たりの良さそうな青年だった。

名前は武田信繁

その時

「男は去れ!!」

Fクラスの男共が騒ぎ立てた。

その瞬間。

覇気と殺気で、空気が重くなった。

いや、支配されたと言っても、過言ではない。

その証拠に、Fクラスの男共は、歯をカチカチと鳴らしている。

そして、覇気と殺気の発信源は……

「あなた達……」

「貴様ら……」

信玄と幸村の二人だった。

「今、兄上に去れと言いましたか？」

「今、信繁様に去れと言ったか？」

二人は、その体からは想像出来ないほどの覇気と殺気を放っていた。

Fクラスの中で、正気を保っていたのは

(な、なんつー覇気と殺気だ！)

かつて、悪鬼羅刹と呼ばれていた雄二だけだった。

(俺も、中学の頃に結構な修羅場を経験したが……この二人はトップクラスだ！)

雄二は、二人から放たれる気配だけで、二人の力量を察知した。

そして、それは

未だかつて、会ったこともないレベルだった。

所謂、達人レベル。

恐らく、素手の一撃でも大人を撃破できるだろう。

二人から放たれる気配と今の自分達の差は

巨人とアリだった。

その時だった。

「あー、待て待て。落ち着け」

その二人を信繁が宥めた。

「兄上」

「信繁さま」

「こいつらの気持ちも、分からんでもない。見てみる。この教室、女が二人だけだ」

信繁はそう言いながら、指を動かした。

「二人？ 三人じゃないのですか？」

「あー…あそこに居るのは、男だな」

信繁の言葉に、信玄が首を傾げたが、信繁が訂正した。
すると

「なんと！ お主は、ワシが男じゃと分かるのか!？」

秀吉が嬉しそうに、問いかけた。

「ああ。骨格でわかる」

信繁が事も無げにそう言う

「ありがとうなのじゃ!!」

秀吉が感激の涙を流しながら、信繁の手を握った。

それだけで分かったのか

「お前……苦労してんだな」

優しそうな表情で、秀吉に労わりの言葉をかけた。

その横では

「いいですか、あなた達」

「今回は信繁様がお許しくださったから、これで許すが………」
そこで二人は、息を合わせて

「次は無いと思いなさい」

「次は無いと思え」

静かに、しかし、はっきりと告げた。
すると

「ママ・イエス・ママ!!」

男共は全員、一糸乱れぬ統率で敬礼していた
(凄え……こいつらを完全に統率してやがる)

それを見ていた雄二は内心で、感心していた。

「それでは、席に座ってください。席は後ろの空いてるちゃぶ台に座ってください」

福原がそう告げると、三人は空いてるちゃぶ台に向かうが

「おや? 兄上、菊はどうしました?」

信繁の足元を見た信玄が、信繁に問いかけた。

「んお? あれ? どこに行った?」

信玄から指摘された信繁は周囲を見回すが、首をかしげた。

「先ほどまでは居たのですがね」

同じように周囲を見回した幸村も、首をかしげていた。

クラスは変わって、Aクラス

「とうわけで、今日からAクラスに編入することになった」

「天城颯馬と言います。皆さん、よろしく願います」

そう言ったのは、高橋女史の隣に立っている眼鏡を掛けた気弱そうな男子だった。

髪は耳が見えるくらいで切りそろえられており、少し子供っぽい雰囲気だ。

「席は後ろの席を使用してください。それでは、HRを終えます」

高橋女史はそう言うと、教室を出て行った。

そして、颯馬が歩いていると

「颯馬、久しぶり」

「久しぶりですね」

明久と謙信が手を上げて挨拶した。

「久しぶりです。明久様。謙信様」

颯馬は深く頭を下げ、挨拶した。

「様はやめてくれって、何回も言ってるのに……」

明久は様とつけられて、頬を掻いた。
すると

「吉井くんと上杉さんの知り合い？」

横に来ていた優子が、問い掛けた。

「うん。幼馴染みなんだ」

明久は微笑みながら言うが

「実家の天城家は先祖代々、上杉家と吉井家に仕えてきた家なんです」
「仕えてきたって……吉井くんと上杉さんの家って、もしかして、凄いの？」

颯馬の言葉を聞いた優子は、少し驚いていた。

「ううん。別に凄くはないよ」

「はい。少しばかり、歴史が長いだけです」

明久と謙信は苦笑いしながら、首を振った。

それを見ていた颯馬が、苦笑いしながら席に向かおうとしたら

「おや、颯馬。足元に居るのは、キクゴローでは？」

颯馬の足元を見た謙信が、指を差した。

「え？」

「うん？」

明久と颯馬が、謙信の指差した先に視線を向けた。

そこに居たのは

「猫？」

白と茶色の入り混じった斑模様の猫だった。

優子は猫を見て首を傾げた。

猫には首輪も付いているから、飼猫というのは簡単に分かった。
だが、どうやって入ってきたのか？

優子は不思議に思った。
すると

明久が猫を両手で抱えて、顔の前に持ち上げた。

「ねえ、菊五郎。もしかして、信玄と幸村。それに信繁の三人が来てる

の?」

と、猫に問いかけた。

「吉井くん。なに猫に問いかけてるのよ? 猫が答えるわけが……」

優子が小ばかにしたように言った。

その時

「うん。来てるよ」

間延びした声が響いた。

そして、優子は目を見開いて固まっていた。

それはなぜか?

理由は簡単だ。

目の前の猫が喋ったからだ。

「あ、やっぱりそうなんだ。でも、なんで?」

猫が喋っているのを、さも当たり前のように受け入れ、明久は問いを続けた。

「なんでもねえ。明久が通ってる学校を知りたかったからなんだって」

猫はヒゲと耳をピクピク動かしながら、答えている。

「そっか」

と、明久がうなずいた。

その時だった。

「猫が喋ったー!?!」

Aクラス内に、絶叫が轟いた。

なんと、窓が揺れたほどだ。

そして、声は明久に集中する形で叫ばれていた。

その結果

「おろおろ……」

「ウニヤアア……」

明久と猫、菊五郎は目を回していた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「はあ……知猫……」

あれから、驚いていたAクラスの面子が落ち着くのを待ってから、謙信が説明した。

「そうです。知猫というのは、遙か以前からの知識を受け継いでいるんです」

「僕の知識は大体、軽く五百年分以上はあるね」

謙信の説明に、菊五郎が補足を入れた。

「ご、五百年……………」

「戦国時代もあるのか……………」

優子は絶句していて、久保は興味深そうに見ている。

「あるよ。当時の記憶も知識もね」

と、菊五郎が答えると

「……………それじゃあ、吉井の家は何時から存在してるの?」

翔子が気になったのか、問いかけた。

それを聞いた菊五郎は、しばらく思い出すように唸ると

「系列だけを見るなら、軽く八百年くらい昔から存在してるみたいだね」

と、答えた。

「あ、そんなに古かったんだ。僕の家」

「うん。どうやら、かなりの豪族だったみたいだよ」

明久が驚いていると、菊五郎は飄々と答えた。

「で、上杉家は吉井家とは懇意だったみたいだね。何代にも渡って、將軍起用したみたい」

と菊五郎は言うど、後ろ足で顔の辺りをカカカつと搔いた。

「それじゃあ、そろそろ戻ったほうがいいよ。多分、探してるだろうか」

と明久が、菊五郎に戻るように促した。

「うん。そうする。じゃあね」

と菊五郎は、尻尾を揺らしながらAクラスを去った。

「……………なんか……………妖怪を見た気分ね……………」

優子が呟くように言うと、明久たちを除いて、全員が頷いた。

恐怖の昼休みに守護神現る

昼休み

場所 屋上

そこでは……………

「明久！ しつかりしてください！ 明久！」

「謙信様！ AED持ってきました！」

顔面蒼白になって倒れてる明久

「あなたは、なにをしたかわかってますか？」

「え、えつと……………」

姫路を正座させて、説教中の幸村

「ムツツリーニ！ しつかりしろ！ 傷は浅いぞ！」

明久よりかはマシだが、ガタガタと震えてるムツツリーニ

何故、こんな状況になっているのか。

時間は少し、遡り

昼休み直後

場所 Fクラス

「あー、腹減った。さてと、弁当を食うか」

と雄二は、かばんからタッパーの弁当を三つ取り出した。

「兄上、私達も」

「おう」

「信繁様、信玄様。こちらに」

信繁、信玄、幸村の三人は重箱を取り出した。

その時

「あ、あのー！」

姫路が大声を出した。

「なんじゃ？」

「……………どうした？」

秀吉とムツツリーニが質問すると

「少し、お弁当を作り過ぎたので、食べてもらえませんか？」

と姫路が、幸村が出したのより二倍くらい高い重箱を出した。

「ほう」

「助かるのじゃ」

「……食費が浮く」

上から、雄二、秀吉、ムッツリーニの順である。

「これは、随分と作りましたね」

「は、はい……少し、気合いが入り過ぎまして……」

幸村の指摘に姫路は頬を染めながら、モジモジとしている。

「そんじゃあ、この天気だし、屋上で食わねーか？」

雄二がそう言うと、全員賛成したので、屋上へと向かった。

時を少し戻して、場所は変わってAクラス

「明久、昼食にしましょう」

「そうだね。颯馬は？」

「僕も大丈夫です」

明久達はカバンから弁当箱を出した。

すると、

「あたし達も、いいかしら」

気付けば、近くに優子達が居た。

「うん、いいよ。それと、どうせだから屋上で食べない？ いい天気なんだし」

明久は返事しながら、右手の親指で窓を指差した。

窓の外は快晴で、蒼天が眩しいほどだった。

「いい提案ね」

「賛成だヨ」

「……賛成」

優子、愛子、翔子の三人は明久の提案に頷いて賛成した。

「それじゃあ、行こうか」

そして、明久を先頭に歩き出した

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わって、屋上

「ふむ、いい天気じゃのう」

「本当だな」

「いい天気です」

「……晴天」

「太陽が眩しいくらいね」

旧校舎側から、Fクラスの面子が続々と出てきた。

その時、新校舎側のトビラも開き、

「うん。やっぱり、屋上にして正解だったね」

「本当ですね」

「いい天気」

「最高のロケーションだね」

「……絶好のロケーション」

Aクラスのメンバーも現れた。

その声にFクラスの数人が顔を向けて、

「あ！ 吉井！」

と島田が、剣呑な表情で指差した。

「え？ あ、島田さん」

明久も声で気付いたようで、視線を向けた。
すると、

「吉井！ あんた、またそんな女ばっかり！」

と、島田は詰め寄ろうとした。

が、その瞬間。

島田の首元に鉄扇、横合いから月型十字槍、正面から刀が向けられた。

向けたのは、もちろん、

「明久に攻撃をしようとは」

「いい度胸をしてるな」

「容赦しませんよ？」

信玄、幸村、謙信の三人である。

三人は島田の気配に反応して、一瞬にして武器を構えたのだ。
約一名、どこから出したのか深く問いたいが。
すると、

「島田、揉め事は止せ」

島田の肩を雄二が掴んだ。

「でも！」

「厳罰を科すと言ったのを忘れたか？」

「くっ！ わかったわよ……………」

島田は不承不承といった感じで、明久を睨みながら下がった。

信玄、幸村、謙信の三人はそれを確認すると、武器を収めた。

「しかし、お前らも明久の知り合いなのか？」

雄二が問いかけると、三人は頷いた。

「はい」

「私達は幼馴染でして」

「ガキの頃から遊んでたんだ」

上から、幸村、信玄、信繁の順である。

「ついでに、僕もそうなんですよ」

「あ？ あんたは？」

明久の背後から現れた颯馬を見て、雄二は首をかしげた。

「あ、僕の名前は天城颯馬と申します。謙信様と明久様に仕える者です」

と、颯馬は礼儀正しく一礼した。

「仕えるって…………お前らの家って凄いのか？」

「二度目だけど、歴史が長いだけだって」

そう言うと、明久は弁当を膝の上に置いた。

「あの、吉井くん。ひとつ聞きたいんですが」

「ん？ なに？」

「そのお弁当、誰が作ったんですか？」

そう問いかけている姫路の表情は、はっきり言って怖い。

「え？ 僕と謙信の合作だけ？」

その明久の発言に、姫路と島田の背後に黒いオーラが噴出した。

「吉井くくん、その内容をじっくりと…………」

「吉井！ あんたは、オシオキを！」

と、二人が発言した瞬間。

一瞬、凄まじい剣気が発せられた。

その剣気で、二人はすっかり萎縮してしまった。
そして、それを発したのは……

「今のは……」

「……吉井？」

「あ、よくわかったね」

明久だった。

明久は二人の気配に反応して、一瞬だけ、剣気を放出したのだ。
条件反射的に出したのだが、ほとんど全盛期の剣気だった。

「流石は剣聖」

「刀を握らなくなった、って聞いたが」

「その剣気は一切衰えてませんね」

信玄、信繁、幸村の順である。

三人は昔から明久の剣気に触れてきたので、全盛期と変わらないこと
に気付いていた。

「うん、自分でもビックリ」

明久は苦笑いしながら、弁当を開いた。
すると

「あ、私も広げないと」

と、姫路も重箱を開けた。

「おおー！」

その重箱の中身を見て全員、感嘆の声を上げていた。
重箱の中には

狐色に上げられたエビフライ

綺麗に並べられたおにぎり

瑞々しい光沢を放っているサラダ

等々が所狭しと入れられていた。

「ほう……」

「これはすばらしいですね」

「上手に作ったね、姫路さん」

等々の賞賛が姫路に送られた。

「あ、ありがとうございます……」

姫路は褒められて嬉しいのか、頬を染めている。
そして

「いただきますーすー!」

と、全員食べ始めた。

「ふむ。では、ワシはこれを貰おうかのう」

と、秀吉がエビフライを食べようとした時。

ヒョイ

と、横からムツツリーニが手で摘み上げた。

「む! ムツツリーニよ、意地汚いぞい!」

と、秀吉が抗議した瞬間。

ドゴン!

と気付けば、ムツツリーニがブリッジになっていた。

「っ!」

「っ、土屋くん!? 大丈夫ですか!」

全員が驚き、姫路がムツツリーニに駆け寄ると

ムツツリーニが立ち上がり

「…………っ!」

と、親指を立てた。

どうやら、美味しいと言いたいらしい。

「そうですか! それでは、ドンドン食べてください!」

と、姫路は笑顔で勧めた。

その瞬間

明久は雄二とアイコンタクトを取っていた。

(雄二、どう思う?)

(あの足は演技には見えねえ。アイツはなにを入れたんだ?)

そう、ムツツリーニの足がまるで気絶寸前のボクサーのように見え
たのだ。

(ねえ、雄二。あれ全部いける?)

(すまねえ、翔子の作った弁当があるから、無理だ)

(だよね…………)

そこで明久は少しの間、黙考して

(雄二、僕が行くよ)

(な!?! 正気か、明久!?!)

明久は頷くと

(言ったでしよ雄二。僕は、護るためなら、刀を振るうって)

(明久……………すまねえ!)

雄二がそう言う

「青の剣聖、吉井明久……………未来を切り開く!!」

と、重箱の中身をかきこんだ。

そこから数分間、明久の激闘(誤字に非ず)は続き

明久は全て食べ終わり

「あ、明久?」

と、雄二が問いかけると

明久は笑い

「……………アバヨ、ダチ公」

そう言って、倒れた。

「明久……………!!」

謙信たちは明久に駆け寄った。

そして、冒頭に戻るのである。

なお、この時のことを雄二はこう語っている。

「あの時の明久は……………マジで守護神に見えた……………」
と

補足だが、姫路は幸村によって料理禁止令が出されたとか

Bクラス戦 開戦！ そして……

悲劇の昼休みを終えて、5時間目終了後にFクラスはBクラスに対して宣戦布告

なお、死者には須川が逝った。(両方とも誤字に非ず)

開戦は翌日の昼休み終了後となった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

そして、翌日の昼休み

「全員、補給テストご苦労！」

そう言ったのは、教壇の位置に立っているFクラス代表の坂本雄二である。

「これからBクラスと試召戦争を行うが、お前ら……気合いは十分か？」

「オオオオオオオ！」

雄二の問い掛けに、Fクラスの全員は雄叫びで答えた。

イレギュラーな成績上位者以外のFクラス唯一の武器である。

「今回の戦いは如何に、相手を教室内に押し込めるかが鍵だ！ だから、渡り廊下戦は絶対に負けられない」

雄二はそこで一旦区切り、全員の顔を見回して

「今回、前線指揮官を姫路に任せる」

と、視線を姫路に向けた。

「が、頑張ります！」

指名された姫路は、小さくガッツポーズを取りながら意気込んだ。

そのタイミングで、開戦の合図チャイムが鳴った。

「よし、行ってこい！ 目指すは、システムデスクだ！」

「おう！」

雄二の号令を受けて、第一陣が教室を飛び出していった。

場所は変わって、渡り廊下

Fクラス第一陣が走っていると

「居たぞ！ Bクラスの連中だ！」

廊下の反対側から、Bクラスの生徒達が余裕からか、ゆっくりと歩

いていた。

「高橋先生を連れてるぞー！」

歩いてるBクラスの間辺りに、高橋先生の姿があった。

Fクラスとしては、Bクラスが文系が多いから、理数系の科目で戦う予定だった。

が、Bクラスは短期決戦を目論んでいるらしい。

そして、双方のクラスが交戦距離に入った瞬間

「試獣召喚！」

総数30名以上が一気に、キーワードを唱えた。

総合科目

Bクラス 御手洗一馬

V S Fクラス

田島宏人

1568点

560点

数学

Bクラス 永田美智子

V S Fクラス

横溝浩二

160点

75点

Bクラス 黒崎由利子

V S Fクラス

武藤啓太

145点

68点

しかし、あまりにも地力差が激しすぎた。

「た、助け！」

「誰か、誰かあ！」

あつという間に、阿鼻叫喚の地獄絵図と化した。(Fクラスにとつては)

「見てください兄上。クラスメイト達がまるでゴミのようです」

「幾らなんでも、不甲斐なさ過ぎる……………」

「まあ、基本的にバカだしな」

上から信玄、幸村、信繁の順である。

三人はお互いの顔を見ると頷いて

「そんじゃあ、そろそろ助けるか」

「そうですね」

「では、先陣は私が勤めます」

そこまで言うと、三人は一步前に出て

「試^サ獣^モ召喚!!」

同時にキーワードを唱えた。

すると、三人の足元に幾何学的な魔方陣が浮かび上がり、次の瞬間には軽い爆発音が響いた。

そして、召喚獣が現れて、点数が表示された。

総合科目

Fクラス 武田信繁 3987点

Fクラス 武田信玄 4057点

数学

Fクラス 真田幸村 300点

「な、なにー!?」

Bクラスの生徒達に、動揺が走った。

「なんだあの点数は!?!」

「Aクラス並だぞー!」

「本当にFクラスか!?!」

と、動揺していた瞬間

「はあ!」

幸村の召喚獣が、武器の月型十字槍を振るった。

その結果

Bクラス 永田美智子&黒崎由利子 0点

二人を一撃で葬った。

「な……」

「一撃なんて……」

二人が呆然としていると

「戦死者は補習ーーーーー!!」

西村先生がロープを使って、窓から現れた。(某伝説の傭兵風の衣装)

「い、イヤアアアアアア!!」

しかも、二人を担いで走り去った。

それを見た信繁たちは冷や汗を流して

「あの先生は本当に人なのか?」

「私にはわかりません……」

「あれは、私から見てでも人間離れしてます……」

と、西村先生が走り去った方向を見て呟いた。

すると、そのタイミングで

「す、すいません……遅れました……」

姫路が現れた。(逃走中のナレーション風)

「来たぞ!」

「姫路瑞希だ!!」

Bクラスの生徒達は姫路の姿を確認すると、身構えた。

「え、Fクラスの姫路が数学で挑みます! 試獣召喚!!」

姫路がキーワードを唱えると、先ほどと同様の現象が起きて、召喚獣が現れた。

すると

「私が相手になります!」

「律子、私も手伝う!」

姫路の前に、二人の女子が現れた。

「試獣召喚!」

数学

Fクラス 姫路瑞希 412点

VS

Bクラス 岩下律子 いわしたりつこ 187点

Bクラス 菊入真由美 きくいりまゆみ 152点

「あ。姫路さんの召喚獣、アクセサリーなんて着いてるんだね」

姫路の召喚獣の腕に腕輪が着いているのに気付いた岩下が、姫路に問いかけた。

「あ、はい。数学は結構解けたので」

聞かれた姫路も、普通に答えたが

「ふーん………って、腕輪!? ヤバいじゃない!!」

「勝てるわけが!!」

と、二人が狼狽した瞬間。

「では、行きます!!」

「ちい、根本の小者か……確かに、あいつならやりそうな事だな」と、頭を搔いた。

「それより、どうして雄二は教室を離れたのじゃ？」

と秀吉が問いかけると、指示をしていた雄二が振り向いて

「ああ、向こうの代表から協定の申し込みが来たんだ。午後4時で終わらなければ、試召戦争は一時中断して、明日に再開つてな」と、気だるそうに告げた。

「しかし、このまま戦っていれば、我々のほうが有利では？」

雄二の言葉を聞いて疑問に思ったのか、信玄が首をかしげた。

「確かに、だけど、姫路は違うだろ？」

という雄二の言葉を聞いた信繁たちは、一瞬驚いた表情をした。

「あいつは確かに、ウチの最強戦力の一人だが、スタミナが無い。正直言つて、今回の協定はありがたかったからな。乗らせてもらつた」と、雄二が言った瞬間だった。

ドアが乱暴に開けられて、一人の男子が駆け込んできた。

「大変だ！」

「どうした？」

「島田が人質にとられた！」

男子からの報告を聞いた雄二は、視線を信繁たちに向けた。すると

「あの女は……」

「指揮官代行を頼んだというのに……」

と、信繁と信玄が頭を抱えていた。

「そつちの対応は任せる。好きに処断しろ」

「わかった」

雄二の言葉に頷くと、信繁たちは走り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わって、渡り廊下

「お前ら、動くなよ!? 動いたら、こいつを戦死させるからな！」

そこでは、島田が二人のBクラスの生徒に召喚獣ごと捕まっていた。

そして、それをFクラスの生徒達が囲んでいるが、島田が人質に取られているので、攻めあぐねていた。

すると、信繁達が到着した。

「島田……………」

「あなたは、なにをしてるんですか……………」

「指揮官代行を頼んだのに……………」

三人は島田が捕まってるのを見ると、頭を抱えた。

「お前ら！　なんでこいつが捕まったか、わかるか!?!」

という、Bクラスの生徒の問いかけに三人は同時に

「バカだからだろう?」

「バカだからでしょう?」

と確信めいた口調で、口走った

「殺すわよ!?!」

三人の言葉に、島田は逆ギレした。

「こいつな、Aクラスの吉井が保健室に運ばれたって情報に騙されて、ホイホイ向かったんだぜ?」

Bクラスの生徒の言葉を聞いた三人は、眉をひそめて

「それは本当か?　島田」

と、島田に視線を向けた。

「そ、そうよ……………心配したのよ……………悪い?」

島田は頬を染めて、視線をそらした。

「なるほど……………」

「まあ……………知人を心配するのは、人として当然……………」

と、幸村と信玄が呟いた瞬間

「吉井が上杉とかいう女のパンツを見て、鼻血を吹いて倒れたって聞いたから、オシオキしようと思ったのよ!!」

と、大声で叫んだ。

そして、その言葉を聞いた三人の雰囲気ガラリと変わって

「総員……………突撃!」

と三人同時に、号令を下した。

「え!?!」

「はあ!?!」

「な、なに!?!」

上から、島田、Fクラス男子達、Bクラスの二名である
三人以外は全員、同じように驚いている。

「ちよ、ちよつと待て!?! それでいいのか!?!」

代表して須川が、三人に詰め寄った。

「ああ……すまん。言葉が足りなかったようだな……」

「ですね……」

「ええ……」

と、三人が号令をしなおす様子になったので

「だ、だよな……ふいー、驚いたぜ……」

と、須川が安心した瞬間

「その役立たず諸共、撃破しろ!!」

と、更に上の号令を下した

「な、なにー……!?!」

「な、なんでよ!?!」

完全に予想外だったのか、全員驚いていた。

「明久はAクラスなんだぞ!?! 今回の試召戦争には無関係だろうが
!!」

「あなたは指揮官を任されたんですよ!?! その指揮官が独断行動をし
ていいわけがありません!!」

「しかも、あなたが人質にとられたから、こちらがピンチになってるん
です! 少しは反省してください!!」

と、三人は立て続けに言うのと、最後に

「なにより、あの明久がそう簡単に鼻血なんて流すかー……!!」
と、口をそろえた。

三人に剣幕に、全員が固まっていると

「あなたの顔を見るのも不愉快です……」

「だな、幸村」

「はい……試召モモン」

信繁の命令に従って、幸村が召喚獣を召喚した。

Fクラス 真田幸村
英語 200点
VS
Bクラス 立花司郎たちばなしろう
英語 23点
Bクラス 今井冬彦いまいふゆひこ
英語 34点
Fクラス 島田美波
英語 55点
となつて

「この一撃……船賃の代わりとしれ」

と幸村が、高速の連続突きを放った。

その結果

立花司郎&今井冬彦&島田美波

0点

となつた。

その瞬間

「戦死者は補習……」

と、なぜかダンボールの中から、鉄人が現れた。

そして、あつという間に三人を連行していった。

この後、信繁たちの指示により、Fクラスは多大な犠牲を払いながらも、Bクラスを教室内に押し込めることに成功したのだ。

そして

「ふむ……」

午後四時を回つたので、試験召喚戦争は一時中断となつた

その教室内では、雄二が報告書を見て唸っていた

「どうだ、坂本。このままイケそうか？」

「まあ、ちよいとばかり、被害は多いが……作戦には支障はない」
信繁の問いかけに、雄二は報告書を机の上に置きながら呟いた

すると、ムッツリーニが現れて

「なに？ Cクラスに不穏な動きだ？」

「……ああ。察するに、試召戦争の準備をしているようだ」

ムッツリーニの言葉を聞いた雄二は悩むと

「狙いはAクラス？ ……いや、漁夫の利を得るつもりか。いやらしい連中だな」

と、顔をしかめた

「どうする？」

と信繁が聞くと

「交渉したいが、なんでこのタイミングなのが気になるな……ムッツリーニ、Cクラスの代表は誰だ？」

と雄二が聞くと

「……俺の調べでは、小山友香こやまゆうかという女子だ」

「小山………思い出した。確か、根本の彼女って女だ」

雄二はそう呟くと、髪をグシャグシャと掻いた

「どうすつかな……Dクラスを動かすか？ いや、Dクラスはあの作戦で使うから………」

と、雄二はしばらくブツブツと呟くと

「仕方ない……迷惑は掛けなくなかったんだがな………」

と、雄二は嘆息すると

「Cクラスに関しては、俺のほうかなんとかする。今日は解散！」

と、雄二の一言で解散となった

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「なんでウチがあんなめに………」

と、ブツブツと呟いてるのは、島田美波である

どうやら、補習室送りにされたのが不本意らしい

「悪いのは吉井じゃない………」

と、島田が自宅アパートのドアノブに手をかけた時だった

「ん？ 宅配便？」

ドアの隣にある不在受け取り箱に、ダンボールが入れていた
島田はそれを取り出して、荷札を見た

「ウチ宛？」

それには、〈島田美波様へ〉
と書かれていた

島田は相手を確認しようとしたが

「名前が書かれてない……」

名前が書かれてなかった

そのことに首を傾げるが、島田は荷物を持って家に入った
そして、ダンボールを開けると中に入ってたのは

「腕輪？」

それは、赤い腕輪だった

赤い、紅い、赫い

不気味なくらい赤い腕輪だった

島田は、しばらくそれを見つめていたが

「ん？ 紙？」

ダンボールの中には、一枚の紙が入っていた

「えつと……好きな相手との召喚獣戦で使うと……思いが伝わる？」

それを読んだ島田は、紙を握りつぶすと

「待ってなさいよ……吉井……」

と、呟いていた……

対Bクラス戦 打倒キノコ!!

翌日

場所 Fクラス教室

「さて、これからBクラスとの戦闘を再開するが」

と、教卓の位置に立っている雄二が言った時だった。

「待つのじゃ、雄二よ」

そう言いながら、秀吉が手を挙げた。

「なんだ、秀吉?」

「Cクラスはどうするのじゃ?」

秀吉がそう聞くと、雄二は頷いて

「ま、大丈夫だ。多分、そろそろ……」

その時、雄二の近くにムツツリーニが現れて、耳元で囁いた。

「よし、予定通りだ」

と、雄二は頷くと

「Cクラスなら、Aクラスから宣戦布告をされたらしい。これで、Cクラスは動けない」

と、雄二は淡々と告げた。

「な、なるほどのう……」

秀吉は驚きながらも、納得したらしい。

何故、AクラスがCクラスに宣戦布告したのか

それは、昨日の帰りのことだった。

回想開始

「……Cクラスに対して、宣戦布告?」

「どういうこと、雄二?」

雄二からのお願いに、翔子と明久が首を傾げた。

「今、Fクラスが戦ってるBクラスには根本が居るんだがな」

雄二の言葉に、明久が眉をひそめて

「あの根本くんが? 大丈夫だった?」

と聞くと

「教室の設備をぶっ壊されたが、大丈夫だ」

雄二の言葉を聞いた明久と謙信は、顔をしかめて

「また根本くんはそんなことを……………」

「話に聞いてましたが、本当だったとは……………」
と、呟いた。

「で、その根本の彼女が、Cクラス代表の小山なんだよ」

雄二の言葉を聞いた明久は、納得したらしく頷いて

「なるほど、Cクラスが動いたんだね？ Fクラスに対して試召戦争を」

明久の言葉に、雄二は澁面を浮かべて

「そうなんだよ…………正直言つて、お前らに迷惑を掛けたくないんだが……………」

すると、明久が

「いいんじゃないかな？ どのみち、何処からかは宣戦布告される可能性もあるし」

と明久が言うと、翔子も頷いて

「…………クラスメイトの練習にもなる」

と呟いた。

「悪いな、頼んだ」

雄二が言うと、明久と翔子は親指を立てたのだった。

以上、回想終了

というわけである。

「これで俺達は、心置きなく、Bクラスと戦える」

と、雄二は心中で二人に礼を陳べると

「なお、前線指揮官は姫路と信玄に一任する！ 頼むぞ、二人とも！」

と、視線を信玄と姫路の二人に向けるが

「は、はい……………」

「わ、わかりました……………」

その二人は、どこか挙動不審になっていた。

「？ まあ、とにかく！ 全員、武運を祈る！」

雄二はそれに一瞬、眉をひそめるが、すぐに戻して激励を飛ばした。

「おおおおお!!」

生き残りの全員は雄たけびを上げた。

そして、運命の戦いは再開されたのだった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

しかし、試合は予想外の展開になっていた。

「勝負はなるべく、単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行うのじゃー！」

「右翼は連携を厳に！ 左翼は第二部隊と変われ！」

前線で指揮を執っていたのは、秀吉と信繁の二人だった。

その時、信玄と姫路の二人は

「くっそ！ 現国が残り一桁だ！ 姫路さん！ 救援を!!」

「こっちもだ！ 歴史の応援を、信玄さん！ 頼む!!」

と、Fクラスの生徒が救援を頼むが

「あ、あう……………」

「くっ……………」

その二人は、僅か後方で動けないでいた。

「御館様!? どうなされたのですか!?!」

「姫路さん! どうしたんだ!?!」

幸村と須川が叫ぶ様に聞くが、二人は歯噛みするだけで答えなかった。

「仕方ない……………幸村！ 幸村が右の援護！ 須川は左に向かえ！」

「承知！」

「おうよ！」

信繁が命令すると、幸村と須川が救援要請のあった方へと向かった。

その隙に、信繁と秀吉が二人に近づいた。

「姫路よ！ お主になにがあったのじゃ!?!」

「信玄！ 一体、どうしたんだ！」

秀吉と信繁が問いかけても、信玄と姫路の二人は視線を左右に動かすだけで答えなかった。

と、その時

「くっそ！ 古典がやばい！ 誰か！ 援護を！」

という、悲鳴じみた声が聞こえ
「私が行きます！」

と、姫路が向かおうとしたが

「あ、あう……………」

ある方向を見て、動きを止めた。

(ん？ あっち？)

それを不審に思った信繁が視線の先を見ると

その先に見えたのは、きのこ頭が特徴の男子だった。

そいつは前線の僅か後方で、可愛らしい便箋と簪を持っていた。

そして、簪のほうは信繁には見覚えがあった。

(あの簪は！ 俺が信玄にプレゼントした！)

信繁は怒りで、拳が白くなるほど握った。

すると、秀吉が近づき

「どうやら、根本が原因らしいのう……………」

と、彼にしては珍しく、怒りを露わにしていた。

それを見た信繁は

「なあ、秀吉よ。少しばかり、男二人で無茶しねえか？」

と、獰猛な笑みと共に、問いかけた。

すると

「そうじゃのう……………なぜか知らぬが、ワシも怒りで腸が煮えくり返り

そうじゃのう……………」

と、同様の笑みを浮かべた。

信繁はそれを確認すると、視線を信玄と姫路に向けて

「お前ら、少し下がっている。ここは俺達が対処する」

「うむ。しばらく休んでおれ」

「漢の意地。とくと見せてくれる！」

と二人は、獰猛な笑みを見せた。

「は、はい……………」

「すみません。兄上……………」

信繁はうなずくと

「秀吉。すまんが、しばらくここを頼む。坂本に許可を得てくる」

と、走り出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わって、Fクラス教室

「坂本！」

信繁は力強く扉を開けながら、雄二を呼んだ。

「な、なんだ!? どうした?」

雄二は予想外だったのか、少し動揺していた。

「すまんが、俺と秀吉で少しばかり無茶をする。その許可をもらいたい」

「あ、ああ……なにが、あった?」

信繁の剣幕に、ただ事ではないと悟ったらしく、許可を出してから、雄二は問いかけた。

「あまり深くは言えないが……少しばかり、きのこ料理を作るだけだ」

そう言ってる信繁の眼には、光が無い。

「そ、そうか……まあ、がんばれ」

「おうよ」

雄二の激励に、信繁は背中越しに手を振った。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

場所は変わって、Bクラス前廊下

「許可は降りた。作戦はシンプルだ」

「どうするのじゃ?」

二人は、適時に指示を出しながら話し合っていた。

「秀吉、お前がアイツまでの道を切り開け。そうすれば、一撃で決めてやる」

と、信繁は根本を睨みながら告げた。

「承知したのじゃ。ワシも点数は良くないので。長くは保たないぞい」

「わかってるよ。頼むぜ? 相棒」

秀吉に返事しながら、信繁は拳を突き出した。

秀吉は一瞬、キョトンとしたが

「うむ、行くぞぞ」

と、拳をぶつけた。

そして

前に出た。

「Fクラス、前線指揮官代行！ 木下秀吉、参る！ 試獣召喚！」

「Fクラス、軍師！ 武田信繁、出る！ 試獣召喚！」

二人の足元に、召喚獣が現れ、点数が表示された。

古典

Fクラス 木下秀吉 98点

Fクラス 武田信繁 425点

「参るー」

秀吉は両手で長刀を構えてから、列に突撃した。

そして信繁は、槍から火縄銃に持ち替えた。

「せあああああ！」

秀吉は裂帛の気合と共に、長刀を振るいBクラスの生徒の壁に穴を開け始めた。

それを信繁は、目を細めて見続けた。

そして、秀吉が一人を倒した時だった。

確かに、根本の足元の召喚獣が見えた。

そして、その一瞬を信繁は見逃さなかった。

「軍師、武田信繁、敵を狙い撃つ！！」

信繁の召喚獣が放った弾丸は、生徒の壁の穴を通って

古典

Bクラス 根本恭二 0点

根本の召喚獣を葬った。

「な、なにっ！」

根本が驚愕した時だった。

「戦死者は補習ーーーー！！」

なぜか、Bクラス内のダンボールから鉄人が現れた。

何時の間に入ったのだろうか？

「ま、待て、鉄人！ 俺はこんなの納得しない！」

「やかましい！ 貴様は負けたのだ！ 終わるまで、補習漬けにしてくれるわ！」

というやり取りをしながら、Bクラスから出てきた時だった。

「西村教諭！ 待ってください！」

「待ってほしいのじゃ、鉄人！」

西村を信繁と、後退してきた秀吉が止めた。

「おお、なんだ。どうした？」

「少し失礼」

信繁はそう言いながら、根本の胸元に手を突っ込んだ。

そして、簪と便箋を取り返した。

「なんだそれは？」

西村は、眼を細めて聞いた。

「こいつ、Fクラスの設備を壊した挙句。人のカバンから物を盗んでたんですよ」

信繁の言葉を聞いた西村の目つきが険しくなり、根本を見た。

「ほほう……こいつはそんなこともしていたのか……」

その時

「ま、待て！ それを俺がやったという証拠がどこにある!!」

根本は顔を蒼くしながら言うが、秀吉が

「お主が持っていた時点で、十分な証拠じゃ！」

至極正論である。

すると、西村がうなずいて

「根本……貴様には、特別に道德の補習を追加してくれるわ」

と宣告した。

「な、なんだと!?!」

「貴様がやったのは、立派な犯罪だ！ 貴様の腐ったその性根、叩き直してくれる！」

西村は憤然と断言すると、根本を脇に抱えたまま補習室に向かった。

去り際に

「この屈辱、忘れんぞー！」

と、根本の声が聞こえたが

「何時でも来い！ 返り討ちにしてやる！」

「何時でも来るのじゃ！ 返り討ちにしてやるのじゃ！」

と二人は、宣言した。

そして、試験召喚戦争は佳境を迎える。

Bクラス戦終了！　そして、戦後対談

「ふむ、侮っていたわけではないが……なかなかやるではないか。Fクラス」

そう言ったのは、窓際に立っている紫が混じった長い黒髪に透き通るような白い肌

そして、なにより目立つ右目に眼帯を着けた美少女

だてまさむね
伊達政宗だった。

「はっ！　そういうそちらさんだつて、よく保ってるじゃねーか！」

そう言ったのは、入り口付近で指揮を執っている雄二である。

時間は、もうすぐ正午になろうとしていた。

その時

「しかし、暑いな……小十郎。すまんが、窓を開けてくれるか？」

政宗は片手を団扇のように扇ぎながら、付近に立っていた黒髪ポ

ニーテールの少女

かたからかげつな
片倉景綱にそう頼んだ。

「ああ、わかった」

景綱はうなずいて、窓を全開にした。

雄二はそれを見ると

「てめえら！　作戦を開始する！　覚悟を決めろ!!」

「おおおおおおお!!」

雄二の掛け声に、Fクラスの男子達は歓声で答えた。

「なに、作戦？」

雄二の言葉に、政宗が眉をひそめると

「決めろ、姫路!!」

「はいー」

姫路の召喚獣が右腕の腕輪を掲げた。

「まさか!?　全員避けろ!!」

政宗は気付き指示を出す

間に合わない。

「ヒート・ブレイザー!!」

姫路の召喚獣の腕から放たれた極太のレーザーは、敵味方問わず、右側の通路を一掃した。

その瞬間

「戦死者は補習ー！ー！！」

西村が20人余りを担いで走り去った。

その事実には左側のBクラス生徒達は動揺しながらも戻ろうとするが、Fクラス生徒の攻撃が激しく戻れなかった。

その隙に

「今だ！！」

坂本雄二を始めとした数人がなだれ込んだ。

「遠藤先生！ 武田信繁がBクラス代表に英語で勝負を！」

と、信繁が勝負を挑もうとしたが……

「片倉景綱が引き受ける！！」

それを数人のBクラス生徒達が阻んだ。

「くっ！ 近衛部隊じゃと!?」

そのことに秀吉は歯噛みした。

そして、雄二は冷静に自分達と伊達政宗までの距離を目算していた。

「ふっ…あと数人居れば勝てただろうにな」

と、政宗が言ったとき

「いや、チェックメイトだ！」

雄二はそう言いながら、指を鳴らした。

「なにっ？」

雄二の言葉に政宗は眉を上げた。

さて、ここで教科の特性について説明しておこう。

各教科の担当の先生によって、テストの結果に特徴が表れる。例を挙げると、数学担当の木内先生は採点が早い。

世界史の田中先生は、点数の付け方が甘い。

今居る英語の遠藤先生は、多少のことは寛容で見逃してくれる。では

保健体育は？

保健体育は、採点が早いわけでも甘いわけでもない。

召喚範囲が広いわけでもなく、御しやすい先生というわけでもない。

保健体育の特性、それは教科担当が実技体育の教師が為の……………

ダンツ！　ダンツ！　ダンツ！

並外れた行動力!!

政宗は着地の音がした方向に視線を向けた。

窓から縄が教室に入り込んでいて、人が三人、屋上から降下してきた音だった。

そして、そこに着地していたのは……

「き、貴様らは…………」

「内藤先生…………Fクラス土屋康太と」

「同じく、真田幸村が」

「Bクラス代表、伊達政宗に勝負を挑む！」

「許可します！」

「ムツツリーニと真田だと!?!」

Fクラスが誇る保健体育の帝王と切り込み隊長だった。

「試^サ獣^モ召喚！」

保険体育

Fクラス　土屋康太　441点

Fクラス　真田幸村　402点

VS

Bクラス代表　伊達政宗　306点

「……………加速！」

「一閃!!」

ムツツリーニと幸村の足元から現れた召喚獣が、あっという間に政宗の召喚獣を切り裂いた。

その結果

Bクラス代表 伊達政宗 0点
となった。

その瞬間

「勝者、Fクラス!!」

西村の大きな声が轟いて、Fクラスの勝利が決まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「そんじゃあ、戦後対談といこうか。Bクラス代表さんよ」

「そうだな。で、なにが目的だ？ 恐らく、設備交換が目的ではないだろう?」

政宗の言葉を聞いた雄二は一瞬驚くが、すぐに表情を改めて

「そんじゃ、言わせてもらうぜ？ お前さんのところに、根本って居るだろ?」

「根本? ……ああ、あの小者か」

政宗は思い出すと、視線を景綱に向けた。

「少し待て」

景綱はBクラスの生徒達の中に消えると……

「こいつだろ?」

と、一人の男子を投げた。

「ぐえっ」

男子

根本恭二は顔面から地面に倒れた。

「よう、根本。好き勝手やってくれたらしいじゃねーか」

「なんのことだ?」

根本は胡座をかきながら、しらばつくれた。が

「すつとぼけんじゃねーよ。てめえ、うちのクラスの設備を壊した挙げ句に、個人の物を奪ったろ?」

雄二の言葉を聞いたBクラスの生徒達の非難がましい視線が、根本に集中した。

「証拠はあるのか」

根本は、往生際悪く足掻くが

「てめえが持ってた物は、うちのクラスの奴が回収して確認したんだ

よ。観念しろや」

雄二の言葉に、根本は舌打ちして視線を上げて

「で、なんの用だ」

と問い掛けた、

「なに、簡単だよ。つと、その前に……」

雄二は根本に言う前に、視線をBクラスの生徒達に向けて

「本来なら、Bクラスには素敵なちやぶ台と座布団をくれてやりたいが、条件次第では免除してやる」

雄二の言葉に、Bクラスの生徒達は困惑気な表情をした。

「まあ、根本には去年から好き勝手やられてたからな。正直目障りだったんだよな」

と、雄二が喋っていると、背後にムツツリーニが現れた。

そして、雄二の手に紙袋を持たせて消えた。

「まずは……根本のコスプレ写真集を作ろうじゃないか!」

雄二は言いながら、紙袋から

女子の制服を取り出した。

それを見た根本は

「ふ、ふざけるな! なぜ、この俺がそんなことを!」

と怒鳴るが

「任せて! 必ずやらせるから!」

「クラス全員で実行させよう!」

「それで設備を守るなら、安いものだ(よ)!!」

Bクラス全員に、根本は簡単に見捨てられた

これだけで、根本の人望がないのがわかった。

「うおおおーい!? お前ら!」

根本が驚いていると、雄二がイイ笑顔で

「決まりだな」

と、近づきながら言った。

「待て! 寄るな変態!!」

と、根本は後ずさるが

「小十郎」

「うむ」

「ぐえっ!？」

片倉景綱の蹴りによって、気絶した。

「好きに使ってかまわん」

「おう、あんがとよ。ムツツリーニ!」

雄二が呼ぶと、背後にムツツリーニが現れて

「精々、可愛く写してやれ」

と、雄二が注文すると首を振って

「……それは無理、土台が腐っている」

と、根本を引きずっていった。

すると、政宗が

「それで、もうひとつの条件はなんだ？」

と、雄二に問いかけた。

そのことに雄二は一瞬驚くが

「なに、話は簡単だ。Aクラスに宣戦布告をやってもらいたいんだ」

「なに？」

雄二の言葉に、政宗は片眉を上げた。

「ただし、完全に宣戦布告する必要はない。ただ、戦う準備があるって伝えるだけでいい」

雄二がそう補足すると、政宗は納得した様子でうなずいて

「なるほど。要は牽制か」

「ああ、その通りだ。やってくれるな?」

「もちろんだ。そのくらいで設備が守れるならば、安いものだ」

そう言うと政宗は、視線を信玄たちに向けた。

「まさか、お前達が居るとは思わなかったぞ。甲斐の虎」

「それはこちらもです。独眼竜」

「驚いたぞ」

「まさか居るなんて」

四人の会話を聞いた雄二は少し驚いた様子で

「なんだ、お前達は知り合いなのか？」

「ええ」

「まあ所謂、幼馴染でな」

「明久とも知り合いなんです」

雄二の質問に信玄たちが答えた。

政宗は腕組みをしながら

「剣聖には度々世話になったのでな。出来うる限りフオローはする
さ」

という政宗の言葉を聞いた雄二は

(明久の交友関係は広いな)

と、内心で感心していた。

そして、最後に

「そんじゃあ、宣戦布告の件は頼むぜ?」

「ああ、わかった」

と、政宗に念押しして解散した。

こうして、Fクラス対Bクラスは

Fクラスの勝利で幕を閉じたのだった。

Aクラスへの宣戦布告

FクラスがBクラスを降し、AクラスがCクラスに勝った翌日
「一騎打ち?」

「ああ。俺達、FクラスはAクラス代表に一騎打ちを申し込む」
Aクラスでは、Fクラスの坂本雄二が宣戦布告をしていた。
なお、雄二を出迎えたのは木下優子である。

翔子は先生に呼ばれて、職員室に向かっていた。

「なにが目的かしら?」

と、優子が問い掛けると

「もちろん、俺達Fクラスの勝利だ」

と断言した。

それを聞いた優子は、しばらく黙考して

「悪いけど、受けられないわ」

と、突っぱねた。

その言葉を予想していた雄二は頷き

「姫路が出るのを懸念したな? 安心しろ。Fクラスからは、俺が出る」

と、自身を親指で示した。

が、優子は首を左右に振って

「安心できないわ。何たって、これは戦争なんだから」

と、拒否した。

そのことに雄二は内心、どうしようか考えていたら

「……その提案、受けていい」

気付けば、翔子が帰ってきていた。

「代表! いいんですか?」

と優子が聞くと、翔子はうなずいて

「……ただし、7対7で先に四回勝ったほうが勝ちで」

と、提案してきた。

「いいだろう。だったら、教科選択権はこっちが四回、そちらが三回だ。それくらいの手合はいいよな?」

交換条件なのだろう、雄二が提案すると、翔子もうなずき

「……構わない。開戦時間は？」

「午後の一時からだ。場所はここでいいな？ 正直、Fクラスは適さないんだ」

雄二がそう言うのと、翔子は頷いた。

と、交渉が終わった時

その場に新しく、三人現れた。

「ようやく来たね、雄二」

それは明久だった。

隣には、謙信が寄り添うように立っており、少し離れた場所に颯馬が居る。

「おう、待たせたな。明久」

そう雄二が返答した

その時だった。

「異端審問会！ 開廷！」
キックオフ

「ヤーハー！！！」

F F F 団共が、現れた。

それを見た明久は、雄二とアイコンタクトを始めた。

(なにあれ?)

(異端審問会こと、通称F F F 団だ)

雄二の告げた団体名を聞いて、明久は首を傾げた。

(F F F 団?)

(ああ。簡単に言うと、女子と仲良くしてる男子に対して嫉妬から来る八つ当たりをする集団だ)

二人がそこまで会話した時

「横溝！ 被告の罪状を読み上げろ！」

「はっ！ 被告吉井明久(以下から甲とする)は、血の掟に背き女子と一緒に……」

まるで、裁判のようなやり取りが始まった。

「長い！ もっと簡潔に陳べよ！」

「美少女とイチヤイチャしてうらやましいであります！」

「うむ！ 実にわかりやすい！」

そんなバカ共の様子に、雄二はため息を吐いて

「交渉はこれで終わりだ。こいつらのことは任せろ。こちらで処分する」

と言って、ドアを閉めた。

以下からは音声でお送りします。

『坂本！ なぜ邪魔をする！ 我々には、あの男を殲滅するという義務があるのに!!』

『そうだそうだ!』

『お前ら、あいつは他クラスだ。他クラスの奴に迷惑をかけるな』

『そんなことは関係ない！ 我々は男の定めに従っているのだ!』

『男の定めだあ?』

『そうだ！ 諸君！ 男とは!?!』

『愛を捨てて、哀に生きる!』

『その通りだ!』

『ようするに、モテねえからヒガンでるだけか』

『うるさい！ 我々の邪魔をするのなら、貴様から倒すぞ!』

『はっ！ やれるものなら、やってみろや』

『行くぞ諸君！ 正義は我らにアリ！ 突撃!!』

『うおおお!』

『てめえらが正義を語るな！ 行くぞ！ 悪鬼羅刹!』

『なにい!? ス、ス○ンドだとお!?!』

『怯むな！ 相手は一人だ！ 数で行けえ!』

『むーだ！ 無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄!』

『ぎやああああああ!』

『た、助け!』

『FFF団の存在する、意義！ 意味！ 理念！ 全てが、無駄あ!!』

『バカなああああああ!!』

以上、終了

その頃、Aクラス内では

「明久、ス○ンドとはなんですか?」

「謙信は知らなくていいからね?」
少しのほほんとした会話が あったとか。

Aクラス対Fクラス その1 双子

午後1時

場所 Aクラス教室

「それでは、これよりAクラス対Fクラスの代表者による一騎打ちを行います」

そう宣告したのは、Aクラス担任にして学年主任の高橋女史である。

「それでは第一回戦を始めます。両クラスの一人目、前へ！」

と、高橋女史が言う

「それじゃあ、あたしが出るわ」

Aクラスからは、木下優子が

「ふむ、ワシが行こうかのう」

Fクラスからは、弟の木下秀吉が出た。

「教科を選択してください」

と、高橋女史が催促すると

「あんたが選んでいいわよ」

優子は、選択権を秀吉に譲った。

「む？ それならば、古典をお願いするのじゃ」

秀吉は一瞬、眉をひそめたが、好意に甘えたのか教科を選んだ。

「古典承認します。召喚してください」

と、高橋女史が促すと二人は頷き

「試^サ獣^モ召喚！」

同時にキーワードを唱え、召喚獣を召喚した。

古典

Aクラス 木下優子 328点

VS

Fクラス 木下秀吉 289点

「なに!? 秀吉、あんた! その点数は!?!」

優子は表示された表示の点数を見て、驚いていた。

「なにこの。Aクラスと戦うのに、点数が低いままでは勝てないのは

わかっておったのじゃ。じゃから、信繁達に教えてもらったのじゃ」
秀吉は自信に満ちた瞳で、優子を見ながら告げた。

その時

「試合、開始！」

高橋女史が、ゴングを鳴らした。

「先手必勝！」

始まると同時に、優子が即行で召喚獣の右手の突撃槍ランスを突き出した。

秀吉は、それを冷静に見極めて

「ふっ！」

短い呼気と共に、薙刀の柄で下に逸らして

「はあっ！」

流れるような動作で、一閃した。

「くっ!？」

優子は急いで、身を捻ったが避けきれず

Aクラス 木下優子 287点

点数が減り、僅かに秀吉の点数を下まった。

「一つ言い忘れたのじゃが、教えてもらったのは勉強だけではないの
じゃ。真田には槍術も教えてもらったのじゃ」

「槍術ですって？」

秀吉の言葉に優子は、目を細めた。

「うむ。あまり詳しくは言わんが、その技を応用しておるのじゃ」

そこまで説明すると秀吉は、薙刀を構えて

「無駄話はここまでじゃ、参る！」

気合いと共に、駆け出して

「はあ！」

秀吉は短い気合いと共に、連続突きを放った。

「くっ！」

優子は慌てながらも、バックステップで避けた。

「ならば！」

避けられた秀吉は、薙刀を戻して

「せいっ！」

召喚獣を独楽のように回した。

「くっ！」

優子はランスを縦に構えて、薙刀を受け止めた。

その衝撃により、優子の召喚獣は後ろに押しとばされた。

秀吉の召喚獣は優子を追わず、その場で薙刀を構え直した。

「追撃しないなんて、随分と余裕じゃない」

優子は睨みつけながら、秀吉に問い掛けると

「無闇に深追いしすぎるなというのも、師匠の教えでいう」

油断無く構えながら、そう返した。

「やられっぱなしってのも、趣味じゃないし……行くわよ！」

「うむ、来るのじゃ！」

そこから、二人の激戦が始まった。

時には弾き、突きあい、拳が、なぎ払いが当たり

そして、数分間の激戦の結果

古典

Aクラス 木下優子 37点

VS

Fクラス 木下秀吉 35点

お互いに、あと一撃で決着が付きそうになった。

「まさか、あんたがここまでやるなんて、思いもしなかったわ」

「ワシにも、男の意地があるのでのう」

優子の言葉に、秀吉がそう返すと

「後、一撃……」

「これが、最後の一撃じゃ……」

二人はそう言いながら、召喚獣の身を低くして

「っ！」

同時にお互いに向けて突撃した。

そして、二人の攻撃は

秀吉の召喚獣の薙刀は、優子の召喚獣の胸元に

優子の召喚獣の突撃槍は、秀吉の召喚獣の腹部を貫通していた。

その結果

古典

Aクラス 木下優子 0点 戦死

V S

Fクラス 木下秀吉 0点 戦死

お互いに、戦死となっていた。

その瞬間

「第一回戦、引き分け!!」

高橋女史が、勝負の結果を宣言したのだった。

Aクラス対Fクラス その2 軍師

「ひ、引き分け!」

まさかFクラスに引き分けにされるとは思っていなかったのか、高橋女史は狼狽え気味に試合結果を宣告した。

「ひ……引き分け?」

秀吉も信じられないのか、呆然としていると

「なに呆けてるのよ」

気づけば、姉の優子が隣まで来ていた。

「あ、姉上……」

「なによ、あんたもやれば出来るんじゃない」

優子はそう言うと、微笑んで

「この調子で、頑張りなさいよ?」

優しく諭した。

すると、秀吉は目尻に涙を浮かべながら

「うむ! 頑張るのじゃ!」

と、意気込んでからFクラスの下へと戻った。

そして、秀吉が戻ると、Fクラスの全員は拍手喝采で秀吉を迎えた。

「秀吉、よくやった! 幸先良いスタートだ!」

雄二がそう誉めると、秀吉は頷いて

「直接勝てなかったが、クラスの勝利に貢献できて良かったのじゃ」

と、嬉しそうに語った。

すると、冷静さを取り戻したのか、高橋女史が

「それでは、第二戦を始めます。両クラスは選手を出してください」

と、二人目を催促した。

すると、Aクラスからは眼鏡を掛けた女子、佐藤美穂さととうみほが立ち上がり

「私が行きます。科目は物理でお願いします」

と、科目を選択した。

それを聞いた雄二は、数瞬考えると

「よし、須川。いってこい」

須川を指名した。

すると須川は、キザつたらしく髪をかきあげて

「ふっ……坂本よ……それは俺に、本気を出せってことか？」

と、雄二に問いかけた。

すると、雄二は親指を立てて

「ああ、逝ってこい!!」

と、死刑宣告をした。

それを聞いた須川は、右手を突き上げて

「勝ってくるぜ!」

意気揚々と、試合会場に向かった。

雄二は見送ると、顔を信玄達に向けて

「さて、生け贄はこれでいいとして……」

どうやら、須川は捨て駒だったらしい。

「Fクラスは三人目を出してください」

「は?」

高橋女史の言葉に雄二が振り向くと、そこには

物理

Aクラス 佐藤美穂 398点 WIN

VS

Fクラス 須川亮 0点 DEAD

という、表示が見えた。

どうやら、須川は瞬殺されたらしい。

そして既に、Aクラスからは天城颯馬が出ていた。

颯馬と信繁の視線が重なる、二人は同時に笑みを浮かべた。

そのタイミングで信繁は立ち上がり

「そんじゃあ、俺が行こう」

と、試合会場に出た。

そして、白線まで出ると

「どうも信さん」

「数ヶ月ぶりの勝負だな。颯馬」

二人は軽く挨拶した。

「ええ…そろそろ、決着を着けたい所ですね」

「だな。丁度半々だしな」

信繁が確認すると、颯馬は頷いて

「ええ。百戦五十勝五十敗です」

と、競い合った数を告げた。

この二人は互いに競い合って、戦略や戦術を高みにまで昇華させてきた。

その勝負をそろそろ着けたいらしい。

「んじやま、丁度よく百一戦目だし。これで仕舞いにしようか」

「ええ」

二人がそう言ったタイミングで、高橋女史が

「それでは、科目を選択してくださいー!」

と、宣言した。

それを聞いた二人は、目を合わせて

「では、僕が選びます」

「おう、どうぞ」

颯馬が選択権を得た。

「世界史でお願いします!」

颯馬が言うと、高橋女史はパソコンを操作して

「承認します。召喚してください」

と、召喚を促した。

それを聞いた二人は頷き

「試^サ獣^モ召喚!」

同時にキーワードを唱えた。

その直後、二人の足下に幾何学的な模様の魔法陣が浮かび、軽い爆発音が聞こえた。

そして、二人の召喚獣が現れた。

二人の召喚獣はおそろいの服装だが、武器が違った。

信繁は右手に槍、背中に火縄銃に対して

颯馬は両手に小太刀を持っていた。

そして、二人の点数がモニターに表示された。

世界史

Aクラス 天城颯馬 498点

VS

Fクラス 武田信繁 497点

驚いたことに、二人の点数はほぼ同点だった。

互いの点数を見た二人は、笑みを浮かべて

「んく…五百行かなかったか」

「ですね。お互いに、一問ずつ間違えたみたいですね」

信繁の言葉に颯馬は同意すると、深呼吸をして

「吉井、上杉両家側仕え軍師。第二十代目天城颯馬！」

凜とした声で、名乗った。

それを聞いた信繁は目を見開き

「本気みたいだな…いいだろう」

颯馬と同じように、深呼吸して

「武田家長男、武田家次期頭首側仕え軍師。武田信繁！」

颯馬と同じように、名乗った。

それを見ていた周囲の生徒達は首を傾げていた。

なぜ、この段階になって名を名乗る必要があるのだろうか？ と。

すると、雄二が近くに座っていた幸村に

「なあ、あいつらの名乗りはどういう意味なんだ？」

と、たずねた。

すると、幸村は視線を信繁達に向けたまま

「あれは、我々のような古い武家に伝わる儀式です」

と、説明しだした。

「儀式？」

「ええ。意味は……」

幸村はそこで一旦区切ると、視線を雄二に向けて

「本気の勝負を希望する。不退転の覚悟で挑むです」

それを聞いた雄二は、真剣な表情で試合会場に視線を向けた。

そして、試合会場では二人の召喚獣が既に臨戦態勢で武器を構えていた。
それを見た高橋女史は右手を上げて

「試合、開始！」

右手を振り下ろしながら、ゴングを鳴らした。

「はあ!!」

「ぜあ!!」

二人は試合開始と同時に、召喚獣を突撃させた。

信繁の槍と颯馬の小太刀がぶつかって、火花が散った。

二人は衝撃で一瞬姿勢を崩すが、すぐに立て直し

「疾！」

颯馬は矢継ぎ早に連撃を繰り返した。

「なんの！」

信繁はそれを槍の柄で受け止めると

「ちえい!!」

石突で叩こうと槍を回した。

「くっ！」

颯馬はそれを小太刀を交差させて防いだ。

だが、衝撃を殺しきれなかったのか後ろに押された。

そして、その間合いは中距離。

すなわち……………

「俺の距離だ!!」

信繁の槍の連撃が、颯馬を襲った。

「くあ!!」

颯馬は小太刀で防いだり受け流したりしたが、一撃貰い

天城颯馬 457点

一気に40点近く削られた。

だが、点数が減っていたのは颯馬だけではなかった。

武田信繁 456点

気づけば、信繁の召喚獣の体に短刀が三本刺さっていた。

「暗器か…っ！」

短刀の正体に気付いた信繁が歯噛みしていると

「誰が、僕の武器が小太刀だけだと言いました!？」

その隙を突いて、颯馬が怒涛の連撃を始めた。

「くお!？」

信繁は、その連撃を槍で弾いたり、防いだり、体を傾けて避けていった。

だが、避けきれずに数発当たり

武田信繁 295点

大幅に点数差が開いた。

「なるほど、お前らしい装備みたいだな。暗器使いか」

「信さん。僕達は軍師なんです。軍師はあらゆる状況を想定し、それをもとに戦術を組み立て、それを実行する」

颯馬の言葉に、信繁は頭を掻くと

「そうだったな……しかもお前は、時には自分すら駒にする」

颯馬の理念を思い出した。

「ええへ守るためならば、毒すらも利用して、自分の命も天秤に掛ける。それが、僕の理念です」

颯馬はそう言うと、武器を構えた。

それと同時に、信繁も槍を構えた。

そこから数秒間、お互いに動かなかった。

そして、周囲の緊張感が高まった途端だった。

「はっ!」

「ぜあっ!」

二人は同時に突撃、お互いの武器が激突した。

金属音と共に火花が散り、二人の距離が離れた。

余波で体勢が崩れたが、二人は同時に体勢を取り直し

「ふっ!」

颯馬は右手を振って、短刀を三本投げた。

「なんの!!」

信繁はそれをステップすることで躲すと、槍を振るった。

颯馬は避けようと体を後ろに逸らしたが、避けきれずに当たり

天城颯馬 398点

四百点を切った。

だが、点数差で押し切れると思ったのか、颯馬は一気に接近すると

「はあっ！」

小太刀で切りかかった。

「まだまだ！」

信繁は小太刀を槍の柄で受け止めた。

その瞬間

颯馬がわずかに、笑みを浮かべた。

その直後、颯馬の召喚獣が信繁の槍を蹴り飛ばした。

「しまっ！」

信繁は槍を取ろうとしたが、それを颯馬が許すはずもなく

「はっ!!」

信繁の召喚獣を蹴り飛ばした。

信繁の召喚獣は大きく飛ばされ、仰向けに倒れた。

倒れた信繁はすぐさま立ち上がろうとしたが、また倒れ込んだ。

「なにが!？」

なぜ、立ち上がれないのか慌てた信繁は、足に絡まっていたソレに
気付いた。

「なっ……縄じょう標ひょうだ?!」

縄標じょうひょうというのは、いわゆる投げ縄である。

ただし、縄の両端に重りが付いているために相手に投げつけられ、
反動で相手を簡易的に縛ることが出来るのだ。

「くそっ！」

信繁は縄標を外そうと手を伸ばすが、それを颯馬が許すはずがな
かった。

「させません！」

颯馬は矢継ぎ早に暗器を投げると、小太刀を構えて突進した。

信繁は暗器を避けるために、地面を転がった。

だが避けきれず、数発が掠り点数が減り、そこに颯馬が小太刀の一
閃を繰り出した。

武田信繁 133点

小太刀が直撃したことにより、点数は百点台になった。

「次で終わりにします」

颯馬はそう宣言すると、暗器を構えた。

信繁の足には未だに、縄標が絡まっている。

縄標を取る時間は無いだろう。

信繁もわかつているのだろう。

沈黙で返した。

そして、数秒後。

「はあっ！」

颯馬は暗器を投げてから、小太刀を構えて飛びかかった。

信繁は先ほどと同じように、暗器を転がって回避していった。

だが、颯馬は回避方向を予測していたようで、三本ほど刺さった。

回避行動が終わった信繁の前には、小太刀を振りかぶっている颯馬

の姿があった。

誰もが、颯馬が勝つと思った。

だが、そんな状況下で

信繁は笑った。

信繁が笑みを浮かべたことを、颯馬が訝しんでいると

信繁の召喚獣が右腕を出した。

そして、召喚獣の右腕には

火縄銃が握られていた。

「火縄銃!？」

颯馬は火縄銃の射線上から逃げようとしたが、颯馬の召喚獣は空中

に居て、回避のしようがなかった。

「王手だな。颯馬」

信繁はそう言うと、火縄銃の引き金を引いた。

放たれた弾丸は一直線に進み、颯馬の召喚獣の頭部を貫通した。

それにより、颯馬の召喚獣は後ろに一回転して、地面に落ちた。

それを見た信繁は勝利を確信したのか、拳を握った。

「この試合、引き分け！」

だが、高橋女史が告げたのは、引き分けだった。

「へ？ 引き分け？」

勝利じゃないことを不思議に思い、信繁は高橋女史に視線を向けて

からディスプレイを見た。

そこには

世界史

Aクラス 天城颯馬 0点

V S

Fクラス 武田信繁 0点

試合 DLAW

と表示されていた。

ディスプレイを見た信繁は慌てて、自身の召喚獣を見た。

そこには、倒れている自身の召喚獣が居て、召喚獣の胸部には、小太刀が深く刺さっていた。

「小太刀を投げたのか!!」

「ええ、あのままでは勝てないと思い、悪あがきに出させてもらいました」

颯馬は信繁の言葉に返答すると

「まあ、引き分けでしたけど」

と、肩をすくめた。

それを聞いた信繁は嘆息して

「勝負つかずか……こりゃ、次回に持ち越しかな?」

と、颯馬に問いかけた。

すると、颯馬も頷いて

「ええ、次回を楽しみにしてますよ。信さん」

と、微笑んだ。

こうして、幼なじみ軍師同士の勝負は引き分けに終わった。

Aクラス戦 その3 寡黙と開放

第三試合が引き分けに終わり、現在はAクラスが優勢だった。

そして、第四試合

「これより、第四試合を始めます。両クラスは代表者を出してくださいー！」

高橋女史がそう言うと、Fクラスからはムツツリーニが出た。

そして、Aクラスからは工藤愛子が出た。

「キミがムツツリーニ君だね？ ボクは去年末に転校してきた工藤愛子。よろしくネ？」

工藤愛子が軽く自己紹介すると

「……よろしく」

ムツツリーニは軽く頭を下げた。

そのタイミングで

「それでは、科目を選択してくださいー！」

と、高橋女史が促した。

「……保険体育」

促されて、ムツツリーニが選んだのは保険体育だった。

ムツツリーニが保険体育を選ぶと、工藤愛子が面白そうな顔をして「そういえば君は、保険体育が得意なんだよね？ 実はボクも得意なんだ。ただし、君とは違って……実技でね」

と意味深に告げた。

それを聞いたムツツリーニは、一瞬首を傾げて

「……それがどうし」

た、と言おうとしたが、鼻血が噴出した。

するとムツツリーニは、ポケットからティッシュを取り出し鼻に詰めると

「……これは花粉のせい」

と、否定したが

「康太、それは無理がある」

「ムツツリーニ、その言い訳には無理がある」

明久と雄二が同時に突っ込みをいれた。

「アハハ！ 君って面白いネ！ そうだ、それとね……」

愛子はひとしきり笑うと、下目遣いでムツツリーニを見つめて

「今日のボクね……ノーブラなんだよね♪」

愛子がそんな問題発言をした。

次の瞬間

「……卑怯な！」

ムツツリーニの鼻から鼻血がティッシュを押し出して、凄い勢いで噴出した。

「ムツツリーニイヤー!!」

「誰か、このエロの化身を助けてくれえ!!」

「衛生兵！ 衛生兵!!」

Fクラス側では阿鼻叫喚となり、Aクラス側では呆れ半分、引き気味半分となっていた。

「はあ……やれやれ……」

雄二は溜め息を吐きながら、ムツツリーニに駆け寄って処置を始めた。

少々、お待ちください。現在蘇生中です。

「えー……始めてもよろしいでしょうか？」

さすがに驚いたようで、高橋女史も若干引き気味に訊ねた。

「……問題……ない」

雄二の蘇生治療の甲斐あって、ムツツリーニはなんとか立てるようになっていた。

ただ、両腕で松葉杖を使っており、近くには点滴台も立っていて、正直、痛々しい。

二人が頷いたのを見て、高橋女史は

「それでは、召喚してください！」

と、促した。

「試^サ獣^モ召喚！」

促された二人は、同時にキーワードを唱えた。

その直後、軽い爆発音がして、二人の足元に召喚獣が現れた。

ムツツリーニのは相変わらず、忍者姿で両手に小太刀を装備していた。

そして、愛子の召喚獣は服装はセーラー服だったが、右手には「なんだ、あの巨大な斧は!?」

「それに、腕輪も填めてるぞ!!」

そう、愛子の召喚獣の装備は召喚獣よりも大きな斧を持っており、右腕には腕輪も装備されていた。

保険体育

Aクラス 工藤愛子 472点

そして、その点数も驚異的だった。

「理論派と実践派、どっちが強いか証明してあげる!」

と、愛子が宣言したと同時に

「試合、開始!」

高橋女史がゴングを鳴らした。

「バイバイ! ムツツリーニ君!」

試合開始と同時に、愛子が斧を振りかざしながらムツツリーニに駆け出した。

「ムツツリーニ!」

Fクラスからムツツリーニを心配する声が出た。

その時だった。

「……加速」

とムツツリーニが呟き、袖に隠れていた腕輪が光った。

「え?」

愛子がムツツリーニの呟きに首を傾げた瞬間、ムツツリーニの召喚獣がかき消えて

「……終了」

と呟いたと同時に、ムツツリーニの召喚獣が愛子の召喚獣の背後に現れた。

その直後、愛子の召喚獣は倒れた。

保険体育

Aクラス 工藤愛子 0点 LOSE

V S

Fクラス 土屋康太 552点 WIN

ディスプレイの表示を見て、愛子は目を見開き

「そんな……このボクが負けるなんて……」

と膝を突いて、悔しがった。

すると、そんな愛子にムツツリーニは近づき

「……確かに、お前は強かった」

声を掛け始めた。

「ムツツリーニ君……」

声を掛けられたことで、愛子は視線をムツツリーニに向けた。

「……だがお前は、慢心が過ぎた」

「……どういうこと？」

ムツツリーニの言葉に、愛子は首を傾げた。

「……自分が一番強い。自分より強い奴は居ないと侮り、相手に対しての注意を怠った」

普段は寡黙な彼にしては珍しく、饒舌になっていて、愛子も聞き入っていた。

「……世の中には自分より上が居て、相性の悪い相手だって居る。お前はその事を考えていなかった」

そのムツツリーニの指摘に、愛子は衝撃を受けた。

（確かにその通りだ……実際にムツツリーニ君のほうが点数が高かったし、速さは見えなかった……）

愛子がそう思い、視線を下げていたらムツツリーニは背を向けて

「……その考え方を改めたら、いつでも挑戦に来い……俺は待っている……簡単に負ける気もないがな……」

ムツツリーニはそう言うと、歓声を上げているFクラス側に戻っていった。

愛子は去っていくムツツリーニを見送りながら

「ありがとう……ムツツリーニ君……」

と、感謝の言葉を呟いたのだった。

これにより、四戦が終了。

両クラスが一勝一敗二引き分けという、熱戦を繰り広げていた。
だが、この時は誰も気づかなかつた。

この直後の試合で、一人の少年に悲劇が起きようとは予想だにして
いなかった……

Aクラス戦 その4 悲劇

四戦目が終わり、今のところは熱戦が続いている。すると、高橋女史が両クラスを見て

「それでは、両クラスは代表者を出してください」と、促した。

それを聞いた雄二は、信玄を指名しようとしたが

「ウチが行くわ!」

島田が勝手に、フィールドに上がった。

「待て、島田!」

雄二が呼び止めるが、島田は無視して

「吉井、出てきなさい!」

明久を呼び出した。

指名された明久は、閉じていた目を開き

「やれやれ……」指名みたいだね……」

と、首を振りながら、フィールドに上がった。

そして規定位置に立つと、島田は明久を睨みつけ

「吉井! アンタがカンニングしてAクラスに居るのは、わかってる

んだからね! ウチがボコボコにしてやるわ!!」

と、明久を指差しながら叫ぶように言った。

それを聞いた明久は、首を振って

「カンニングなんかする筈ないでしょ? それに、試験監督はあの高

橋先生だよ? 高橋先生が見逃すわけないじゃないか」

明久がそう言うと、高橋女史も頷き

「吉井君の言うとおりです。島田さん、言葉を慎んでください」

と、高橋女史が島田を注意した。

が注意された島田は、顔を真っ赤にして

「アンタなんか、ウチが負ける訳がないんだから!」

と、明久を指差した。

そのことに明久がやれやれ、と首を振っていると

「それでは、教科を選択してください」

と、高橋女史が促した。

すると、島田が高橋女史の方を見て

「数学でお願いしますー!」

と、教科を選択した。

教科を聞いた高橋女史は、PCを操作すると

「数学に設定しました。召喚してください」

と、二人に召喚を促した。

促された二人は、同時に頷き

「試獣召喚!」

と、キーワードを唱えた。

その直後、軽い爆発音と共に、召喚獣が現れた。

数学

Aクラス 吉井明久 257点

VS

Fクラス 島田美波 214点

驚いたことに、明久と島田の点数は近かった。

明久は数学が苦手教科で、二百点前半くらいしか取れない。

だが逆に、島田は数学が得意教科で元々Bクラスの上位級だった。

しかし、今の点数はAクラス下位に匹敵している。

「ずいぶんと、点数を上げたみたいだね」

「ウチなりに頑張ってみたのよ!」

明久からの問い掛けに、島田が意気込んで返答すると、高橋女史が

手を上げて

「試合開始!」

ゴングを鳴らした。

「先手必勝!」

試合が始まると同時に、島田が突撃してきた。

島田が突撃してくるが、明久は慌てずに眺めている。

そして、必中の距離まで近づいた。

「もらったあー!」

島田がそう叫ぶと、島田の召喚獣は武器であるサーベルを突き出し

た。

だが、島田のサーベルは掠りもしなかった。

明久の召喚獣は立っているだけなのに、当たらなかった。

「ま、マグレよー！」

島田はそう言うと、サーベルの連撃を繰り返したが、明久の召喚獣には一切当たらなかった。

だが、明久の召喚獣は攻撃もしない。

傍目から見ると、それは防戦一方に思える。

そう見えたのか、Fクラスの一人が明久を指差して

「おいおい、防戦一方じゃねーか！」

「Aクラスも大したことないな！」

「こりゃ、勝ちを貰ったな！」

と、声を上げた。

「お前らの目は節穴だな」

そんなFクラスの連中を見て、雄二が皮肉を言った。

「なんだと？」

「俺達の目が節穴だど!？」

「いくら坂本でも、殴るぞ！」

そんな雄二の言葉を聞いて、Fクラスの数人が腕まくりしながら雄二を囲んだ。

だが、雄二はそんな連中を睨むと

「もう一回言つてやる。お前らの目は節穴だな」

と、もう一度同じ言葉を言った。

「だったら証明してみろや！」

「そうだ！ あんな防戦一方の試合！」

と、男子が指差した先では島田だけが攻撃していた。

「いいか、よく見る。確かに、島田だけが攻撃してる。だが、島田の攻撃は当たってるか？」

雄二の言葉に、男子たちは試合をよく見た。

そこでは相変わらず、島田のみが攻撃していた。

だが、島田の攻撃はすべて、当たっていない。

それを見て初めて、Fクラスの男子達は気付いた。

「ま、まさか……」

「吉井の奴……島田の攻撃を全部、紙一重で避けてるのか!？」

男子達は驚愕した。

召喚獣の操作は非常に難しく、同点でも相討ち覚悟で戦うくらいだ。

相手からの攻撃は大抵、大きく避けるか武器で防ぐしか出来ない。だが、明久は島田の攻撃を全て、紙一重で避けているのだ。

そこから分かるのは、明久の操作技術は学年一……いや、恐らく学園一という事実。

その時

「吉井流剣術、歩法の極み……柳葉陣」
リゅうようじん

信玄の呟きが、雄二の耳に入った。

「柳葉陣？　なんだそれ？」

雄二が問い掛けると、信玄は扇子を明久に向けて

「あの動きです。まるでヒラヒラと舞う柳の葉の如く、敵の攻撃の全てを避ける技術です」

「なんでも、吉井流剣術の次代頭取しか許されない動きなんだとか」

信玄に続き、信繁が雄二に説明した。

そこから分かるのは、明久は次代頭取に決まっているという事実。

雄二は明久の動きを見て、惹かれた。

(まるで、踊ってるみたいだ……)

周囲の生徒達も同じ気持ちだったのか、全員、息を呑んで見つめていた。

明久の召喚獣は、右に左に

時にはしゃがみこんで避けている。

それら全ての動きが連動して、まるで舞っているかのようだった。

その時、島田は焦っていた。

(なんでよー！　なんでウチの攻撃が当たらないの!?!　吉井はただゆっくり動いてるだけなのに!)

島田は心中で焦りながらも、攻撃を続行した。

だが、結果は同じで、全て避けられている。

(負けられないのよ！ 吉井なんかには、負けられないのよ!!)

そう島田が意気込み、手を握り締めた瞬間だった。

右腕の袖に隠れていた赤い腕輪が

不気味に光った。

その瞬間、明久は違和感を感じた。

(なんだ？ 感覚が違う?)

明久は感じた違和感に思考を割いた。

それが原因なのか、召喚獣の動きが僅かに鈍った。

その瞬間

「もらったあー！」

島田がサーベルを振った。

「っ！」

明久は慌てて身体を反らしたが、僅かに掠った。

数学

Aクラス 吉井明久 245点

当たったのが頭部ゆえか、掠っただけにしては点が大きく減った。

「ぐっ……」

その時、突如明久が額を抑えた。

その手の隙間から、血が滴った。

それを見て、雄二が立ち上がり

「高橋先生！ なんで明久のフィードバックが100%になってやがる!!」

試合監督を勤めていた高橋女史に向けて、怒鳴った。

「わ、私にもわかりません！ ですが、急ぎ試合を！」

高橋女史はそう言うと、パソコンを操作した。

が、驚愕に目を見開き

「そんな……フィールドが解除出来ない!？」

パソコンを叩いた。

その画面には

《警告 あなたの権限では、解除出来ません》

と表示されている。

高橋女史は齒噛みすると、視線を西村に向けて

「西村先生！ 召喚フィールドを！」

と、展開を催促した。

高橋女史の狙いはフィールド干渉だろう。

Fクラスの監視役として来ていた西村は頷くと

「展開！」

召喚フィールドを展開した。

が

西村の召喚フィールドだけが、割れた。

「な!？」

「片方だけ割れた!？」

高橋女史と西村は有り得ない事態に、目を見開き驚愕した。

召喚フィールドが重なると割れるのは、システムの過負荷による

オーバーヒートを防ぐためである。

ゆえに普通は、展開された召喚フィールド双方が割れるはずなのだ。

だが、割れたのは西村の展開したフィールドだけだった。

二人がどう対処しようか悩んでいる間にも、島田の攻撃は続いた。

感覚が違うからか、それとも視界が血で見えにくいからか、その両方なのか

明久は攻撃を避けきれずに、次々と受けた。

その結果、明久の制服は血に染まり、意識も混濁しだした。

(あれ……僕はなににしてるんだっけ……)

明久は状況もわからず、周囲に耳を向けた。

すると、聞こえてきたのは、自分を心配する声だった。

(ああ……そっか……僕は、他流試合をしてるんだっけ……)

明久が思い出したのは、今から三年前の《あの試合》だった。

その試合は、最初は普通の試合のはずだった。

だが、相手方の代表を勤めていた男が謙信を見て

『俺達が勝ったら、その女は貰う』

と言ったのだ。

その言葉に二人は怒り、当初の予定だった集団戦を変更
明久と謙信対相手六人としたのだ。

相手はそれを聞いて、嘲笑った。

相手の六人は成人近い大きい体格。

それに比べて、明久と謙信の二人は華奢な子供だった。

その差から、男達は勝てると思ったのだ。

だが、結果は

明久と謙信の圧勝だった。

男たちは失念していたのだ。

明久が剣聖

謙信が軍神と呼ばれていることを。

剣聖は最強を意味し、軍神は次席を意味しているのだ。

しかも、二人の異名には共通して蒼が付く。

異名に付けられる色には意味があり、蒼の意味は

決して、手の触れること適わない相手という意味である。

そして、この二人をして

双蒼そうそうと呼ばれているのだ。

しかも、リーダー格の男を倒したのは、謙信なのだ。

まさか、年下の少女に負けるとは思ってなかった男は逆上して、木
刀に偽装していた真剣を抜いて、謙信に切りかかったのだ。

明久はそれをいち早く察知して、持っていた木刀で反射的に防ごう
とした。

が、真剣を木刀で防げるわけがなく、木刀を斬られて、左目も一緒
に斬られた。

明久の意識は、そこまで戻っていた。

(そうだ……僕が倒れたら、謙信が殺される……それだけは、ダメだ
……)

明久は朦朧としながらも、相手の猛攻を避けていく。

(どうする……どうすればいい？ ああ……そんなのは決めてるじや
ないか……守るためなら、刀を抜くと……)

明久がそう思っていた。

その時

「これでええええ！」

島田は興奮した様子で、サーベルを振りかざした。

「明久ー！！」

見ていた雄二達は、顔を青くしながら、明久の名前を叫んだ。

明久の召喚獣は元々が、観察処分者仕様である。

この観察処分者仕様は、召喚獣の疲労や筋的負担

更には、痛みを三割ほど召喚者にフィードバックするのだ。

しかし、その恩恵と言うべきか

召喚獣との一体感が上がり、操縦性が上がるのである。

しかし、そのフィードバックは今や100%に引き上げられている。

ゆえに、召喚獣が負ったダメージが明久に来ているのである。

だから、召喚獣が致命傷を負えば、明久も致命傷を負い、召喚獣が消えれば、下手したら

死ぬ。

そして、島田の召喚獣のサーベルが明久の召喚獣を斬ろうと振り下ろされた。

その時

銀閃が走った。

全員の目に入っているのは、交差した二人の召喚獣。

そして

数学

Aクラス 吉井明久 156点

VS

Fクラス 島田美波 167点

互いに減っている点数。

そして

回転して突き立った、腕が付いたままのサーベルだった。

「……………」

誰の言葉だったのかはわからない。

だが、なぜ、腕が付いたままのサーベルが突き立ったのか。

答えは簡単。

明久が、その手に持っている刀で斬ったからだ。

明久は全身を血に染めながらも、立っていた。

だが、顔は俯いている。

「あ、明久……？」

謙信が呼んだ瞬間、明久は顔を上げて

「オオオオオオオオオー!!」

空気を震わす程の雄叫びを上げた。

雄叫びを上げると同時に、明久から殺気が放出された。

その殺気が原因なのか、窓はひび割れ、机は揺れた。

そして、明久から放出された殺気で空気が凍りつくほどに寒く感じられた。

殺気に慣れていないほとんどの生徒達は力無く座り込み、歯を鳴らして、ガタガタと震えた。

そしてそれは、信玄と幸村の殺気と覇気に耐えた雄二も例外ではなかった。

雄二も顔を青ざめ片膝を突き、息を荒くしていた。

(なんだ、この殺気は!?! FFF^{バカ}団^共の殺気なんか子供だましじゃねーか!)

雄二は本能的に逃げたかった。

だが、恐怖で足が竦み、言うことを聞かない。

その時、三つの影が前に出た。

それは

「信繁に信玄。それに幸村!」

その三人が前に立った瞬間、僅かだが、殺気が薄まった。

「俺達の後ろから出るなよ」

「私達でも、ある程度弱めるのが限界です」

雄二はふと、視線をAクラスに向けた。

そこでは、謙信と颯馬が同じように立っていた。

その向こうでは、翔子や優子も顔を青ざめて座り込んでいた。謙信と颯馬が、信繁達と同じように殺気を弱めているのだろうか。は、想像に難くない。

(明久……！)

雄二は明久を見守ることしか出来ないことに、歯噛みした。

「今更刀を抜いたって、ウチの勝ちが変わらないわよ！ 点数ならまだ、ウチが勝ってるんだから！」

島田はそう言いながら、刺さっていたサーベルを抜いた。

明久は無言で島田を見つめている。

「これで、終わらせるんだから！」

島田はそう言うと、サーベルを振りかぶって突撃した。

明久はそれを見ると、構えた。

左手で柄を持ち、右手は柄尻に当てる程度

切っ先は下に向けて、左半身で刃を前にして、峰を肩に当てた。

その構えは、常識的に考えるならば、防御の型だ。

だが、その構えを謙信は知っていた。

「ダメ……」

謙信はその技を思い出し、呟いた。

「吉井流剣術……」

明久は島田を睨みながら、呟く

「ダメです……明久……」

謙信は涙目になりながら、首を振った。

なにせ、その技は……

「裏奥義……」

かつて三年前に

「だめー！！」

男の命を奪った技だったからだ……

「これでええええ！」

「ぜっが
絶牙！」

次の瞬間、二人の召喚獣が交差した。

そして消えたのは

島田の召喚獣だった。

悲劇の後

島田の召喚獣が消えた後、数秒間は全員が呆然としていた。あまりの予想外の試合内容に、全員は付いていけなかったのだ。すると、高橋女史がパソコンの画面を見て

「召喚フィールド解除！」

今更かもしれないが、召喚フィールドを閉じた。

それにより、生き残っていた明久の召喚獣も消えた。すると、雄二が立ち上がって

「明久……」

心配そうに、明久に声をかけた。

次の瞬間、明久の体が傾いた。

「明久！」

それを見た雄二が駆け出そうとしたが

「明久！」

すでに、謙信が駆け寄っていて、抱き締めた。

「明久！ 明久！」

謙信が揺すりながら名前を呼ぶが、明久は反応しなかった。

謙信は制服や手が血に濡れるのも構わず、明久を呼び続けた。

その姿に、全員が固まっていると

「つ……ウチはなにを……?」

頭が痛いのか、苦痛に表情を歪めながら額に手を当てて島田が呟いた。

その声が聞こえた瞬間、雄二は島田に向けて駆け出して

「島田——」

島田の胸ぐらを掴み、島田を持ち上げた。

「ぎ、坂本!? い、いきなりなに!?」

訳がわからないのか、島田は目を白黒させながら問いかけた。すると雄二は、怒りに任せて

「なにスツとぼけてやがる！ てめえのせいで明久が！」
と、怒鳴った。

雄二の言葉を聞いて、島田は視線を明久達の方向に向けた。

「な!? よ、吉井!」

島田は明久の姿を見て、顔を蒼白にした。

「てめえのせいだろうが!」

雄二はそう言いながら、島田を持ち上げた。

それにより、首が締まっていき、島田の顔が白くなっていった。

「よせ、坂本!」

その光景に西村が慌てて駆け寄り、雄二の腕を掴んだ。

「うるせえ! こいつのせいで、明久が!」

西村の制止を振り払い、雄二はさらに島田を持ち上げようとした。

その時だった。

「よしな!」

新たに聞こえた第三者の声に、全員は声のした方向に振り向いた。

そこに居たのは……

「学園長!」

「ババア!」

ここ、文月学園の学園長

藤堂カヲルだった。

「坂本、下ろしな」

学園長は静かに、雄二に命令した。

「だが!」

雄二は抗議の視線を学園長に向けるが、学園長は雄二を睨みつけ

「もう一回言うよ。下ろしな」

と、冷徹な光を宿した目で睨みながら、命じた。

「わかった……」

渋々といった様子で雄二は、島田を下ろした。

床に下ろされた島田は、激しく咳き込みながら呼吸していた。

そんな島田を見下しながら、学園長は近づいて島田の腕を掴んで持ち上げた。

「あっ!?」

そんな学園長の行動に島田は驚くが、学園長は無視して袖をまくっ

た。

そして、見えた腕輪を見て、西村は目を見開いた。

「学園長、それは!」

「ああ……以前開発して廃棄したはずの《真紅の腕輪》さね……」

西村と学園長はその腕輪の正体を知っていた。

「真紅の腕輪? なんだそれ?」

雄二が聞くと、島田の腕から腕輪を外した

島田は一瞬、腕を伸ばしかけたが、学園長に睨まれて止めた

「こいつは、吉井が観察処分者に立候補する前に作った腕輪でね。先生がこれを装着していて、フィールド内に生徒が居ると、そいつを簡易的に観察処分者仕様に出来る。って目的で開発したんだが……出来たのは、とんだ失敗作だった。生徒に対するフィールドバックが強制的に100%で固定されていたんだ……余りにも危険と判断して、廃棄したはずなんだが……」

学園長はそこまで言うと言を細めて、島田を見下ろし

「アンタに聞くよ。これはどうやって手に入れたんだい?」

と、問いかけた。

問いかけられた島田は最初は口を閉ざしていたが、西村と雄二に睨まれてようやく口を開いた。

「宅配便で届いたんです……ウチ宛てに……」

島田の言葉を聞いて、学園長は片眉を上げた。

「配達された? 誰からだい?」

再び問いかけられた島田は首を振って

「わかりません……名前は書かれてなかったから……」

と呟いた。

島田の呟きを聞いた雄二は、憤慨した様子で近づき

「てめえは……送り主不明なんて怪しい品を受け取って、しかもどんな効果も知りもしないで使ったのか!!」

と怒鳴った。

怒鳴られた島田は、顔を白くして

「ウチだって、こんなことになるなんて知らなかったのよ! 中に

入った紙には、これを着けて召喚獣勝負に勝てば、相手に思いが伝わるって！」

と喚いた。

それを聞いた雄二が更に怒鳴りつけようとしたが、それを学園長が手で制して

「その紙ってのは？」

と、島田に問いかけた。

問いかけられた島田は、ポケットに手を入れて

「こ、これです……」

と、差し出した。

学園長は差し出された紙を奪い、西村と一緒に見た。

「ちつ……ご丁寧にパソコンかい……」

「これでは、誰からかは……」

学園長は舌打ちして、西村は残念そうに首を振った。

学園長は紙を西村に渡すと、島田を見下ろして

「これが入ってた箱は？」

と、腕輪を振りながら聞いた。

「う、ウチの部屋にあります……」

島田の呟きを聞くと、学園長は領いて

「今回の試合は、アタシの権限で無効試合とさせてもらうよ！ 更に、

今日は試合を中止！ 明日に持ち越しさね！」

と告げた。

そう言った後、学園長は視線を高橋女史に向けて

「高橋先生、アンタは吉井を病院に連れていきな。文月総合病院には

アタシから連絡を入れとく」

「はい……」

学園長の指示を受けた高橋女史は、謙信と明久に駆け寄り、謙信と一緒に明久を運びだした。

すると、颯馬と信玄、信繁と幸村も付いていった。

それを学園長は見送ると、島田に視線を向けて

「クソジャリ、アンタには先に三日間の自宅謹慎を命じる。その後には

詳しい処分を伝える。少しは頭を冷やすんだね」

と、島田に告げた。

それを聞いた島田は俯いて

「はい……」

と返答してから、ヨロヨロと立ち上がり教室から出ていった。

学園長はそれを見送ると、視線を雄二に向けて

「アンタも病院に行つてきな。吉井が心配なんだろう？」

と語りかけた。

それを聞いた雄二は数秒間悩んだが

「すまん……」

と頭を下げると、ドアに向かって歩き出した。

すると、雄二を追うように翔子も教室から出ていった。それを確認すると、西村は残っていた生徒に向けて

「今日は帰ってよし。明日は通常通りに登校するように。以上！」

と告げた。

それを聞いた生徒達は、三々五々と教室から出ていった。

全員を見送つてから、西村と学園長は領きあつて

「それじゃあ、今からあのジャリの家に行くかね」

「はい。少しでも、犯人に繋がる手懸かりを探しましょう」

と言うと、教室から出た。

場所は変わり、ある一室に二人の人影があつた。

一つは白髪混じりでメガネを掛けた男性で、もう一つは小柄で紫色の髪をツインテールにしている女子だった。

二人の前にはモニターが設置されていて、先ほどの明久と島田の試合を映していた。

試合結果を見ると、男性は舌打ちして

「使えないクズめ……観察処分者如きに勝てないとは……」

と、憎々しげに呟いた。

すると、女子が近づいて

「でしたら、この策なんかはどうでしょうか……」

と言つてから、男性の耳元で囁いた。

それを聞いた男性は、笑みを浮かべて

「それは名案だ……早速、手を打とう」

と言つて、部屋を出た。

それを女子は見送ると

「単純な男……まあ、使えるから使うわ……剣聖、あなたは邪魔なのよ

……」

と呟いから、部屋を出た。

病院 過去話

数十分後

場所 文月総合病院手術室前

手術室前の廊下のソファに、謙信は一人で座っていた。

途中までは高橋女史も居たが、仕事も残っているために学校に戻った。

謙信は明久が手術室に入ってから、一瞬たりとも動かず、ソファに座っていた。

謙信の制服には明久の血が残っていて、悲惨な事になっていた。

どれくらい座っていただろうか、明久の無事を祈りながら座っていたら、廊下の向こうから、数人の走る音が謙信の耳に入った。

視線を向けると、そこには信玄達が走っていた。

信玄達は謙信の前に止まると、心配そうな様子で

「明久は？」

「大丈夫なのか？」

と、謙信に問い掛けた。

問い掛けられた謙信は、へ手術中〜と灯っているランプを見上げながら

「まだなんとも……」

と呟いた。

謙信の視線を追って、全員が手術室のランプを見上げたその時、手術室のランプが暗くなった。

全員がそれに気づくと同時に扉が開き、中から数人の看護師と医者。そして、ストレッチャーに乗った明久が出てきた。

すると謙信は素早く立ち上がって、医者に駆け寄り

「先生、明久の容体は？」

と、心配そうに問い掛けた。

問い掛けられた医者は、笑みを浮かべて

「安心してください。命に別状はありません。ただし、出血が多かったので、数日は絶対安静が必要です」

と断言した。

医者 of 言葉を聞いて、全員安堵した。すると、医者は周囲を見回してから

「ご家族の方は？」

と、謙信に問い掛けた。

「こちらに向かつてる途中のはずです」

病院に来る際に謙信は、吉井家に連絡を入れていた。

明久の実家は、少し離れた所にあるために、急いでも一時間以上は掛かるのだ。

「そうですか……では、入院手続きはご家族が来た時にするとして、彼は先に個室に移送しましょう」

「個室ですか？」

集団部屋だと予想していた謙信は、個室と聞いて首を傾げた。

「はい。文月学園学園長から指定されました。既に個室代金も頂いております」

どうやら、学園長の手引きだったらしい。

まさか、個室の手配までしてくれるとは思わなかった謙信は、内心で学園長に感謝した。

移動し始めた明久の後を、謙信達は一緒に移動した。

明久が移送された個室はかなり広く、全員が入っても余裕があった。

途中で木下姉弟も来て、明久のベッドの周囲を全員で囲む形になっていた。

明久はまだ眠り続けており、手術の際に眼帯は外されて、左目の傷痕が痛々しい。

謙信はベッドの隣に置かれてるイスに腰掛けて、明久の顔を優しく撫でている。

謙信が撫でていると、なにか決心した様子で雄二が口を開いた。

「上杉、今回の試合で明久が使ったあの技はなんだ？ 上杉は知っているみたいだったが……」

問い掛けられた謙信は、苦い表情を浮かべて

「ええ……知っています……」

ポツリと呟いた。

その表情は悲しみに満ちており、雄二は一瞬躊躇ったが「知ってるなら教えてくれ……あの技はなんなんだ？」

と、促した。

促された謙信は一回大きく深呼吸すると、体を雄二達に向けた。

「……あの技は……吉井流剣術裏奥義……絶^{ぜつ}牙です……」

「絶牙……？」

雄二がオウム返しに言うと、謙信は無言で頷いた。

「吉井流剣術は守ることを重きに置いた流派で、その技のほとんども守る剣です……聞いた話では、火縄銃の弾すら弾いたとか……」

謙信の説明を雄二達は、黙って聞いていた。

それは、これから核心に触れると分かったからだ。

「その吉井流剣術の中で、禁忌とされた技が……絶牙なんです」

「絶牙が……禁忌の技……？」

優子が問い掛けると、謙信は天井を見上げて

「絶牙は吉井流剣術の中で唯一の殺しの技なんです……そして明久は、三年前にある男を……絶牙で殺しました……」

その事実を聞いた優子と秀吉は目を見開くが、信玄達や颯馬。そして、雄二と翔子の二人は驚いていなかった。

「雄二達は知っておったのか……？」

秀吉が問い掛けると、雄二は頷き

「ああ……二年前に話は聞いたからな……」

「……吉井のおかげで、今の私達になった……」

雄二に続いて翔子が言うと、謙信は頷いて

「はい。そのことは明久から聞いてます……」

と、呟いた。

その後謙信は目を瞑り、数秒間沈黙すると

「三年前になにがあったのか……それを話します……」
と告げた。

「いいのか？ 楽な話じゃないだろ？」

雄二が聞くと、謙信は頷いて

「そうですね……この話を聞いて、明久をどう思うかは、私にはわかりません。ですが、知ってほしいんです……明久が友と言ったあなた達には……」

と言った。

そして謙信は語り出した、三年前の事件を……

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「今日も暑いね……」

「そうですね……」

明久の呟きに謙信は頷いた。

明久と謙信が居るのは、吉井家の庭にある道場の縁側である。

そんな二人を、真夏の太陽がギラギラと照りつけている。

明久は胴着の胸元を開けて、パタパタと手で仰いでいて、謙信は足を水の入った金ダライに浸している。

「何時からだっけ、他流試合……」

「確か、午後二時からの予定です……」

明久からの問い掛けに謙信が答えると、明久は視線を動かして時計を見た。

「後三十分くらいだね……」

「では、片付けましょうか……」

明久の言葉を聞くと、謙信は足を金ダライから出して、水を撒いた。そして、足の水を布で拭いてから立ち上がり

「明久もそろそろ、気持ちを引き締めてください」と促した。

謙信の言葉に明久は頷いて

「そうだね……先方に失礼しないようにしなきゃ」と言ってから、胴着を着直して立ち上がった。

そして二人はトイレを済ませて、道場で正座して精神統一していた。

すると

「明久ー！ 北郷一刀流の方々が来たわよー！」

と、母親の声が聞こえた。

その声に二人が目を開くと同時に、道場の扉が開き、母親を先頭に七人の男性が入ってきた。

すると、男性陣の中でも一番年上と思われる白髪の男性が明久と謙信に近づき

「はじめまして、君が劍聖だね？ 儂は北郷一刀流師範の中尾宗暁なかおむねあきじゃ。君のことは噂に聞いておるよ」

好々爺然とした様子で、手を差し出した。

明久も手を出して握手しながら

「いえいえ、こちらこそ。あなたの事は聞き及んでおります。お会いできて光栄です」

と言いながら、ペコペコと頭を下げた。

「君ほどではないよ。その年齢で吉井流剣術を免許皆伝して、劍聖の名を得た君にはな」

そんな明久の様子に、宗暁は目元を弛ませながらそう言った。

そして明久との握手が終わると、宗暁は謙信にも手を差し出して

「そして君が、軍神の名を持つ上杉謙信だね？ はじめまして」と挨拶した。

それに対して謙信は、宗暁の手に自身の手を合わせて

「こちらこそ、はじめまして。今日はあなた達と試合出来ることを光栄に思います」

と挨拶した。

吉井家で行われているこの他流試合は、相手の六人と明久と謙信。そして、吉井流剣術の弟子四人を混ぜた六人で行われる予定だった。

いわゆる、剣道で言う集団戦形式であり、先に大将が倒された方の負けというものだ。

もちろん、明久達の方は明久が大将である。

三人が挨拶し終わり、試合の事を話そうとした。その時だった。

突如、宗暁の横に二十代後半と思われる男が現れて、謙信の顎に手を当てて顔を上に向かせて顔を覗き込んだ。

「へえ……かなりのモンじゃねえか」

謙信の顔を覗き込んだ男は、口笛を吹きながらそう言った。すると、宗暁が目くじらを立てて

「高岡！ お前はなにをやつとるか!!」

と、高岡を怒鳴りつけた。

「うるせえなあ……少しくらい、いいじゃねえかよ」

高岡は文句を言うと、謙信の顎から手を離した。

高岡が離れると、明久は眉根を寄せて

「なんなんですか、あの男は？」

と、宗暁に問い掛けた。

問い掛けられた宗暁は渋面を浮かべて

「あいつは道場では師範代を勤めてる奴で、名前は高岡茂樹たかおかしげきと言う奴じゃ。ただ、あの通り、我が強い奴での。自分こそが、一番強いと思っておる……」

と、うなだれた様子で言った。

それを聞いた明久が高岡を見ると、竹刀袋から木刀を取り出していった。

高岡は取り出した木刀を明久に向けて

「おい！ そのガキ！」

と、大声を張り上げた。

明久は片眉を上げて

「僕のことですか？」

と、高岡に問い掛けた。

「そうだ、テメエだ！ テメエ、俺を差し置いて剣聖の称号を得るんなざ許さねーよ！」

その言葉を聞いて、明久はため息を吐いた。

明久が剣聖の称号を得てから、度々そういつた言葉と同時に挑戦者が来たからだ。

だから明久としては、ああ……またか。程度だった。

だが、宗暁としては問題だったらしく

「高岡！ 貴様はいい加減にせんか！」

「うるせえ！　そしてガキ！　テメエを倒したら、その女は俺のモンにするぜ！」

宗暁の注意を突っぱねて、高岡はそう宣言した。

その宣言を聞いた明久は、高岡を睨んだ。

「なに……？」

「テメエに、その女はもったいねえ！　俺みたいな男にこそ、いい女は許される！」

その言葉を聞いた瞬間、明久は怒った。

謙信を物扱いした高岡を、明久は許せなかった。

「高岡！　貴様は、言っているいいことと悪いことの区別すらつかないのか!？」

「うるせえつ！　俺に指図すんじやねえ!!」

宗暁が高岡の胸元を掴みながら怒鳴ると、高岡は宗暁を突き飛ばした。

突き飛ばされた宗暁は倒れそうになったが、それを明久が支えた。

「大丈夫ですか？　宗暁さん？」

「ありがたいな、明久くん」

宗暁が無事なのを確認した明久は、高岡を睨んで

「高岡さん。あなたの望み通り、戦ってあげましょう」と告げた。

それを聞いた高岡は、嬉しそうに

「はっ！　そうこなきやなあ……！」

と言った。

すると、謙信が明久の隣に寄って

「ただし、戦うのは私と明久の二人対あなた達六人です」

と宣言した。

それを聞いた高岡は、片眉を上げて二人を睨んだ。

「あんだと？　どういうつもりだ……」

「どうもこうも、あなた達の相手は僕達二人で充分だと言ってるんです」

高岡の問い掛けに明久が答えると、高岡達の顔は怒りで赤くなっ

た。

「このガキが……ナメてんじゃねえぞ?！」

「ナメてるかどうかは、あなた達で考えてください」

高岡が怒鳴るが、謙信が何食わぬ顔で返すと

「このアマあ……」

と、謙信を睨んだ。

まさしく、一触即発。

その状況を道場の壁に背中を預けて見ていた明久の母、明恵は額に手を当てた。

「あーあ……あいつ、明久と謙信ちゃんを怒らせちゃった……」

と呆れた様子で、呟いた。

すると、明恵に宗暁が近づき

「此度は本当にすまぬ……」

と、頭を下げた。

「いえいえ、宗暁さんに罪はないですよ。悪いのは、あの男」

と明恵は、やんわりと微笑んだ。

その間に、明久達の準備が終わった。

その時、ドアが再び開き四人の少年少女が入ってきた。

「どうも……」

「こんにちは……」

「何事だ、ありや」

「確か、集団戦形式だったはず……」

上から順に、信玄、幸村、信繁、颯馬だった。

「あら、いらっしやい。まあ、相手のリーダー格が明久と謙信ちゃんを挑発したのよ」

四人に気づいた明恵が説明すると、四人は納得したように頷いた。

「相手もバカだな」

「ですね。明久達の実力に気づかないとは」

信繁の言葉に信玄が頷くと、戦いは始まった。

明久達の戦いは一分と掛からなかった。

明久は五人の弟子に対して、ほぼ同時に突きを放って一撃で倒し、

謙信は高岡を二撃で倒した。

それはまさしく、圧倒的の一言だった。

そして、倒れてる高岡に対して謙信が

「大したことなかったですね……」

と言つて、振り返つた後だった。

高岡が立ち上がり

「このアマがああああ！ ナメんじゃねえええ！」

と、木刀に偽装していた刀を抜いた。

高岡の持つていた木刀は、柄の部分が白い布のような物が巻かれていた。

この行為自体は、大して珍しくない。

木刀というのは、意外と滑りやすい。

そのために、振つた時にスツポ抜けないように布を巻くのは多い。

明久と謙信も、最初はそれだと思つていた。

だが高岡の場合は、鞘のつなぎ目を隠すためだったのだ。

まさか真剣とは思わず、謙信は固まつた。

そんな謙信の前に明久が滑りこみ、反射的に木刀を構えて、刀を受け止めようとした。

だが、木刀で真剣を受け止められるわけがなく、木刀は斬られ、切つ先で明久の左目が斬られた。

その痛みに明久の動きが止まると、明久の胸ぐらを高岡が掴み

「テメエのせいで、そのアマを斬れなかったじゃねえかあ！」

と、明久を投げ飛ばした。

投げられた明久は壁にぶつかり、床に落ちてむせ込んだ。

あまりの出来事に、ほぼ全員が固まつていた。

その間に、高岡は倒れてる明久に向かいズシズシと歩いた。

その高岡と明久の間に、宗暁が立ちふさがつて

「高岡！ 貴様は何をやつてるのか、わかつておるのか!!」
と怒鳴つた。

すると高岡は、刀を肩に担いで

「いちいち、邪魔すんじゃねえ!!」

と、柄尻で宗暁の側頭部を強打した。

その一撃で宗暁は倒れ、高岡は明久に向けて刀を振り下ろした。

「ぐっー！」

明久は側転するように避けたが、高岡は刀を横に振った。

その一撃は避けきれず、明久の右肩を浅く斬った。

「ほれほれ、もっと頑張らないと、斬り殺しちまうぞ!!」

高岡の瞳には狂気が宿っており、完全に暴力に酔っていた。

そして明久が肩の傷を押さえていると、高岡は明久を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばされた明久は、道場正面の御守り刀の近くに倒れた。

するとその衝撃で、御守り刀の台座が倒れて、明久の前に御守り刀

が転がった。

明久の視界に御守り刀が入った瞬間、高岡は駆け出して

「これで死ねやああ!!」

と明久に向けて、刀を全力で振り下ろした。

明久はその一撃を、鞘に入ったままの御守り刀で受け止めた。

その直後、甲高い金属音が響き、高岡の一撃は御守り刀によって止められていた。

「ダメエ……」

と高岡が呟いていると、御守り刀の鞘にヒビが入り、鞘が砕けた。

その中から現れたのは、一目で名刀とわかる一本の真剣だった。

「お……オオオオオオ！」

明久は雄叫びを上げると同時に全身の力を使い、高岡を押し飛ばした。

「チッ……まあいい。どうせ、殺すタイミングが変わっただけだ……」

高岡は舌打ちすると、舌なめずりして、刀を構えた。

その間に明久は立ち上がり、構えた。

その構えを見た明恵は、驚愕で目を見開いた。

「そんな！　なんで明久がああ技を知ってるの!？」

「どういう……ことですか？」

明恵に支えられていた謙信は、明恵に問い掛けた。

すると明恵は、苦虫を噛み潰したような顔をして

「あの技は……吉井流剣術の禁忌……絶牙……」

「絶牙……?」

明恵が言った技名を謙信が復唱すると、明恵は頷いた。

「まだ明久には教えてない技なのに……なんで……」

明恵は明久を見ながら、そう呟いた。

吉井流剣術裏奥義、絶牙

この技は本来、免許皆伝して尚且つ、頭目に就任しないと教えられないのだ。

それなのに、明久はその構えを取った。

それは、明久に流れる吉井流剣術という血が可能にしているのかもしれない。

確かに、明久は知らなかった。

それなのに、体は知っていた。

その時

「これで……終わりだああああ!!」

と高岡は雄叫びを上げながら、明久に向けて突撃しながら刀を振り上げた。

そして、お互いの間合いに入った瞬間。

「ぜりやああああ!!」

「吉井流剣術裏奥義……絶牙!」

お互いの技が炸裂した。

高岡の刀は弾かれて空中をクルクルと回り、少し離れた床に刺さった。

そして、明久の放った技は……

「が……ガヒュ……」

高岡の喉を切り裂いていた……

切り裂かれた喉から、血が噴水のように吹き出して、あっという間に高岡と明久を血に染めた。

数秒後、高岡は背中から床に音を立てながら倒れた。

それを見た明久は、自分の視界が真っ赤に染まった中、自分の手に

ある刀を見て気づいた。

「僕が……僕が……殺した……？」

そう呟いた直後、明久の手から刀が床に落ちた。

そして、明久は膝を突き顔を手で覆って

「あ、ああ……アアアアアアアア!!」

と、叫び声を上げた……

「……いつ、気づいた？」

康太が問い掛けると、謙信は微笑んで

「大体、この話をし始めた頃ですね」

謙信がそう言うのと、康太はため息を吐いた。

「……ほとんど最初からか」

康太が落胆した様子で首を振っていると、雄二が近寄って

「ムツツリーニ……もし、今の話を録音していたなら、それを出せ……」

と、睨みながら言った。

すると、康太は両手を上げながら首を振って

「……さすがに、今みたいな話を録音する趣味はないし……なにより、恩を仇で返したくない」

と、真剣な様子で断言した。

その康太の言葉に、雄二は片眉を上げて

「どういうこと？」

と、康太に問い掛けた。

すると康太は、寝ている明久を見て

「……明久は、文月学園での俺の初めての友人で、あのあだ名のせいでイジメられていた俺を助けてくれた……」

そこまで言うのと、康太は視線を謙信達に向けて

「……だから、俺にとっても明久は大事な恩人だ」

と、いつになく真剣な表情で断言した。

その康太の表情から、雄二は康太の真剣さを感じとったのか手を差し出して

「だったらよ……俺達と一緒に、明久を守らないか？」

と、康太に問い掛けた。

問い掛けられた康太は一瞬驚くが、すぐに何時もの表情に戻り

「……理由を聞こうか？」

と、雄二に問い掛けた。

すると雄二は、寝ている明久を見ながら

「こいつは、誰かのために全力で頑張れる奴だ。だけど、相手の中には

逆恨みしてくる奴だつて居る……だから、そんなクソみたいな奴らから、俺達が守つてやろうぜ？ 俺達には、その義務がある。だろ？」

という雄二の言葉を聞いて、康太は数秒間黙ると

「……その話、乗った」

と、雄二の手を握った。

その直後、雄二と康太の手の上に次々と手が置かれた。

雄二と康太が振り向くと、信繁達や木下姉弟も置いていた。

「俺達にも協力させろや」

「私達とて、明久の友人です」

「我々も明久を守りたいんです」

「明久様は兄みたくない人なんです！」

「……私は言うまでもない」

と信繁達や翔子が言うのと、木下姉弟も

「明久は、ワシをこの学園で初めて男として見てくれて、助けてくれたのじゃ！ ワシとて、明久を守りたいんじゃない！」

「さっきの話を聞いてほつとける程、あたしは薄情じゃないわ！」

と、決意を込めて宣言した。

そして全員の視線が、謙信に集中した。

その視線を受けて、謙信は座っていたイスから立ち上がり

「私は言うまでもなく、明久を守りたいです」

と、一番上に手を置いた。

雄二はそれを確認すると、全員に目配せして

「それじゃあ、俺達で明久を守るぞ！」

「おう！」

「うむ！」

「はい！」

「ええ！」

雄二の宣言を聞いて、全員は頷いた。

場所は変わって、病室前の廊下

そこに居たのは、明久の母親

吉井明恵だった。

明恵は中から聞こえた雄二達の声聞いて、嬉しそうに微笑んで「気づきなさい、明久。あなたは、こんなにも慕われているのよ……」
と言うと、その場から離れた。

Aクラス対Fクラス 再開

雄二達が明久の病室で宣言した翌日。

午前9時 文月学園二年Aクラス

そこには、FクラスとAクラスの生徒達が集まっていた。なお、明久と島田の姿はない。

明久は入院しているからで、島田は自宅謹慎中である。

明久は雄二達が帰った後、目を覚ました。

最初、明久は三年前を思い出したらしく、錯乱しかけたが、謙信が明久を抱き締めて落ち着かせた。

そして今、フィールドには謙信が立っている。

謙信が着ている制服は昨日のまま、血が乾いて赤黒くなっている。

その謙信を見て、ほとんどの生徒は痛ましい表情だった。

現在、試合は互いに一勝一敗二分け一無効となっている。

そこから試合は再開されて、Aクラスからは謙信が出た。

そして、Fクラスからは

「姫路、行け」

「はいー」

雄二に促されて、姫路が出た。

フィールドに出た姫路は、謙信を見ると

「あなたは、吉井くんのなんなんですか？」

と、謙信に問い掛けた。

すると謙信は、目を閉じたまま

「明久は、私の恩人であり、婚約者です」

と言った。

すると姫路は、背後に黒いオーラを揺らめかせて

「そうですか……吉井くんにはO☆S I☆O☆K I☆をしないとダメですね……」

と呟くと、謙信が薄く目を開けて

「貴女にそんな権利があるとでも？」

凄まじい威圧感と共に、問い掛けた。

そんな威圧感に気付いてないのか、姫路は

「吉井くんには、Fクラスがお似合いなんです！ 高橋先生、総合科目
でお願いします！」

高橋女史に教科を宣言した。

高橋女史は、すぐさまパソコンを操作して

「設定しました。召喚してください」

と二人に、召喚を促した。

すると、二人は頷いて

「試^サ獣^モ召喚！」

と、キーワードを唱えた。

軽い爆発音がした直後、二人の足下に幾何学的な模様の魔法陣が浮かび上がって、召喚獣が現れた。

そして数秒後、遅れて点数が表示された。

総合科目

Fクラス 姫路瑞希 4409点

「はああああー!?!」

「なんだよ、あの点数!?!」

「代表に匹敵するぞー!」

姫路の点数を見て、Aクラスからは驚愕の声が上がった。

元々、姫路瑞希という少女は成績優秀で有名だった。

それこそ、Aクラスに余裕で入れると言われるほどに。

しかし、それでも良いとこ次席クラスのはずだった。

その彼女の点数は今や、Aクラス代表クラスだった。

驚くな、というほうが無理だろう。

まさしく、Fクラスの切り札だった。

だが……

「その点数がどうしました……?」

総合科目

Aクラス 上杉謙信 4356点

もう一人、その点数に匹敵する少女が居た。

「なっ!?!」

「姫路さんに匹敵するだど?!」

Fクラスからは驚愕の声上がり、Aクラスからは

「凄……」

「彼女なら、勝てるかも……」

すがりつくような声が聞こえた。

「点数なら、私のほうが上です!」

「戦いというのは、点数だけでは決まりません!」

と、二人が言った直後、高橋女史が片手を上げて

「試合、開始!」

と、宣言した。

その直後

「先手必勝です!」

その言葉と共に、姫路は腕輪が装着されている腕を突き出し

「腕輪、発動!」

その極太の熱線を、謙信に向けて放った。

熱線が迫るなか、謙信はゆつくりとした動作で右腕を掲げた。

その直後、謙信の立っていた地点で爆発が起きた。

「これで……」

その光景を見た姫路は、構えを解いた。

だが、それは致命的なミスだった。

「油断大敵です……」

「え?」

謙信の眩きに姫路が首を傾げた直後

ザシュツ!

何かを切り裂く音が響き、姫路の召喚獣の首が落ちた。

そして姫路の召喚獣が消えて、消えた姫路の召喚獣の背後の位置に

は、謙信の召喚獣が刀を振り抜いた姿で立っていた。

総合科目

Aクラス 上杉謙信 4306点 WIN

VS

Fクラス 姫路瑞希 0点 LOSE

「勝者、Aクラス！」

高橋女史が勝者宣言をするなか、謙信はつまらなさそうに背を向けて歩き出した。

「そんな……確かに、直撃したはず……」

姫路が呆然とした様子で呟くと、謙信が背中越しに視線を向けて

「私の腕輪で防がせて貰いました」

と宣言した。

「腕輪？」

姫路の問い掛けに謙信は頷いて

「ええ、私の腕輪の能力は氷結です。それを使って、氷の壁を作り出して、貴女の熱線を防ぎ、油断した貴女の召喚獣を切り捨てました。ただ、それだけです」

言い終わると謙信は、Aクラスの方へと戻った。

こうして、Aクラスが一步リードとなった。

A対Fクラス戦 終

Aクラス対Fクラス最終戦

どちらが勝とうと、この戦いで全てが決する。

現在の状況を言うなれば、戦況はAクラスが優勢である。

次にAクラスが勝てば、Aクラスの勝利が確定する。

そんな状況で、Aクラスからは代表の霧島翔子が

Fクラスからは、同じく代表の坂本雄二がフィールドに上がった。

それを高橋女史は確認すると、視線を翔子に向けて

「Aクラスは教科を選択してください」

と、教科選択を促した。

それを聞いた翔子は、一瞬悩むと

「……日本史でお願いします」

と、教科を選択した。

教科を聞いた高橋女史は、パソコンを操作すると

「日本史に設定しました。召喚してください」

と、召喚を促した。

促された二人は、同時に頷いて

「試^サ獣^モ召喚！」

キーワードを唱えた。

その直後、幾何学的な模様の魔法陣が浮かび上がり軽い爆発音がした。

そして、二人の召喚獣が現れた。

翔子は、いかにも上等そうな侍風の鎧と刀

そして雄二は、改造学ランとトンファーだった。

その数秒後、二人の点数がディスプレイに表示された。

日本史

Aクラス代表 霧島翔子 457点

V S

Fクラス代表 坂本雄二 463点

その表示された点数を見て、Aクラスでは動揺が走った。

「おいおい……あいつは本当にFクラスか!？」

「僅かだけど、代表を上回ってるわよ!？」

「いやまて、聞いたことがある! 確か、坂本は昔、神童って呼ばれてたって!」

「マジかよ!？」

そんなAクラスを尻目に、Fクラスは喚起に沸いていた。

「よっしゃ!」

「これは勝てるぞ!」

「ハッハー! 見たか、Aクラス!」

そんな男子達バカたちを見て、信繁達は溜め息を吐いた。

「お前らが戦ってるわけじゃねえだろ……」

「これは教育が必要でしょうか……」

「御館様、言っても無駄かと」

だが、そんな声はフィールドに立っている二人には聞こえていなかった。

「行くぜ、翔子……」

「……うん、この時を待ってた」

二人がそこまで言った時、高橋女史が片手を上げて

「試合、開始!」

最終戦のゴングを鳴らした。

ゴングが鳴ったと同時に、二人は駆け出した。

先制攻撃を繰り出してきたのは、武器のリーチが長い翔子だった。

翔子は間合いに入った瞬間、刀を突き出した。

翔子の召喚獣は点数の高さも相まって、まるで弾丸のように雄二に突きを放った。

だが雄二は、自身に迫る刃を冷静に見極めると、左手のトンファーを使って刀を逸らしてから、右手のトンファーを回しながら翔子に繰り出した。

翔子はそれを大きく体を右に倒すことで避けると、その勢いを利用して左足によるハイキックを雄二目掛けて放った。

雄二はハイキックをしゃがんで避けると、体を独楽のように回して

足払いを放った。

その足払いを翔子は側転の要領で避けて、逆立ちになると蹴りの連撃を繰り返した。

さすがに避けられないと悟ったのか、雄二はトンファアを交差させて受け止めると、その勢いを利用して距離を取った。

僅か数秒間の二人の攻防は、ハイレベルかつ、ハイスピードだった。その戦闘を見ていたほとんどの生徒は、あまりのハイレベルかつハイスピードの戦闘に啞然としていた。

「まさか、カポエラとはな……いつ覚えた？」

「……前にテレビのアニメで」

雄二が問い掛けると、翔子はいつもの表情で返答した。

すると二人は、互いの武器を構え直して

「そんじやま、仕切り直しといこうぜ」

「……うん」

その言葉を皮切りに、第二ラウンドを始めた。

そこからは手数では雄二が、威力の高さでは翔子が勝り続けて約十分後

日本史

Aクラス代表 霧島翔子 38点

V S

Fクラス代表 坂本雄二 30点

後一撃で終わるところまできた。

点数としては翔子が勝っているが、どちらも油断出来ない状況だった。

「次で終わらせるぞ、翔子……」

「……うん」

二人は頷きあうと、腰を低くして構えた。

二人は互いに無言で相手を見つめ続けて、見守っていた生徒達もあまりの緊張感に黙っていた。

その沈黙は数秒間続いて、誰かが息を呑んだ次の瞬間

「っー」

二人は同時に相手目掛けて、飛び出した。
そして、同時に武器を繰り出して二人の召喚獣がぶつかり合った。
そのまま二人の召喚獣は、数瞬固まっていた。
そして、翔子の召喚獣だけが消えた。

日本史

Aクラス代表 霧島翔子 0点 LOSE

VS

Fクラス代表 坂本雄二 1点 WIN

「勝者、坂本雄二！」

高橋女史が勝者を宣言するが、誰も声を上げなかった。
すると、優子が

「今、なにが……」

と呟いた。

その疑問に答えたのは、隣に座っていた謙信だった。

「今の一瞬の間に、霧島さんが放った突きを坂本君は首を横に倒して避けながら同時に、首目掛けてトンファーを叩き込んだんです。ようは、カウンターですね」

と謙信が説明を終えると、Fクラス側から

「勝った……？」

「勝ったんだよな？」

「ああ、坂本が勝った！」

「よっしゃあああ！」

一人の呟きから始まって、歓声が上がった。

対照的に、Aクラス側は悲観に満ちていた。

「そん、な……」

「代表が……負けるなんて……」

「嘘だろ……」

その時、パソコンを見ていた高橋女史が再び、口を開いた。

「これにより、Aクラス対Fクラスの一騎打ち勝負は終了。互いに二勝二敗二引き分け一無効となり、引き分けです！」

高橋女史のその言葉に、全員がへ？ という、表情になった。

「それにより、この後をどうするかは代表同士が話し合っただけで決めてください」

引き続き紡がれたその言葉を聞いて、雄二は小さくガッツポーズをした。

予定外のトラブルは起きたが、雄二が求めていたのは、まさしくこの状況だった。

すると、翔子も雄二を見ながら微笑んでいた。

それに気づいた雄二は頷いて、翔子と一緒に前に出た。

「和平交渉を申し込む」

「……受けます」

二人のその言葉に、双方のクラスにどよめきが起きた。

「代表、和平交渉なんてする必要はありません！」

「そうですよ！ 私達は勝てます！」

「相手はたかが、Fクラスですよ!？」

「総合では我々が勝ってます！」

と喚いたのは、Aクラスの生徒達である。

が、翔子は首を振って

「……それは無理。私の点数が一教科だけとはいえ、0点だから、即敗北になるかもしれない」

と言うと、Aクラスの生徒達は黙った。

すると、Fクラス側からは

「そうだそうだ！」

「お前らの代表は負けたんだ！」

「俺達の勝ちだ！」

と大声で言った瞬間、バカ共は黙った。

理由は簡単、雄二や信繁達が睨んでいたからだ。

「てめえらは黙ってろ」

「あなた達は戦っていないでしょう……」

「それなのに、相手に対して罵倒とは……分をわきまえなさい」

信繁、幸村、信玄の三人が順に言う、バカ共は無言でコクコクと頷いた。

バカ共が黙るのを確認すると、雄二は視線を戻して

「こちらからの提案は、そちらのクラスでの合同授業だ」

と提案した。

それを聞いた翔子は頷いて

「……承諾します。ただし、こちらが許可した人以外は入室を禁止する……」

「了解した。こちらとしても、そちらの勉強の邪魔はしたくないから、その提案を受け入れる」

と雄二が言うと、翔子は頷いた。

「……高橋先生、AクラスとFクラスは和平交渉により停戦します」

翔子の言葉を聞いた高橋女史は、頷いて

「了解しました。これにより、Aクラス対Fクラスの試召戦争は終了！」

高橋女史の宣言により、Aクラス対Fクラス戦は和平交渉にて終了した。

その時、Fクラスを監視していた西村が一步前に出て

「さて、我がFクラスの諸君。これにて終わりだ」

西村の言葉を聞いて、Fクラスのほとんどがポカンとした。

「我が……Fクラス？」

「鉄人……それは、どういう？」

男子達が問い掛けると、西村は頷いて

「ああ、貴様らの担任が福原先生から俺に変わったぞ。喜べ、これから一年間死に物狂いで勉強出来るぞ？」

「なにー！？」

「どういうこった!？」

西村の言葉を聞いた男子達は、悲鳴を上げた。

勉強嫌いの彼らにとっては、死刑判決に等しいだろう。

「確かに貴様らはよくやった。Aクラスと引き分けになったほどだ。だが、いくら【底辺でも頂点に勝てる】というのを証明したとはいえ、人生を歩んでいく上で強力な武器の一つになるのに、蔑ろにはできない」

「まあ、その通りだな」

西村の言葉を聞いた信繁は、腕組みをしながら頷いた。

「故に、貴様らは集中的に監視してくれる！　だが、坂本、武田兄妹、真田の四人に関しては、補習は免除とする」

「ちよ、ちよと待ってくれ！」

西村の言葉を聞いた須川か、西村に詰め寄った。

「なんだ？」

「どうして、坂本達は免除なんだよ！　あいっらだって、同じFクラスじゃないか！」

須川の言葉を聞いた西村は、目を細めて睨みつけながら

「だったら、貴様らは坂本達並みの点数を取れるのか？」

と、須川に問い掛けた。

「ぐっ……」

問い掛けられた須川は、何も言えずに悔しそうに歯噛みした。

「取れないのだろう？　それは貴様らが勉強してないからだ。そんな貴様らにはこれから放課後は毎日、一時間の特別補習を行う！」

「なにー！？」

「ふざけんな！」

「いくら教師だからって、そんなの横暴だ！」

西村の言葉を聞いた男子達は次々に文句を言うが、それを西村は大きく

「やかましい！　貴様らが頻繁に試験召喚戦争を行ったから、授業が遅れとるんだ！」

と一喝して、黙らせた。

全員が黙ったのを確認すると、西村は視線を雄二に向けて

「それで、坂本。目標は達成出来たか？」

と、問い掛けた。

問い掛けられた雄二は、一瞬意外そうな顔をしたが、すぐに笑みを浮かべて

「ああ、文句無しにな」

と、答えた。

こうして、Fクラスが起こした下克上はAクラスと引き分けという類を見ない結果を残して幕を閉じた。

なお、今回の一騎打ちにて問題となった島田は観察処分者に命じられた。

余談だが、Aクラスにて授業を行うことを許可されたのは、雄二と武田兄妹と幸村、康太と秀吉だけだった。

おまけ

おまけその1 王様ゲーム

どこと知れない薄暗い教室……

時間も分らない。

そんな教室に、十数人の男女が集まっている……

そこで行われるのは……

「王様ゲーム！」

「イエーッ！」

集団では定番のお遊びである。

「明久、ルール説明を頼む！」

「OK、雄二！」

雄二に頼まれた明久は、箱と十数枚の紙を取り出した。

「ここに王と書かれた紙と、1から12の数字が書かれた紙があります。これを箱に入れて、各自が中から取ります。で、王を引いた人は命令が出来ます。例えば、一番が王様の肩を揉むとか、七番が九番にしっぺ等々……そして、このゲーム唯一のルールは……王様の命令は」

明久がそこまで言うと、全員が口を揃えて

「絶対！」

と言った。

「はい、その通り。ただし、数字を引いた人は絶対に数字を言わないように」

と明久が言うと、最初に雄二が引きながら

「それじゃあ、お前ら……覚悟はいいか!？」

と、全員に問い掛けた。

そして全員は、各々紙を引きながら頷いた。

それを雄二は確認すると、自分が引いた紙を高く掲げながら

「行くぞ、せーの！」

「王様誰だ！」

雄二の音頭に続けて、全員は言った後、無言で紙を見た。
数秒後

「つしゃあ！俺だ！」

雄二が嬉しそうに、王と書かれた紙を高く掲げた。

他の全員は悔しそうに、床を叩いたり頭を抱えていた。

「んじやまあ。最初は無難に……四番と六番は全員分の飲み物を買ってこい」

と雄二が命令すると、明久と康太が呻いた。

「僕達か……」

「……仕方ない。行こう」

康太が言うと、明久は頷いて立ち上がった。

そして、二人がドアの向こうに消えると

「それでは、二人が戻ってくるまでの間にやりましょう」

と、信玄が言った。

残っていたメンバーはそれに従い、数字の紙を二枚減らしてから全員で引いて

「王様誰だ！」

次の王様ゲームを始めた。

数分後、ドアが開き

「ただいま」

「……今戻った」

明久と康太が戻ってきたが、二人は思わず固まってしまった。

理由は

「ダハハハハハ！」

腹を抱えて大爆笑している信繁と

「ちくしょう……」

なぜか、西遊記の孫悟空のようなコスプレをしている雄二が床を叩いていたからだ。

「えっと……これは……」

「……何があった」

その光景を見た二人が眩くと、謙信が

「あれは信繁の命令です」

と、二人に説明しだした。

「……どういう命令だ？」

康太が詳細を要求すると、謙信は苦笑いしながら

「五番は、まあ今回は雄二さんだったわけですが……五番は隣の部屋にある衣装から、適当に一着選んで着替える。という命令でした……」

「それであの格好なんだ……」

謙信の説明を聞いて明久が納得していると、雄二がユラリと立ち上がって

「そんじゃあ、次行くぞおー！ セーのー！」

と音頭を取りながら、紙を取った。

「王様誰だ！」

そして、数秒間の沈黙の後

「あ、ボクだね」

工藤愛子が笑みを浮かべながら、王と書かれた紙を掲げた。

それを見た全員が各々悔しがつっていると、愛子が

「それじゃあね……二番が三番、四番が五番の……ほっぺにチューで♪」

という、とんでもない命令を出した。

「本当ですかあ!？」

その命令を聞いた姫路は嬉しそうな顔をしながら、明久に視線を向けて

「吉井くん……吉井くんの番号は……二番ですよね？」

と問い掛けた。

問い掛けられた明久は、自分の紙を見ると

「ん……」

と呟きながら、ゆっくりと紙を開いた。

そこに書かれていたのは……五番だった。

「えっ!? じゃ、じゃあ……誰が……」

と、明久の紙を見た姫路が狼狽していると

「ん、ん……」

姫路の肩を、島田が叩いた。

「え？ 美波ちゃん、どうし……つ、まさか!？」

姫路がピクリと体を震わせると、島田はゆっくりと紙を開いた。そこに書いてあったのは……二番だった。

「いらっしやい……瑞希……」

島田がそう呟くと、姫路は絶望した様子で固まった。

そんな二人を無視して、明久は

「四番は誰？」

と、自分の相手を探していた。

すると、顔を赤くした謙信が手を上げて

「わ、私です……」

と、恥ずかしそうに呟いた。

それを聞いた明久は、ホツとした様子で

「謙信か、良かった。それじゃあ、手早く済ませようか」

と言うと、謙信は頷いた。

少々お待ちください……

数分後、部屋には何とも言えない雰囲気、島田は顔を赤くしながら口をハンカチで拭いていて、恥ずかしがっている謙信の頭を明久が撫でていた。

すると、姫路が黒いオーラを揺らしながら

「なるほど……そういう少しエツチな命令もアリなんですね……だつたら、私……もう、容赦しません!」

と、何やら決意した様子で声を上げた。

それを聞いた秀吉は、不思議そうにしながら

「女子は普通、そういう命令は嫌がるはずなんじゃがのう……」
と首を傾げた。

すると、それを聞いた信繁が秀吉の肩に手を置いて

「秀吉、Fクラスに普通とか常識は通用しない……」

と、諭すように言った。

そして、それを聞いた秀吉は

「それだけで納得出来るのも、嫌なのじゃ……」
と落胆していた。

「それじゃあ、行きます！　せーの！」

「王様誰だ！」

姫路の音頭が続いて、全員は紙を引いた。

数秒間の沈黙の後、翔子が

「……私が王様」

と紙を傾げた。

そして全員が悔しがっていると、翔子は雄二を数秒間見つめて

「……八番はこの後、私とデートして」

と告げた。

すると雄二は、自分の紙を机に叩きつけながら

「なんでお前は、俺の番号をピンポイントで当てるんだよ！」

と叫んだ。

雄二の叩き付けた紙には、八番と書かれてある。

すると、翔子は親指をグツと立てながら

「……雄二のことに關しては、不可能はない」

と言った。

それを聞いた雄二は、視線を明久に向けて

「最近、翔子がエスパールになったのか？　と思う……」

と呟いた。

「あははは……」

雄二の愚痴を聞いた明久には、苦笑いしか出来なかった。

そして、雄二は立て直すと

「そんじゃあ、時間的に次が最後だな」

と告げた。

全員はそれに頷くと、箱に手を入れて

「それじゃあ、最後行くぞ！　せーの！」

「王様誰だ！」

一斉に引いて、紙を開いた。

そして、数秒後

「あ、僕だね」

明久が手を上げた。

全員が悔しがっていると、明久は全員を見回して

「それじゃあね……全員は盗撮写真や噂になつてるBL本とか全部出して、焼却処分！」

と告げた。

「良い提案じゃな、明久！」

秀吉は賛同するが、姫路と島田の二人は驚愕した様子で

「そんなあああ!？」

と揃って叫ぶと、明久に詰め寄り

「吉井くん！ そんなのあんまりです！」

「そうよ！ そんなことしたら、アンタが持つてる木下の写真まで燃やすことになるわよ!？」

と非難した。

非難された明久は溜め息混じりに

「なんで、僕が持つてること前提なのかな？ それに、そういうのは犯罪だからね？ さあ、キリキリ出す！」

明久がそう言うと、島田と姫路の二人はドアに向けて駆け出すが、それは雄二と幸村の二人によつて捕まえられた。

「お前ら、王様ゲームのルールを忘れたのか？ 王様の命令は……」

「絶対です」

雄二に続いて幸村が言うと、二人は顔を青ざめて

「い、いやああああ!!」

と叫び声を上げた。

「それじゃあ、色々と処理が残ってるけども……解散！」

明久の号令により、王様ゲームは色々な爪痕を残して終了した。

なお、姫路と島田及び、康太が所持していた写真などは全て回収内容を確認次第、順次燃やしていった。

その光景を見た姫路と島田は、虚ろな目をして笑っていて、康太に至っては、泣きながら寝転んでいる。

シスタークライシス

明久が退院してから、数日後

それは、突然の電話から始まった。

「ん？ 誰だろ……」

退院したとはいえ、未だに無理出来ない明久は自宅で読書していた。

ちなみに、家事などは謙信が行っている。

明久は携帯を取ると、画面を見た。

「母さん？ はい、どうし」

『明久！ 今すぐにそこから逃げなさい！』

明久が要件を聞こうとしたら、母がそれを遮るように叫んだ。

「な、なに？ どうしたの？」

『いい、明久。落ち着いて聞きなさい』

明久が再び要件を聞くと、母は念押ししてきた。

「うん、まずは、母さんが落ち着いて」

明久はそう言うと、お茶を一口含んだ。

その直後

『玲がそつちに行った！』

母が言ったその言葉を聞いて、明久は口からお茶を吹き出した。

「ゲホゴホ……え、マジで？」

なんとか立て直した明久が聞くと、電話の向こうで母は盛大に舌打ちして

『マジもマジの大マジよ！ ったく、あの子はいつの間に縄抜けや空蝉なんて使えたのかしら……しかも、セキュリティまで無効化して……』

実の娘に対してやることではないが、明久としてはスルーした。

『とりあえず、あんたは今すぐ、謙信ちゃんと一緒に逃げなさい。私達も向かってるけど、それまでは絶対に捕まらないで！』

「わかったー」

明久は通話を切ると、部屋から出た。

「謙信！」

「明久？ どうしました？」

居間で掃除していた謙信は、駆け込んできた明久を見て、怪訝そうにした。

「姉さんが、こっちに来る！」

「っ！」

明久の言葉を聞いて、謙信は目を見開いて固まった。

「本当……なんですか？」

「本当みたい。さつき、母さんから連絡があつたからね」

「そうですか……」

謙信が明久の言葉を聞いて唸っていると、明久が肩に手を置いて

「とりあえず、最低限の荷物と貴重品を持って！ 姉さんが来る前に脱出するよ！」

「はい！」

謙信は明久の話を聞いて、エプロンを外して居間から出ていった。

明久も部屋に戻ると、学校の鞆と財布と携帯を持って廊下に出た。すると、既に謙信が明久を待っていた。

そんな謙信の手には、大きめのリュックが一つだけあつた。

それを明久が確認した瞬間、ピンポンとチャイムが鳴り

『アキクーン……開けてくださいーい』

という、二人にとっては聞き慣れた声が聞こえた。

そしてその声を聞いた時、二人は身構えた。

「まさか、もう来たなんて……」

「早かつたですね……」

二人が話している間にも、ドアの向こうから開けてくださいと催促が来ている。

「どうしますか、明久？」

唯一の出入り口を封じられて、謙信は明久に問い掛けた。

すると、明久は謙信の手を取って

「靴を持ってきて……こっち」

と、居間に戻った。

「明久、なにを？」

謙信は明久が居間に戻ったために、籠城でもする気なのか？ と疑った。

が、明久は机の端を持つと

「謙信、手伝って」

と言ってきた。

謙信は首を傾げながらも、明久を手伝って机を移動させた。

机の下にはマットが敷かれてあり、明久はそれを捲った。

「あつー！」

謙信はマットの下から現れた新たなドアを見て、驚きの声を上げた。

「この物件ってね、母さんからの紹介なんだよね……で、もしも場合はここを見なさいって言われてたんだ……」

明久はそう言うと、ドアの横の数字のボタンを押そうとした。

が、押す直前で固まった。

「明久？ どうしました？」

突然固まった明久を見て、謙信が問いかけるが明久は黙ったままだった。

（待てよ……姉さんなら、あのドアの鍵くらいは簡単に開けてくる筈……それなのに、なんで催促だけなんだ？）

明久はそこまで考えると、目の前のドアの向こうに意識を集中させた。

そして、気づいた

「明久？ いったい、なにが……」

謙信が問い掛けようとしたが、それを明久は唇に指を当てて止めると、無言でドアを差し示した。

謙信は首を傾げながらも、ドアの向こうに意識を向けた。

そして、謙信は目を見開いて

（居るー…この向こうに玲さんが！）

床下に玲が居ることに、気づいた。

謙信が視線を明久に向けると、明久は無言で頷いて

(こつちが本命で、あつちが困だね。気づいて良かったよ)

明久は小声でそう言いながら、立ち上がった。

もし、居るのに気づかないで開けていたら、すぐに捕まっていただろう。

(謙信、静かに玄関に行くよ)

(はい！)

二人は静かにしかし、早く、玄関に向かって靴を履くと、互いの顔を見て頷き

「脱出！」

ドアを一気に開け放って、駆け出した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「で、俺の所に来たわけか」

そう言ったのは、明久と謙信を出迎えた雄二である。

明久と謙信の二人は家を出ると、近くに住んでいる雄二の所に向かった。

雄二は最初、明久と謙信が来たことに驚いていたが、事情を話したら受け入れてくれた。

「んで、話に聞いた限りでも相当だが、お前の姉さんはそんなにヤバいのか？」

雄二が問いかけると、明久は頷いて

「うん……一言で済ますなら、非常識の塊だね」

と断言した。

「お前が言うなら、相当なんだな」

雄二がそう言うと、謙信が遠い目をしながら

「ええ……明久を女装させようとしたり、明久を家族としてではなく、異性として愛していると公言したりしてます」

と言った。

謙信の話を聞いて、雄二は頬をヒクヒクさせて

「そりゃあ……相当だな……」

と呟いた。

その時、チャイムが鳴った。

今、明久と謙信が居るのは、喫茶躑躅ヶ崎《きつさつつじがさき》である。

この喫茶店は、武田家が営んでおり、文月市にあるのは支店である。開店して1ヶ月も経ってないというのに、既に近所では有名店である。

その理由は、信玄と幸村が大正風メイド服を着てるのと、信繁が作るデザートが美味しいからだ。

信繁は意外と料理が得意で、特にデザート関係はかなりの物である。

「しかし、あの人も困ったもんだな」

「言い訳のしようがありません」

信繁の言葉に、明久は土下座した。

「そんじゃあ、とりあえず……」

信繁はそう言うと、信玄に視線を向けて頷いた。

すると、信玄はドアの外に出て看板を裏返して、中に戻るとカーテンを閉じた。

「え？ いいの？」

明久が聞くと、信繁は頷いて

「玲さん絡みだと、まともに営業出来ないだろうからな」

「本当にごめんなさい……」

信繁の言葉を聞いて、明久は再び土下座した。

その後、明久達を伴って自宅の方に移動して、信玄と幸村は着替えた。

そして、対玲用の準備をしていると

ピンポン

という、チャイムが聞こえた。

その瞬間、信繁達は身構えた。

「信玄、幸村……」

「ええ、来ていますね」

「間違いありません。玲さんです……」

『アキクーン……ここに居るんでしょ……』

ドアの向こうから、玲の声が聞こえてきた。

「明久、謙信、お前らは奥に居ろ……」

「ここは私達が請け負います……」

「吉井本家が来るまで、もう間もなくでしょう……そのくらいならば、私達でも稼げます」

三人はそう言いながら、各々武器を構えた。

それを聞いた明久は数秒間悩むと、謙信の手を握って

「ごめん……三人共お願い……!」

頭を下げてから、奥の部屋に入った。

その後、ドアの向こうから

『行くぞ、お前ら……準備はいいか?』

『大丈夫です』

『問題ありません』

『OK……そんじゃあ……突撃!』

三人のそういう会話が聞こえ、その後しばらくドタバタと派手な音が聞こえた。

そして、数分後……

「静かになりましたね……」

ドアの向こうが、一気に静かになった。

『明久、終わったぞ』

「良かった……では」

信繁の声が聞こえたからか、謙信は安心してドアを開けようとした。が、それを明久が制した。

「明久?」

謙信が疑問の目を向けると、明久は真剣な表情でドアの向こうを見ていた。

そして明久は、周囲を見回すと、近くにあつた棒を掴んでから、ドアを開けた。

次の瞬間、ドアの向こうから影が飛び込んできて、明久は棒を横にして掲げた。

その後、金属音が響き明久の掲げた棒にクナイがめり込んだ。

「やっぱり、姉さんだったか……っ！」

「よくわかりましたね。アキくん」

明久の目の前には、玲が居て、クナイを振り下ろしていた。

「……信繁達は？」

「眠ってしまいました……」

玲の話を聞いて、明久は視線だけで確認した。

三人は先ほどの部屋で、うつ伏せに倒れていた。

「明久！」

「謙信は来ないで！」

背後から謙信の心配そうな声が聞こえて、明久がそう返すと、玲が謙信を見て

「アキくん、退いてください……そうしないと、その牝狐を倒せません……」

「行かせるわけには、いかない……っ！」

二人がそう言いながら鏢迫り合いをしていたら、ドアが開く音がして

「うっ……」

玲が呻いて、力が抜けるように倒れた。

明久が視線をドアの方に向けると、そこには颯馬が右手を突き出した状態で居た。

「颯馬！」

「明久様、謙信様！ 〆無事ですか!？」

「うん、大丈夫……ねえ、この注射って……」

明久は謙信の無事を確認してから返答すると、颯馬に玲の首輪に刺さってる注射のことを問い掛けた。

「はい、馬用です」

颯馬はなんでもないとでも言うように、返答した。

「玲さんには、人間用は効かないからと、明恵様から渡されました」

「姉さん……どんだけ食らってるのさ」

颯馬の話を聞いて、明久は溜め息を吐いた。

「アハハハ……そして、馬用を平然と出す明恵様も凄いですよね……」
明久の愚痴を聞いて、颯馬は苦笑いしていた。

明久と謙信は颯馬の言葉を聞いて、二人して頷いた。

その数分後、明恵を筆頭に吉井本家の人間が入ってきて、玲を捕獲、縄で縛ってから車に放り込んだ。

「いやあ、まさかあのセキュリティーと縄と鎖を抜けるとは思わなかったわー」

「信繁達と雄二は？」

「坂本君なら、先に保護したわ。信繁君達は、今ウチの医療班が対処してるわ」

明恵がそう言ったタイミングで、明恵の近くに一人の男が近寄り、何かを耳打ちしていった。

それを聞いた明恵は、男に二言三言話すと、顔を明久に向けて

「あんた達の部屋は無事だそうよ。私達はこれから、玲を連れて戻るから、あんた達も戻りなさい」

と言うと、外に出ていった。

その後、吉井本家の人間達と颯馬も付いていつて居なくなる、明久と謙信は互いの顔を見てから武田家から明久の部屋に帰った。

その後、明久と謙信は食べ損ねていた昼食を食べ終わると居間で少しのんびりしていた。

「明久、傷は大丈夫ですか？」

謙信が問いかけると、明久は一回全身を軽く動かしてから

「一応、包帯を替えようか……謙信、手伝って」

「はい」

謙信は頷くと、新しい包帯を持ってきた。

そして、明久が上着を脱ぐと謙信は一部を見て

「少し、血が滲んでますね……ガーゼも交換しましょう」

謙信はそう言うと、取り付けられていたガーゼを外して、箱から新しいガーゼを取り出して付けてから、包帯を巻き始めた。

そしてしばらくの間、無言が続く

「そういえば、棒とは言え持つてましたね」

と、謙信が明久に問い掛けた。

「ああ、うん。最近になって、ようやくね。あれくらいなら、なんとか持てるようになったよ」

明久がそう言うと、謙信は包帯を巻きながら

「次は木刀ですね」

「うん、謙信。付き合ってくれる？」

「当たり前です。つまらないことを、聞かないでください」

明久が問いかけると、謙信は包帯を巻く手を緩めずに言いながら微笑んだ。

「ありがとう……」

そんな謙信に明久は感謝を述べて、静かに時間は過ぎていった。

こうして、姉による騒がしい一日は終わったのだった。

休日デート

ある日のことだった。

「謙信、出かけるよ〜」

と、明久が謙信に声を掛けた。

「お出かけ……ですか？」

「うん……まあ、簡単に言おうと、デートだね」

謙信の問い掛けに明久がそう返すと、謙信は顔を仄かに赤くしながら

「デート……ですか……」

と呟いた。

それを聞いた明久は、コクリと頷いて

「うん。考えてみると、ここ最近謙信と出かけてないからね」

と答えた。

それを聞いた謙信は、数秒間黙考すると、コクリと頷いた。

こうして、二人のデートが決定した。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

十数分後、二人の姿は街中にあった。

明久は動き易さを重視されており、荷物は腰のポシェットのみ

謙信は肩から小型のバッグを下げている

「まずは、どこに行こうか」

明久が問い掛けると、謙信は考え込んでから

「アソコはどうでしょうか」

と、近くのカラオケを指差した。

「OK、行こうか」

謙信がカラオケを選ぶなんて、珍しいと思いつながら、明久は謙信と一緒にカラオケに入った。

受け付けを済ませて、部屋に入ると、明久はメニューを開いて

「謙信はなにを飲む？」

と問い掛けた。

「私は烏龍茶で」

「それじゃあ、僕も同じのにしようっと」

と明久は、インターホンを使って注文した。

その後、注文した飲み物が来てから、謙信が端末機を持って
「では、私から行きますね」

と、曲を入れた。

題名は《届け物》と出ている。

「明久を思っ、歌いますね……聞いてください。届け物」

※わからない人は、YouTubeで探してみてね！

数分後、曲が終わると明久は拍手しながら

「うん……謙信らしい可愛い歌だね」

と誉めた。

「ありがとうございます……」

誉められた謙信は、頬を朱に染めながら、マイクを明久に渡した。

「それじゃあ、僕はこれかな」

そう言っ、明久が入れたのは

《私の中の銀河》と出た。

「かなり古い曲だけど、いい歌なんだよね」

と明久は言っ、マイクのスイッチが入っ、ることを確認してから
立ち上がり

「それじゃあ、行きます」

と歌い出した。

数分後、明久が歌い終わると謙信が拍手しながら

「明久らしい、優しい歌ですね……聞いて、安心できます」
と言っ。

「ありがとう、謙信」

誉められた明久は、お礼を言っ、から烏龍茶を一口含んだ。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇
約二時間後、明久達はカラオケから出、昼食を取ることにした。
ただし、来たのは……

「なんで、ウチの店なんだよ」

喫茶躑躅ヶ崎である。

その二人を、追跡している者達が居た。

「フッフッフ……吉井くーん……許しませんよー」

「異端者は処刑だー!」

姫路とFFF団である。

なお、その人物達を少し離れた所から親子が見ている、子供が指差して親に聞くと、親がどこかに連れて行った。

そして、この不審者達は、明久達の後を追って移動を始めた。

場所は変わり、映画館前。

明久と謙信の二人は、映画館の目録を見ていた。

すると、そんな二人に

「あ? 明久?」

「……偶然」

雄二と翔子が声を掛けた。

「あ、雄二に霧島さん」

「偶然ですね」

明久と謙信が返答すると、雄二と翔子は二人に近づいて

「お前らも映画か?」

「うん、僕達はデートって感じだけどね。雄二達も?」

雄二からの問い掛けに明久が返すと、雄二は頷いて

「ああ、翔子が行きたいって言うからな」

と言った。

「で、お前らは決まったのか?」

と雄二が聞くと、明久はあるタイトルを指差して

「うん、アレにしようかなって」

と言った。

「何々……機動警察パ○レイバーか」

「うん、昔のマンガを実写化したんだって。気になってたんだ」

明久が指差したのは、少し昭和的雰囲気漂う作品だった。

「面白そうだな。俺達もそれにすっか?」

「……雄二がいいなら、それでいい」

雄二が問い掛けると、翔子は頷きながら言った。

すると、先にチケットを買った明久達が

「じゃあ、僕達は先に入ってるね」

と言ってから、中に入った。

明久達が入ったいたたのを確認すると、雄二達もチケットを購入した。

すると、入り口のほうからドタバタと足音がして

「あれ!? 吉井くんはどこに!?!」

「おのれ、異端者め! どこに逃げた!」
不審者達バカどもが現れた。

入ってきた不審者達バカどもは、周囲をキョロキョロと見回して雄二達に気付くと

「坂本くん! 吉井くんがどこに行っただか、知りませんか!?!」

「隠し立てすると、容赦しないぞ!」

と、いきり立って聞いてきた。

その瞬間、雄二と翔子の二人はアイコンタクトを成立させて

「……吉井なら、地獄の黙示録2を見に行っただか」

「しかも、二回な」

四時間超えの映画の題名を教えて、そこに隔離することにした。

「地獄の黙示録2ですわね!」

「よし、総員突撃!」

不審者達バカどもは、雄二達の言葉を信じて、チケットを購入して入っていた。

雄二達はそれを見送ると、お互いに親指を立ててから、明久達と同じ部屋に入った。

それから、約二時間後

「いやー楽しかったね」

「だな。いかにも、今の技術で作れそうだから、尚更だったな」

明久と雄二は興奮した様子で語り合い、それを見ていた謙信と翔子は微笑んでいた。

すると、腕時計を見た明久が

「そろそろ、いい時間だね」

「マジだな。そんじゃあ、俺達は帰るか」

「……うん」

雄二が問い掛けると、翔子は頷いた。

「じゃあ、ここで」

「また明日、学校で」

明日と謙信が挨拶すると、雄二と翔子は手を上げて

「じゃあな」

「……また明日」

と言って、別れた。

こうして、休日デートは幕を閉じた。

文化祭編

出し物の決定と騒動の始まり

新緑が強く印象付く季節。

そんな季節に、文月学園の文化祭は催される。

そんな文化祭の名前は、清涼祭である。

そして、ここAクラスでは……

「……というわけで、AクラスとFクラスは合同で模擬店を出すことに決まりました」

「わかりました！」

翔子と雄二の二人が話し合い、二クラス合同出店が決まった。

「Fクラス代表の坂本だ。今回は、こちらからの申し出を受け入れてもらって、感謝する」

と雄二が頭を下げると、Aクラスの生徒達は友好的な声を掛けた。

「気にすんなって」

「あの教室は確かに、勉強には向かない環境よ」

雄二がAクラスと合同出店を決めたのは、Fクラスの環境の悪さが原因だった。

詳しく調べてみた所、教室に使われている畳の半数以上は腐りかけており、卓袱台はボロボロ

壁はヒビだらけで、隙間風が通る始末だった。

これはあまりにも酷いと思った雄二は、西村に文化祭で得た収入で設備を買い換えるなどは出来ないのかを相談した。

そうしたら、意外なことに出来ると言われた。

これは好機と思った雄二は、収入を増やすためにAクラスとの合同出店に踏み切ったのだ。

しかし、来ているのは雄二を含めて数名のみで、他のクラスメイト達は廊下にすら居る気配が無い。

それを不思議に思った明久は、手を上げて

「ねえ、雄二。他の皆は？」

と問い掛けた。

すると雄二は、無言で親指を窓に向けた。

それを見た明久は、席から立ち上がり窓の外を見た。

そこでは……

「行くぞー！ 横溝！」

「来いや！ 須川！」

バカ共が野球をしていた。

「お前なんか、俺が投げるスライダーの餌食にしてやらあ！」

「はっ！ てめえのへなちよこ球なんざ、ホームランにしてやる！」

須川の挑発に横溝はそう言いながら、ホームラン宣言をしていた。

明久がそのことに固まっていると

「貴様ら！ なにを野球なんぞしているかあ!!」

西村が凄い勢いで走りながら、怒鳴り声を上げた。

「げえっ!? 鉄人!」

「全員、逃げろ！」

誰かわからないが、その声が響くとバカ共は散り散りに走り出した。

「待たんか貴様ら！ 貴様らのその曲がった性根、補習室で叩き直してくれるわ!!」

西村は声を張り上げながら、散ったバカ共を追い掛けた。

「待ってくれ鉄人！ これは坂本が率先して始めたんだ！」

と須川が言うと

「バカめ！ 坂本ならば、模擬店に關しての話し合いをAクラスで行っているわ！」

と、西村は返した。

「なんだと!? おのれ、坂本め！ 男の摂理に逆らうとは！ あいつを異端審問に掛けなければ！」

西村の言葉を聞いて、須川がいきり立った様子でそう言った。

すると、西村の背後にオーラが漂い

「なるほど……貴様らの性根が腐ってきているのは、十分に分かった……ならば！ 俺がそれを叩き直してくれるわあ!!」

西村はそう言うのと、右手を前に突き出した。

「行くぞ！ 流派、東方〇敗が最終奥義い！」

「な、なにい!？」

「まさか、あの技は!？」

「に、逃げ！」

西村の言葉と構えを見て、バカ共は顔を青ざめた。

「石破天〇拳!!」

その直後、バカ共が宙を舞った。

「ギャアアアア!？」

この時、西村が放った技はなぜか、腕組みした胸に28という数字が書かれた存在が見えたとか。

なお、この時を境に度々、同じ存在が空を飛んでるところが目撃されるようになるのは、また別の話である。

閑話休題

そして鉄人は、撃破したバカ共を一気に担いで補習室に連行していった。

一連の光景を見て、明久達は呆然としていた。

その後、出店内容はコスプレ喫茶に決まったので、明久、謙信、雄二、翔子の四人は正式な許可を得るために学園長室へと向かった。

そして、学園長室の前に到着すると

『……長こそ……事はな……』

『なにを……るんだい。あん……そ勝手に……』

と、中で言い争っている声が聞こえてきた。

「どうやら、学園長は居るみたいですね」

「はっ、行き違いにならなくて良かったじゃねえか」

謙信の言葉を聞いて、雄二はそう言うのと

「失礼するぞ」

と、ノックと同時に中に入った。

「失礼なガキだね。普通は返事があるまで待つもんだよ」

雄二の行動に、学園長である藤堂カヲルは非難の声を掛けるが、雄二は無視した。

「すいません、学園長」

「申し訳ありません」

「……夫がごめんなさい」

明久達は口々に謝罪するが

「待て翔子、まだ結婚してないからな？」

雄二は翔子に突っ込みを入れていた。

「やれやれ……このタイミングで来客ですか……まさか、学園長の差し金ですか？」

と言ったのは、メガネを掛けた白髪混じりの男性

教頭の竹原だった。

この竹原はクールな言動により、一部の女子には人気だが、成績の低い者や素行の悪い生徒には侮蔑のこもった視線を向けるのである。

その証拠に、明久と雄二には侮蔑がこもった視線を向けている。

「はっ、なに言ってるんだい。なんでアタシがそんなセコい真似をしななければいけないんだい？」

竹原の言葉にカヲルがそう返すと、竹原はメガネを指で押し上げてから

「どうでしょうかね？ 学園長は隠し事が好きなようですから」

と言った。

「はん。それこそ言い掛かりさね。なんでアタシが隠し事をする必要があるんだい？」

カヲルがそう言うと、竹原は肩を軽くすくめて

「いいでしょう……今日はこれで退散しましょう」

と言って、左後方に僅かに視線を向けた。

明久はそれに気づき、隣りに居た謙信に小声で

(謙信、左後方にはなにがある?)

と問い掛けた。

問い掛けられた謙信は、左後方を僅かに見ると

(あるのは、観葉植物のようですが……)

と、明久と同じように小声で教えた。

(そっか……ありがとう)

明久達がそう会話していた間に、教頭は退室していた。

教頭が退室すると、カヲルは視線を明久達に向けて

「で、あんたらは何のようさね？」

と、問い掛けてきた。

すると、雄二と翔子の二人が一步前に出て

「AクラスとFクラスの合同出店の許可を貰いたい」

「……別に問題はないはず」

と言った。

「そりゃあ問題は無いがね……どういふつもりだい？」

二人の言葉を聞いて、学園長はそう問い返した。

「Fクラスの設備を買い換えるための資金を得るためだ」

「……合同出店したほうが、収入は多く得られるはず」

二人がそう言うと、カヲルはなるほど頷き

「そういえば、文化祭で得た収入を使って、設備の拡充は許可していたね。いいだろう。合同出店を許可する」

と言った。

カヲルの言葉を聞いて、二人は満足そうに頷いた。

「あと、これはついでなんだがな」

と、再び雄二が口を開いた。

「なんだい？」

「教室施設の改修工事を依頼したい」

カヲルからの問い掛けに、雄二は即答した。

すると、カヲルはバカにしたように笑い

「なに言ってるんだい。教室施設の差は今更じゃないか」

と言うが、雄二は首を振り

「いくらなんでも、壁のひび割れや割れたガラスはやりすぎだ！ あれじゃあ、体調を崩してもおかしくない！」

と言った。

それを聞いたカヲルは、眉をひそめて

「どういふことだい？」

と、雄二に問い掛けた。

すると雄二は、懐に手を入れて

「これを見る」

と数枚の写真を、机の上に投げた。

カフルは雄二が投げた写真の一枚を拾い上げ見ると、目を見開いた。

すると、カフルは次々と写真を見ていき

「これが……Fクラスだったのかい？」

と雄二に問い掛けた。

カフルの言葉を聞いて、雄二は眉をひそめた。

「どういうことだ？　これはババアの指示じゃねえのか？」

雄二からの問い掛けにカフルは首を振って

「いくらアタシでも、こんな施設の指示は出さないし、許可もしない！」

と、声を荒げた。

彼女も学園長という立場上、やはり生徒を思っているのだろう。

それを聞いた雄二は

「誰がこの施設の点検と指示を？」

と問い掛けた。

その質問にカフルが答えようと、口を開いた時だった。

「学園長、ちよつと待ってください」

明久が静止した。

カフルと雄二達が訝しむような視線を明久に向けると、明久は人差し指を口の前に持っていていき、静かに、というジェスチャーをした。

そのジェスチャーに全員が首を傾げていると、明久は左後方にあつた観葉植物に近づいて

「ふっー」

短い呼気と共に、蹴りを放った。

明久の蹴りにより、観葉植物が植わっていた鉢が割れた。

「吉井、あんたなにを！」

「明久!？」

「……吉井?」

と三人が驚いているが、明久は無視して土の中から何かを取り出した。

「これですよ、学園長」

明久は取り出した物を、机の上に置いた。

それは、ビニールに包まれた黒い物体だった。

「こいつは……」

とカヲルがその物体を見つめていると

「盗聴器ですよ」

と明久は言いながら、机の上にあつた文鎮でそれを叩き壊した。

「盗聴器だ?!」

「……誰が?」

雄二と翔子は驚いているが、カヲルは覚えがあつたようだ。

「これは先ほど、教頭が見ていた観葉植物の中になりました。学園長、全て、話してください」

明久がそう言うと、カヲルは観念したように

「アタシの無能を晒すようで嫌なんだがねえ……」

と呟いた。

この時を境に、明久達は学園を巡る騒動に巻き込まれることになる。

取引

「アタシの無能を晒すようで嫌なんだがねえ……」

明久が問い掛けると、学園長は溜め息混じりにそう言うってから、視線を明久達に向けた。

「アタシは基本的に、召喚獣システムに掛かりきりでね。学園の運営面に関しては、教頭である竹原に一任してるのさ」

学園長の説明を聞いて、雄二が

「つまりは、なにか？ このボロい設備はあの教頭の指示だつてののか？」

と問い掛けた。

すると、学園長は頷き

「そういうことさね。まったく……あいつの方が、隠し事があるじゃないかい……」

と呟いた。

すると、その呟きを聞いた明久が

「学園長……竹原教頭は更に、なにかやったのではないんですか？」と問い掛けた。

問い掛けられた学園長は、視線を明久に向けて

「どうして、そう思うんだい？」

と問い掛けた。

「先ほど入室する前に、学園長と竹原教頭が言い争ってる声が聞こえました。つまりは、竹原教頭がなにか独断専行をしたということでは？」

学園長からの問い掛けに明久がそう返すと、学園長は軽く肩をすくめて

「まったく……吉井は聡いね……」

と呟いた。

そして、数秒間置いてから、学園長は一つの腕輪を机の上に置いた。

「それは？」

「今度の文化祭で行われる召喚大会で、景品として出される予定の腕

輪さね……名前は黒鉄の腕輪」

雄二が問い掛けると、学園長は呟くように説明した。

「……この腕輪がどうしたんですか？」

と翔子が問い掛けると、学園長は数回口をつぐんでから

「……実は……この腕輪は、まだ完成してないのさ」

と言った。

「未完成の品を景品にしたんですか？」

謙信が非難めいた口調で問い掛けると、学園長は首を左右に振って

「アタシはさらさら、出す気は無かったんだがね。気づいたら、竹原の奴が勝手に景品として発表していたのさ」

と言った。

「完成するまでは、後どのくらいなんですか？」

と明久が問い掛けると、学園長は軽く唸ってから

「そうだね……早く見積もっても、後二週間は掛かるね」

と言った。

文化祭までは、後約一週間

どう考えても、間に合わないのは目に見えている。

「それで、腕輪は今現在、どのくらいまで出来てるんですか？」

明久が問い掛けると、学園長は一瞬迷う素振りを見せたが

「機能自体は、既に完成してるのさ。ただ、調整が面倒なんだよ。今のところ、大体Bクラスの総合平均点くらいを取ると暴走を起こすね」

と説明した。

その説明を聞いた明久は、顎に手を当てて黙考すると

「召喚大会で出される景品はそれだけですか？」

と問い掛けた。

その問い掛けに、学園長は首を振ると

「いや、もう一つあるさね」

と言うと、机の引き出しからもう一つの腕輪を出した。

「名前は白銀の腕輪。こっちは元々、景品として出す予定だったから、何の問題もないよ」

と説明した。

それを聞いた明久は、コクコクと頷いてから

「でしたら、学園長。取り引きしましょう」

と言った。

「取り引きだつて？」

明久の言葉を聞いて、学園長は目を細めた。

「ええ。召喚大会で雄二達が腕輪を獲得したら、Fクラスの施設を改修するんです」

それを聞いた学園長は、目を見開いた。

「なるほど……そうすれば、暴走する危険性も抑えられるし、調整する時間も出来るね……」

学園長はそこまで言うのと、雄二に視線を向けて

「今の吉井の提案に乗るかい？ 乗るなら、教室施設の改修もしてやるさね」

と言った。

問われた雄二は、Iも二もなく頷いて

「無論だ。その話、乗ってやる」

と断言した。

その後、雄二は召喚大会のルールを確認した。

1. 参加するには、二人一組とする（他クラスでも可）

2. 教科は対戦毎に変わる

大まかには、この2つだった。

ルールを確認した雄二は、数秒間沈黙すると

「ババア、提案がある」

と言った。

学園長は、雄二をジト目で睨みつけて

「アンタは、いっぺん基本的な言葉遣いを覚え直しないと、溜め息混じりに言った。

明久達も同感だったのか、無言で頷いている。

そして、学園長は再び溜め息を吐くと

「で、提案ってのはなんだい？」
と聞いた。

「教科は、対戦毎に変わるんだろ？　だったら、その教科選択を俺にやらせてほしい」

「ふむ……その程度だったら、良いだろう。点数の水増しとかだったら、一蹴していたがね」

雄二の提案を聞いた学園長はそう言うと、パソコンの画面とキーボードを雄二の方へと向けた。

雄二はパソコンに近づくと、考えながらキーボードを打っていた。

そして、入力が終わったらしく、パソコンから離れた。

「終わったかい？」

「ああ」

雄二の答えに、学園長は満足げに頷いて

「そうかい。それじゃあ、くれぐれも頼んだよ」

と念押しした。

明久達は頷くと、学園長室から退室した。

その後、教室に戻った明久達は、かつて病室で誓った全員を集めた。

そして、雄二が学園長との取り引きの話をする

「なるほど……あの施設は教頭が原因だったのか」

「でも、教頭はなんでそんなことをしたのかしら？」

と納得したり、少し困惑気味に話し始めた。

が、それを雄二が手を叩いて止めて

「推測は今はやめとけ。証拠が少ないのに、推測を立てたんじゃ、それに引つ張られかねない」

と言ってから、真剣な表情で

「それに、恐らくだが、竹原からの妨害も起こるだろう」

と言った。

「理由を聞いてもいいですか？」

颯馬が問い掛けると、雄二は内密にな。と呟いてから

「実は、学園長室に盗聴器が仕掛けられてたんだ。しかも、仕掛けたのは教頭だ」

と言った。

雄二のその言葉を聞いて、ほとんどのメンバーが目を見開いた。

「盗聴器って……」

「……そこまでやるか」

優子と康太が続けて言うと、雄二は頷き

「ここまでやる奴が、妨害をしないなんて予想出来ない。だから、何時も不測の事態に対処出来るようにしてくれ」

と言った。

雄二の言葉に、全員は真剣な表情で頷いた。

すると雄二は、明久に視線を向けて

「ただし、明久は無理すんなよ？ まだ怪我が治りきってないんだ」と言った。

言われた明久は、軽く肩をすくめて

「まあ、無理しない程度に頑張るよ」

と、苦笑いしながら言った。

その言葉を聞いた全員は安心したように頷くと、今日はこれで解散した。

試食の悲劇

学園長との交渉から、二日後。

明久達は文化祭に向けて、準備を進めていた。

とは言っても、設備などは専門の業者が行うので、明久達は模擬店で出す料理などを確認していた。

「さつてと……大体のメニューは決まったな」

「だね」

信繁の言葉に、明久は頷いた。

ちなみに、翔子と優子及び颯馬の三人がAクラスの教室で設備関連のことを業者と確認しており、雄二が島田と共に倉庫代わりのFクラスの掃除の指揮を執っている。

明久達が居るのは、二つある家庭科室の一つである。

家庭科室に居るのは、明久と信繁の他に、康太、秀吉、謙信、信玄、幸村である。

そんな彼らの前の机には、信繁、明久、康太の三人が作った料理やデザート類が置かれている。

明久と信繁が意外に思ったのは、康太の料理の腕が高かったことだ。

ただ、康太はエロが絡むと不可能を可能にするのだ。

そして、女子陣と秀吉は値段のことを話しており、材料などの仕入れ先を決めていた。

その時、ドアが開いて、雄二、翔子、優子の三人が入ってきた。

「お、なんだ。美味そうじゃねえか」

「……本当に」

「凄いわね」

「流石は、明久様と信さんですね」

入ってきた四人は、机の上の料理やスイーツを見て口々に賞賛した。

「ありがとう」

「……今回は自信あり」

「店よりかは道具が揃ってないから、ある程度は妥協したがな」と三人は謙遜していた。

「それよりさ、味見を兼ねて食べてくれる?」

「できたてが一番旨いからな」

「……味は保証する」

と勧めた。

すると、明久が何かに気付いた様子で

「雄二、島田さんはどうしたの?」

と、問い掛けた。

すると雄二は、軽い調子で

「ああ……Fクラス男子達の指揮を押し付けた。鉄人も居るから、脱走も出来ないしな」

と言ってから、料理を手にとって食べ始めた。

それを聞いた明久は、それなら仕方ないか。と思いながら、信繁と一緒に作ったプチシユークリームを食べた。

(うん……上手くできてる)

明久は出来に安堵して、安堵した。

が、次の瞬間には違和感を感じた。

違和感を感じた明久は、その数を数えてから

「ねえ、康太に信繁。確か、僕たちが作ったプチシユークリームの数って、八個だよな?」

と、二人に問い掛けた。

「ああ、八個だな」

「……数えたから間違いない」

二人のその言葉を聞いて、明久は首を傾げながら

「じゃあさ……この一個は、なに?」

と、皿に残っている一個を指差した。

その一個を見てから、康太と信繁は全員が食べた数を思い出し

「待て、一個多いぞ」

「……数が合わない」

と困惑していた。

そして、三人が言いようのない不安に襲われていると、料理を食べ終わったらしい雄二が皿に残っていたプチシュークリームを見て

「お、美味そうだな。貰い」

と言つて、残っていたプチシュークリームを摘まんだ。

それを見た明久達は、慌てた様子で

「待つて、雄二！」

「早まるな！」

「……戻すんだ！」

と雄二に、皿に戻すように促した。

だが、雄二はそんな三人の様子にキョトンとしながら

「お前ら、何をそんなに慌ててるんだ？」

と言いながら、そのプチシュークリームを口に入れた。

「ふむふむ、外はカリカリ、中はネバネバ。甘くなく、むしろ辛過ぎる

味わいがなんとも……アベシ!？」

なぜか、どこかの世紀末のような悲鳴を上げながら、雄二は倒れた。

「雄二……！」

「坂本……！」

倒れた雄二を見て、三人は慌てて駆け寄った。

「雄二、しっかりして！」

「大丈夫か!？」

「……目を覚ますんだ！」

三人が必死に声を掛けていると、うつ伏せになっていた雄二が

「ああ、俺は大丈夫だ……」

と返事をしてきた。

「よかった……」

「安心した……」

雄二の返事を聞いた三人が、安堵のため息を吐いていると

「ああ……喜ぶのは構わんだが……別にあの川を渡ってしまっても構わないのだろうか?」

なぜか、赤い弓兵風に雄二がそう言った。

「渡るなあ……！」

「……戻ってこい！」

明久と康太の二人が、声を張り上げていると、ドアが開いて

「あ、私を作ったプチシユークリームはどうでした？」

先ほどまでは居なかった姫路が、そう問い掛けてきた。

その問い掛けを聞いて、信繁と呆然としていた翔子が近寄って

「さて、姫路。一つ聞こう」

「……何を入れたの？」

と問い掛けた。

二人からの問い掛けに、姫路は首を傾げながら

「隠し味として……硝酸を」

と答えた。

次の瞬間、盛大に血管が切れる音が響き、信繁と翔子から凄まじいオーラが立ち上がった。

「姫路……ちよーつと、O☆HA☆NA☆SHI☆がある……」

「……何も言わないで、付いて来て」

二人はそう言うと、それぞれ姫路の手を掴んで歩き出した。

「え？ え？ ちよつと待ってください！ なんか、お話のニュアンスが違っ……」

姫路の抗議も虚しく、二人は姫路を引きずって家庭科室から出て行った。

その十数秒後、姫路の悲鳴がどこからか聞こえてきたが、誰も気にしなかった。

「む？ 六万だと？ いや、それはおかしい。こういう場の船賃は六文と相場が決まっていますよね……いや待て、なぜ親父が居る？ なに？ お袋の作った弁当を食べた？ だから、俺が作った弁当にしろと言っただろ？」

雄二がそう言っている間に、颯馬がAEDを持ってきた。

「雄二、戻ってくるんだ！ とうか、雄二のお父さんも帰ってきて！」

康太！」

「……わかっている！ 電圧、チャージ完了！ 生きろ！」

康太はそう言いながら、AEDのスイッチを押した。

なお、この時になぜか、康太の目に鳥のような赤い光が浮かんでいたのを、颯馬が確認していたとか。

「アババババ！ はっ！ 俺は一体……」

雄二はAEDの電気ショックが効いたらしく、無事に帰還してきた。

「……良かった」

「霧島さんを、未亡人にしなくて済んだよ……」

無事に帰還した雄二を見て、明久と康太は安堵の息を吐いた。

なお、この事件をキツカケに、姫路をキッチンに立たせないようにと、姫路は倉庫番に決定。

雄二の父親は会社で倒れたために、会社の同僚がすぐさま救急車を呼んで、一命を取り留めた。

こうして、準備期間は過ぎていく。

始まる文化祭

時は過ぎて、文化祭当日

Aクラスの教室では……

「いらっしやいませー!」

「コスプレ喫茶へようこそ!」

様々な衣装を着た生徒達が、入ってくる客に対して接客していた。ちなみに、それぞれが着ている衣装は以下の通りである。

明久 明治剣客浪漫譚主人公

謙信 一年中桜が咲く島の素直になれない妹（二作目）

雄二 某運命の赤い弓兵

翔子 某クイズ学校ゲームの天才少女

信玄 某船コレクションの悪夢と呼ばれた犬みたいな少女

幸村 信玄と同じ作品のへそ出しツインテール

信繁 錬金術漫画の焰使い

颯馬 某子供先生

優子 某魔法少女の関西弁の女の子

秀吉 某剣デスゲームの主人公

康太 某ゲーム世界に閉じ込められた三白眼の付与術士
となっている

そんなコスプレ喫茶の滑り出しは順調で、いわゆる満員御礼だった。

ちなみに、他のクラスメイト達の衣装は、女尊男卑の世界の制服だったり、某魔法少女のツインガンナーだったりと様々だ。

ちなみに、これらの衣装の大半を作ったのは康太である。

彼は僅か一週間で、約三十着は作ったのである。

残り有志女子達を作ったのだが、恐ろしいはその正確性と製作速度だろう。

康太の作った衣装を着た生徒達は、その採寸の丁度さに驚愕していた。

サイズを教えた覚えはないのに、康太の作った衣装は各個人にピツ

タリだったのだ。

なぜピツタリだったのか、明久が聞いたら

『……俺に、不可能はない』

と言つてのけた。

それを聞いた明久は

(なんでだろう……言つてゐることは決まつてるのに、素直に賞賛出来ない……)

と思つた。

閑話休題

そして、学園長と交渉した試験召喚獣大会には雄二と康太のペアが参加することになった。

そして、文化祭が始まつて数時間後

『ただいまより、試験召喚獣大学を開催します。選手の方々は各試合会場までお越しください』

という放送が聞こえた。

「そんじゃあ、行つてくるわ」

「……勝つてくる」

放送を聞いた雄二と康太の二人は、そう言うと教室を出ていった。

試験召喚獣大会は、一回戦から三回戦までは試合観戦はできないらしく、明久達は素直に見送つた。

そして、数分後

「明久。明久はそろそろ、休憩に入ってください」

と明久は、謙信に休憩に入るように促された。

「え、でも……」

明久がためらっていると、謙信が腰に手を当てて

「いいですか？ 明久のケガは、未だに完治してません。それに、開店してから、明久は働き詰めではないですか」

開店してから既に、数時間が経過しており、働いている生徒の中では、明久が一番と断言出来るほど動き回っていた。

料理は勿論のこと、接客から写真撮影までこなしている。

ちなみに、この写真撮影は指名式で一回五百円と高めだが、明久は

と、称号を呼ばれた。

二人が振り向いた先に居たのは、眼帯を付けた美少女だった。

「ああ、政宗」

「奇遇ですね」

二人はそこまで言ってから、首を傾げた。

「政宗……なんで、男装してるの？」

「結構、似合ってますが……」

二人の視線の先には、男物のスーツを着た政宗の姿があった。

「ん？ ああ……私達のクラスの出展内容はな、男女逆転祭りだな」

「ああ……なるほど」

「これはまた……斬新ですね」

政宗の話を聞いて、二人は困惑気味だが納得した。

「政宗はいいの？」

「ああ。私は休憩中でな……今は小十郎が指揮している」

政宗はそう言いながら、手に持っていた綿アメを振ってみせた。

「そういえば、剣聖よ。ケガは大丈夫なのか？」

政宗がそう問い掛けると、明久は軽く右腕を回しながら

「まあ、大体は治ったよ。けど、まだ完治じゃないんだ」

「なるほどな……あまり、無理はしてくれないなよ？」

明久の説明を聞いて、政宗は心配そうにそう言った。

「うん、ありがとうね」

「政宗もよろしかったら、私達のクラスに来てくださいいね？」

「ああ……確か、お前達のクラスはコスプレ喫茶だったか？」

政宗がそう言うと、明久は頷き

「だから、こんな格好なんだよね」

と言いながら、腰帯に刺してある刀に手を添えた。

「大丈夫なのか？ 刀に触れて……」

政宗が問い掛けると、明久は微笑みながら

「うん、なんとかね……」

「模造刀ですからね」

明久が腰に帯びている刀は、これも康太が見つけてきたものだ。

なんでも、知り合いの中に刀鍛冶が居るらしい。

それを聞いた明久は、康太の交友範囲に驚いたのを覚えている。しかも、その刀鍛冶も僅か三日で打ち上げで送ってきたらしい。

閑話休題その3

「しかも、写真撮影のおかげで普通に握れるようにはなったよ」

「お客からの要望の中で、刀を構える要望が多かったですからね」

明久に続けて謙信がそう言うと、政宗は頷き

「なるほど……PTSDの治療にも役立ったか」

「うん……」

政宗の言葉に、明久は頷いた。

なお、謙信は明久の衣装に刀があつたのを見て心配していた。

トラウマが発症して、倒れるのではないかと。

その証拠に、明久は最初、刀を握ると震えていた。

だが、回数を重ねる度にその震えは少しずつ収まっていった。

それが、謙信にとっては嬉しかった。

模造刀とはいえ、明久が再び、刀を握れるようになったことを。

そして、謙信はふと腕時計を見た。

「明久、そろそろ戻りましょう」

謙信がそう提案すると、明久は驚いた様子で

「え？ もうそんなに時間が経つたの？」

と問い掛けた。

すると、謙信は頷いて

「ええ、既に40分は経ってます。そろそろ戻らないと」

「そっか……そろそろ、戻らないとまずいね」

明久はそう言うと、視線を政宗に向けて

「それじゃあ、僕たちはそろそろ教室に戻るね」

「ああ、わかった。後で、そちらの教室に伺おう」

政宗はそう言いながら、去っていく明久達を手を振って見送った。

この後教室で、問題が起きる。

営業妨害

明久と謙信の二人が教室に戻るために歩いていると、途中で雄二達と合流した。

「あ、雄二に康太」

「明久と上杉か」

「……休憩か？」

「ええ。ですが、これから戻るところです。試合はどうでした？」

「勝ったに決まってるだろ」

四人は互いに確認しあうと、教室に向かって歩き出した。

そして数分後、曲がり角を曲がった時だった。

「む。ようやく見つけたのじゃー！」

なぜか、秀吉が現れて駆け寄ってきた。

「秀吉、どうしたの？」

明久が問い掛けると、秀吉は頭をポリポリと掻きながら

「実は、困ったことになってのう……」

と言葉を濁した。

「なんだよ。はっきり言え」

雄二が先を促すと、秀吉は意を決した様子で

「実はのう……営業妨害なのじゃ」

「営業妨害？」

秀吉の言葉に、四人は揃って首を傾げた。

数分後、五人は揃って教室前側のドアから中を見た。

「ほれ、中央の席の二人じゃ」

秀吉に言われて、四人は中央の席に視線を向けた。

そこでは、禿頭とソフトモヒカンが特徴の二人の男子が大声で喚き散らしていた。

「いいから、責任者を呼べて言っただよー！」

「接客がなってねえんだよー！ 文句を言っただよー！」

二人はそう喚きながら、机を蹴った。

よく見ると、二人の襟元のバッチから二人が三年生とわかった。

「まったく……最上級生がなにをしているのやら……」

謙信が呆れていると、康太が懐から手帳を取り出して

「……あのハゲ頭の方は常村勇作、つねむらゆうさくソフトモヒカンなつかわしゆんべいは夏川俊平だ……
両方とも、三年Aクラス」

と言った。

「最上級生のAクラスの高が知れるな……よし、あいつらは常夏コンビと呼ぼう。どうせ、頭の中も常夏だろうしな」

雄二はそう言うと、教室に入り、二人に近づいた。

「お客様、大変お待たせしました。なにかご要望でしょうか？」

普段の雄二からは想像出来ないような笑顔を浮かべながら、雄二は声を掛けた。

すると、二人は雄二を睨みながら

「遅えんだよ！ 客を待たせるんじゃないやねえ！」

「責任者でこれかよ。この店の高が知れるなあ、おい？」

二人の言葉を、雄二は軽くスルーして

「して、ご要望はなんでしょうか？」

再び問い掛けた。

「てめえの所の接客はどうなってんだ、ああ!？」

「対応がなってねえんだよ！ こんなんでよく出店したな、ああ!？」

二人がそう言ったタイミングで、雄二の背後に信玄が近寄り

「その二人が要望したのは、座って付き合え。というものです」

と小声で伝えた。

それを聞いた雄二は、笑みを崩さず

「お客様。お客様がご要望なさったのは、こちらの対応外となっております
ります」

と言うが、二人は目くじらを立てて

「んなこと、知ったことじゃねえんだよ！」

「こっちはお客様だぞ！ お客様!!」

そんな二人の様子に雄二が悩んでいると、明久が近づいてきた。

「申し訳ありません、お客様。足元のゴミを拾わせていただきます」

明久はそう言うと、二人の足元でしゃがんだ。

確かに、二人の足元には二人が蹴ったからか、紙ナプキンが散らばっている。

そして、明久がその紙ナプキンを拾おうと手を伸ばした時

「邪魔だ！」

「失せろ、このバカが!!」

二人は同時に、明久を蹴飛ばした。

「ぐっ!？」

蹴飛ばされた明久は、隣の机にぶつかり、ぶつかった机の下敷きになつた。

「明久！」

謙信は蹴飛ばされた明久に近寄り、明久を抱き起こした。

よく見れば、衣装の一部が僅かに赤く滲んでいる。

どうやら、傷口が開いてしまったようだ。

「けっ!・ 元々の対応がなってねえから、ゴミが有るんだろうが！」

「こんな店、来るだけ無駄だったな!!」

二人はそう言うのと、立ち上がって教室から出ようとした。

だが

「おい……………」

「……………待て、貴様ら」

それを、雄二と康太の二人が止めた。

「ああ?・ なんか用か?」

「こちとら、これから帰るんだがな?」

常夏コンビは雄二達を睨むが、雄二達は視線を逸らさず

「こんな事をして、恥ずかしくないのかよ?」

「……………貴様ら三年生のモラルを疑うな」

雄二達がそう言うのと、常夏コンビは拳を鳴らしながら睨みつけて

「ああ?・ それが三年生に対する態度か!？」

「年上に対する態度つてもんを、教えてやろうか!？」

と怒鳴った。

「上等だ……………」

「……………友人を傷つけられて、黙ってられるか」

常夏コンビの言葉を聞いて、雄二達も拳を鳴らしながら身構えた。その空気はまさしく、一触即発と言えるだろう。その時だった。

「騒いでる生徒が居るといふのは、ここですか!？」

「風紀委員会です! 大人しくしなさい!」

二人の女子を筆頭に、十数人の生徒達がなだれ込んで来た。

片方は愛という漢字の髪留めを付けた女子で、名前は直江兼続なおえかねつぐ

もう片方は、少し外に跳ね気味のセミロングの髪にヘアバンドが特

徴の女子

名前は島津義弘しまづよひろである。

その二人は常夏コンビを認識すると、溜め息混じりに

「常村に夏川、また貴方達ですか」

「こちらも暇ではないんです。いい加減にしてください」

と言った。

「おいこら。どこを見てんだよ!」

「どう見ても、こいつらが因縁付けてるじゃねえか!」

常夏コンビがそう言うと、雄二達が

「ふざけんじゃねえ! 明久を蹴飛ばしておいて、被害者面してん

じゃねえ!」

「……しかも、その前から営業妨害してるだろ!」

と怒鳴った。

すると、兼続は倒れてる明久と抱き起こしてる謙信に気づいて

「謙信様、明久様! 大丈夫ですか!!」

駆け寄ると、謙信を手伝って明久を抱き起こした。

その時、義弘は近寄ってきた他の風紀委員から話を聞くと、常夏コンビに近づいて

「状況と他のお客の話の聞いたら、あんたらが悪いみたいなんだけど?」

と言つて、二人を睨んだ。

「なっ!?!」

「んだと!?!」

義弘の言葉を聞いて、常夏コンビが絶句していると、義弘が背後の風紀委員達に振り向いて

「二人を捕縛！ 本部に連行して」
「はっ！」

義弘の命令を聞いて、風紀委員達は常夏コンビを押さえ込んだ。

「待て、ふざけんじゃねえ！」

「離しやがれ！」

常夏コンビは喚くが、風紀委員達は無視して連行していった。

義弘は見送ると、雄二達の方に振り向いて

「私達のクラスメイトが、迷惑を掛けたわね」

と言いながら、頭を下げた。

「いや、俺達は大丈夫なんだが……」

「……明久が」

二人はそう言うと、心配そうな視線を明久に向けた。

そこでは、謙信と兼続に肩を貸されてなんとか立っている明久の姿があった。

すると、明久と謙信の姿を見た義弘は軽く驚いた表情を浮かべて

「剣聖と軍神!？」

と驚きの声を上げた。

「ケガをしている。保健室に連れて行ったほうがいい」

兼続がそう言うと、義弘はハツとしてから首を左右に振って

「彼は、私達が責任を持って保健室に連れて行くから。安心して」

と言うと、謙信と代わって明久に肩を貸して教室を去った。

謙信はその後を追っていった。

雄二は明久達を見送ると、頬を軽く叩いてから教室を見回して

「お客様。大変お騒がせしました。只今いらっしやるお客様に關しま

しては、全員二割引にさせていただきます。ごゆつくりとお楽しみくだ

さい」

と言ってから、頭を下げた。

「ああ、お構いなく！」

「それより、あの蹴られた子は大丈夫？」

「あーあ、あいつら酷い事をしやがる……ほれ、机は大丈夫みたいだ」
雄二の言葉を聞いて、客達はそう返した。

雄二は客達の言葉に感謝しながら、クラスメイト達に指示を出して
対応を始めた。

新たな仲間との共同戦線

営業妨害騒ぎから数分後、明久達は保健室に居た。

「申し訳ありません、明久様。私達がもう少し早く動いていたら……」

少女、兼統は明久のケガを治療しながら謝罪してきた。

「大丈夫ですよ、兼統さん」

「しかし、兼統もこの学園に居たのですね」

実を言うと、兼統は昔からの知り合いであり、良きお姉さんだ。

「はい。今は風紀委員会の委員長です」

三人が語り合っていると、ドアが開いて

「ごめんねー。遅くなったわ」

と言いながら、義弘が入ってきた。

「ああ、義弘」

義弘が入ってきたのに気づいて、兼統が視線を向けると、義弘は片手を上げながら

「ケガは大丈夫？」

と明久に問い掛けた。

義弘からの問い掛けに、明久は頷くと

「ええ、なんとか大丈夫です……」

と答えた。

だが、謙信がガーゼを交換しながら

「大丈夫ではないですよ！　ようやく塞がりかけてた傷口が、また開いてしまいましたよ！」

と息巻いた。

謙信の言葉を聞いて、義弘は乱雑に頭を搔いて

「本当に、ごめんなさいね。私のクラスメイトが迷惑かけたわ」と迷惑そうに言った。

義弘の言葉を聞いて、明久は首を傾げながら

「あの二人は、どうしてあんな事を？」

と問い掛けた。

すると、義弘は両手を上げながら首を振って

「わからないわよ。あいつらを連行したら、教頭が来てどこかに連れて行ったから」

と答えた。

「教頭が？」

義弘の言葉を聞いて、明久は片眉を上げた。

「そ。おかげで、事情聴取も出来なかったわよ」

明久からの問い掛けに、義弘は苛立った様子で答えた。

その言葉に明久は頷くと、そういえば、と言いながら視線を義弘に向けて

「義弘さん、こっちに来てたんですね」

と言った。

「まあね。地元の高校でも良かったけど、やっぱり東京の高校の方が良くなかって思ってたね」

彼女、義弘は本来ならば、九州の方に住んでいたのだ。

過去に明久と謙信は家の交流もあり、彼女の家に向かったことがあった。

ちなみに、彼女は四人姉妹の次女であり、格闘の達人である。

余談ではあるが、文月学園で彼女は《鬼島津》と呼ばれており、彼女はそう呼ばれる度に

「誰が鬼か!!」

と激怒する。

閑話休題

「でも、これでわかった……彼らは教頭に協力してる」

明久がそう呟くと、謙信は頷いた。

すると、明久の呟きが聞こえたのか、兼続と義弘が

「協力してるって、どういうことですか？」

「何があったの？」

と明久に問い掛けた。

二人からの問い掛けに、明久は言おうか迷った。

二人を巻き込みたくないと思うが、教頭がどれほどの人数を今回の事に動員するかわからない。

それを考えると、貴重な戦力になり得る二人に話すべきなのだろうか。

明久が迷っている、兼続が心配そうな表情を浮かべて

「明久様、何とぞ教えてください。私はこれ以上、明久様が傷つくのを見たくはありません」

と言った。

それを聞いた明久は、数秒間悩み

「……これから言うことは、他言無用で頼みます」

と言った。

明久の言葉を聞いた二人は、ただ事ではないと察して無言で領いた。

そして明久は、二人にことのあらましを語った。

教頭が何か大事を企んでいて、常夏の二人はそれに協力している

と。

明久の話聞いた二人は、どこか納得した様子で頷いた。

「なるほど、有り得るわね」

「ええ……」

二人の言葉を聞いて、明久は首を傾げた。

「どういうことですか？」

明久からの問い掛けに、二人が語ったのはこうだった。
常夏コンビは成績下位の者を見下す傾向が強く、それゆえに同級生やクラスメイトからは相当に煙たがられている。

しかし、高学歴を有する教頭には媚びへつらっており、何かと優遇されている。

風紀委員会は以前から怪しいと調査しているが、なかなか的確な証拠が掴めないためにヤキモキしていたらしい。

「なるほど……」

明久は納得すると、二人に改めて協力を要請した。
具体的には

1、風紀委員会による見回りの強化

これは、教頭が行うであろう妨害で一般客や生徒への被害を未然に

防いだり、減らす目的である。

2、常夏コンビへの監視体勢の強化

これは先のこともあり、常夏コンビがまた暴れる可能性が高いためである。

3、出来る限りの教頭の監視

これに関しては、本当に出来る限りで頼んだ。

今回の件が教頭主体ならば、教頭は邪魔な生徒に対して徹底的に危害を加える可能性が高い。

ゆえに、事前に知ることが出来れば、その生徒を助けることが出来るからだ。

明久がここまで言うのと、二人は顔を見合わせて

「それらは、私達から他の風紀委員に伝達しましょう」

「私達は出来る限り、明久君の近くに居ます」

二人の言葉を聞いて、明久は目を見開いた。

「いえ、そこまで迷惑を掛けるわけには……」

明久がそう言うのと、兼続が片膝を突いて

「お願いします。もう、あの時のような思いはしたくないんです」

と言った。

そう言われたら、明久としては断れる訳が無かった。

「わかりました。でも、無理はしないでくださいね？」

明久がそうお願いすると、二人は微笑みながら頷いた

こうして、風紀委員会との共同戦線が決定した。

誘拐事件

怪我の治療が終わると、明久と謙信の二人は教室へと戻った。すると、一段落したのか客の人数は大分減っていた。

「おお、明久。戻ったか」

「……大丈夫？」

明久に気づいたらしく、雄二と翔子の二人が声を掛けてきた。

二人からの問い掛けに、明久は頷きながら

「まあ、なんとかね……あ、康太！」

と、厨房側から出てきた康太を呼んだ。

「……どうした？」

呼び掛けられた康太は、明久に近づいて首を傾げた。

「衣装なんだけどね、血で汚れちゃって……」

明久はそう言いながら、紙袋を康太に手渡した。

「……明日までには、なんとかする」

康太は紙袋を受け取ると、そう言ってから厨房に入った。

その時、明久は時計を見て

「そういえば、雄二。試合は？」

と問い掛けた。

今の時間帯は、本来ならば試合中のはずである。

明久からの問い掛けに、雄二はなぜか遠くを見ながら

「試合は不戦勝だったんだよ……」

と語った。

「不戦勝？　なんで？」

不戦勝の理由を明久が問い掛けると、雄二は明後日の方向を見ながら

「どうやら……食中毒らしいんだ……」

と言い、雄二の言葉を聞いた明久は固まった。

「……姫路さんじゃあ、ないよね……？」

明久が恐る恐ると聞くと、雄二は

「違うはずだ……あいつは、倉庫番だしな……」

と言ったが、二人としては疑いは晴れなかった。

その後、二人は強引に会話を切り上げて、それぞれ仕事へと戻った。なお、衣装が血で汚れた明久は厨房へと回った。

そして、謙信もそんな明久のサポートへと回った。

そして、少し時間は経ち、雄二は三回戦へと向かい、明久はトイレへと向かった。

そして、明久が戻っている途中で雄二達と会った。

「あ、雄二。試合はどう？」

「勝ったに決まってるだろ」

「……余裕」

明久からの問い掛けに、雄二と康太はサムズアップしながら答えた。

その時だった。

颯馬が慌てた様子で、曲がり角から現れた。

颯馬に気づき、明久は片手を上げながら

「颯馬、どうしたの？」

と声をかけた。

颯馬は乱れている呼吸を整えながら、涙目で

「申し訳ありません、明久さま！ 僕が弱いばかりに……」

と言いながら、俯いた。

「泣いてたんじゃ、わからねえだろ」

「……詳しく話せ」

雄二と康太が促すと、颯馬は視線を上げて

「謙信様を始めとして、数名の方々が攫われました！」

と告げた。

そして三人は颯馬の言葉を聞いて、目を見開いた。

「申し訳ありません……」

颯馬は謝罪しながら、涙を流した。

「とりあえず、教室に行くよ」

明久がそう言うと、雄二と康太は頷いた。

そして、四人が教室に到着すると、クラスメイト達が荒れた内装を

直していた。

明久はその中から目的の人物を見つけると

「信繁ー」

と呼んだ。

呼ばれた信繁は、駆け寄ると

「すまないー」

と頭を下げた。

「今は謝罪よりも、何があったのかを教えてください」

明久がそう言うのと、信繁は頭を上げて

「そうだな……それが……」

信繁が明久達に教えたのは、以下の通りである。

今から、約十数分前のこと。

十人近くの男達が整列係の制止を振り切って、店内に乱入。

その時、たまたま居た小さな女の子を人質に取り、謙信達を拘束し

逃亡したらしい。

話を聞き終わった明久達が唸っていると、康太が

「……付いて来い」

と言つて、教室から出た。

明久達は首を傾げながらも、康太の後を追った。

そして、康太はFクラス教室後方に入ると、自身のロッカーを開けた。

「なんで、パソコンがあるのさ」

康太のロッカーの中を見て、明久は思わずそう言った。

しかも、ロッカーの中に電源が引かれてあり、画面には様々な映像が映っている。

「……これは、学園中に仕掛けてある小型カメラの映像」

「とりあえず、なんでそんな物があるのかは聞かないでおく」

康太の話を聞いて、信繁はそう言った。

すると康太は、パソコンのキーボードを高速で叩きだした。

数秒後、画面に地図が表示された。

「ムツツリーニ、こいつは？」

雄二が問い掛けると、康太はパソコンを操作しながら

「……念のために、全員の衣装に発信機を仕込んでおいた」と言った。

「今は事態が事態だから、不問にしとくぞ」

雄二がそう言ったタイミングで、地図上の一カ所に赤いマークが点滅した。

「康太？」

「……ここは、郊外の廃工場」

明久からの問い掛けに、康太はすぐさま答えた。

康太の言葉を聞いて、明久は立ち上がると

「皆、行くよ」

と告げて、明久の言葉に四人は頷いた。

そして、数十分後

明久達は件の廃工場に到着した。

そして、廃工場の入り口にはワンボックスカーが二台止まっていた。

「……足跡は中に続いている」

康太がそう言うと、明久は近くに落ちていた鉄パイプを拾い上げ、信繁は持ってきてきていたカバンから連結式の棒を取り出し、颯馬は小太刀サイズの木刀を二本持ち、雄二は拳を鳴らして、康太は明久と同じように、鉄パイプを持った。

「それじゃあ、行こうか」

明久の言葉に、四人は無言で頷いた。

中は廃棄された資材や、古い雑誌などが散乱しており、壁にはスペリーによる落書きがチラホラとあった。

明久達はそんな中を慎重に歩きながら、攫われた謙信達がどこに居るのかを探していた。

すると、近くから

「なあなあ、そろそろこいつらを犯さねえ？」

「お、イーねー！ だったら、俺はこの黒髪ちゃんねー♪」
という、会話が聞こえた。

明久達はその声を頼りに、部屋を探し当てた。そして、少し開いているドアの隙間から中を覗いた。そこにはまさしく、件の男達と謙信達の姿があった。どうやら、縄で縛られているらしい。

しかし、全員の無事を確認出来て、明久達は安堵した。

「……私に触るな！」

翔子は自身に触ろうとしていた男の手を、足で蹴った。

「イーねーイーねー！ 気の強い娘は好きだよお！」

蹴られた男はそう言うのと、下品な笑い声を上げた。

「お姉ちゃん……助けて……」

小さな女の子の声が聞こえて、明久は首を傾げた。

なぜならば、その声には聞き覚えがあったからだ。

明久が思い出そうとしていると

「あなた達、この子供だけでも解放しなさい！」

と謙信が、強い語気で言った。

「ああ？ 命令できる立場かよ？」

「っ……！」

男の言葉に謙信が悔しそうにしていると

「それで、あなた達はなぜこんなことを？」

と信玄が問い掛けた。

「俺達は依頼されただけなんだよ。てめえらを拉致って、あのクラス
の模擬店を営業出来なくしてやれってなあ！」

信玄からの問い掛けに、男は愉快と言わんばかりに笑いながら答えた。

「依頼？ 誰が？」

「メガネをかけた白髪のオッサンだよ！ 割りの良い仕事だぜ、拉致って好きにすれば五十万も貰えるんだからなあ！」

幸村からの問い掛けに、男は笑いながら答えた。

「特徴的には、教頭だな」

「うん……」

廊下で会話を聞いた明久達は、特徴から該当は一人しか思い浮かば

なかった。

そして、雄二達は気づいていた。

明久から、殺気が滲み出していることに。

その時だった。

「さーてと……そろそろ犯すかな！」

「私に触るな！」

謙信の声の直後、何かを叩くような音が聞こえた。

「痛えなあ……なにすんだよ、このアマがあ!？」

「あぐつ……」

「……上杉！」

「謙信！」

男の声の直後、謙信の悲鳴と何かにぶつかるような音。そして、翔子達の心配する声が連続した。

その直後

「お邪魔——！」

「おらあ！ 騎兵隊の到着だ！」

明久がドアを鉄パイプで殴り壊し、そこから雄二達が突入した。

「なっ——！」

「なんでここが!？」

明久達の登場に男達が固まっていると、一瞬にして明久が一番近く
の男の懐に入り

「……どけ」

静かに一言呟きながら、鉄パイプを振るった。

「があっ!？」

明久の振るった鉄パイプは、男の肋骨の側面に当たった。

その際に、嫌な音がしたが明久は無視した。

そして、倒れてる謙信とその近くに居る男を見て

「お前か……」

短く呟き、また一瞬にして男に肉薄した。

この時、明久がしたのは縮地と呼ばれる古流剣術に於ける移動技法
の奥義である。

とある文献によると、この縮地を極めると全速力で走っている馬車にも追いつけるらしい。

閑話休題

明久は謙信を殴ったであろう男に、容赦なく鉄パイプを振り上げた。

「ぎゃあああ!!」

殴られた男は数mほど飛んで、瓦礫の山に落ちた。

明久はそれを冷たい目で見ると、謙信の隣にしゃがんで謙信を助け起こした。

「ごめんね。遅くなっちゃった」

「いえ……信じてましたよ、明久」

明久が謝ると、謙信は微笑みながらそう言った。

「少し待っててね……こいつらを倒すから」

明久はそう言うと、謙信を壁に寄りかからせた。

そして、置いておいた鉄パイプを拾い上げて

「次、来いよ……」

と言いながら、鉄パイプを突きつけた。

その時

「てめえら! それ以上動くな!」

一人の男が、女の子の顔にナイフを突きつけながら喚いた。

「それ以上動いてみる! このガキがどうなっても……」

「……させるか!」

男が喚いていると、いつの間にか康太が背後に現れて、男の脳天に鉄パイプを振り下ろした。

「がっ!」

康太に殴られた男はうめくと、前のめりに倒れた。

なお、女の子は康太が男の手から上手くキャッチした。

その後、瞬く間に男たちは全滅した。

黒幕の正体

誘拐犯を残らず倒して数分後、明久達は連絡を受けて来た吉井家の車に乗り込んで文月学園へと戻った。

そして学園に到着すると、島田が心配そうな様子で教室に居た。すると、小さな女の子が

「お姉ちゃんー!」

と声を上げながら、島田に抱きついた。

「葉月!」

島田もその小さな女の子、葉月はづきを抱き締めた。

その光景を見て、明久は首を傾げながら

「その子、島田さんの妹なの?」

と問い掛けた。

すると島田は、明久を見上げながら

「そうよ。ウチの妹の葉月よ。ほら、葉月。挨拶しなさい」

明久からの問い掛けに頷きながら、葉月に挨拶するように促した。すると葉月は、目元の涙を拭いてから

「島田葉月です。助けてくれて、ありがとう。優しいお兄ちゃん!」

と言った。

明久は葉月の言った、《優しいお兄ちゃん》という言葉聞いて、手をポンと叩き

「ああ、思い出した! あのぬいぐるみの時の!」

と言った。

「明久、ぬいぐるみとは?」

謙信が問いかけると、明久は頬を掻きながら

「うん……謙信達が来る前にね、葉月ちゃんが大きなぬいぐるみを買っていたって言ってただけけど、お金が足りなかったんだ。だから、僕が代わりに払ったんだ」

と説明した。

「明久らしいな」

明久の説明を聞いて、信繁は納得した様子で頷いていた。

その後、島田は怯えていた葉月を家に連れて帰ることになり、帰宅した。

島田姉妹を見送った後、明久達は教室に残った。理由は、とある人物を待ったためだった。

そして、待ち続けること数分後

「待たせたね」

ドアを開けて入ってきたのは、学園長の藤堂カヲルだった。

「遅かったじゃねえか」

雄二が文句を言うと、学園長は雄二に視線を向けて

「腕輪も調べてたから、時間が掛かったんさね」

と告げた。

学園長のその言葉を聞いて、その場の全員が真剣な表情を浮かべた。

何しろ、明久に関する腕輪と云えば、アレしかない。

「それで、わかったこととは？」

颯馬が問いかけると、学園長は頷いて

「あの腕輪は、何者かにより改造されていた。第一に教師でなくとも、効果が発揮出来るように。最後に、装着者の闘争本能を増幅させる効果があった」

と説明した。

その説明を聞いた信繁は、首を傾げて

「腕輪って、簡単に改造出来るのか？」

と問い掛けた。

すると、学園長は首を振って

「いいや……本来だったら、アタシしか出来ないはずさね」

と言った。

それを聞いて、信繁は顎に手を当てながら

「つまりは、相手に学園長並かそれ以上の技術者が居るのか……」

と呟いた。

その言葉に学園長は頷いて

「その通りさね。しかも、そいつが竹原に協力している可能性が高い」

と言った。

「教頭にですか？」

信玄が問い掛けると、学園長は頷いてから西村を手招きして「島田の家から回収した箱と紙から、教頭の指紋が見つかった」と告げた。

西村の言葉を聞いて、幸村は険しい表情を浮かべて

「つまりは、今回の誘拐と合わせて、教頭が裏から操っていたと？」と問い掛けた。

幸村の言葉に学園長は頷き

「そういうことさね。そして、今回の件に合わせて竹原の周りを色々調査した結果、竹原が近隣の私立の高校に出入りしていることと、教室の改善費用を横領していることがわかった」

学園長の言葉を聞いて、優子や秀吉達は目を見開いた。

竹原がやっているのは、完全に犯罪の域である。

その時、雄二が右拳を左手に叩き付けて

「あいつが何を企んでるなんて、正直知ったことじゃねえ……だがな、あいつはやつちやいけないう事をやったんだ……きつちりと、片あ着けようじゃねえか！」

と言った。

「おうよー！」

「誰に喧嘩を売ったのか……教える必要がありますね」

「さすがに、今回ばかりは僕も怒ってますよ」

雄二の言葉を聞いて、その場の全員が口々に賛同の声を上げた。

その光景を見て、学園長と西村は微笑んだ。

「これなら、大丈夫さね」

「ええ……こいつらならば、大抵の事は切り抜けられるでしょう」

こうして、文化祭初日は波乱と共に終わった。

そして、事件は終幕へと向かう。

二日目の始まり

翌日、清涼祭二日目

明久達は全員、教室に揃っていた。

そして、一番前には雄二が立っている。

「お前ら、今日が最終日だ！ 何が何でも、売り上げを上げるぞ！」

「おう！」

「はい！」

「任せろ！」

「売りに売ってやるぜ！」

雄二の言葉に、AとFのクラスメイト達は口々にそう言った。

その時、放送用のスピーカーからノイズが聞こえて

『只今より、清涼祭二日目を開催します！』

という、宣言が聞こえた。

雄二はそれを聞くと、右手を掲げて

「行くぞ、お前ら！ 開店だ！」

と号令を下した。

「オオオオオオオ！」

雄二の号令に、クラスメイト達はその時の声を上げた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

清涼祭二日目が始まって、数十分後

「いらっしやいませ！ こちらへどうぞ！」

「はい、プチシュークリームとミルクティーのセットですね」

「三番席の注文、出来たから持ってけ！」

コスプレ喫茶ははつきり言って、大盛況だった。

どうやら、前日来店客からの口コミもあつたらしい。

廊下には常に長蛇の列が出来上がっており、最後尾は最大で四十分待ちと書いてある看板を持つてる男子が立っている。

そして、明久はと言うと

「はい、二百六十円のお釣りで。ありがとうございます！」

レジの席に座っていた。

ちなみに衣装だが、康太は宣言通りに血痕を完全に抜いていた。そして、明久の補佐に謙信も居る。

厨房は康太と信繁が中心になっており、フロアーは信玄と幸村が中心になって切り盛りしている。

雄二と翔子は早期品切れを防ぐために、在庫管理を中心にしている。

なお、島田は先日のももあつたからか、葉月ちゃんが怖がったために今日は休みである。

そこらへんは、やはり良いお姉ちゃんらしい。

そして島田が休んだことにより、姫路が中心となって本来ならば倉庫の在庫管理をするはずだったが、予想外の大盛況により、姫路一人では管理しきれなくなったのだ。

それをフォローするために、雄二と翔子が行ったのである。

翔子の記憶力と雄二の指揮能力の高さにより、今のところは大丈夫である。

その時

『間もなく、試験召喚獣大会、準決勝を始めます！ 選手及び観戦者の方々は第一会場までお越し下さい！』

という放送が聞こえた。

その直後、厨房から康太が出てきてたまたま教室に来ていた雄二と一緒に教室から出ていった。

明久達は模擬店が忙しいために、応援には行けない。

だが、雄二達が勝つと信じて見送った。

そして、十数分後

「戻ったぜ」

「……戻った」

二人が教室に帰ってきた。

「……結果は？」

翔子が問い掛けると、二人はサムズアップしながら

「勝ったに決まってるだろ」

「……根本程度に負けるか」

と言った。

なお、この時二人は言わなかったが、対戦相手の根本は女装姿で参加していた。

理由としては、至ってシンプル。

Bクラスの出し物が、《男女逆転祭り》だからである。

根本としては普通に男子の制服で出たかったのだが、いつの間にか制服を隠されていたので、仕方なく女装したままで参加したのだ。

そして、そんな根本のパートナーは彼女の小山友香であった。

そして、雄二達は根本の姿を見て大爆笑。

怒りに任せて突撃してきた根本の召喚獣を、雄二がトンファーで頭部を強打して撃破し、小山の方は康太が二本の小太刀で切り裂いて勝ったのだ。

「……次の対戦相手は？」

康太が問い掛けると、懐から紙を取り出した信繁が苦い表情を浮かべて

「さつき情報が上がった……こいつらだ」

と指差した。

そこには、《常村勇作》《夏川俊平》と書かれていた。

「常夏コンビか……」

「……ちようどいい、ボコボコにしてやる」

常夏コンビの名前を見た二人は、歯を剥き出しにしながらそう言った。

どうやら、前日の明久への暴行がよほど腹に来ているらしい。

しかし、二人は大きく深呼吸してから頬を叩いて

「今は、模擬店に集中すっか」

「……売り上げも大事」

と言った。

そして、二人は模擬店に集中し始めた。

そして、時間は経ち昼過ぎ

『これより、試験召喚獣大会決勝戦を行います！ 選手及び観戦者の方々は第一会場へお越し下さい！ 繰り返しします……』

という放送を聞いて、雄二と康太は教室を出ようとした。
すると、ホールの全クラスメイトが

「勝ってこいよ！」

「応援してるわね！」

「あの、いけ好かない三年を叩きのめしてやれ！」

と、口々に応援の言葉を口にした。

それに対して、雄二と康太の二人は右手を高々と掲げて

「おうよ！」

「……優勝してくる！」

と返答して、教室を去った。

そして、運命の戦いが始まる。

3年Aクラス所属 常村勇作&夏川俊平

VS

2年Fクラス所属 坂本雄二&土屋康太

友のために、二人は決戦の舞台へと上がる。

決勝戦

試験召喚獣大会、試合会場

『只今より、試験召喚獣大会、決勝戦を行います！』

司会がそう宣言すると、それまで静かだった会場が歓声で一気に騒がしくなった。

『司会は私、新聞部の新野すみれがお送りします！ それでは、選手の入場です！』

司会の新野すみれがそう言うと、赤い階段の方から煙が噴出した。

『まずは、赤コーナー！ 三年Aクラス所属。常村勇作選手&夏川俊平選手！ 三年生の中では唯一、コンスタントに勝ち抜けてきました！ 三年生の面目躍如といった所でしようか!?!』

新野すみれがそう紹介すると、赤コーナーの階段から常夏コンビがそれぞれ片手を上げながら入場してきた。

だが、二人が現れた瞬間、会場はブーイングの嵐であった。

「おいこら！ なんでブーイングなんだよ！」

「俺達は優等生だぞ！」

二人は文句を言うが、誰も相手にしなかった。

どうやら、他の店でも営業妨害をしていたようだ。

『続きまして、青コーナー！ 二年Fクラス所属！ 坂本雄二選手&土屋康太選手！ 彼らは格上相手に勝ち続けて、決勝戦まで上り詰めました！ これは、Fクラスに対する認識を改める必要がありますね！』

と紹介すると、青コーナーの階段から煙が吹き出して、その煙の中から雄二と康太が現れた。

二人は手を上げたりせずに、一歩ずつ階段を登っている。

だが、その目に宿しているのは強い決意の光だった。

そんな二人が登場すると同時に、もの凄い歓声が巻き起こった。

「なんで、Fクラスのクズ共には歓声なんだよ！」

「おかしいだろうが！」

常夏コンビは文句を言うが、誰も相手にしなかった。

『それでは、この試験召喚獣大会のルールをおさらいしましょう！
今回は……』

と新野すみれがルールのおさらいを始めたが、雄二達は聞いていなかった。

「なあ、先輩方や……ちよつとばかり、質問があるんだが、いいか？」

雄二が問い掛けると、常村が億劫そうに

「んだよ、クズ野郎？」

と睨みつけた。

雄二はそんな視線を軽く受け流して

「あんたら、教頭に組みしてるんだろ？　なんでだ？」

と問い掛けた。

すると、常村は鼻で笑ってから

「気付かれたんなら、仕方ねえ……推薦だよ。推薦！」

「今回、教頭先生の企みに協力したら、俺達のために推薦を書いてくれるってな！　そうすりゃあ、面倒な試験勉強なんてしなくてすむ！」

常村に続いて夏川がそう言うと、雄二は哀れみを含んだ目で

「あんたら、バカか？　教頭がやろうとしているのはな、この学園の取り

壊しに等しいんだぞ？」

「……そんな学園の推薦など、ただの紙に等しい」

雄二に続いて康太もそう言った。

すると、常夏コンビは笑って

「そりゃ、てめえらだけだ！」

「俺達には、新しい学校も用意される！」

と言った。

要するに、常夏コンビは学園自体を売ったのと同義である。

そのことに気付き、二人は拳を白くなるほど握り締めた。

「てめえら……ふざけんなよっ！」

「……その腐った性根、斬り捨てる！」

「ハッ！　やってみろやー！」

「どうせ、勝つのは俺達だ！」

雄二達の言葉に、常夏コンビがそう返したタイミングで

『それでは、決勝戦の教科を発表します！』

と、新野すみれが言った。

すると、モニターのルーレットが回りだした。

そして、十数秒後表示されたのは

『教科は選択科目の家庭科です！』

必修科目ではなく、選択科目の家庭科だった。

「なっ!?!」

「バカな!?! 決勝戦の科目は化学だったはずだ!」

表示された科目を見て、常夏コンビは驚愕した。

「おやあ? 決勝戦はランダムって書いてあったのに、まるで化学が選ばれるのが決まっていたような口振りだな?」

「……どうせ、小細工をしたんだろ」

雄二と康太がそう言うと、常夏コンビは悔しそうに歯噛みした。

実を言うと、雄二と康太は試験召喚獣大会のシステムに不正アクセスがあったのを知っていたのだ。

それは今朝方、補充テストをするために早めに登校した時だった。

補充テストを終えて、二人は教室に戻ろうとしたら学園長に呼び止められたのだ。

その内容が、今朝方早くに試験召喚獣大会運営システムに何者かによる不正アクセスが行われたという話だった。

その不正アクセスは、防衛プログラムにより成功して騙したという話しだった。

そして、その不正アクセスを行ったのは教頭のパソコンからだつた。

『それでは、召喚してください!』

「試験召喚!」

召喚を促されて、四人は一斉にキーワードを唱えた。

四人の召喚獣が現れて、最初に常夏コンビの点数が表示された。

家庭科

三年Aクラス

常村勇作 185点

夏川俊平 170点

「けっ！ 確かに教科選択はビビったが、俺達が有利なのは変わらねえ！」

「どうだ！ これが優等生の点数だ！」

常夏コンビは嘲笑うが、雄二と康太は冷静に

「ほざけ……」

「……そんな点数がどうした？」

と告げた。

その瞬間、二人の点数が表示された。

家庭科

二年Fクラス

坂本雄二 389点

土屋康太 378点

その点数は、圧倒的だった。

「な、なんだよ！ その点数は!?!」

「お前らFクラスのクズ共に、そんな点数が取れるわけがないだろ！

カンニングだ！」

常夏コンビは喚くが、雄二達は溜め息混じりで

「おいおい、自分達が不利になった途端にいちやもんか？ 程度が知

れるな」

「……それに、試験官は西村だ。カンニングが出来る訳がない」

と言った。

そのタイミングで

『それでは……試合、開始！』

と、ゴングが鳴った。

「ちい！ 点数じゃ負けてるが、俺達がお前らクズに負けるか！」

「三年の実力を教えてやる！」

常夏コンビはそう言うのと、先手必勝とばかりに突撃した。

しかし、雄二と康太の二人は慌てずに身構えると

「そんな攻撃！」

「……食らうバカは居ない！」

と言いながら、素手で常夏コンビの召喚獣を空中に上げた。

「行くぞ、康太！」

「……合わせる！」

雄二の掛け声に康太が返すと、雄二と康太の召喚獣も常夏コンビの召喚獣を追いかけて飛び上がった。

そして、雄二の召喚獣は常村の召喚獣を捕まえて自身の肩に常村の召喚獣の頭を乗せて、両膝の裏側を掴み、康太の召喚獣は夏川の召喚獣の背中に乗って、夏川の両手を掴んで引き上げた。

「筋○バスター！」

「……オラッ○！」

二人は技銘を叫ぶが、それだけでは終わらなかった。

二人の召喚獣は空中でドッキングして……

「これぞ！」

「……友情のツープラトン！」

二人が放つのは……

「肉○ツープ！」

48の殺人技と仮面貴公子のコンビネーション技だった。

そして、轟音と共に技が炸裂。

その結果……

家庭科

三年Aクラス 常村勇作&夏川俊平 0点 LOSE

VS

二年Fクラス 坂本雄二&土屋康太 389点&378点 WI

N

二人の勝利が決定したのだった。

解決

試験召喚獣大会は最低クラスのFクラスが優勝する、という当初の予想外の展開となった。

そして、優勝者の雄二と康太には景品として黒金の腕輪と白銀の腕輪が学園長によって渡された。

その後、優勝者の雄二と康太による景品のデモンストラーションが行われた。

白銀の腕輪自体に欠陥は無く、雄二は腕輪を起動させて召喚フィールドを形成した。

そして、問題の黒金の腕輪である。

この黒金の腕輪は、取得点数が総合でBクラスに到達したら暴走する危険を孕んでいた。

だが、康太は保健体育以外は今のところFクラスである。

ゆえに、康太も問題無く腕輪の機能を発揮させて、召喚獣を二体に増やした。

こうして、試験召喚獣大会は幕を閉じた。

その後、雄二達は教室に戻り模擬店に専念。

そして、時は経ち……

『これにて、清涼祭を終了とします！ 一般客の方々はお帰りください。繰り返します……』

という放送が聞こえて、それを合図に雄二は右手を高々と掲げて

「お疲れー！」

「お疲れ様！」

「いやあ、売ったな！」

「本当にね！」

「私、足が棒よー」

「私もー」

雄二の言葉を皮切りに、クラスメイト達は歓声を上げた

そして、雄二は計算している翔子と優子に歩み寄って

「売り上げはどうだ？」

と問い掛けた。

すると、二人は一旦計算を止めて

「凄いわよ。2日間だけとは思えない売り上げね」

「……今のところ、これは確定」

と二人は言うのと、それぞれの計算結果の書かれた紙を雄二に渡した。

「ふむ……これなら、全員分の机は揃えられるな」

雄二が呟くように言うと、Fクラスの男子達は喝采を上げた。

しかし、それも仕方ないだろう。

壁と窓はひび割れて、机にしているちゃぶ台は穴が空いてる始末。しかも、畳は半分近くが腐っていることが判明した。

せめて、机だけでもマトモでないとやってられないのだ。

その時、康太が雄二に近寄ってきて

「……そろそろ」

と声を掛けた。

すると、雄二は頷いてから

「そんじゃあ、俺はちよつとばかり倉庫の方を見てくるか」

と言って、教室を出た。

それに続くように、康太と明久が

「……トイレ」

「あ、僕も」

と言って、教室から出た。

三人の目的地はもちろん、学園長室である。

「おら、腕輪を獲得したぜ」

雄二はそう言いながら、康太の腕に着けられている腕輪を示した。

「わかってるよ。誰が渡したと思ってるんだい」

学園長はそう言うと、康太が差し出した腕輪を受け取った。

それを確認すると、雄二は

「さて、こっちは約束を守ったんだ。教室の施設の改修工事を……」

と雄二がそこまで言った瞬間、明久が背後に振り返って

「誰だ！」

と声を張り上げた。

「……盗聴の気配！」

康太の言葉を聞いて、雄二はドアを蹴破る勢いで開けてから左右を見た。

すると、階段の方に見覚えのある背中を見つけた。

「俺とすることが、ミスった！ 常夏に聞かれた！」

「追うよ！」

「……まずは、放送室だ！」

雄二は悔しがり、明久と康太は学園長室から駆け出した。

そして向かった先は、放送室である。

理由としては、常夏コンビが先ほどの会話内容を放送室の機材を使って学園中に流すと思ったからだ。

三人は放送室に到着すると、ドアを蹴破つて中に入った。

だが、そこに居たのは常夏コンビではなく別の男子達だった。

「ここに居るのは、隠れてタバコを吸ったり、AVを売買してるバカだけだ！」

「とりあえず、写真を撮影して風紀委員会に送っておこうか。校則違反だしね」

「……ついでに拘束」

「や、やめてくれえ！」

男子達は抗議するが、明久達は無視して拘束してから放送室を後にした。

そして、次に向かったのは常夏コンビのクラスである三年Aクラスだ。

明久達が駆け込んでくると、三年Aクラスの生徒達はキョトンとした表情で明久達を見た。

だが、教室の中にも常夏コンビの姿は無かった。

「くそっ！ どこに居るんだ！」

雄二が毒づくくと、明久が

「固まって探してたら、時間が掛かるからバラバラに探そう！」
と提案した。

「それが良さそうだな」

「……後で連絡しよう」

二人は明久の提案に乗ると、教室から駆け出した。

三人はそれから探し続けるが、常夏コンビの姿は見当たらなかった。

「一体……どこに……」

明久が息を整えながら見回していると、携帯が震えた。

見ると、康太と雄二の二人からスカ○プで着信が有った。

「はい！」

『明久、今どこに居る?!』

明久が出ると同時に、雄二が怒鳴るように聞いてきた。

「僕は新校舎の裏、二人は？」

『俺は新校舎の二階だ』

『……こっちは新校舎の一階』

どうやら、たまたま近くに来ていらしい。

『さつき、有力な情報で常夏コンビが新校舎の屋上に行ったらしい!』

雄二の話を聞いて、明久は常夏コンビの企みに気づいた。

「しまった! 新校舎屋上の放送設備を使って、さつきの音声を流す気だ!」

明久がそう言うと、雄二が舌打ちして

『くそっ! どうせ新校舎側のドアには鍵を掛けてるはずだ!』

『……今から旧校舎に向かったのでは、間に合わない!』

二人がそう言うと、明久は少し黙考してから

「二人とも、よく聞いて……」

自身の考えを話した。

『お前、正気か!?!』

『……ギャンブル過ぎる!』

明久の考えを聞いて、二人は驚愕していた。

「だけど、この方法しか間に合わないよ……どうする?」

明久が問い掛けると、二人は数秒してから

『仕方ない、やるぞ! 康太!』

『……もうすぐ着く！』

その直後、明久の近くの窓ガラスが開いてそこから康太が出てきた。

「雄二ー！」

『今ー！』

明久が確認すると、二階の窓ガラスが開いて雄二が手を振った。

「いい？ チャンスは一度きりだよ」

「……やるしかない」

『明久、任せるぞ』

二人の言葉を聞いて、明久は頷いた。

そして、数回深呼吸するとキツと前を見て

「行くよー！」

と言って駆け出した。

そう、明久が言ったのは要するに《普通に行って間に合わないなら、ショートカットすれば良い》である。

しかも、そのルートは……

明久が駆け出すと、康太はまるでバレーボールのレシーブのような構えをした。

「康太ー！」

「……行けー！」

明久が勢い良く康太の両手に足を乗せると、康太はそのまま両手を上に振り上げた。

その勢いのまま、明久は跳躍した。

そう、明久が提案したショートカットのルートは縦である。

「雄二ー！」

「掴まれー！」

明久が雄二の手を掴むと、雄二は全身の力を振り絞って腕を上を振り上げた。

その直後

「起動！ー」
アウェイクン

雄二は大会で得た腕輪、白銀の腕輪を起動した。

明久はそれを確認すると

「試^サ獣^モ召喚^ン！」

とキーワードを唱えた。

なお、よく誤解されるが召喚フィールドというのはドーム状ではなく円柱状に展開される。

つまりは、明久が居る空中にも召喚フィールドが展開された。

そして、普段だったら足下に展開される筈の魔法陣は空中だったためか上に展開されてそこに明久の召喚獣が現れた。

もちろん、明久の召喚獣は重力に従って落下するが、それすら計算ずくである。

明久の召喚獣は刀を抜いて、そのまま振るった。

すると、刀を振るったことにより発生した遠心力により明久の召喚獣は落下軌道を変えた。

「お願いー！」

明久の召喚獣は三階の窓枠に着地すると、すぐに跳躍して明久の足裏を刀の峰で叩いた。

そう、明久の召喚獣は《観察処分者仕様》のままなのだ。

そして、観察処分者仕様は《物に触れることが可能》である。

そして、召喚獣の力というのは人間の力を遥かに凌駕している。

召喚獣に叩かれた明久は、まるで人間ロケットのように飛んだ。

そして、屋上では常夏コンビが放送設備を操作していた。

「くそっ！ あいつらのせいで、俺達の推薦が無くなっちゃった……

こうなったら、ババアとの取引の会話を流してやる……常村、そっちはどうだ？」

夏川が問い掛けると、常村はポケットからUSBメモリーを取り出して

「後はこいつを刺して、中の音声を流せば大丈夫だ」

と言った。

その時、サツと影が走った。

「なんだ？」

二人は不思議に思い見上げた。

すると、二人の頭上で明久が宙を舞っていた。

「は？」

まさか、人が宙を舞っているとは思わず、二人は呆然とした。だが、それは致命的な隙だった。

その隙を突いて、明久は腰に刺していた刀を抜いた。

「吉井流剣術、牙の型……奥義！ 幻！」

その瞬間、明久の腕が霞んだ。

そして、次の瞬間にはほぼ同時に常村の持っていたUSBメモリーとパソコン

そして、放送設備が壊れた。

「なっ!？」

「なんだと!？」

二人が驚いている間に、明久は僅かに離れた場所に着地した。

「はあ……はあ……はあ……はあ！」

明久が激しく鳴っている鼓動を抑えていると、常夏コンビは明久を睨みつけて

「てめえ……よくも、俺達の逆転のチャンスを！」

「ぶっ殺してやる！」

と息巻いた。

「知りませんよ、そんなこと……」

明久がそう言うのと、常夏コンビは近くに落ちていた鉄パイプを拾い上げて

「ふざけんなー！」

「死ねやあ！」

と飛びかかった。

明久はそれを防ごうと思ひ、刀を構えようとした。

その時

「ぐっ!？」

明久の体を激痛が襲った。

よく見れば、明久が纏っている衣装には血が滲んでいる。

どうやら無茶をしたために、傷口が開いたらしい。

明久が痛みに耐えている間に常夏コンビは迫り、振り上げた鉄パイプを明久目掛けて振り下ろした。

その瞬間、明久の前に二つの影が走った。

それと同時に、激しい金属音が鳴り響いた。

「なっ!?!」

「お前らは!?!」

驚いている常夏コンビの前に居たのは……

「間に合いましたよ、明久様」

「まったく、無茶をするね。君は」

「兼続さん……義弘さん……」

風紀委員会の委員長と副委員長の直江兼続と島津義弘だった。

二人はそれぞれ、常夏コンビが振り下ろした鉄パイプを手甲と刀で受け止めている。

そして二人が鉄パイプを弾くと、常夏コンビの周囲を他の風紀委員が囲んだ。

「常村勇作及び夏川俊平」

「お前たちを文化祭期間中の模擬店の営業妨害並びに、放送設備の無断使用。及び、傷害未遂の現行犯で捕縛する」

兼続と義弘がそう言うのと、常夏コンビは鼻で笑って

「けっ! 無駄だよ、バーカ!」

「どうせ、教頭が無かったことにする!」
と言った。

が、兼続が

「さて、それはどうかしら?」
と言った。

「どういうこと?」

不思議に思ったのか、常村が問い掛けると、義弘が肩をすくめながら

「要するに、あんたらは怒らせちゃいけない人達を怒らせたのよ。連れていけ」

と言った。

そして、場所は変わって教頭室

そこでは、教頭の竹原が紅茶を飲んでいた。

「まったく……あれだけ手助けしてやったのに、屑の処分も出来ないとはな……あいつらも用済みだな……さて、次の策はどうするか……」

竹原がそう言って考え始めた時、ドアが開いて

「はーい、どうもー」

と一人の女性が入ってきた。

その女性は腰辺りまで伸ばした茶髪に、三十代前半と思える見た目が特徴だった。

「誰だね？ 来客の予定は無かったはずだが？」

竹原がそう言うと、その女性は口元を扇子で隠しながら

「私の名前は、吉井明恵と言います。初めまして、竹原《元》教頭殿」と言った。

「……吉井？ 誰だかわからんが、間違えているぞ？ 元教頭ではなく、現教頭だよ？」

竹原がそう言うと、明恵はクスクスと笑いながら

「いえいえ、元で合ってますよ？ なにせ、《あなたが居たという証拠が何もかも無くなった》のですから」

と言った。

「……どういうことだね？」

竹原が問い掛けると、明恵は右手を上げながら

「こういうことですよ」

と言って、指を鳴らした。

その直後、明恵の背後から黒一色で統一した装備を身に着けた人物たちが雪崩れ込んできた。

その人物たちは竹原を半包围すると、手に持っていた銃口を向けた。

「なんのつもりだー！」

竹原が怒鳴ると、明恵は扇子を突き付けて

「名も無き存在よ……お前は我等、吉井を怒らせた……」

と宣言した。

その時、竹原は気づいた。

黒装備の一団の左肩に、へ零という漢字の下に、刀と拳銃が交差したマークが有ることに……

「ま、まさか……公安……零課……」

顔面蒼白になって呟くように言うと、明恵は底冷えするような笑みを浮かべて

「我等を怒らせたこと……あの世で後悔なさい……」
と宣言した。

そして、この日を境に

竹原という男が存在した証拠は、一切この世から無くなったのだった。

打ち上げ

文化祭が終了して、数十分後

明久達は近くの公園に集まっていた。

その理由は……

「お前ら、模擬店は大成功だ！ お疲れさん！」

「お疲れー！」

文化祭が大成功に終わったので、その祝賀会である。

なお、売り上げはFクラス全員の机や椅子を買っても余ったので、その一部を今回の祝賀会に使っている。

何枚も敷かれてあるビニールシートの上には、近くで買ってきた飲み物や余り物の料理やスイーツが並んでおり、クラスメイト達は各々好きに食べている。

「しかし、お前も無茶しやがって」

「……風紀委員会が間に合ったから、良かったものの」

「あははは……ごめん」

苦言を呈する雄二と康太の前では、明久が苦笑いを浮かべながら座っており、謙信が寄り添うように座っている

ちなみに、事の次第と明久がした事を知った謙信は涙を滲ませて

『明久は無茶し過ぎです！』

と言ってから、明久の治療を行った。

その後から全く離れようとしないので、相当心配したようだ。

そして、あるシートでは姫路がスヤスヤと眠っている。

理由としては、何を考えたのか料理を作ろうとしたので、颯馬が首筋に注射を突き刺したのである。

その活躍に対して、雄二達は心から賞賛を送った。

姫路のケミカルクッキングによる悲劇を、未然に防げたからだ。

明久は自分で料理や飲み物を取ろうとしたが、颯馬や謙信がそれを許さなかった。

暴露すると、明久の傷口は今回の騒動で大分開いていたのだ。

謙信としては、今すぐに病院に行って適切な処置をしてほしかっ

た。

だが、明久が

『せめて、今日の祝賀会には参加させて』

とお願ひしたのだ。

謙信は承諾する代わりに、翌日に必ず行くという約束を取り付けたのだ。

特に負担が大きかったのは、牙の型の奥義、幻だ。

これはいわゆる、多段突きなのである。

ただし、吉井流剣術では最低で二段から最大で五段突きまであり、明久が今回放ったのは三段突きだ。

それを明久は《親指と人差し指のみで塚を握り、最高速で放った》のだ。

故に、明久が今回放った幻は本来の幻よりも間合いが長く尚且つ、威力も高かった。

だから、今回ののは幻改と言うべき技だったのだ。

だから特に、技を放った左腕の負担が大きかった。

だから実を言うと、今明久の左腕はボロボロなのである。

どれくらいかと言うと、左腕を少しでも動かしたら引きつるような痛みが走るほどだ。

だから、颯馬や謙信が取るようにしているのだ。

そんな折、明久は謙信が持ってきた飲み物を口にして固まった。

「なんだろう……嫌な予感がする……」

明久はそう言うと、自身が持っている缶の裏側に書かれている銘柄を見た。

そこには、《カシスオレンジ》と書かれてあった……

「なんでさああああ！」

明久が雄叫びを上げると、雄二が近寄ってきて

「いきなりどうした？」

と声を掛けた。

「雄二……これ見て」

明久はそう言うと、自身が持っていた缶の銘柄を見せた。

「カシスオレンジ……って、酒じゃねえか!？」

雄二は驚愕すると、周囲に視線を向けた。

気づくと、チラホラと顔が赤いクラスメイト達の姿があった。

「買い出し班のバカが……適等を買ったな……」

雄二は頭を掻きながら、渋面を浮かべた。

その時、明久はふと思いついた。

謙信は、酒に弱いのである。

それを思い出した明久は、恐る恐ると視線を謙信に向けた。

「ヒック……」

時すでに遅しだった。

謙信は顔を赤くして、トローンとした表情を浮かべていた。

「アウトローー!」

明久が再び叫ぶと、今度は信繁が近寄ってきて

「あーあ……酒飲んじまったか……間に合わなかったな」

と溜め息混じりに言った。

「悪い。気づいて、忠告しに来たんだが、間に合わなかったみたいだな」

信繁はそう言いながら、頭をボリボリと掻いた。

その時、謙信が両腕を明久の首に絡ませてきた。

「け、謙信? どうしたのかな……?」

明久が恐る恐る問い掛けると、謙信は明久を見上げながら

「明久は……ヒック……無茶し過ぎなんですよ……ヒック……」

と言いだした。

「う、うん……心配掛けてごめんね……?」

明久が謝ると、謙信は唇を尖らせて

「ダメです……許しませんよ……ヒック……」

「だったら、どうしたら許してくれるかな?」

明久はそう言いながら、頬を掻いた。

「キス……」

「……へ?」

謙信の言葉に明久が呆然としてみると、謙信が腕の力を強めた。

次の瞬間、明久と謙信の唇が重なった。

明久が驚いて固まっていることを良いことに、謙信は長い時間キスしていた。

そして数十秒後、謙信は唇を離すとホニヤリと微笑んで

「これで許します……」

と言うと、パタリと倒れるように明久の膝に頭を乗せた。

顔を真っ赤にしながらも、明久は謙信の顔を見た。

謙信は安らかに眠っており、規則的に胸部が動いていた。

「酔い潰れただけか……」

と明久が安堵した瞬間。

「異端審問会！ 開廷！^{セツアツ}」

「ヤーハー！」

「ぶっ殺！」

「■■■■■■■■■■！」

明久の背後に、黒尽くめの集団

異端審問会こと、FFF団^{バカ共}が現れた。

「横溝、あ奴の罪状を読み上げい！」

「はっ！ 被告、吉井明久（以下からは甲とする）は美少女と……」

須川らしき人物に言われて、横溝が紙を読み上げていると、須川がムチを鳴らして

「長い！ もっと簡潔に言え!!」

「要するに……美少女とイチャコラしやがって、死にさらせ！」

と声を上げた。

「実に分かりやすい！ 被告、吉井明久……判決、死刑！」

須川がそう言いながら腕を振り下ろすと、周囲に展開していたFFF団^{バカ共}が明久目掛けて飛びかかった。

次の瞬間

「旋車！」

「ヘリカル・トワイス！」

「デイメンション・スタンピード！」

「……シヤドウ・ステッチ！」

「ラウンド・アクセル！」

「ワール・ウインド！」

その手に武器を持った信繁達により、瞬く間に殲滅された。

「ギヤアアアアアア！」

「攻略組だど!？」

「バカな!？」

「しまった!・黄昏の風が居た!」

「おまつ!？ それ別作品!（作者は同じ）」

信繁達の攻撃から生き残ったFFF団は、顔を青ざめながら距離を取った。

「お前ら……俺達が居て、攻撃が通ると思うなよ?」

「さあ……あなた達の罪を数えなさい」

「……葬る!」

信繁達はそう言うと、FFF団バカ共に飛びかかった。

「えっと……ほどほどにねえ……」

明久がそう言った直後、再びFFF団バカ共の叫び声が響き渡った。

こうして、陰謀塗れの文化祭は幕を閉じたのだった。

おまけその2 二人の出会い

よ、俺の名前は坂本雄二だ、好きに呼んでくれ。さかもとゆうじ

今回は俺と明久の出会いを語るらしい。

つか、最初に俺かよ。

『いい機会だと思ったんよby作者』↑カンペ

さいか。

まあ、いいか。

俺と明久が出会ったのは、今から二年前だった……

雄二 side END

第三者 side

季節は春先

彼、坂本雄二を含めて全ての学生の学年が一つ上がった直後である。

ちなみに、雄二は中学三年生である。

だが、この時までの雄二は荒れに荒れており通称で《悪鬼羅刹》とまで呼ばれるようになっていた。

その理由は彼の幼なじみの少女、霧島翔子に有った。

だが今は、詳細を割愛させていただく。

この頃の雄二は全てにイライラしており、売られたケンカは全て買っては憂さ晴らしに相手をボコボコにしていた。

故に、雄二は敵が多かった。

この事件も、それが原因となった。

雄二が街中を一人で歩いていると、前に数人の男子が立ちほだかつた。

全員は共通して、どこかしらに怪我を負っていて、雄二はその全員に見覚えがあった。

「なんだ……てめえらか……またケンカを売りに来たのか？」

雄二はそう言いながら、その男子達を睨んだ。

その男子達は今から数日前に雄二にケンカを売り、ズタボロに負けた男子達だった。

「よう、悪鬼羅刹！」

「この傷の礼、返しに来たぜ！」

雄二の言葉に対して、男子達はそう返した。

「それはいいけどよ……てめえら、弱いんだよ」

雄二がそう言うと、一人の男子が舌打ちしてから

「はっ！ これを見ても、そんなことが言えんのかよ！」

と言って、ポケットから取り出した携帯を投げた。

雄二は前に落ちた携帯を見て、目を見開いた。

「てめえ！ これは翔子の！」

そう、その携帯は翔子の携帯だった。

その証拠に、雄二が携帯に付けているのと同じストラップが付けれれていた。

「おうともよ！」

「お前が来ないと、その子がどうなるかなあ？」

男子達の言葉を聞いて、雄二は歯噛みしてから

「何処だ……」

と問い掛けた。

すると、男子達は嘲笑いながら

「こつちだ」

「付いて来な」

と言って歩き出し、雄二も無言で歩き出した。

この時雄二は気付いていなかったが、それを眼帯を付けた少年が見ていた。

その少年は落ちていた携帯を拾うと、雄二達の後を追いつつ始めた。

そして数十分後、雄二達が到着したのは潰れたスーパーだった。

「こつちだ」

男子はそう言うと、ドアを開けて中に入った。

どうやら不良の溜まり場になっているらしく、廊下の隅には空き缶や古雑誌などが乱雑に転がっている。

そして廊下を進んでいると、男子が一つの大きなドアを開けて「中に入れや」

と指示した。

雄二は促されたままに、中に入った。

どうやら元々は倉庫らしく、かなり広い空間だった。

雄二が周囲を見回していると、突如光が点いた。

雄二は思わず、右手を顔の前に持っていき光を遮った。

そして、光に目が慣れたので奥に視線を向けた。

「翔子！」

「……雄二！」

奥では、翔子が椅子に縛られていた。

どうやら無事らしく、見たところケガは確認出来なかった。

「来てやったんだ、そいつは解放してやれ！」

雄二がそう言うと、翔子の近くの男子が笑って

「はっ！　そう簡単に解放する訳無いだろ！」

と言った直後、雄二の背後から一人の男子が金属バットで雄二の頭を強打した。

「……雄二！」

「ガッ!？」

さすがに効いたらしく、雄二は片膝を突いた。

すると、男子達は笑い声を上げて

「今まで、よくもやってくれたよな!？」

「倍返しにしてやるぜ！」

と言うと、雄二に対して集中攻撃を始めた。

雄二が無抵抗なのをいいことに、男子達は雄二に殴る蹴るの暴行を行った。

この時、雄二はこの状況を利用しようとも考えた。

この状況が度々起これば、翔子が自分から離れるだろう。

(翔子……お前には、俺よりも相応しい奴が居る筈だ……)

雄二は痛みに耐えながらそう思い、翔子に視線を向けた。

だが、翔子は涙を流しながら自分の名前を叫ぶように呼んでいる。

その光景を見ると、嬉しくもあり少し、胸が痛かった。

その時、雄二に暴行を加えていた男子の一人が

「ちっ……相変わらずタフな奴だな……だが、これは耐えられないだろ!？」

と言いながら、その手に工事現場などにある大きなハンマーを持っていた。

「これで、逝けやあああー！」

男子はそう言いながら、ハンマーを振り上げた。

「っ！」

さすがに雄二が瞠目するが、ハンマーは振り下ろされなかった。

「？」

雄二が疑問に思っていると、ハンマーを持っていた男子は崩れ落ちた。

「な、なんだ!？」

と、翔子の隣に居た男子が喚き声を上げた。

次の瞬間

「やっぱり、鈍ってるなあ……」

という、少年の声が聞こえた。

その直後、喚き声を上げた男子は倒れた。

そして、その男子の背後の位置に立っていたのは眼帯を付けた少年

吉井明久だった。

「……誰?」

翔子が呆然と問い掛けるが、明久は答えずに

「動かないでね」

と言って、翔子を縛っていた縄を解いた。

すると、雄二に暴行を加えていた男子達の内の一人が明久を睨んで「てめえ……なにやってやる!」

と駆け出して、明久目掛けて鉄パイプを振り上げた。

だが明久は、それをユルリと回避して手刀を首筋に叩き込んだ。

その直後、その男子は倒れた。

すると、他の男子達も明久を睨んで

「てめえええ！」

「ぶつ殺す！」

「死ねえええ！」

と雄叫びを上げながら、明久目掛けて突撃した。

だが明久は慌てず、足下の鉄パイプを拾い上げて軽く肩に当てた。そして十数秒後、男子達は軒並み地面に倒れ付していた。

明久は男子達を全員、一撃で気絶させたのである。すると、翔子が

「……雄二！」

と雄二に駆け寄った。

「雄二……？ ああ……彼が悪鬼羅刹か……」

明久は翔子が呼んだ名前から、雄二の二つ名を思い出した。

そして、翔子が助け起こしている雄二に近づいて

「手酷くやられたね、坂本雄二君」

と声を掛けた。

「お前は……？」

雄二が問い掛けると、明久は

「僕の名前は……吉井明久」

と答えた。

これが、二人の初めての出会いだった。

二人の出会い その2

数十分後、雄二は病院で治療を受けていた。

なお、雄二に暴行を加えていた男子達は明久が吉井本家に連絡して捕縛された。

そして、明久達が居るのは吉井本家の息が掛かった病院だ。

「すまねえな。この礼は必ず」

「いいよ。気にしないで……この病院は吉井本家の息が掛かった病院だから」

雄二が頭を下げながら言うと、明久はそう言いながら手を振った。

その時、翔子がハツとした様子で

「……思い出した……蒼の剣聖、吉井明久！」

と明久の二つ名を呼んだ。

「ん？ 僕を知って……待てよ……そういえば、見覚えがあるな……」

明久が翔子を見ながら首を傾げていると、雄二が

「翔子、知ってるのか？」

と翔子に問い掛けた。

翔子の名前を聞いて、明久はポンと手を叩いて

「思い出した。君、霧島財閥の一人娘の霧島翔子さんか！」

と言った。

「知ってるのか？」

雄二が再び問い掛けると、翔子は頷いてからお嬢様らしくスカート
の端を持ち上げながら恭しく頭を下げて

「……お久しぶりにございます。私の誕生日パーティー以来になります
から、三年振りでしょうか？」

と告げた。

すると明久も、右手を胸部に持っていていき

「そうですね。三年振りになりますか……見目麗しくなりましたね」
と言った。

その光景はまさしく、身分の高い者同士の所作だった。

それを見て、雄二は

「吉井……頼みがある」

と明久に声を掛けた。

「なにかな？」

明久が首を傾げていると、雄二は姿勢を正して

「翔子を……お前の家に娶ってやってくれないか？」

と言った。

「……雄二ー」

翔子は声を上げて雄二に詰め寄ろうとしたが、それを明久は制して

「どういうことかな？」

と問い掛けた。

すると雄二は、真剣な表情を浮かべて

「お前も見ただろ？ さつきみたいな事件が、今後も起こらないとは限らない……だが、翔子は霧島財閥のお嬢様だ……俺に関わったら、こんな事件に巻き込まれるのは必至だ……だったら」

雄二はそこまで言うのと、明久に視線を向けた。

「だったら、俺よりもお前の近くに居たほうが安全だし、俺よりも相應しいと思う……だから……」

雄二はそう言いながら、悔しいのか拳を握り締めた。

「坂本くん……歯、食いしばって」

「あ？」

明久の言葉の意図が分からず、雄二は明久に視線を向けた。

その直後、雄二の頬に明久の拳が叩き込まれた。

「がっ!？」

雄二は呻き声と共に倒れて、翔子は突然の事態に固まった。

殴られた雄二は文句を言おうと、顔を明久の方へと向けた。

その直後、雄二の胸倉を明久が掴んだ。

「目の前の現実から逃げるな！」

「なっ……」

明久が大声を上げると、雄二は瞠目した。

「君のそれはただ、安易な楽な方への逃げだよ！ どうしてキチンと向き合ってあげないの！ どうして、キチンと受け入れてあげないの

！」

明久がそう言うと、雄二は歯を食いしばってから明久を睨んで

「お前に何がわかるんだよ！」

と明久を突き飛ばした。

「何も知らねえくせに！ 知りもしないくせに！ 口を挟むんじゃないやねえ！」

「知らないさ！ けど、君の行動は自分だけでなく、霧島さんも傷つけるってなんで気づかないの!?!」

明久がそう返すと、雄二は一瞬口を噤むが

「仕方ないだろ!?! こうでもしないと、翔子の将来がダメになるんだよ！ 俺が近くに居るだけで、翔子の将来が台無しになるんだ！ そんなの……耐えられないんだよ！」

雄二がそう叫ぶと、明久が

「坂本くんが言ったのは、小学四年生の時に起きた……暴力事件だよね？」

と言った。

その瞬間、雄二は驚愕で目を見開いた。

「実を言うとね……霧島財閥からの縁談が過去に二回あったんだ……まあ、翌日にはキャンセルされたんだけどね」

明久はそう言うと、頬を掻きながら

「ただ、二回目の縁談が持ち込まれた時に霧島さんが行く予定だった私立の学園が、普通の中学校に変わってたから、母さんが調べちゃったんだ……それは、母さんの代わりに謝ります。ごめんなさい」

明久が謝ると、翔子が

「……別に、隠してるわけじゃないから大丈夫」
と言った。

「そう言ってもらえると、助かるかな」

と明久は言うのと、雄二を見つめて

「そして、その暴力事件の原因が悪鬼羅刹……ううん。IQ120の神童の坂本雄二くんだった」

明久のその説明を聞いて、雄二と翔子は驚愕で目を見開いた。

「母さんが注目してたんだよね。将来吉井家で使いたいわって……ね、近年稀に見る天才児？」

「知ってたのか……」

明久の言葉に、雄二は自虐的に笑った。

彼、坂本雄二は悪鬼羅刹と呼ばれる前は神童と呼ばれる程に天才的な頭脳を有していた。

しかし、それが理由で周囲の同年代からは疎ましく思われていて、雄二はそれを気にせずに唯我独尊を貫いていて、そんな雄二に追随出来たのは翔子のみだった。

そして、二人が小学四年生の時にその事件は起きた。

雄二と翔子の二人は四年生にして、かなり有名な私立の中学校への推薦入学が決定していた。

しかしながら、それを良く思わない者達が居た。

元々疎ましく思われていたのと推薦を得たのを聞いて、同じ小学校の高学年の数人が雄二に嫌がらせを行った。

だが雄二はその嫌がらせを無視し、普段通りに過ごした。

そんなある日、翔子が雄二のカバンを壊そうとしていた高学年を目撃

口頭で注意した。

翔子の注意を受けてその高学年は逆上し、翔子に手を上げたのだ。

そして、その場面を雄二は目撃し、激情に任せて高学年に拳を振るった。

ここまでだったらその高学年に非があり、罰もその高学年のみだっただろう。

だが、雄二は小学生にしては人間の身体の構造を把握していて、的確に人体の急所を殴り、その高学年に大怪我を負わせたのだ。

その結果、警察沙汰へと発展

学校側は処罰として、雄二と翔子に与えられていた推薦を取り消したのだ。

雄二としては、別にその私立の中学校には興味がなかったから構わなかった。

だが、翔子の推薦を取り消されたのを雄二は自分の責任と把握して、それを重く受け止めた。

そんなこともあり、雄二は翔子が自分から離れると思っていた。翔子自身が拒否しても、家から雄二に対して翔子に会わないでくれ。と言われることも覚悟した。

だが、自身の予想に反して翔子は自分の近くに居続けて、霧島家からも何もなかった。

それが雄二の罪悪感を助長させて、雄二を喧嘩へと走らせた。

これには一部打算もあり、喧嘩に明け暮れて警察に何回も補導されたりしたら、今度こそ翔子は自分から離れるだろうと。

だが、何回警察に補導されたり教師に注意されようが、翔子は離れず、霧島家からも何もなかった。

それが尚更、雄二の罪悪感とストレスを大きくした。

そして、ストレス解消と翔子が離れることを願って喧嘩を繰り返していた。

今回の事件はそれを繰り返した結果、恨まれた結果起きたのだ。

「俺なんかと一緒に居たら、翔子の将来を台無しにしちまう……だから俺は、翔子が離れると思つて喧嘩に明け暮れたんだ……なのに……なのに……」

雄二が涙を零しながら両手両膝を突いていると、翔子がそんな雄二の頭を優しく抱き締めた。

「翔子……？」

「……辛い思いをさせて、ごめん……だけど、私にとっては私立の中学校の推薦なんて、些細なこと……私にとって大事だったのは、雄二と一緒に居ることだったの」

「だが、俺と一緒に居たら……」

翔子の言葉に雄二がそこまで言うのと、明久が片膝を突いて

「坂本くん……少し、僕の話聞いてくれるかな？」

と声を掛けた。

雄二が顔を向けると、明久は口を開いた。

「さつき、霧島家から二回縁談が持ち込まれたって言ったよね？」

明久がそう言うのと、二人は頷いた。

「その二回共に、縁談を持ち込んだのは霧島太一さん……霧島さんのお爺さんなんだ」

「……お爺様が？」

明久の説明を聞いて、翔子は驚いていた。

「そう……だけど、その二回共翌日に拒否の連絡があつたんだ……拒否の連絡をしてきたのは……霧島翔太さん……霧島さんのお父さんなんだ」

続いての明久の説明を聞いて、二人とも驚いていた。

「拒否してきた時、何て言つてたと思う？ 『娘の相手は娘に選ばせてあげたいのです……それに、彼ならば、娘を幸せにしてくれるだろう』つて……正直言うとな、最初の縁談が持ち込まれた時、僕には既に婚約者が居たんだ……だけど、霧島家の御隠居からの縁談だったから、断りにくかつたんだ……そしたら、翔太さんから拒否の連絡が来たんだ……」

明久の説明を聞いて、翔子は嬉しそうに両手を組んだ。

すると、雄二が不思議そうに

「なんで、翔太さんはそんなことを……」
と呟いた。

「ねえ、坂本くん……霧島さんの記憶力、凄く良いと思わない？」

「は？ まあ、かなり良いと思うが……それがどうした？」

明久の問い掛けを聞いて、雄二は不思議そうに首を傾げた。

すると明久は、一回翔子に視線を向けてから

「霧島さんはね……一度見聞きしたことは、絶対に忘れないんだ」
と言った。

「な、なに……？」

明久の説明を聞いて、雄二は驚愕した。

人の記憶力というのは案外大したことはなく、周囲の景色などは、そのほとんどを流している。

だが、人間の脳のキャパシティは約百四十年近く有ると言われているので、死ぬまでは覚えていられる計算である。

とはいえ、完全に覚えていられるというのは、普通は不可能である。だが、物事には全てにおいて例外が存在する。

「霧島さんは直感像資質……つまりは、完全記憶能力を有してるんだ……そして、それが理由で実の家族からも気味悪がられてたんだ……翔太さん以外にはね……」

明久の説明を雄二は、呆然と聞いていた。

「母親からも気味悪がられて、霧島さんは実質的に一人ぼっちだったんだ……坂本くん、君に会うまではね」

明久がそこまで言うのと、雄二は視線を翔子に向けた。

「翔子……本当なのか？」

雄二が問い掛けると、翔子は頷き

「……吉井が言ってるのは本当」

と肯定した。

「……小さい頃から、私は見聞きしたことは全部覚えてた……そんな私をお母様は気味悪がって、構ってくれなくて……お父様は仕事が忙しくって、中々家に帰ってこれなかった。だから、家のことはハウスキーパーに実質任せきりだった……だけど、ハウスキーパーの人も私を気味悪がって、あまり話し掛けてこなかったの」

翔子はまるで、泣きそうな表情を浮かべながら語り出した。

「……そんな時、私は雄二に会ったの……雄二は私に何時も話し掛けてくれて、遊んでくれた……そして気づいたら、私は雄二が好きになつてたの……」

「そう、だったのか……」

翔子の説明を聞いて、雄二は驚きながら呟いた。

「多分、そのことに翔太さんは気づいたんだろうね……だから、坂本くんなら霧島さんを任せられるって思ったんじゃないかな？ 家族の優しさをほとんど知らない霧島さんをさ……」

明久がそういうと、雄二は肩を震わせた。

すると、明久は雄二の肩に手を置いて

「坂本くんもさ、孤独だったんでしょ？ 大人からは天才児扱いされても、周囲の同年代にとっては邪魔者以外なんでもないからね……霧

島さんと一緒に居れて、遊べて、嬉しかったんでしょ？ だったらさ、素直になろうよ……今なら、まだ間に合うからさ……」

明久がそこまで言うのと、しばらくの間、部屋は静かになった。どれほど経っただろうか。

ある時、それまで俯いていた雄二が顔を上げてから翔子を見つめて「翔子……最後に確認するぞ……本当に、俺でいいんだな？ 後悔しないな？」

と問い掛けた。

すると、翔子は雄二に抱きついて

「……雄二じゃなきゃ嫌だし、後悔もしない」と言った。

翔子の言葉を聞いて、雄二はゆっくりと翔子を抱き締めたのだった。

二人の出会い その3

翔子と雄二は気を持ち直すと、少し距離を取った。存外に恥ずかしかつたのかもしれない。

そして数瞬すると、翔子が明久に視線を向けて

「……吉井。一つ、質問していい？」
と問い掛けた。

「なになかな？」

明久が首を傾げると、翔子は自身の左目を指差しながら

「……その眼帯はどうしたの？」
と問い掛けた。

翔子の問い掛けを聞いて、明久の体がビクツと震えた。

「……私の記憶では、三年前には眼帯は着けてなかった。それに、吉井は帯刀許可証を渡されていた筈……刀はどうしたの？」

「帯刀許可証だ?!」

翔子の言葉を聞いて、雄二は驚愕した。

帯刀許可証

それは文字通り、平時に於いても刀を持つことを許可された者に渡される許可証である。

日本は昔から剣術が栄えており、その保護を目的に発行されているが、所持しているのは十人にも満たないと言われている。

「……私が知っている限り、吉井は小学校六年生で免許皆伝を有し、蒼の劍聖という称号を得たと同時に政府から許可証を渡された……」

翔子の言葉を聞いて、雄二は驚愕した。

小学校六年生で免許皆伝し、更には帯刀許可証を渡された。

それはもはや、麒麟児と言っても差し支えないだろう。

「……私の誕生会の時、吉井は自分の刀を持ってきていたし眼帯は着けていなかった……」

翔子はそう言うと、明久の腰を指差して

「……でも、今の吉井は刀は無いし、眼帯を着けてる……何があったの？」

と問い掛けた。

翔子の問い掛けを聞いて、明久は俯いた。

その態度だけで、二人は何かあったらしいとは察した。

もしかしたら、聞くべきではないかもしれない。

だが、翔子は気になってしまった。

しかも、明久が住んでいたのはここから一時間以上離れている街だった筈

それなのに、明久はこの街に居る。

それも気になった理由だ。

どれほど経っただろうか。

それまで俯いていた明久は顔を上げると、辛そうな表情で

「一年前……僕は、人を殺したんだ……」

と呟くように告げた。

「……え？」

「な、なに……？」

予想外の言葉を聞いて、二人は思わず目を点にした。

「この目はその時に相手に斬られて、失明したんだ……あの子を守るために、僕は刀を握った……そして、相手を斬り殺してしまったんだ……」

明久はまるで、独白するように語り出した。

「刀を握ったこと自体に、僕は後悔は無いさ……だけど、今の僕は刀を握れないんだ……あの時を思い出してしまって、体が震えるんだ……」

「……PTSD」

「トラウマか……」

翔子と雄二の二人は、自分の体を抱いた明久を見て当たりを付けた。

今の明久は、人を殺したという罪の意識に縛られているのだと。

「今の僕じゃあ、刀を握れない僕じゃ、あの子の……謙信の傍に居れない……守るって誓ったのに、刀を握れないんじゃない意味ないし、居る価値が無い……だから、僕は……っ！」

涙ながらの明久の言葉を聞いて、二人は察した。

今の明久は非常に危ういと。

今の明久は綱渡りの状態で、一人で居る。

今の不安定な明久を支えるべき人物が居ないのだ。

もし、今の明久を一人のままにしたら、何が起きるか分からない。

矛盾した思いを抱き、それでも尚、明久は誰かのために戦うことを辞めなかった。今回の騒動で、見ず知らずの雄二を助けたのがその証拠である。

「帯刀許可証は、今の僕には不要だから、一時的に返却してあるよ……でも、正当防衛になったとは言っても、人を斬り殺した僕に、再び帯刀許可証を発行されることは無いかな……」

明久は泣きそうな表情でそう言うので、一旦目を閉じて

「こんな話をしてごめんね……もし、僕と縁を切りたいなら、それでも構わないよ……僕みたいな人殺し、会いたくないだろうしね……」

明久はそう言うので立ち上がって、部屋から出ようとした。

その時、そんな明久の腕を雄二が掴んだ。

「坂本くん？」

「なあ……俺達と友達にならないか？」

明久が視線を向けると、雄二はそう言った。

予想外の言葉だったらしく、明久は目を見開いて固まった。

「……吉井が優しいことは、十分に分かる」

「そんなお前だからこそ、俺達は友達になりたいんだ」

二人がそう言うので、明久は首を傾げて

「僕みたいな、人殺しでいいの？」

と問い掛けた。

すると、二人は頷いて

「……吉井だから良い」

「お前だから良いんだ」

と同時に言った。

二人の言葉を聞いて、明久は目を閉じると

「まさか、今の僕に友達が出来るなんて思わなかったなあ……」

と呟くと、二人を見つめて

「それじゃあ、僕の名前は吉井明久……好きに呼んで」と言った。

それは、事実上の認可だった。

明久の言葉を聞いて、二人は笑みを浮かべて

「……私の名前は霧島翔子。好きに呼んで……吉井」

「俺は坂本雄二だ。好きに呼びな、明久」

と改めて名乗ってから、明久の名前を呼んだ。

「うん、よろしくね。霧島さん、雄二」

明久は頷くと、それぞれ二人の名前を呼んだ。

これが、この三人の出会いの物語だった。

この出会いを期に、三人は遊んだり、一緒に勉強したりするようになつていったのである。

三人称 side END

雄二 side

とまあ、これが俺達の出会いだったんだ。

長々と付き合ってくれて、ありがとうな。

つか、改めて話すとヤツパリ恥ずかしいな……。

ま、俺達の出会いはここまでにすつか。

次からは、また本編らしいからな。

楽しみにしてくれや。

じゃあな、これからもこの作品をよろしく頼むぜ。

オリエンテering編 オリエンテering 始まり

「ん？ なんだろ、あの人混みは？」

登校した明久達は、下駄箱の近くに数十人の人混みがあることに気づいた。

上履きに履き替えて、明久達はその人混みに近寄った。

「なんか掲示板に張り出されてるみたいだけど……見えないなあ」

明久は背伸びするが、前に居るのは明久よりも背が高い男子なので、掲示板は見えなかったが

「オリエンテeringだよ」

と、横から雄二が説明した。

「オリエンテering？」

明久が首を傾げて問いかけると、雄二は頷き

「なんでも、今日の五時間目と六時間目を使って、学校全体を使ってやるんだとよ」

と説明した。

「へー……学校全体かあ……」

と明久が頷いていると、康太が現れて

「……俺の調査では、かなり豪華な景品がある」

と語った。

「豪華な景品ですか？」

謙信が問いかけると、康太は一枚の紙を取り出して

「……これが、現時点で分かっている景品内容だ」

と手渡してきた。

明久は紙を受け取ると、紙を一読した。

景品内容としては、安い物は如月ランドパークのストラップがあり、そこから、学食の1ヶ月食べ放題券や辞書セットなどがあった。

「あ、如月ランドパークのプレオープンチケットがありますね」

と謙信が指差した場所には確かに、如月ランドパークのプレオー

プリンチケットと書かれてあった。

だが、明久としては隣に書いてあったシークレットアイテムのほうがいいになった。

「このシークレットアイテムっていうのは？」

明久が問いかけるが、康太は首を振って

「……俺の情報網を持って、詳細はわからなかった」と言った。

「そっか……まあ、貰えばわかるよね」

明久はそう言うのと紙を康太に返して、教室へと向かった。

その後、午前中の授業も無事に終わり、昼食も食べた。

そして、昼休み終了数分前。

高橋女史が教室に入ってきた。

「皆さん。これより、オリエンテーリングの班を発表します」

高橋女史はそう言うのと、教卓のパソコンを操作した。

数秒後、ディスプレイにオリエンテーリングの班構成が発表された。

その中に

吉井明久・上杉謙信・天城颯馬の名前が一つの班として表示されていた。

「あ、同じ班だね」

「良かったです」

「明久様や謙信様と争わずに済みました」

と明久達が安堵していると、高橋女史はプリントの束を用意して「今から、景品の場所のヒントを得るプリントを回します」

と言って、廊下側から配り始めた。

配られたプリントには、様々な分野の問題が書かれており、その問題を解くことで、景品のある場所が分かる仕組みらしい。

そして、プリントが配り終わったタイミングで、チャイムが鳴った。

「それでは、開始です」

高橋女史は宣言すると、教室を去った。

ディスプレイには、景品を得ても召喚獣戦闘で負けたら、相手に奪

われる。

と書いてあった。

明久達はそれを見ると、プリントに視線を向けて

「さてと、解きますか」

と問題に取り掛かった。

そして、一問目を解き終わると

「あれ？…この位置って、僕の席の位置だ」

と明久が言った。

なお、景品の位置はそれぞれ、X軸、Y軸、Z軸が交差する形で示されている。

そして一問目を解いた結果、示された位置はまさしく、明久の席の位置だった。

「間違いないのですか？」

「うん……何回解いても、僕の席だね」

颯馬の問い掛けに答えると、明久は自分の席を確認した。

そして、滅多に開かない冷蔵庫の中に、それを見つけた。

見つけたのは、ガチャポンのような物だった。

開けてみると中に入っていたのは、食堂の1ヶ月食べ放題券だった。

「あんまり使う機会はなさそうだけど、貰つとこう」

明久はそう言うと、食べ放題券をポケットにしまった。

そして気づけば、教室に居るのは僅か数人のみだった。

どうやら、解いた場所に向かったらしい。

その時

「あ、あったよー！」

と外から愛子の声が聞こえた。

窓から見てみると、校庭の中心辺りに、愛子、優子、翔子の三人が居た。

そして、愛子の手には先ほど明久が見つけたのと同じ物があった。

それを三人が確認しようとした時

「待った！」

「その景品、渡してもらおうぜ！」

「解けないから、見張つてて正解だったぜ！」

と三人の男子が現れた。

その三人に明久は見覚えがあり、Fクラスの男子と分かった。

「どうやら、問題を解くのを諦めて、景品を見つけた生徒から奪うつもりらしい。」

「あら、あなた達で勝てるでも？」

「はっ！ 数で挑めばどうか?!」

優子の挑発的な言葉に、一人が答えた瞬間に、他に10人近く現れた。

「どうやら、全員が同じ考えらしい。」

「三人に対して、大勢なんて……情けないと思わないの?」

「うるせえ！ 勝てばいいんだよ！ 試獣召喚！」

優子の言葉に反論すると、男子達は一斉にキーワードを唱えて召喚獣を召喚した。

なお、このオリエンテーリング中は学校全体に先生が散っており、校庭には化学の教師が立っていた。

化学

Aクラス代表 霧島翔子 418点

木下優子 368点

工藤愛子 315点

VS

Fクラス男子×12 平均70点

点数が表示されると同時に、Fクラス男子達は一斉に飛びかかった。

だが、一瞬にして全滅した。

その光景はまるで、どこその無双系ゲームだった。

そして、Fクラス男子達が負けた直後

「戦死者は補習ー！」

西村が土煙を上げながら、駆けてきた。

「アイエエエエ!? ナンデ!? 鉄人、ナンデ!?」

「これはオリエンテーリングであって、試召戦争じゃないのに！」

西村が現れたことにFクラス男子達が驚いている間に、西村は到着して

「それは貴様らの誤解だ！ オリエンテーリングで負けても、補習は実行される！ ただし通常と違って、出されたテストで学年平均を出したら、即解放はしてやる」

西村の説明を聞いて、男子達は安堵した。
だが

「ただし！」

世の中、そんなには甘くない。

「貴様らは卑怯な手を使って負けたから、満点を取らない限り解放はしないからな！」

「ふざけんな！」

「こんな日に、そんなことしたくない！」

「逃げる！」

西村の言葉を聞いて、Fクラス男子達は逃げ出した。

「そうか……ならば行くぞ！ 王の○勢！」

西村が宣言した直後、周囲の光景が変わった。

校庭に居た筈なのに、荒野に変わっていた。

「な……！」

「こ、固有結界だと!？」

「バカな!？」

西村が行ったことに驚愕していると、土を踏む音が聞こえてきた。

男子達が視線を向けた先には小さな丘があり、そこから現れたのは、数十人にも及ぶ筋骨隆々の男達だった。

「この人達は俺が世界中を回って競い、強敵と認め合った勇者達だ……」

西村の趣味の一つ、レスリング。

彼は長期休暇を取っては世界中を周り、世界中の勇者達と戦ってはその技術を競い合っていた。

そして、そんな中にはお互いを強敵と認め合った者達と硬い絆を結

んでおり、今も交流している。

「この荒野は俺達が競い合っていた場所の中で、一番印象に残っている場所だ……」

西村は誇らしげに語ると、固まっていたFクラス男子達に視線を向けて

「貴様らに逃げられるかな？」

と語りかけた。

その直後、男達はFクラス男子達へと猛然と駆け出して、西村も駆け出した。

「い、嫌だあああああ！」

「助けてくれえええええ！」

Fクラス男子達は逃げ惑うが次々と捕まっては、レスリング技を掛けられて倒れていった。

そして、最後の一人も西村のレスリング技によって倒れた。

西村はそれを確認すると、高々と拳を掲げた。

それに続いて、男達も拳を掲げて歓声を上げた。

その後、西村は一人一人と握手を交わすと、固有結界を閉じた。

そして閉じた後、西村はFクラス男子達を纏めて抱え上げると、校舎の中へと入っていった。

それを見ていた明久は、思わず

「相変わらず、西村先生は人間離れしてるなあ……」
と呟いた。

伝説の傭兵？

場所は変わって、Fグラスの雄二達。

なお、雄二達のグループは以下である。

坂本雄二、土屋康太、木下秀吉

武田信繁、武田信玄、真田幸村

以下略

である。

「さてと……問題を解くか」

雄二はそう言うと、問題用紙を眺めて

「秀吉、秀吉は古典を重点的に解け。ムツツリーニは保健体育を重点的に解け」

と指示を出した。

「了解じゃ」

「……心得た」

雄二の指示に従い、二人はそれぞれ解き始めた。

そして、数秒後

「ふむ……それじゃあ、近い場所から回るか」

雄二は解いた問題用紙を見ながら、そう言った。

「うむ……それで、一番近いのは……」

「……あっち」

康太が指差したのは

「おい、空中だぞ」

明らかに空中だった。

「む？ 答えは合ってるはずじゃが……」

その問題を解いた秀吉は、問題用紙を見つめながら唸った。
すると、窓の外

つまり、校庭から

「お、あつたぞー！」

という、信繁の声が聞こえた。

雄二達が窓から見下ろすと、花壇の端を信繁達が掘り返していた。

「中は何でしょうかね？」

信繁達が掘り出したのは、どうやら少し大きめの箱らしい。

「開けてみましょうか」

信玄はそう言うのと、箱の蓋を開けた。

「ぬいぐるみだな」

「これは確か、如月グランドパークのマスコットですね」

信繁が首を傾げていると、ぬいぐるみを持ち上げた幸村がそう言った。

「とりあえず、仕舞っておくか」

「はい」

信繁の言葉に従い、幸村はぬいぐるみを箱に仕舞った。

その時だった。

「そのアイテム！」

「渡してもらおうぜ！」

Fクラス男子達が現れた。

人数にして、約20人程である。

「お前ら、暇人だな……ずっと見張ってたのかよ」

信繁が呆れた様子で言うのと、男子の一人が指差して

「やかましい！ 問題がわからないなら、分かる奴を見張っていればいいんだよ！」

「そして、アイテムを得たタイミングで奪えば、簡単に手に入る！」

「それが、俺達の作戦だ！」

と言った。

「やれやれ……本当に暇人ですね」

信玄がそう言うのと、男子の一人が

「それに、お前らがアイテムを三つ得たのは分かっているんだ！」
「根こそぎ奪ってやる！」

と言って、一斉にキーワードを唱えた。

日本史

Fクラス男子 平均60点

V S

武田信繁 489点

武田信玄 475点

真田幸村 458点

もはや、地力が違い過ぎた。

戦闘は一瞬で片が尽き、Fクラス男子達は全滅した。

その直後、なぜか学校の上空を一機のヘリが通過して

「戦死者は補習ー！」

西村が迷彩服を着て、更に眼帯と鉢巻きを装着して降下してきた。

その姿はさながら、伝説の傭兵のようであった。

「へ、蛇だと!？」

「バカな!？」

「奴は死んだはずだ!！」

西村の姿を見て、Fクラス男子達は次々と声を上げた。

だが、着地した西村はそんなFクラス男子達を見回すと

「貴様らのような問題児が居る限り、俺は何度でも蘇る!！」

と宣言した。

「くそっ! 逃げろ!！」

「総員、撤退!！」

西村の宣言を聞いて、Fクラス男子達は逃げ出した。

だが、西村は慌てず

「バカめ……逃がすものか!！」

と言うと、無線機を掴んで

「総員、降下!！」

と言った。

その直後、数機のヘリが飛来。

そのヘリから次々と、西村と同じ迷彩服を着た男達が降下してき

た。

降下してきた男達は見事な統率で、Fクラス男子達を包囲した。

「こいつらは、まさか!！」

「ピー○メイカーか!？」

男子達は現れた男達を見て、驚愕の表情を浮かべた。

「こいつらは俺の自慢の仲間達だ……」

西村はそう言うのと、Fクラス男子達に近寄り

「どうする？ 今なら、まだ痛い目に合わなくてすむが？」
と問い掛けた。

それは、実質的な投降勧告だった。

Fクラス男子達はなんとか逃げようと、周囲を見た。
だが、包囲していた男達には微塵の隙も無かった。

それによろやく観念したのか、地面に座り込み

「降参する……」

と両手を上げた。

西村は頷くと、包囲していた男達に対して

「連行しろー」

と号令を下した。

男達は西村の指示に従い、Fクラス男子達を全員捉えて連行して
いった。

それを見ていた雄二は、思わず

「……鉄人、就く職を間違えてないか？」

と呟いた。

その時

「む。……この翻訳を間違えておったか」

と秀吉が言った。

それを聞いて、雄二は

「マイペース過ぎるだろ、秀吉……」

と呆れていた。

救助活動

始まってから、約一時間

明久達は校舎全体を回り、景品を回収していった。

とはいえ、中にはハズレやダミーも有ったので、回収出来たのは最初に見つけたのを含めて、三つである。

そして、時間的に最後の場所に向かった。

その場所は、旧校舎の屋上だった。

「よつと……」

と明久がドアを開けると、すでに目的の場所では雄二達と翔子達が戦っていた。

数学

Aクラス

代表 霧島翔子 475点

木下優子 327点

工藤愛子 286点

VS

Fクラス

代表 坂本雄二 457点

木下秀吉 125点

土屋康太 224点

点数的には雄二達が劣勢だが、召喚獣の操作では雄二達が勝っている。

故に、雄二達はなんとか拮抗していた。

とはいえ、点数差は如何ともし難い。

少しずつ劣勢になり始めた。

その時、ドアが開いて

「あー！ 吉井！ 見つけたわよー！」

「見つけました！」

島田と姫路が現れた。

「お姉様！ そんな猿なんて放っておいて、私とアバンチュールを！」

その二人を追い掛けてくる形で、清水美春まで現れた。

「さあ、勝負よ、吉井！」

「吉井くん、勝負です！」

「邪魔する奴は殺します！」

明久は思わず、額に手を当てた。

かなり面倒である。

とはいえ、召喚しないと負けになってしまうので、召喚した。

古典

Aクラス

吉井明久 398点

上杉謙信 412点

天城颯馬 485点

V S

F & Dクラス

島田美波 7点

姫路瑞希 425点

清水美春 98点

正直言って、一人圏外である。

「……島田さん？」

「聞かないで……」

明久が問い掛けると、島田は涙を流しながら目を逸らした。はつきり言って、勝負にならない。

結果、島田と清水の二人はすぐさま撃破された。

その時、柵を飛び越えて人影が現れた。

「戦死者は補習！」

なぜか西村は、髪を逆立てて二等辺三角形のサングラスを掛けていた。

「まさかの戸○呂弟ですか!？」

西村の格好を見て、颯馬は思いつき突っ込みを入れた。

「いやああああ!？」

「お姉様と一緒におおお！」

かなり不安をかき立てるセリフを言いながら、島田と清水は連行された。

一抹の不安を覚えながら、明久は姫路の一撃を受け流して切りかかった。

だが、姫路は明久の一撃を避けて、明久の攻撃は屋上にパネルにめり込んだ。

その直後、嫌な音と共にヒビが広がっていった。

「ヤバイ！」

それを見て明久はすぐさま、隣に居た謙信を抱えて跳んだ。

その数秒後、床が崩れて大きな穴が空いた。

明久と謙信、颯馬はなんとかギリギリで助かった。

だが、雄二達や翔子達。

更に、姫路が構造物を掴んで耐えてる状態だった。

「脆すぎでしょ、学園長！」

思わず悪態を吐きながら、明久は救助活動を始めようと動いた。

その時、新校舎側のドアが開いて

「何があった!？」

「轟音がしましたか!？」

「大丈夫ですか!？」

と信繁達が現れた。

「三人共、ナイスタイミング！ 手伝って！」

明久が声を掛けると、三人は頷いてから雄二達の救助へと向かった。

姫路はすでに颯馬が自慢の暗器を活用して、救助を始めている。

そして、明久は翔子達のほうへと近づいた。

だが、明久が翔子のほうに手を伸ばそうと一歩踏み込むと、ガラガラと音を立てて足場が崩れた。

「これは、下手に近付けない……」

明久がそう呟いていると、姫路を救助し終わった颯馬が近寄ってきて

「明久様、下がってください。危険です！」

と明久に下がるように促した。

「くっ……！ 何も出来ないの!?!」

明久が歯噛みしていると、雄二が雲梯の要領で翔子へと近づき

「翔子、ゆっくりこっちに来い!」

と手を伸ばした。

翔子は頷くと、雄二の手を掴み、少しずつ雄二の背中に掴まった。

「いいな、しっかり掴まってろよ!」

「……うん」

雄二はそう言うと、先ほどと同じように雲梯の要領で脱出しようとして動き始めた。

だが、雄二が手を伸ばして掴んだ部分が崩れて、雄二は大きくバランスを崩した。それを見た瞬間、明久は颯馬が持っていたワイヤーを掴んでそれを近くの柵にフックを掛けて跳んだ。

もちろん、颯馬が止めようとしたが、明久は止まらなかった。

そして、一気に雄二に近づくと雄二の腕を掴んだ。

「明久!? 無理するな!」

「……怪我がまだ、治ってない!」

雄二と翔子が制止するが、明久は離さない。

「上げて!」

明久は痛みを堪えて、信繁達に引き上げるように促した。

信繁達が引く度に、右手に巻き付けたワイヤーが肉に食い込んで、激痛が走った。

だが、それでも明久は絶対に離さず、痛みを歯を食いしばって耐えた。

そして数分後、無事に引き上げが終わった。

だが、明久の右手はワイヤーが食い込んだことで、酷い有り様であつた。

「雄二……大丈夫?」

「俺は大丈夫だが、お前……右手が」

「……早く、保健室に」

明久が問い掛けると、雄二と翔子は明久の右手を見て、息を呑んだ。

明久の右手は、ワイヤーが食い込んだことで真っ赤になって、出血していた。

その怪我を明久が確認したタイミングで、チャイムが鳴った。そして、なんとか救助した高橋女史が腕時計を見て

「只今を以て、オリエンテーリングは終了です」

と言うと、それまで展開していたフィールドを解除した。

すると、高橋女史は明久に近づき

「まず、吉井くんは保健室に行ってください。その手は、治療が必要で
す」

と言った。

「わかりました」

流石に痛みが強かったので、明久は素直に頷いて保健室へと向かった。

十数分後。

「失礼しました」

と明久が出ると、謙信が近寄り

「どうでした？」

と心配そうに問い掛けた。

すると、明久は右手を上げて

「摩擦で皮膚が破けた位だよ。まあ、しばらくは包帯だね」

と言った。

明久の説明に謙信が安堵の息を漏らしていると、雄二達が近寄ってきて

「明久、大丈夫か？」

と問い掛けた。

「うん、大丈夫。雄二達は？」

明久が問い返すと、雄二は肩をすくめて

「俺達は平気だ」

と答えた。

「そっか、良かった」

明久はそう言うのと、雄二に視線を向けて

「そういえば、雄二は何を手に入れたの？」

と問い掛けた。

「ああ、そういえば見てなかったな」

雄二達はそう言うと、鞆の中から回収したガチャポンを取り出して開けた。

「えっと……如月グラウンドパークのプレミアムオープンチケットに、事典セット……それに、シークレットアイテム？」

「どうやら、雄二達がシークレットアイテムを手にしたようだ。」

「あ、雄二達がシークレットアイテムを手に入れたんだ。なんだろうね」

「さあな、学園長室に取りに来て書いてある」

雄二がそう言うと、明久達も手に入れたガチャポンを取り出して開けた。

「えっと……如月グラウンドパークのプレオープンチケットに、ぬいぐるみ？」

明久は最後の一つに首を傾げ、信繁は固まっていた。

「どうしたの？」

明久が問い掛けると、信繁はゆっくりと紙を見せた。

紙には『西村&高橋女史による1ヶ月特別補習券』と書いてあった。

その内容に戦慄を覚えて、明久達はさり気なくその紙を須川の席に置いたのだった。

ちなみに、シークレットアイテムというのは腕輪で、能力はコピーという物だった。

如月グランドパーク編 如月グランドパークへ

オリエンテーリングから2日後、明久は自宅でゆっくりしていた。平日なので、本来ならば登校日である。

だが、オリエンテーリングの時に旧校舎側の屋上が崩落したので、緊急で検査が入るので休みになったのだ。

明久は怪我もあつたので、自宅で療養していた。すると、謙信が現れて

「明久、如月グランドパークに行ってみませんか？」
と言ってきた。

「如月グランドパークに？」

明久が首を傾げると、謙信は頷いて

「ええ。ちょうど、チケットも手に入ったことですし」

と件のオリエンテーリングで入手したチケットを出した。

それを見て、明久は手に入れたのを思い出して、数秒間黙考すると「思い立ったが吉日って言おうし、行こうか」

と言つて、立ち上がった。

「わかりました。では、準備しますね」

明久の言葉を聞いて、謙信はそう言つて居間から出て行った。

「さてと……僕も準備するか」

明久はそう言うと、居間から自室へと向かった。

こうして、明久達の波乱含みのデートは始まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

数十分後、明久達はバスに揺られて目的地である如月グランドパークに到着した。

まだ正式オープン前なので、ゲートには《プレオープン中》という看板があつた。

二人はそれを見ると、それぞれチケットを取り出して係員に見せた。

係員はチケットを確認すると、笑顔で二人を通した。

だが、明久達の姿が見えなくなると、懐から無線機を取り出して「ターゲットαが来た……ウォールとポイズンに知らせろ」と告げた。

明久達は気づいていなかったが、実はこの係員はFクラスの男子だったのだ。

Fクラス男子達は明久達が如月グランドパークのチケットを入手したのを知っており、近日中に来るだろうと考えて、バイトに募集して潜入したのだ。

しかも、そのメンバーの中にはある二人も居た……

そんなこともつゆ知らず、明久達はマップを眺めていた。

その時、明久達目掛けて二体の如月グランドパークのマスコットキャラクターが物凄い勢いで走ってきていた。

その二体は、背後に黒いオーラを際立たせながら、その手に凶器としか表現出来ない薙刀と鉞を持っていた。

そして、明久達まで残り数メートルになった直後、その二体は横合いから投げられた縄で動きを封じられて、風のように現れた颯馬が隙間から注射を刺して、動きを止めた。

そして、颯馬が胸元の無線機に何かを呟くと、ゴミ回収台車が来て、その二体を中に放り込み、足早に去った。

その直後、明久は振り向いて首を傾げた。

「どうしました?」

謙信が問い掛けると、明久は不思議そうに首を傾げながら

「なんか、知り合いの気配を感じた気がしたんだけど……まあ、いいか。それじゃあ、どこに行こうか」

とマップに視線を戻した。

その後、二人は謙信の願いでお化け屋敷へと向かった。

ちなみに、なぜ颯馬が居たのかというと、この如月グランドパークには吉井家や武田家、上杉家も出資していたのだ。

そして、今日はたまたま颯馬が吉井家から査察という立場で来ていたのだ。

だが、無線で不審な動きをするマスコットキャラクターの報告を聞いて、颯馬は先回り

力づくで無力化したのである。

その手際の良さは、玲で手慣れたためか、逆に哀愁漂うレベルであった。

そして、颯馬はゴミ回収台車を押しながら中の二人をどう処分しようかと考えていたが、嫌な予感がしたので

「すいませんが、警備員の数を二倍に増やしてください。もしかしたら、最悪の事態が起きるかもしれません」

と近くに寄ってきた支配人の一人に告げた。

颯馬としては、外れてほしい予感である。

しかし、世の中はそんなには優しくは無いのである。

颯馬が離れて数分後、引き渡した筈の二人が着ぐるみを残して消えたという報告を聞き、颯馬は知り合いに助けを求めたのだった。

現代の忍者

お化け屋敷に入つてすぐに、明久はお化け屋敷に入ったことに頭を抱えていた。

「うん、忘れてた僕も悪かったよ……けどさ、一つ聞いていいかな……なんで、お化け屋敷に入ったのさ？」

明久がそう問い掛けると、腕に抱き付いていた謙信は涙目で明久を見上げながら

「その……遊園地に来たら、一番最初はお化け屋敷でしよう……明恵さんが……」

と言った。

何を隠そう、謙信はお化けといった類が苦手なのである。

「謙信、母さんの言葉を真に受けちゃいけないよ」

明久がそう言うと、謙信は無言でコクコクと頷いた。

明久の母、明恵には一つ困った性格があった。

それは、大のイタズラ好きである。

しかもそのイタズラのレベルははつきり言って、タチが悪いのだ。

以前、明久が小さかった頃

明恵は明久に誕生日プレゼントと称して、箱を手渡したのだが、その中には大量に虫が詰まっていたのだ。

明久はそれに気づかず、箱を開けて、中から大量の虫が溢れ出し、一時期は虫恐怖症にすらなった。

なお、その虫は吉井家の警備部門の半数を投じて、駆逐。

誕生日プレゼントは別にキッチンと用意してあったが、明久はしばらくの間疑って開けなかった記憶がある。

そして、今回もその可能性が非常に高い。

とりあえず、今は出口に向かうしかない。と明久は判断した。

そして二人が歩いていると、行く先々でお化けが出てきて、出てくる度に謙信は短く悲鳴を上げながら明久の腕に強く抱きついた。

それを明久は微笑ましく思いながらも、謙信を引きずるようにして出口を目指していた。

皆さんはご存知ないかもしれないが、こういったお化け屋敷では、お化けを機械にするか、人が行うかはおおよそ半々なのである。

そして如月グランドパークでは、本来は全て機械で行う予定だったのだが、納入が間に合わなかったり、機械の微調整が間に合わなかったり等で半分程は係員が代行していた。

なお、明久は人間が混じっているのは気づいていた。

だが、そのお化け役がまさか、Fクラスの男子とは思っていなかったのだ。

お化けが出てきて、謙信が驚きながらも、明久達はなんとか進んでいた。

しかしその中で、出てきたお化け役が待機場所である隠し壁の中に戻らず、衣装の中から棍棒を取り出して、明久達を追い掛けてきた。

そのお化け役こそが、Fクラスの男子の一人だった。

普段だったら、背後から来ても必ずどちらかが気づいていた。

だが、謙信は苦手なお化け屋敷に入っていたので、精神的余裕がなく、明久はそんな謙信のフォローに意識を割いていたので、気付かなかった。

そして、お化け役の男子は静かに明久達の背後に近寄り、明久達の上から出てきた機械式のお化けに動きを止めた瞬間、棍棒を振り上げた。

次の瞬間、そのお化け役の背後に無音で人影が現れて、お化け役の男子の口の中に、何やらゼリーののような物をつっ込んだ。

すると、その男子は一気に顔を青ざめて倒れそうになった。

だが、背後の人影。

忍者のような服装の康太が、その男子が倒れるのを支えると、近くの係員用のドアに、その男子を放り込んで、すぐさま天井裏に隠れた。

その数秒後、明久は振り向くが、不思議そうに首を傾げてから再び歩き出した。

そして係員用通路では、康太が懐から無線機を取り出して

「……………こちらシャドー、お化け屋敷B2通路にてFクラスの男子を捕獲した。移送の手配を頼む」

と通信していた。

『ありがとうございます、康太さん。助かりました。手配しておきますね』

無線の相手、颯馬は感謝の言葉を述べた。

なぜ、康太が居るのか。

それは、Fクラスの男子達が不審な動きをしているのに気づいて、彼らと同じようにバイトとして秀吉と一緒に潜り込んでいたのである。

そして、彼らを監視していた矢先に、颯馬からメールが来たのだ。吉井家からの応援部隊が来るまで、明久達の護衛をしてはくれないかと。

颯馬は秀吉と康太がバイトに来ていることを、査察官として見た書類で知ったのだ。

康太と秀吉は颯馬の願いを快諾し、明久達の近くに待機していたのだ。

本当だったら、颯馬も同じように護衛に入りたかったのだが、査察官としての仕事があるので、康太達を頼ったのだ。

「……礼など不要だ。俺達は同志だろうか？」

『そうじゃ。何時でも頼ってくれて構わないのじゃ』

康太の言葉に同意するように、秀吉の言葉が聞こえた。

『ありがとうございます。今移送の手配をしたので、引き続き頼みます』

「……了解した」

『承知したのじゃ』

颯馬の言葉を聞いて、康太は返事すると無線機を懐にしまった。

そして、廊下に倒れている男子を見ると

「……バカな奴らだ」

と言うと、一瞬にして消えた。

ちなみに、康太が男子の口に押し込んだのは、姫路作のゼリーである。

あのオリエンテーリングの日、姫路がゼリーを作って持ってきてい

たことに、康太は気づいて、市販されている物にすり替えておいたのだ。

しかし、簡単に捨てて被害を出す訳にはいかないと思い、隠し持っていたのだ。

今回はそれが役立った形である。

もはや、暗殺向きな姫路作のケミカルクッキングである。

この後も、秀吉と康太のおかげで明久達は無事にお化け屋敷から出ていき、次の場所へと向かっていった。

お昼の攻防戦

明久達がお化け屋敷を出ていった直後、入れ替わる形で雄二達がお化け屋敷に入った。

最初は普通だったが、何故か途中からお化けが出なくなった。

そのことに二人が不思議そうに首を傾げていると、ボソボソと何かが聞こえ始めた。

その音に二人が耳を傾けていると……

『俺は翔子よりも、姫路の方が好みだな』

と、何故か雄二の声が聞こえた。

しかもその直後には、前方の天井から釘バットや刀、鉈と言った凶器が垂れ下がってきた。

だが、雄二と翔子の二人はソレらと声を無視してスタスタと進んだ。

すると、どこからか慌てている気配がするが、雄二は無視して

「俺はあんな事を言った覚えはない」

と言った。

そして、翔子は

「……たかが機械音声に惑わされる私じゃない」

と断言した。

それを聞いて、雄二が

「よく機械音声って分かったな？」

と問いかけた。

すると、翔子は親指を立てながら

「……雄二に関して、私に不可能は無い」

と断言した。

まさしく、愛の成せる技である。

なお、人というのは自分の声は分からないものである。

だから、録音したのを後で聞くと、結構驚くものだ。

閑話休題

「しかし、これは何がしたいんだ？」

雄二が首を傾げていると、翔子が

「……多分、吊り橋効果を狙ってると思う」と言った。

「吊り橋効果って、アレか。二人で危機的状況を乗り越えようと、仲が進展するっていうヤツだな?」

雄二がそう言うのと、翔子は頷いて

「……そう。けど、これは逆効果」と言った。

すると、雄二は同意するように頷いて

「むしろ、これは浮気効果になるだろ」と告げた。

雄二の言葉を聞いて、翔子が頷いているとどこからか動揺した気配がする。

雄二達はそれも無視して、さっさとお化け屋敷から出ていった。

その頃、明久達はファンタジーな乗り物から降りて、休憩スペースに居た。

すると、謙信が持っていたカバンの中から大きめのバスケットを取り出して

「少し早いですが、お昼にしましょうか」と提案した。

時刻は、十一時を少し過ぎた辺りである。

確かに、少し早いが丁度いいかも。と明久は思い

「そうだね。そうしようか」と頷いた。

すると、謙信はビニールシートを取り出して草原に広げて、中央にバスケットを置いた。

そして、明久が座ると謙信はバスケットの蓋を開けた。

中は謙信としては珍しく、洋風の食べ物が入っていた。

サンドイッチを初めに、ポテトサラダにミートボールと、バランス良く入っていた。

「これ、謙信が?」

明久が問い掛けると、謙信は頷いて

「はい……兼ねてから、信繁に教わっていました。少しでも、料理のレパートリーを増やそうと思ひまして……」

と恥ずかしそうに言った。

それを見ただけで、明久の為に頑張ったと分かる表情であった。

謙信のその表情を見て、明久は微笑みを浮かべると

「ありがとうね、謙信」

と謙信の頭を撫でた。

すると、謙信ははにかんだ笑みを浮かべてから

「どうぞ、食べてください」

と促した。

謙信に促されて、明久は両手を合わせて

「いただきます」

と言ってから、サンドイッチを口に運んだ。

そして明久が咀嚼していると、謙信は不安げな表情を浮かべて

「どうでしょうか？」

と明久に問い掛けた。

そして、明久は飲み込むと笑みを浮かべて

「うん、おいしいよ。頑張ったね、謙信」

と誉めた。

明久に誉められて、謙信は安堵した様子で

「では、ドンドン食べてくださいね」

と明久に、更に食べるように促した。

「うん、ありがとうね……」

明久はそう感謝すると、再び食べ始めて、謙信も食べ始めた。

なお、この時明久達は知らなかったが、休憩スペースの出入り口では、熾烈な戦いが繰り広げられていた。

「退け！ この裏切り者がああああ！」

そう叫んでいるのは、係員に紛れ込んだFクラスの男子達である。

そして、そのFクラス男子達を食い止めているのは、康太と秀吉だ。

「断るのじゃ！」

「……元より、貴様らの仲間になった覚えなどない！」

二人はそう言いながら、手に持っている武器を振るった。
まず、康太が両手に持った小太刀を後ろに引いて

「……回転○舞六連！」

「ギヤアアアア!?」

二刀流による高速連撃を叩き込み、数人を纏めて吹き飛ばし、続くように秀吉が

「中華○舞！」

「グアアアアア!?」

目にも留まらぬ高速刺突を繰り出した。

結果、Fクラス男子達は全員撃破された。

男子達が動かなくなったのを確認すると、二人は顔を見合わせてから捕縛に移行。

そして、二人は颯馬に連絡して、Fクラス男子達の回収を頼んだ。

アーチャー、現る

昼食後、明久と謙信の二人は次のアトラクションに向かっていた。だがそんな明久達の背後から、二体の着ぐるみと数人のFクラス男子達が迫っていた。

それを、とある人物が如月グランドパークの中央にある城の高台から見ている人物が居た。

「秀吉と土屋君は……捕まえたFクラス男子達の連行で動けない……つまり、ようやくあたしの出番ね」

そう言ったのは、左手に弓を持った優子だった。

「距離は……大体五十位かしら……」

優子はそう言うのと、背負っていた筒から矢を抜くと、弓につがえた。そして、少し目を細めると

「……っ！」

短い気合いと共に、矢を放った。

優子が放った矢は、空気を切り裂きながら、一直線に集団目掛けて飛翔した。

数瞬間、優子が放った矢はFクラス男子の一人の側頭部に直撃した。

その直後、着ぐるみ二体

姫路と島田の二人を含めて、全員が驚愕で固まっていた。

「狙いがズレたわね……この位かしら？」

優子は微調整をすると、今度は三本を一息に放った。

その直後、三本の矢はほぼ同時に男子達の頭に直撃、男子達は揃って倒れた。

「ん、今度は狙い通りね……」

優子がそう言ったタイミングで、残ったFクラス男子達は、矢が来た方向に気づいて、近くの木の陰に隠れた。

しかしそれを見ても、優子は慌てずに

「その程度で、私から逃げられるとでも？」

と言うと、新しい矢を抜いて構えた。

よく見ると、その矢は矢羽根が一枚欠けていたり、微妙に切つてあつたりと不揃いだつた。

そしてキリキリと引くと、立て続けに数本放つた。

優子が放つた矢は一気に歪曲して、木を回避し、隠れていたFクラス男子達に直撃した。

「これで、男子達は殲滅つと……後は」

優子がそう言ったタイミングで、同じように隠れていた姫路と島田が木陰から飛び出して、明久達の方へと駆け出した。

優子はそれを見ると、少し考えてから

「着ぐるみを着ていると、有効射になりにくそうね」と言つた。

そして、新しい矢をつがえた。

だが、その矢の先端は先ほどまでの矢とは違い、鋭い針が有つた。

優子は明久達目掛けて走る二人を睨みながら、弓矢を大きく引いた。

そして、数秒後

「シッ！」

短い気合いと共に、矢を二本同時に放つた。

放たれた矢は大きく弧を描き、走っていた姫路と島田の背中に直撃。

矢の直撃を受けて、姫路と島田の二人は倒れた。

それを確認して、優子は右耳に付けていたインカムに手を当てて

「こちらアーチャー、対象の撃破完了。回収をお願い」と通信を始めた。

『了解です。すいませんね、優子さん。休んでいたのに、来ていただいて』

「いいのよ。どうせ、家で暇してたんだし」

颯馬の言葉を聞いて、優子は手をヒラヒラとさせながら、そう言つた。

優子は最初、この如月グランドパークには居なかつた。

だが秀吉が、自分達二人だけで護りきれないと判断し、優子にお願い

いしたのである。

そして案の定、秀吉と康太の二人では対処が間に合わなかったので、優子が動いたのである。

なお、男子達に向けて射った矢は安全面を考慮して、鏃は付いていない物である。

そして、姫路と島田に射ったのは、針の先に二倍の濃度の対人用の麻酔薬が付いた物である。

「二応、二人には麻酔矢を使ったから大丈夫だとは思う。けど、油断はしないで」

『了解です。ありがとうございます』

颯馬がそう言うと、優子は頷いてから離れた。

そして優子の視界の端では、明久達はジェットコースターに並んだ。

それを見て、優子は微笑んだ。

これが、優子の弓術師としての始まりだった。

そして、後に神業の木下として有名になるのは、また別の話である。

追加戦力

明久達がジェットコースターから降りた頃、颯馬は裏手の駐車場へと向かった。

その駐車場に、タイミング良く一台のワンボックスカーが止まった。

そして、そのワンボックスカーから降りてきたのは、ウサギを彷彿させる髪型の女性と、七人の男女だった。

「お待ちしました、宇佐美さん！」

「……お待たせ」

返事したのは、宇佐美定満

吉井家では警備責任者であり、明久達にとっては信頼が置ける人物である。

「……明久様と謙信様は無事？」

定満が問い掛けると、颯馬は頷いて

「はい！ 協力してくれたご友人達のおかげで、無事です。ですが、そのご友人達も疲労が溜まってきてます」

と報告した。

すると、定満はコクリと頷いて

「……そのご友人達に、後は私たちに任せて休んでって、言っておいて」

と言った。

すると颯馬は、定満の後ろに居る人物達に視線を向けて

「その人達は、まさか……？」

と定満に問い掛けた。

すると、定満は頷き

「……七聖剣」

と端的に答えた。

七聖剣

吉井、上杉両家の中でも、特に武力に優れた選りすぐりの七人によって構成されており、並大抵の武闘家では勝つことは不可能であ

る。

「やっぱり……」

「……両家が動かすことを承認したの。それで、相手は？」

定満が問い掛けると、颯馬は懐から数枚の紙を取り出して

「この人達が残った敵です。それと、要注意なのが、最後の二人です。先ほど、捕まえたのにまた脱出したと報告が入りました」

と報告した。

颯馬の報告を聞いて、定満は紙を受け取ると、七人に見えるように掲げて

「……よく顔を覚えて……最後の二人に関しては、確実に無力化して捕縛して……散！」

定満の号令の直後、七聖剣は一瞬にして姿を消した。

定満は七聖剣が居なくなったのを確認すると、颯馬に視線を向けて「……それじゃあ、私は指揮に専念するね」

と言った。

「ありがとうございます。これで、僕も本来の仕事に専念出来ます」

颯馬の言葉を聞いて、定満は頷くと

「……無理しないでね」

と颯馬の頭を撫でた。

「はい！ 定満さんも頑張ってください！」

「ん……」

定満と颯馬はその場で別れると、それぞれ仕事へと向かった。

場所は変わって、ジェットコースターでは

「さつてと……次はどうしようか」

「そうですね……」

ジェットコースターから降りた明久と謙信の二人が、マップを見ながら次のアトラクションを決めていた。

「一回、休もうか」

「そうですね……休ましましょうか」

明久の提案を聞いて、謙信も同意した。

どうやら、連続で遊び続けたために少し疲れたらしい。

明久と謙信は周囲を見回すと、ちょうど良い草地を見つけた。

二人はそこに移動すると、並んで座った。

二人が座ったのは、木の根元だった。

だからか、ちょうど影になっている場所であり、そよ風もあって心地よかった。

「いい天気だね」

「そうですね……」

と話し合っていると、明久がウトウトし始めた。

それに気づいて、謙信が膝を曲げて

「明久」

と自身の膝を軽く叩いた。

よほど眠かったのか、明久は素直に従って、謙信の膝に頭を乗せた。いわゆる、膝枕である。

そして、数秒もしない内に明久は規則正しく呼吸を始めた。

そんな明久の頭を撫でながら、謙信は微笑んで

「いつもお疲れ様です。明久……」

と呟いた。

その頃、残存Fクラス男子達及び、姫路と島田達は、地下の係員用通路に居た。

「ダメだ！ 監視室に居た奴からの連絡が途絶えた！」

「クソッ！ これじゃあ、吉井の奴の居場所が分からない！」

男子達の言葉を聞いて、姫路と島田の二人は苛立たし気に

「この役立たず！ 何とかしなさいよ！」

「そうです！ 早く見つけてください！」

と怒鳴った。

「だけど、一体どうすれば！」

「だったら、もう一回監視室に行かせなさいよ！」

「少しは考えてください！」

姫路と島田の指示を聞いて、一人が困惑した様子で

「だけど、これ以上戦力を割いたら、吉井に攻撃出来ない！」と反論した。

「そんなの知らないわよ！」

「そうです！ 私たちさえ攻撃出来れば、こっちの勝ちなんです！」

と二人が怒り心頭という様子で言った直後

「……少しは自分で動いたら？」

と声がした。

「誰だ！」

「誰よ！」

「誰ですか！」

声のした方向に、姫路と島田、Fクラス男子達は一斉に顔を向けた。最初は暗くて分からなかったが、少しすると人影が見えた。

「……怒鳴るように指示を出すだけじゃ、猿でも出来るよ」

と言いながら姿を見せたのは、定満だった。

「なんですって!？」

「どういう意味ですか!？」

激昂した様子で姫路と島田が怒鳴るが、定満はサラリと受け流して

「……あなた達はまるで、猿山の大将みたいってこと」

と言った。

「なんですって!？」

「そもそも、あなたは誰なんですか!？」

「……あなた達に名乗る名前は無い」

姫路と島田が名前を問い掛けるが、定満は答える気は無いらしい。

「だったら、関係ない奴は消えなさいよ！」

「そうです！ 無関係な人はどっかに行ってください！」

島田達がそう言うのと、定満は首を振って

「……そうはいかない……あなた達は明久様と謙信様の障害でしかない。だから、排除する」

と言った。

すると、Fクラス男子達が憤慨した様子で

「クソツッ！ また吉井かよ！」

「あいつばっかり、ふざけるな！」

「やっぱり処刑だ！」

と口々に叫んだ。

すると、定満は睨みつけて

「……させると思う?」

と静かに告げた。

「ふんっ! あんた一人で何が出来るのよ!」

「そうです! たった一人じゃ、何も出来ません!」

島田達がそう言うと、定満はつまらなさそうにため息を吐いて

「……一人じゃないよ?」

と言った。

その直後

「があ!?!」

「いぎっ!?!」

「ひぐっ!?!」

と悲鳴が聞こえて、島田達は周囲に視線を向けた。

気付けば、周囲には七人の男女

七聖剣が居た。

「なっ……いつの間!?!」

「何者だよ!?!」

「なんなのよ!?!」

「なんで邪魔をするんですか!?!」

口々に叫ぶが、定満も七聖剣も答えなかった。

そして、定満はゆっくりと島田達を指差して

「……捕縛せよ」

と命じた。

その直後、七聖剣はその牙を向けて飛びかかった。

「チクシヨー!」

「に、逃げっ……ギャアアアアア!?!」

「い、イギャアアアア!?!」

何人かの男子達は抵抗を試みたが、適うわけなく全滅。

島田と姫路の二人は、そんなFクラス男子達を見捨てて逃げようとしたが、定満が一撃で無力化。

今度は逃げられないようにと、両手両足を結束バンドで拘束。
倉庫に放り込んだ。

その後、定満と七聖剣は如月グランドパークの警備責任者に会い、
指導することになった。

こうして、Fクラス男子達と姫路及び島田は捕縛されたのだった。

昼食

宇佐美がFクラス男子と姫路及び、島田を捕まえた頃

雄二と翔子の二人は、メリーゴーランドから降りて次のアトラクションへと向かっていった。

「さつてと……次は何にすっかな」

雄二がマップを見ながらそう言うと、翔子が雄二の袖を引いて

「……お昼にしよう」

と提案しながら、持っていたバスケットを掲げた。

「どうやら、作ってきたらしい。」

「お？……ああ、一時過ぎてたか。OK、食うか」

翔子の言葉を聞いて、雄二は腕時計を見てからそう言った。

「どうやら、時間を把握してなかったらしい。」

「……向こうに、丁度いい芝生がある」

「お、じゃあ行くか」

翔子が指差しながら言うと、雄二は頷いた。

そして、芝生にビニールシートを引くと、翔子は持っていたバスケットを開けた。

バスケットは中で三段構造になっていて、一段目はおにぎり、二段目はサラダ等、そして三段目は唐揚げや春巻き等が入っていた。

しかも、それら全ては食べやすいようにと一口サイズに作られていた。

それを見て、雄二は両手を合わせて

「いただきます」

「……ん。どうぞ」

雄二の言葉を聞いて、翔子は雄二へとバスケットを軽く押した。

まず雄二はおにぎりを取ると、咀嚼して飲み込んだ。

「……どう？」

「美味しいぞ。また腕を上げたな、翔子」

雄二が誉めると、翔子は首を振って

「……まだ、修行中。吉井には遠く及ばない」

と答えた。

すると、雄二は苦笑いを浮かべて

「いやあ、明久は別格だろ。あいつはほとんどプロだ」と答えた。

以前、雄二と翔子の二人は明久が作った料理を食べたことがあったのだ。

二人は明久が作った料理を一口食べて、思わず

『明久。お前、どこかの料亭で働いてたのか？』

『……これは最早、プロの領域』

と問い掛けたのだ。

その問い掛けに対して、明久は

『働いてはいないよ。ただ、昔から料理を作るのが好きでね。暇を見ては台所に立って色々やってたんだ』

と答えた。

二人は知らなかったが、この時に明久に料理を教えたのは、長年吉井家の台所を支えてきた女中さんだった。

その女中さんは、明久に料理に関するあらゆる技術を教え込み、明久はそれを習得。

そこから更に、我流昇華させていったのである。

そして、明久はそれら全てをノートに纏めてあり、その冊数は既に三十冊を超えている。

そして、明久は知らないのだが、そのノートを明恵が見ており、明恵は知り合いに居たプロの料理人数人にそのノートを見せた。

すると、その料理人達は口を揃えて

『これは素晴らしい』

『尊敬に値する』

『こんな調理法があったなんて……』
と言ったのだ。

中には、総料理長の座から退いて

『修行してくる』

と言って、どこかに旅立った料理人すら居たのだ。

料理人達の言葉を聞いて、明恵は思わず

『この子……料理人で一財産稼げそうね……』

と呆然と呟いたとか。

話を戻して
閑話休題

「……吉井に見せてもらったノートの技術を再現しようとしてるけど、中々上手くいかない」

「いやあ、普通は無理だろ？俺だって頑張ったが、全体の1割も行かないで諦めた位だ」

翔子の言葉を聞いて、雄二はそう言った。

二人からしてみたら、明久は既にプロの領域に差し掛かっており、到達するにはかなりの時間を要するだろう。

だが、翔子は少しずつとは言え明久の料理の技術を模倣している。

雄二は翔子のその努力に対して、心中で素直に賞賛した。

雄二は母親がともに料理が作れなかったので、必要に迫られて料理を覚えた。

だから、料理に関してはそれなりに自信はあった。

だが、明久のノートを見たら、自分はまだまだだと思った。

ちなみに、雄二の母親の料理の技術に関しては、もはや推して知るべし。

材料の形が残っていればまだマシンな方で、酷い時は謎の物体Xに成り代わる。

一回、母親が料理を作るのを見た事が有ったが、雄二としては、なぜそんな事態になるのか、サッパリと分からなかった。

そして、母親の料理を食べた場合、十中八九で気絶し、一番酷い人命に関わる。

最近、父親が母親の作った弁当を食べて意識を喪失。

しかも、心肺停止する事態に発展した。

その時は、たまたま近くで弁当を食べていた同僚がすぐさま救急車を呼び、一命は取り留めた。

だが、父親曰わく

『いやあ……気が付いたら河原に居てな。河原の向こう岸に死んだ曾

爺ちゃんが居てな。凄い慌てた様子で両手を振ってたな』
と語った。

それを聞いて、雄二は思わず

『それ。三途の川だったんじゃないか……？』

と呟いたのは、記憶に新しい。

再び話を戻そう
閑話休題

「……ちなみに、今回はおにぎりはご飯を少し固めに炊いて、味付けはシンプルに塩味だけ。唐揚げは昨日の内に味付けして、今朝揚げた」
翔子の説明を聞いて、雄二は興味深い様子で頷き

「この隠し味はなんだ？ 一つはしようがってのは分かるんだが……」

と唐揚げを指差した。

「……すりおろしたしょうがとリンゴ。リンゴを味付けに使ったことで、肉質が柔らかくなって、冷えてもジューシーに揚がるって書いてあった」

翔子の説明を聞いて、雄二は頷いてから

「その位だったなら、俺にも出来そうだな……今度やってみるか」と呟いた。

すると、翔子がポツリと

「……これはまだ、初級編。上にはもっと凄いのがあった」

「マジかよ……」

翔子の言葉を聞いて、雄二は思わず空を仰いだ。

明久の料理への探求心に驚いたのだ。

その後、二人はお弁当を食べ終わると、次のアトラクションへと向かった。

デートの終わり

雄二達は食べ終わると、色々なアトラクションを回った。そして、締め括りに観覧車へと来た。

これは二人の意見が重なった結果であり、最後は観覧車でないと、ということだった。

そして、観覧車に乗って外を眺めていると

「……いい景色だね」

「ああ……」

と二人が会話を始めた。

「もう、何年の付き合いだ？」

「……大体、11年」

雄二の問い掛けに翔子が答えると、雄二は溜め息混じりに

「もうそんなになるか……長いわけだ」

と言った。

すると、翔子は頷いて

「……人生の半分以上の付き合い」

と言った。

「だなあ……まあ、これからも付き合うわけだがな……」

「……うん」

二人はそう言うと、外を見ながら

「出来るなら、明久達とも長く付き合いたいな……」

「……うん」

と話した。

そして、数分後には二人が乗っていたゴンドラは下に降りて、二人はゴンドラから降りた。

そして時間もあつたので、二人はそのまま帰宅することにした、

これからの学園生活に思いを馳せながら、二人は帰路へと付いた。

その頃、明久達は……

「ん……？」

「あ、起きましたか。明久」

明久が起きると、謙信は微笑みを浮かべながら明久の顔を覗き込んだ。

明久は最初、意識がボンヤリとしていたが、少しずつ意識がハッキリとしてきた。

そして気付くと、空は茜色に染まっていた。

明久は起き上がると、謙信に対して

「ごめん。かなり長い時間寝てたみたいだね……」

と謝った。

だが、謙信は首を振って

「いえ、大丈夫ですよ。どうやら、かなり疲れが溜まってたみたいですね」

と言った。

実際、寝る前よりも体が軽くなっているように、明久は感じていた。どうやら、無自覚に疲れを溜めていたようだ。

そのことを、内心で恥じながら

「本当にごめんね、謙信。行きたいアトラクション、有っただろうに」と再び謝罪した。

すると、謙信は微笑みを浮かべて

「いえいえ……明久の寝顔が久しぶりに見れましたから、おあいこですよ」

と言うと、立ち上がろうとした。

だが、その直後

「あっ!？」

足に力が入らなかったのか、謙信はガクツと前のめりに倒れそうになった。

だがそんな謙信を、明久が素早く支えた。

「すいません、明久……足に力が入らなくなつて……」

謙信がそう言うのと、明久は首を振って

「ううん。そもそも、僕が原因だしね。足、痺れてるんでしょ?」と指摘した。

明久が数時間謙信の膝枕で寝たために、謙信の足は痺れたのだ。

明久はそれを察知していて、近くに居たのだ。

「すいません、明久……すぐに」

謙信はそう言いながら立ち上がろうとするが、それを明久は、首を振って止めて

「無理しないの」

と言って、バスケットを渡した。

「そのままね」

明久のその言葉に、謙信が首を傾げていると

「よつと」

と明久は軽く気合いの声を上げて、謙信を抱え上げた。

右手は謙信の背中に、左手は謙信の膝裏に持っていった。

ようするに、お姫様抱っこである。

「あ、明久!?! 私、重いですよ!?!」

恥ずかしいからか、謙信は顔を真っ赤にしながら声高にそう叫ぶように言った。

すると明久は、微笑みながら首を振って

「謙信は軽いよ……逆に心配になる位だ」

と言うと、スタスタと歩き出した。

「しかし、明久……」

「大丈夫だって、僕に任せて」

謙信が再び抗議しようとしたが、明久はそれを、笑顔で遮った。

謙信としては、他人に見られるのが恥ずかしいのだが、明久としては気にならないらしい。

明久は謙信をお姫様抱っこしたまま、観覧車へと向かった。

明久曰わく、最後は観覧車でしょ、とのことだ。

そして観覧車に乗ると、明久は謙信を椅子に座らせて、自身は隣に座った。

そして、二人で外の景色を眺めていたら

「ねえ、謙信……」

と明久が、謙信に言葉を掛けた。

「なんですか、明久?」

謙信が問い掛けると、明久は真剣な表情で

「まだまともに刀も持てない僕だけど……待っててね、絶対に戻るから」

と言った。

すると、謙信は微笑んで

「ええ……待ってます……」

と言うと、二人は唇を重ねた。

そして二人は、観覧車から降りると出口へと向かった。

こうして、二組の如月グランドパークのデートは終わりを告げたのだった。

強化合宿編 始まりとトラブル

「強化合宿かあ……」

そう呟いたのは、高橋女史から配られたしおりを見た明久だ。

二日後、文月学園が所有する合宿所に行つて、三日間の学力強化合宿をやるらしい。

とは言つても、一日中勉強する訳ではなく、それなりにイベントもあるらしいが。

その時

『案内すら無いのかよ!?!』

という悲鳴が聞こえてきた。

「今のは一体?」

謙信が首を傾げていると、しおりを見ていた明久が

「多分、Fクラスじゃないかな?」

と言いながら、自身が持っていたしおりの一カ所を指差した。

そこには、各クラスの移動方法が書かれてあったのだが、そのFクラスの欄には

《Fクラス 現地集合》

と書かれてあった。

それを見て、謙信は苦笑いを浮かべながら

「行くのが大変そうですね……」

と呟いた。

そして二日後、明久達Aクラスは学園が用意したリムジンバスに乗って移動していた。

「こんなの用意する位なら、Fクラスにも用意してあげなよ……」

というのは、リムジンバスを見た明久の談である。

途中渋滞にハマって遅れたが、明久達は無事に合宿所に到着した。

そして、学園長からの挨拶も終わり、割り振られた部屋へと向かった。

その部屋というのが……

「まさか、雄二達と同じなんてね」

そう、雄二達と同じだったのだ。

「まあ、一応問題児ってレッテルは残ってるしな」

明久の言葉を聞いて、雄二は肩をすくめた。

そして、雄二の言葉を聞いて、明久は

「まあ、一年生の時に色々やってたもんね」

と苦笑いしながら言った。

一年生の頃、雄二達は何かとトラブルを引き起こしては、それを明久が諫めていた。

それを教師達も知っているので、明久を監視役にしたのだろう。

「俺も同じなのは、明久の友人だからか？」

「多分、僕もかと」

そう言ったのは、壁に背中を預けている信繁と、明久の隣に座っている颯馬である。

この部屋に居るのは、明久、雄二、信繁、颯馬、秀吉、康太の六人だ。

他の部屋割りより人数が多いからか、少し広めの部屋である。

ちなみに、この合宿所。

何でも、倒産した旅館を学園が安く買い取り、召喚獣に対応させる改修工事を行ったらしい。

だから、合宿所は全部で四階建てで、地下に大浴場が二つある。

なお、明久達は三階の部屋に居る。

もちろんだが、男子と女子とで部屋は別だ。

そして謙信は、翔子、愛子、優子の三人と同じ部屋になっている。

そして明久達は夕食も終わり、今は入浴の時間を待っているところだった。

そして入浴が終わったら、後は寝るだけとなっている。

だがその時、廊下が騒がしくなっていることに、明久達は気付いた。

その直後、部屋のドアが乱暴に開け放たれて

「吉井、いー」

「明久君！」

「大人しくしなさい、バカ達！」

島田と姫路を筆頭に、十数人の女子達が雪崩れ込んできた。それを見て、明久はキョトンとしながら

「何々、何の用かな？」

と女子達に問い掛けた。

すると、姫路と島田が怒り心頭という様子で一歩前に出て

「しらばっくれるつもり!？」

「犯人は明久君達しか居ません！」

と怒鳴った。

すると、雄二が立ち上がって

「いきなり現れて、明久を犯人扱いとは、どういう了見だ？」

と女子達を睨んだ。

すると大多数の女子達は怯えたが、それを掻き分けるようにC組代表の小山が現れて

「これが、女子大浴場の更衣室に仕掛けられてたのよ！」

と右手を出した。

その手の中に有ったのは、小さい機械

小型カメラだった。

それを見て、康太が

「……A&K社の小型監視カメラ」

と呟いた。

それを聞いて、信繁が

「まさか、お前……」

と視線を向けると、康太は手を振り

「……俺じゃない。こんな安物、俺は使わない」

と言った。

それを信繁はジト目で見るが、すぐに肩をすくめた。

しかし、小山は話を聞かずに

「これを仕掛けたのが、あんた達だって分かってるのよ！」
と怒鳴ると、明久達に迫った。

しかし、それを許す颯馬ではない。

颯馬は素早く明久の前に立つと、袖の中から小太刀サイズの木刀を二本出して構えた。

「それ以上近付けば、護衛役として無力化させてもらいます」

颯馬がそう言うのと、島田と姫路が

「何よ！ そんなバカの肩を持つって言うの!？」

「そうです！ どうせ、明久君しか犯人は居ません！」

と怒鳴ると、颯馬を睨んだ。

その時、明久が何故か窓を開けた。

その直後、その窓から人が入ってきた。

その人物はなぜか、忍者のような格好をしていて、口元を覆っている布には

《補習》と書かれてある。

すると、その忍者は両手を合わせて

「ドウモ、ミナッサン。テツジンデス」

と名乗った。

その事に女子達は驚愕の声を上げたが、雄二達は明久に顔を向けて「よく、鉄人が来るって分かったな？」

と質問していた。

それに対して、明久は

「なんとなく、直感だよ」

と答えた。

こうして、波乱まみれの学力強化合宿は始まった。

いざいざの始まり

「要するに、貴様らはその小型カメラだけで、吉井達を犯人扱いしているわけか……」

明久達の部屋にやってきた西村は、女子達から聞いた話を聞いて、深々と溜め息を吐いた。

すると、島田と姫路の二人が息巻いて

「犯人扱いじゃなくて、そいつらが犯人よ！」

「明久君達しかありえませんか！」

と断言した。

すると、西村がそんな二人に視線を向けて

「言っておくが、吉井達には不可能だ」

と告げた。

「な、なんですって!？」

「そんな訳ありません！ 絶対に明久君達です！」

西村の言葉に二人は反論すると、明久に飛びかかろうとした。

だが、それは西村が二人の襟首を掴んだことで阻止された。

そして、そんな二人を投げるように放すと

「人の話は最後まで聞け！」

と怒鳴った。

そして、二人が大人しくなったのを確認すると

「まず、吉井と天城の二人が所属するAクラスは、バスが渋滞に巻き込まれて、到着が大幅に遅れた」

と説明を始めた。

「それにより、到着したのは開会式が始まる約十分前に到達。その後、すぐに開会式に出席して、終わった後は夕食。そして、それからはここにいる」

西村がそう説明すると、颯馬が頷いた。

なお、明久は背中を壁に預けて寝ていた。

そして、西村は続いて康太や雄二に視線を向けて

「そして、土屋は来る途中で乗り物酔いになり、開会式直前までは医務

室に居た。これは、医務室の先生が証人だ。そして坂本。坂本は到着してから、小腹が空いたらしく食堂で軽食を開会式直前まで食べていた。食堂の人達が証言してくれた」

と説明すると、康太と雄二は頷いた。

最後に、信繁に視線を向けて

「まあ、こいつに関しては開会式直前まで高橋先生と会話していた。俺が証人だ」

と言った。

そう明久達全員には、犯行は不可能なのだ。

それに気づいて、島田と姫路以外の女子達は顔を蒼白にした。

しかし、島田と姫路は

「それがなによ！ こいつらしか居ないわよ！」

「そうです！ だから、お仕置きです！」

と叫ぶように言うと、二人はどこからともなくバットを取り出して飛びかかった。

しかし、次の瞬間

「やめんか！」

と西村が、二人を床に叩き付けた。

「ちよつと！ 教師が生徒に手を出していいの!？」

「訴えますよ!？」

二人がそう言うと、西村は腕組みして

「貴様らがやろうとしたのは、不当な暴力だろうが！ 俺には、生徒を守る義務がある！」

と宣言した。

その時、それまで寝ていた明久が目を覚ました。

「五月蠅いなあ……何事？」

明久がそう言うと、島田と姫路が

「吉井！ どうせあんたが犯人何でしょ！」

「白状してください！」

と喚いた。

だが、明久は目を細めて

「何が言いたいのかわからないけど、自分がやってないことを認める訳ないでしょ？ 何言ってるの？」

と告げた。

すると、西村が二人の襟首を掴んで

「貴様ら……貴様らは、特別補習室に連行してくれるわ」

と告げた。

「と、特別補習室!？」

「なんで!？」

二人が驚愕していると、西村は二人を睨んで

「貴様らは犯人では無いと言ったのに、吉井達を犯人と決めつけた！」

しかも、反省の色がまったく無い！ よって、普通の補習では無理

と判断した！」

と言った。

そして、他の女子達に視線を向けると

「お前達は反省しているようだから、反省文で許してやる。後で補習室に来るように」

と言うと、なおも喚いている二人を引きずって部屋から出ていった。

そして、女子達は明久達に謝罪すると、ゾロゾロと部屋から去った。

雄二達は女子達を見送ると、明久に視線を向けて

「よく、あんな状況で寝られたな」

と問いかけた。

すると明久は、遠い目をして

「母さんのジャイアンリサイクルに比べたら、静かさ……」
と言った。

明久の母、明恵は家事全般、武道、趣味などはほとんどそつなくこなすが、ただ一つだけ壊滅的にダメなのがかった。

それが、歌である。

それも筋金入りの音痴であり、聞く人は耳栓をしないと、頭が痛くなるほどだ。

明恵も頑張って克服しようとしているが、如何せん上達しない。

そして、明恵は父である貴久に願い、離れの一室を完全防音に改装して、暇があればその部屋にこもって練習するようになったのだ。

しかし、上達する気配は微塵もない。

最近では、貴久が玲へのお仕置きに使えないか画策中とか何とか。

「本当にね……あそこまで下手だと、むしろ一種の才能だよ……聞いて、耳が痛くなるだけじゃなくって、頭が痛くなるってどんだけさ……」

「もういい、思い出さなくていい。すまんかった！」

喋っている内に、明久の目が段々と虚ろになっていったのを見て、

雄二は慌てて頭を下げた。

バカ共の騒動

女子達が去って数分後、明久達はまだ入浴時間にならないので談笑していた。

すると、廊下が騒がしいことに気付いた。

「なんだか騒がしいね……」

「少し聞いてきます」

明久の言葉を聞いて、颯馬は廊下へと出ていった。

そして数十秒後、颯馬が慌てて戻ってきて

「大変です！ Fクラス男子達が、女子風呂を覗きに行ったみたいですよ！」

と叫んだ。

それを聞いて、明久は

「今、どこが入ってるっけ？」

と雄二に問い掛けた。

すると雄二は、立ち上がりながら

「AクラスとFクラスだ……」

と答えた。

それを聞いて、明久達も立ち上がった。

「騎兵隊……行こうか」

明久がそう言うのと、雄二達は無言で頷いた。

「ひゃっはー！ 邪魔だ教師共！」

「今の俺達は止められないぜー!!」

まるで、世紀末のやられキャラのようなセリフを言いながら、F^{バカ}クラス男子^{ども}達は走っていた。

そんなFクラス男子達を止めようと何人かの教師達が立ちふさが
るが、それをFクラス男子達は数に物を言わせて集団で倒していく。

そして、一階の大広間に到着した時だった。

「そこまでだ、バカどもが」

「……行かせると思うか？」

女子風呂のある地下へ行くための階段の前に、明久達が居た。

「邪魔だ、この裏切り者達が！」

「死にさらせえ！」

Fクラス男子達はそう叫ぶと、持っていた武器を明久達へと振り下ろした。

だが、そんな粗末な攻撃を食らう明久達ではない。

「ギャアアアア!？」

次の瞬間、悲鳴を上げながら飛んでいたのはFクラス男子達だった。

「お前ら、忘れてないか？」

「俺達、めっちゃ強いぜえ？」

そこには、阿修羅すら凌駕する存在が居た。

「確かにお前達は強いが、俺達は数が居るぞ！」

「しかも、復活も早い！」

一人がそう言うのと、先ほど吹き飛んだ男子が起き上がった。

「HPが低くとも、復活は早いほう」

「どこの花札のワカメだ」

その光景を見て、秀吉と信繁は呆れた。

しかし、状況は悪くなっていった。

最初は明久達が勝っていたが、Fクラス男子達はまるでゾンビのように何度でも立ち上がってくる。

それにより、徐々に追い詰められていた。

気づけば、階段の中ほどまで後退していた。

「これ以上はヤバいぞ！」

「ここを突破したら……」

「……女子風呂まで一直線だ」

信繁達の言葉を聞いて、明久と雄二はまた数人の男子達を倒して歯噛みした。

その直後、階段の踊場に一冊の本

辞書が落ちた。

しかも、風も無いというのにページが開き、螺旋を描くようにページが舞い上がった。

「な、なんだ!？」

「一体、何が……」

双方が驚いていると

「問題児は補習!？」

と聞こえて、舞っていたページが吹き飛んだ。

そして現れたのは、神父のような服装に銃剣を両手に持った西村だった。

「アンデルセ○神父だー!？」

Fクラス男子達は驚くが、明久達は呆然としていた。

「吉井、お前達には感謝しよう……おかげで、こいつらを呼ぶのが間に合った」

西村はそう言うのと、深呼吸してから

「汝らに問う! 汝らはなんぞやあ!？」

と問い掛けた。

すると、明久達の後ろに二十人近くの男女が現れて

「我らは補習官! 問題児に補習を課す者なり!」

と返答した。

「ならば付いて来い! 十億土を超えて行けええええ!」

「はっ!!」

西村が駆け出すと、二十人近くの男女達も後に続いた。

「う、うわああああ!？」

「に、逃げろおおお!？」

Fクラス男子達は一斉に逃げ出すが、次々と捕まっていた。

そして、Fクラス男子達は全員、補習官へと連行されていった……

反撃の狼煙

翌日の朝、明久達は食堂で朝食を取っていた。

「あー……疲れた」

と言ったのは、首を鳴らした雄二である。

どうやら、昨日のFクラス男子達との戦いで疲れたようだ。

そして、そのFクラス男子達は先生監視のもと、食事中だ。

なお、昨日女子大浴場に突入しようとした理由は、以下の通りである。

女子更衣室に、カメラを仕掛けた変態もさが居る!?

よし、俺たちも続くんだ!

以上である。

それを聞いて、西村は思わず頭を抱えた。

そして、問題の姫路と島田は別室に居る。

明久達がいまだに犯人だと決めつけており、それを罰するのが自分たちの役目だと主張したのだ。

これを受けて、西村と高橋女史は二人を別室にすることを決定。

更に、常に教師が近くに居て監視することにした。

なお、雄二達は明久達と食事を共にしている。

理由は至ってシンプル。

Fクラスの大半が、別の大広間で食べているからだ。

そして、朝食も終わりそうになった時

「……恐らく、カメラはまだある」

と康太が言った。

それを聞いて、明久達は真剣な表情を浮かべた。

「康太、その理由はなんだ?」

信繁が問い掛けると、康太は頷いてから

「……素人に見つかるような場所に仕掛けるわけがない。つまりは、陽動だ」

と告げた。

それを聞いて、信玄は頷き

「ですね。聞いた話しでは、裏返した籠に隠してあったそうです。」
と補足説明した。

それを聞いて、颯馬が顎に手を当てて

「確かに、そんな場所に隠すなんてあり得ません」
と同意した。

すると、幸村が

「こここそ隠れて盗撮するなど、言語道断です！」
と憤った。

幸村の言葉に同意するように、明久は頷いた。
そして

「康太は一応、その事を先生に伝えて」
と指示した。

「……承知した」

康太はそう返事をする、一瞬にして姿を消した。

それを見て、雄二は

「もう、忍者としてやってけるぞ」
と呟いた。

それを聞いて、明久は苦笑してから

「颯馬、本家に連絡して。電波追跡装置を持ってきて、って」
と言った。

明久の指示を聞いて、颯馬は頷き

「承りました」

と言って、食器を片付けてから去った。(康太は片付けている)

「本命を見つけるのか」

明久の意図を察して、雄二がそう言った。
すると、明久は頷いて

「さすがに、今回ばかりは頭に来たからね」
と言いながら、怒気を滲ませた。

「人の恋人の裸を撮られて、しかも犯人扱いされたんだ……頭に来たよ」

明人がそう言うと、雄二と信繁が頷き

「だよなあ」

「ここで黙ったら、男が廃るわ！」
と言った。

それを聞いて、明久は頷いてから

「真犯人、絶対に捕まえるよ」

と告げた。

「おうっ!!」

明久の言葉を聞いて、信繁と雄二は頷いた。
こうして、明久達の反撃が始まる。

作戦会議

明久達は、覗きの真犯人が分かるまで、Fクラス男子達を止めることに注力することにした。

とはいえ、先日のことを考えると明久達だけでは戦力的に覚束ないのは明白だ。

しかも、Fクラス男子達は援軍を呼ぶだろう。

そうなったら、明久達は数の暴力に負けるのは目に見えている。

だったら、こちらにも援軍を呼べばいいという結論に達した。

そのために、明久と謙信はAクラス男子達の所に訪れた。

彼らなら、明久達に協力してくれると判断したからだ。

だから、明久自ら赴いたのだ。

「なるほど………そういうことだったのか」

明久の話を聞いて、久保は納得した様子で頷いた。

久保もどうやら、覗き騒ぎから連なる事件を知っていたようだ。

「お願い、力を貸して」

明久はそう言いながら、深々と頭を下げた。

すると久保は明久の肩に手を置いて

「頭を上げてくれ、吉井君」

と言った。

明久が頭を上げると、久保は真剣な表情で

「今回の件、僕らも無関係じゃない。真犯人が見つからない限り、僕ら

だって犯人扱いされかねない。だから、協力するよ」

と言った。

その言葉を聞いて、明久は嬉しそうにしながら

「ありがとう、久保くん！」

と感謝した。

こうしてAクラス男子達の協力が決まったが、問題は真犯人だった。

真犯人を見つけるためには、吉井本家からの電波探知機が必要である。

今明久達が居るのは、文月市よりも遠い場所だ。最低でも、数時間は掛かるだろう。

そのことを危惧していたが、颯馬曰く

『なんでも、ヘリを使うとか……』

と苦笑いを浮かべていた。

それを聞いて、明久は

(頼むから、目立たないようにお願いします………)
と祈った。

それはさておき、明久達に打てる手は全て打った。

後は、バカな男子達の覗き行為を食い止めながら、真犯人を見つけ出して、なぜ覗き行為をしたのかを知るのみだ。

だから明久は、防衛戦のための作戦を練った。

Fクラス男子達は前回のことを鑑みて、増援を頼むだろう。

数の暴力に対して無策で挑んだら、あつという間に負けるのは目に見えている。

だから、作戦を練る。

その為の知将ならば、既に居る。

Fクラス代表、坂本雄二。

同じくFクラス、軍師武田信繁。

Aクラス軍師、天城颯馬。

三人の軍師は、自分達の思い付く限りの作戦を提案し、互いに修正し、そして完成した。

その作戦は、召喚獣を使った戦いだった。

確かに、数においては劣っている。

だから、自分達が勝っているので数の差を補う。

それが、点数だった。

Fクラス男子達や他のクラスよりは、自分達の点数が勝っているのは百も承知だった。

だからそれを活かすために、召喚獣を使った戦いをするのだ。

そうすれば、数の差は覆せるはずである。

なにせ、試験召喚獣での戦いに敗れたら、補習室送りなのだから。

「これなら、数の差はなんとかなるな」

「ああ……後は、覗きの真犯人だな」

「そちらは、吉井本家の隠密班が動いています」

雄二の言葉に颯馬がそう返すと、明久が頷き

「それじゃあ、先生達に協力を頼もうか」

と言った。

すると、信繁が立ち上がった

「それに関しては、俺がやろう。西村先生と高橋女史、それと数人でいいな？」

と言った。

「お願いね、信繁」

明久がそう言うと言信繁は頷いてから、部屋から去った。

今現在の時刻は、夕食が終わった午後8時少し前。

恐らく、Fクラス男子達が動くのは女子が入り始める8時半からだろう。

明久達は、動き始めた。

防衛戦のために。

出陣

明久達は入浴時間になるまで、自室に居た。しかし、ただ待っていただけではない。覗きの真犯人を情報面から探していた。とは言え、作業は難航していた。理由は単純。

余りにも、犯人に繋がる情報が少なすぎたのだ。今のところ分かっているのは、見つけた小型カメラのメーカーとその小型カメラに残っていた指紋くらいである。

しかしその指紋の該当は、FにもAにも居なかった。その時、康太が

「……一人だけ、心当たりがある」と告げた。

明久達の視線が集中するなか、康太は懐から一枚の写真を取り出した。

その写真に写っていたのは、一人の女子生徒だった。

「……名前は清水美春……Dクラスの女子だ」

「Dクラスの？」

康太の説明を聞いて、信繁が首を傾げた。

何よりも、女子というのが気になった。

「なんで女子なんだ？」

雄二が首を傾げると、康太は写真を指差しながら

「……こいつは、盗撮した写真や映像の売買。更に、盗聴した音声を使って脅迫なんかもしている」と語った。

それを聞いて、明久達は目をしかめた。

ぶつちやけ言えば、康太も似た事をしている。

しかし、康太は脅迫まではしない。

「しかし、なんで女子が女子風呂に？」

颯馬が問い掛けると、康太が写真の清水を指差しながら

「……こいつは、百合だそうだと端的に告げた。

明久達はそれを聞いて、全てを察した。

清水は自身の欲望を満たすためにカメラを仕掛け、その罪を擦り付けたのだ。

思い出してみれば、突撃してきたメンバーの中にも確かに居た。

あの時は西村の介入があったから、退いたのだろう。

しかし、今後はどう動くか分からないし、まだ彼女が犯人と決まった訳ではない。

彼女が真犯人なのかは、吉井家からの報告を待っているところである。

だがそれまでは、バカな騒ぎを起こす男子達を止める必要があった。

康太の情報収集では、今日も動くと聞いている。

だったら、今はそれを止めるのが最優先事項。

その男子確かにだが、康太の調べによると、他のクラスにも協力を要請していることがわかった。

その総数、約八十人

二年生男子の約八割である。

それに対するは、約二十名。

数の差は歴然だ。

だが、防衛側の士気は非常に高かった。

理由は単純。

人というのは守るためならば、実力を越えるものだ。

邪な輩に、防人は負けない。

それは遙か昔から変わらない。

特に、吉井家は守るための刃だ。

明久の目には、強い光が宿っていた。

愛謙信しい少女を守るために、刃を振るう。

それが、明久の信念だった。

そして、時計を見た明久は、ゆっくりと立ち上がった。

もうすぐ、女子の入浴時間だからだ。

明久は立ち上がると、周囲のメンバーを見渡して

「それじゃあ、行こうか」

と告げた。

明久の言葉を聞いて、雄二達は頷いた。

そして、守るための戦いが始まる。

己が信念に従い、少年達は戦場へと向かう。

解決

明久達が到着した時、既にAクラス男子対BくFクラス男子連合の戦いは始まっていた。

数では劣勢だが、Aクラス男子達は防衛線を維持していた。

それは、連携を重視しているからだ。

Aクラス男子達はやはりAクラスなだけあり、点数が非常に高い。

だからと言うべきか、個人で戦い勝つのが多かった。

しかし、数の差で押されて負けるというデータがあった。

そしてそれは、Cクラス戦で実証されている。

対Cクラスの時、一人の男子が突出し過ぎて孤立。

結果、数人の集中攻撃を受けて負けたのである。

たった一つの敗北。

しかし、この敗北がAクラスの生徒達に一つの事実を教えた。

それは、連携の重要性。

一人では無理でも、二人なら出きることがある。

だからAクラス男子達は、暇さえあれば勉強だけではなく連携の訓練もしてきた。

その結果が、今ここに実った。

Aクラス男子達は、四倍の差に耐えていた。

戦闘が始まって、約三十分

その間、Aクラスは誰一人欠けることなく戦っていた。

しかし、数の差は如何ともしがたい。

四倍の差

それにより、徐々に後退を余儀なくされていた。

明久達が到着したのは、正にそのタイミングだった。

「皆、いくよー!」

「おうよっ!」

「試獣召喚!」

明久の言葉を皮切りに、後ろに続いていた雄二達は一斉にキーワードを唱えて、召喚獣を召喚した。

数学

Fクラス代表、坂本雄二 556点

古典

Fクラス、武田信繁 499点

Aクラス、上杉謙信 487点

保健体育

Fクラス、土屋康太 705点

家庭科

Aクラス、吉井明久 587点

明久達は召喚獣が現れたのを確認すると、一気に突入した。

まさか増援が現れるとは予想してなかった連合部隊は、慌てた。

その隙を突いて、Aクラス男子達は一気に攻勢に出た。

元々が地力の高いAクラスだ。

攻勢に出れば、その攻撃力の高さで押しきれぬ。

それにより、男子連合部隊は勢いを削がれて、防戦一方になっていった。

その光景に防衛側は勝てるかと確信し、鬨の声を上げながら攻勢を強めた。

もはや、防衛側が勝つのは時間の問題かと思われた。

その時、不審な人影が動いていた。

その不審人物達は、戦場を大きく回って、明久へと近づいていた。

戦闘に集中している明久の背後へ。

そして、明久が一人を倒して、もう一人と交戦を始めた。

その瞬間、不審者達は明久目掛けて飛び掛かった。

さて、読者の皆さんはお気付きだろうか？（メタいが、気にするな）

防衛側に参加した人数が少ないことに。

何よりも、彼らが明久に降り掛かる悪意に気づかないわけがない。

明久に不審者達の攻撃が当たる直前、隠れていた颯馬、幸村、秀吉

の三人が不審者達を取り押さえた。

その取り抑えた人物達を見て、颯馬は

「やはり来ましたね……島田さん、姫路さん、清水さん」

と言った。

そう、明久を襲おうとしたのは、本来は入浴中の筈の三人だった。

「離してください！」

「あんた達、離しなさいよ！」

「この豚野郎！ お姉さまを離しなさい！」

三人はそう喚きながら、脱出しようと暴れた。

しかし颯馬達はそれを抑えたまま、戦いの邪魔にならないようにと、近くの別の部屋へと引きずった。

そして簡易的に拘束すると、壁際に座らせた。

「今すぐに、解きなさいよ！」

「そうです！ 吉井君を攻撃出来ません！」

「どうせ、あの豚野郎が真犯人に決まっています！」

三人はそう喚くが、颯馬はそれを無視して

「清水さん……全部、分かっているんですよ」

と告げた。

次の瞬間、清水の表情が変わった。

「どういう……ことですか？」

清水が問い掛けると、颯馬は自分の右耳部分を指差した。

そこにあつたのは、小さな機械だった。

清水が眉を潜めていると、颯馬は機械を操作した。

すると、颯馬のメガネに映像が投影された。

「最新のインターフェイスです……首尾は？」

『ビンゴです。軍師颯馬……清水美春のノートパソコンから、盗撮映像と盗聴音声が見つかりました』

敢えて聞こえるようにしていたのだろう。

そこに居た六人の耳に、男の声が聞こえた。

颯馬が頷くと、秀吉が部屋に据え付けられていたノートパソコンを持ってきた。

颯馬がそのノートパソコンとインターフェイスをコードで繋ぐと、画面に清水の物らしきノートパソコンが映った。

それを見て、清水は息を飲むがすぐに

「人の物を勝手に触るなっ！ プライバシーの侵害ですわ！」
と叫んだ。

しかし、颯馬は冷静に

「その前に、貴女は盗撮ならびに盗聴。更には脅迫をしますよね？
今回の合宿、小型カメラを設置する時に、一人脅迫してますよね？
見られたから黙るようにと」

と目に冷酷な光を宿しながら、そう言った。

それは幸村と謙信、翔子、優子達が極秘裏に聞き込み調査をした結果だった。

脅されたのは、清水と同じDクラスの女子だった。

その女子は浴場に入ったが、専用の薬用シャンプーを籠に忘れたことに気づいて、取りに戻った。

その時に、見てしまったのだ。

清水が小型カメラを仕掛けていたのを。

もちろん、その女子は最初は清水を諷めようとした。

しかし、そこで清水はその女子が学校に密かにバイトをしていることで脅迫したのだ。

文月学園では、無届けでバイトをした場合、最悪では停学すら有り得るのだ。

清水はそれで女子を脅迫し、むしろカメラの設置を手伝わせたのだ。

それにより、清水が設置したカメラの個数と場所が判明。

調べていたのである。

用心深い清水のことだから、手元に記録端末を持っているはずだと。

そもそも無線小型カメラだと、データを送られる範囲は非常に限られる。

最大で、半径百m程だ。

だから、持ってくる必要があるのだ。

データを記録するための端末が。

そしてそれは、吉井家から来た調査班が電波探知機を使って見つけ

た。

これで、証拠は全て揃った。

「美春……あんた……」

島田が驚いた様子で清水を見るが、清水は歯を噛み砕かんばかりに噛み締めて、颯馬を睨んでいる。

「さて……貴女方は一旦、ここから離れてもらいますよ……特に清水さん……貴女には、全て話してもらいます」

颯馬がそう言うと、窓から黒い装備を身に付けた一団が入ってきた。

颯馬はその一団を見ると、三人を指し示して

「連れていけ」

と命じた。

それを聞いて、一団は無言で頷くと、三人が騒げないようにと猿轡を噛ませてから、また窓から去っていった。

颯馬はそれを見送ると、深々と溜め息を吐いて

「やれやれ……ようやく、静かになりそうですね……向こうはどうなってますか？」

「どうやら、防衛側が勝ったようじゃな。覗き側は全員、西村先生によつて補習室に送られたようじゃ」

颯馬の問い掛けに答えたのは、秀吉だった。

秀吉の話しを聞いて、颯馬と幸村は安堵した。

こうして、覗き事件は一応の解決を見たのだった。

夏休み編

夏休み、始まる

合宿が終わった二日後。

明久は、自宅で料理の本を読んでいた。

本来は登校日なのだが、合宿が土曜日まで行われたので代休である。

しかし、覗きに参加した男子達。

更には、島田、姫路、清水の面々は親と共に学校にて学園長から合宿での覗きと盗撮事件についてお達しが通達されているだろう。

尚、後に聞いた話では、覗きに参加した男子達は全員、一週間の停学処分。

姫路と島田に関しては、一ヶ月の停学処分と週三日で放課後に三時間間の道徳の補習。

そして、清水に至っては、無期限の停学処分
実質の留年である。

しかも、来年は強制的にFクラスが決定した。

この決定に、当初は清水の父親が抗議したが、それは母親によって鎮圧された。

見ていた西村曰く

『見事な手際だった』

とのことだった。

あの西村に言わせたのだから、本当だろう。

清水母、恐るべし。

そして、明久はカレンダーを見てから

「もうすぐ、夏休みかあ……」

と呟いた。

もう、7月も半ばで来ている。

後数日もしたら、夏休みに入る。

さて、今年はどうしようか

皆というのは、恐らく何時ものメンバーだろう。

しかし、なんでだろう？　と思いつながらも、明久は

「皆、今月の25日から三日間、予定空いてる？」

と問い掛けた。

すると、翔子が直ぐに

「……私と雄二は空いてる」

と答えた。

それを聞いて、明久は

「なんで、雄二の予定まで？」

と翔子に問い掛けた。

すると、翔子は親指を立てながら

「……雄二の予定は、頭に入ってる」

と答えた。

愛が、重い……

明久がそう思っていると、他のメンバー達は空いてると答えた。

後は、雄二以外のFクラスメンバーだ。

故に明久は、ライ？を使った。

『今月の25日から三日間、空いてる？　雄二は空いてるの知ってるから』

から』

と問い掛けた。

すると

『なんで、俺の予定を知ってるんだよ』

と雄二から来た。

それに対して、明久は正直に

『霧島さんが覚えてたんだ』

と答えた。

『なら、仕方ねえ』

『仕方ないのかのう』

『……受け入れてるのか』

雄二の言葉に対して、秀吉と康太から突っ込みが来た。

そして、信繁から

『霧島の愛が、重いと思われる件について』
と来た。

それに対しては

『慣れた』

『慣れたんかい!!』

という、やり取りがあつてから少しして

『ワシは空いてるぞ』

『……俺も空いてる』

『俺達は全員空いてるぞ』

と来た。

それを受けて、明久は母親に全員空いてると返信した。

すると直ぐに

『だったら、朝八時に羽田空港に集合!』

と来た。

「はい?」

その文章を見て、明久は首を傾げた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

当日の正午

「ウィーアーイン! 沖縄!」

明久達は、沖縄に居た。

正確には、沖縄の西表島のとある一角の砂浜だった。

「母さん、説明」

「はい」

明久が問い掛けると、明恵は砂浜に正座した。

今明久達が居るのは、なんと、吉井家のプライベートビーチらしい。

そして、明恵は明久の数少ない友人達に感謝を込めて、そのプライ

ベートビーチに招待したらしい。

なお、飛行機代は全て吉井家持ち。

お土産すら、既に手配済みらしい。

なんとという手際の良さだろうか。

「だったら、ちゃんと説明してよ! いきなり空港に召集されて、飛行

機に乗せられて、気付いたら沖縄の西表島だよ!? 驚いたからね!?

「ドッキリがいいかなって」

「ドッキリすぎだよ!？」

後に聞いたら、飛行機もプライベートジェット機だったらしい。

明恵は立ち上がると、全員を見渡して

「それじゃあ、皆! 好きに遊んでねえ!」

と声を上げた。

こうして、明久達の夏休みが始まったのだった。

一日目、前半

「まさか、沖縄に来れるなんてね……」

「まったくじゃのう」

と話し合っているのは、水着に着替えて砂浜に居る木下姉弟である。

指定された時間に空港に着いたら、あれよあれよと沖縄だった。

確かに、何時かは来たいと思っていた。

それがまさか、今になるとは思っていなかった。

しかも、高い飛行機代は吉井家持ち。

ありがたかった。

学生にとって、飛行機代は大変高い。

それこそ、貯金を切り崩さないといけないだろう。

それを考えると、吉井家が出してくれて大変良かった。

今の木下姉弟は、二人で過ごしている。

両親は仕事で海外を飛び回っており、小遣いはそれぞれの口座に

そして、生活費は主に電気代や水道代、ガス代は両親の口座から引

き出されていて、食費は二人で分担している。

そして、緊急用たる貯金口座管理は優子がしていた。

この貯金口座は、両親が月毎に決まった金額を入れてくれており、家電が壊れた時や、友人の誕生日プレゼント用の出費の時とかに使っていた。

しかし、ここ最近はちよつと出費が重なってしまっており、残高が心許なかったのだ。

両親に連絡すれば、入れてくれるかもしれない。

しかし、それは気が引けた。

理由を説明すれば、入れてくれるだろう。

しかし、親に甘え過ぎるものなど。

沖縄に来てからの出費も、まだ微々たるものだ。

水着代の千円少々。

その水着代とて、吉井家が七割ほど負担しているとのこと。

「一体、どれ程の影響力を……」

優子は、思わずそう呟いた。

以前まで居た筈の、文月学園教頭

竹原も、いつの間にか居なくなっていた。

しかも、図書室にある教職員名簿からも、竹原の名前が無くなっていた。

まるで、最初から居なかったように。

恐らく、あらゆる所のデータベースから竹原の個人情報も消されているだろう。

「吉井家を怒らせた代償……か」

優子はそう言いながら、水着姿で寝転がっている明恵を見た。

なお、優子の第一印象は若いだった。

明久の年齢から考えると、最低でも四十代の筈である。

しかし、明恵の見た目はどう見ても、三十代だった。

しかも、明恵から聞いた話では明久には大学を卒業した姉が居ること。

そこから考えると、五十代の筈だ。

アンチエイジも真っ青である。

そしてもう一つの印象は、底が知れないだった。

学園祭にも来ていたが、ニコニコと笑みを浮かべて回っていた。

そこから優子は考えたが、首を振って

「今は、関係ないわね……」

と呟いた。

すると、準備体操を終えたららしい秀吉が

「姉上、どうしたのじゃ？」

と優子に問い掛けた。

その問い掛けに対して、優子は笑みを浮かべて

「大丈夫よ」

と言うと、一歩踏み出した。

そして

「さあ、とことん遊ぶわよ！」

と駆け出した。

その頃、明久と謙信は

「静かだね……」

「そうですね……」

ヨットに乗っていた。

なお、そのヨットも吉井家所有の物である。

操舵しているのは、中年男性だった。

その男性も、今は釣りをしている。

聞いた話では、夜食の食糧らしい。

なお、明久と謙信も水着姿である。

明久は蒼い水着を履いて、上にパーカーを着ている。

そして謙信は、蒼地に白い線が入ったビキニにパレオを巻いていて、上は明久とお揃いのパーカーを羽織っている。

今の海原は波風もなく、静かだった。

砂浜に視線を向けてみれば、雄二が何やら潜っている。

よく見ると、その手には網と銚がある。

すると

「獲ったどーっ!!」

と声が聞こえた。

その声を聞いて、明久は苦笑しながら

「雄二、君はどこぞの野生児かい？」

と言葉を漏らした。

ふと気付けば、横で謙信が笑っている。

どうやら、ツボに入ったらしい。

「はいはい。大丈夫？」

明久は謙信を心配して、謙信を支えた。

少しすると、笑いが収まった謙信が涙目で

「すみません……予想外だったので、つい」

と謝ってきた。

謙信のその謝罪に、明久は笑みを浮かべながら

「ああ、いや。あれは、僕も完全に予想外だったよ」

と返した。

すると、操舵の男性が

「若様！一度、船を移動させますぜ！」
と言ってきた。

それを聞いて、明久は

「はい。わかりました！」

と返した。

そして、謙信に手を差し伸べて

「お嬢様。お手をどうぞ」

と言った。

すると謙信は、僅かに顔を赤くして

「はい、明久」

と明久の手を掴んだ。

そして二人は手を繋いだまま、船室に向かった。

ゆつくりと、だが、確実に。

ゆつたりとした日常。

それは、夢く、そして、大切な時間。

何時かは、唐突に終わりを告げるかもしれない。

しかし、今は……

明久は、船室の窓から外を見た。

青く輝く、綺麗な海原を。

平和の象徴を、白い波と共に船は進んでいく……

沖繩旅行は、まだ始まったばかりである。

一日目、中

お昼をそれぞれ取った後、明久達は沖に出ていた。乗っているのは、大型のクルーザーだった。

つまりは、クルージングだ。

なお、大半の面子は経験している。

この中で初めてなのは、木下姉弟と康太、雄二だった。

意外な話したが、雄二は一回も乗ったことは無かった。

過去に翔子が何回か誘ったが、その頃は荒れていたので無視していた。

康太は空を飛んでいる鳥を写真に納めている。

彼ほどの技量ならば、素晴らしい写真になっているだろう。

ただし、彼が本気で写真撮影するのは、エロだけだろう。

それが、康太がムツツリーニと呼ばれる理由だから。

閑話休題

明久達はクルージングしながら、釣りもしていた。

聞いた話としては、かなりの大物も釣れることがあるらしい。

その証拠に

「フイーーーーッシユ！」

「負けるかあああああ！」

雄^赤二と明^青久が、ハイテンションに釣りまくっていた。

更に、船首では

「フハハハハハハ！ 我^{オレ}に敵うかなあああ!?!」

と信^金繁が、これまたハイテンションで釣りまくっている。

ぶつちやけ言って、あまりのハイテンションに他の面子は引いている。

「とりあえず……落ち着くまで放置しましょう」

という謙信の提案に、残りの面子は頷いた。

なお、落ち着いたのは数分後だった。

「いやあ、悪いな」

「なんか、こう……釣り師魂っていうの？」

「それに触発されてな」

苦笑いを浮かべながら謝罪してきた三人の頭には、見事なたんこぶが鎮座している。

三人が落ち着いた、もとい、三人を落ち着かせたのは、明恵である。余りにもハイテンションかつ、五月蠅い三人に、明恵が静かにキレたのだ。

そして三人の背後に回ると、見事なジャーマン・スूपレックスで黙らせたのだ。

なお、その直後のことを康太はこう語る。

『……犬神家が三つ』

と。

そして、三人が元に戻ったので、本来の予定が再開される。

「はいはい！ お馬鹿三人組も落ち着いた所で、シユノーケリングをするわよ！」

そう言ったのは、他ならぬ明恵である。

そんな明恵は、既にウエットスーツ姿だ。

「二応、皆のサイズに合わせたのを色事に用意してあるから、着替えてね？」

と明恵は、船室を指差した。

そんな明恵の言葉に従い、全員はウエットスーツに着替えた。

そして、先に明恵と明久が飛び込んだ。

二人は経験者であり、先に障害物が無いかを確認しに潜ったのだ。少しすると二人が上がってきて、？が書かれたボードを掲げた。

このボードは、こういう時に使える優れものである。

マグネットを使って文字や記号を書いて、会話が出来ない水中や会話が難しくなる立ち泳ぎの時に使えるコミュニケーションが取れるのだ。

それを見て、先に謙信が

「では、お先に」

と短く言うと、飛び込んだ。

そして、浮かび上がって少し離れると、残っていた面子も次々と飛

び込んだ。

明恵と明久は全員が飛び込んだのを確認すると、ジェスチャーで集まるように指事した。

そして、全員が近くに集まったのを確認すると、再びボードを掲げた。

そこに書いてあったのは、並び順だった。

一番前に明恵で、最後が明久。

そして二人で、他の面子を挟むように書いてある。

これで、万が一にでもはぐれるのを防ぐのだ。

それを全員が見て、その通りに並んだのを確認すると、先に明恵が潜った。

それに続くように次々と潜っていき、最後に明久が潜った。

そして見えたのは、幻想的な光景だった。

海水は透き通るようで、海底の珊瑚がよく見える。

よく見ると、海底には過去の大戦で沈んだらしい軍艦の残骸が見える。

そんな軍艦の残骸に、色とりどりの魚が住み着き、優雅に泳いでいる。

本土の海では、なかなか見れない光景だった。

ふと気付くと、明恵が手招きしている。

一旦呼吸してから再び潜り、明恵に近寄った。

すると明恵は、腰のポシエツトの中から何かを取り出した。

どうやら、魚肉ソーセージらしい。

明恵は封を切ると、半分に折った。

そして、その半分を指で解すと、魚達が次々と集まってきた。

しかも、明恵が解した魚肉ソーセージを食べている。

その光景に、誰もが見いていた。

そして半分あげると、上がってから残りの半分を近くの謙信に渡して、更にポシエツトから新しい魚肉ソーセージを何本か出した。

明恵は同じようにすると、次々と渡した。

つまりは、自分であげてみなさい。

ということなのだろう。

それを理解した全員は三度潜ると、魚肉ソーセージを解し始めた。その光景を、明久と明恵は少し離れた場所から見ていた。全員嬉しそうに与えており、微笑ましい光景だった。

すると、明久が腰のポシエットから水中カメラを取り出してシャツターを押した。

そして数十分後、全員の姿は船上にあった。

そして、かなり興奮した様子で

「凄かったな！」

「貴重な体験出来たね！」

「あんな距離で、餌やりが出来るもんなんじゃない！」

と会話している。

どうやら、先程のシュノーケリングのことを思い出しているようだ。

「どう？ 楽しかったかしら？」

と明恵が問い掛けると、優子が満面の笑みで

「凄く楽しかったです！ あんな間近で、魚に餌やりが出来るなんて思いませんでした！」

と語った。

それを聞いて、明恵は頷くと

「それは良かったわ。この後だけど、そろそろコテージに向かうわよ？ 時間も時間だし、今日は移動の疲れも有るだろうしね？」

と言った。

時間は、間も無く五時半頃だ。

大分太陽は傾き、海面がキラキラと輝いている。

そして、明恵の言う通りに、全員は疲れていた。

慣れない飛行機と舟に乗り、更には普段使わない筋肉も使った。全身が重かった。

「それじゃあ、船長さん！ お願いしますねえ？」

明恵が頼むと、船長たる男性は無言で親指を立てた。

なお、この船長のモットーは《海の漢は不言実行》と《海の漢は、背

中で語れ《だそうだ》。

どうでもいいが。

彼の操舵により、クルーザーは静かに帰港したのだった。

一日目、後

「食材を回せ、料理長！　メインディッシュだ！」

「は、はい！」

とキッチンに立っているのは、明久と今居る別荘の料理長だ。

とはいえ、明久の素早い調理に料理長が気圧されていた。

その光景を見て、明恵が

「この体は、レシピで出来ている……血潮は鉄で心は料理人……幾多の調理を越えてメシマズは無く、お残しも無し……彼の者は常に研究し、新しい料理を覚えていく……故にその体は……無限のレシピで出来ていた」

と言つて、それを聞いた信繁達が吹いた。

「くっそ……ぶっほっ」

「卑怯な……ぶぶっ」

吹いている信繁と雄二を尻目に、明恵は拳を握り締めて

「明久のクラスは、コックね！」

と断言した。

その直後

「誰がサーヴァントか」

「あ痛っ!？」

調理を終えた明久が、その手に持っていた皿の底で、明恵の頭を叩いた。

そして、持っていた皿を机の上に置くと

「というわけで、沖縄料理です！　いやあ、やっぱり新しい料理は楽しいね！」

と満足そうに頷いた。

それを見て、何人かは

(そんなんだから、コックと呼ばれるんだよ)

と内心で突っ込んだ。

「明久様の料理への意気込みは凄まじいですね……気圧されましたよ」

と言ったのは、明久と同じように皿を持った女性だった。
その女性が、今居る別荘の本来の料理長だ。

「ごめんなさいね、明久が」

「いえいえ、教えてるこちらが楽しいくらいですよ」

明恵の謝罪の言葉に、その女性は朗らかに笑いながら返答した。

そして、持っていた皿を机に置く

「皆様、私はこの別荘の料理長を勤めます。朝田明日菜と申します。
短い期間ですが、皆様のお食事を御用意させていただきます」

と挨拶した。

それに各々挨拶すると、他に使用人達により次々と料理が運ばれてきた。

その料理は全て、先ほどの明久が言った通りに沖縄料理だった。

「どうぞ、お召し上がりくださいませ」

と明日菜が頭を下げると、食事が始まった。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

食事から時が経ち、明久は入浴していた。

明久が眺めている夜空には、満月が浮かんでいる。

そんな明久の隣には

「月が、綺麗ですね……」

謙信が居た。

「そうだね……あ、夏目漱石が本当にそう言ったのかは、諸説あるからね」

「明久、誰に説明しているのですか」

明久の説明に謙信は突っ込みを入れて、明久の背中に背を預けた。

今の時間は、午前0時。

もう殆どのメンバーは寝静まり、別荘は静かだった。

他に起きているのは、明恵くらいだ。

そしてその明恵は、ベランダで月見酒と洒落混んでいる。

二人もとっくに入浴は済ませ、後は寝るだけだった。

しかし、どうにも目が冴えていた。

だから二人は、一緒に露天風呂に入ることにした。

ただただ、ゆつくりと時の流れに身を任せて入浴していた。
ふとその時、謙信が付けていた背を離した。

それに気が付いた明久は、謙信が上がるのかと思って振り向いた。
その直後、明久の首筋にスルリと謙信の腕が絡み付いて

「ん……」

「ん……」

二人の唇が、重なった。

予想外だったからか、最初こそ驚いていた明久だったが、すぐに謙
信とのキスに意識を傾けた。

「ん、はむ……」

「はむ、ん……」

気付けば、明久は謙信を抱き締めていた。
優しく

しかし、力強く。

愛しい人だから

最愛の恋人だから、離したくない。

その思いが、二人の中にあつた。

そして、短くも長いキスは終わった。

二人はゆつくりと唇を離すと、ある種の熱に浮かされた表情で互い
を見つめた。

そして、少しすると

「部屋に、行く？」

と、明久が問い掛けた。

その問い掛けに対して、謙信は蕩けた表情で

「はい……」

と答えた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

「ん……」

今、明久の腕の中で、裸身の謙信が眠っていた。

そんな謙信を、明久は優しく撫でた。

「謙信……血に濡れた僕を愛してくれて、ありがとうね……」

謙信が寝ているのを知っていたが、明久は語り掛けた。

「だから、もう少し……もう少しだけ待ってね、謙信……必ず、蒼き剣聖として、帰るからね……」

明久はそう言うと、寝ている謙信の額に優しくキスをした。

そして、寝ている謙信を優しく抱き締めながら眠りについたのだった。

沖縄旅行 二日目 1

翌日

「ぐちそうさまでした」

「お粗末様でした」

朝食を食べ終わった全員が一斉に言うと、明日菜は微笑みながら軽く頭を下げた。

そして、明日菜は旦那さんと食器を片付けていった。

その後、一行はペンションから出た。

そして、車に乗ると

「今日は一旦、沖縄島に行くわよ」

と明恵が言った。

「沖縄に来たのなら、やっぱり行かないといけない場所があるからね」
明恵の言いたいことを、全員は理解した。

日本人であり、学生ならば知らないといけないだろう。

第二次世界大戦時、空爆以外で数多くの民間人が亡くなった日本唯一の地。

それが、沖縄だ。

故に、沖縄には戦史に関する施設が多数ある。

船で移動した後、さらに車で移動。

そして、到着したのはひめゆりの塔だ。

ここは、第二次世界大戦時に数多くの女学生が亡くなった場所に建てられた施設だ。

博物館となっている区画には、当時に使われた物品や地下防空壕の中から発見された物品が飾られている。

それを学生一同は、神妙な表情で見ている。

「私達と大差ない歳の女学生達が、ここで……」

「今の世も、決して平和とは言えませんからね……無関係ではいられない
ませんか……」

「これ……懐中時計かな？」

「だね……熱で変形しちゃってる……」

「…………これ…………」

「御守り…………か？ 半分以上燃えて、分からないな」

展示を見て、一同は口々にそう言いながら進んだ。

先に進むと、少し開けたフロアに出た。

そこでは、ビデオが流されている。

白黒のビデオで、内容は第二次世界大戦末期の沖縄上陸戦だった。

アメリカ軍兵士が、火炎放射機を洞窟に向けて放ち、隠れていたら

しい人が火だるまになって出てきて、次々と倒れていく。

それを辛そうに見ていると、映像が切り替わった。

次に映ったのは、川原で一人の女学生が両手を上げており、それを

アメリカ軍兵士が受け入れているシーンだった。

そのビデオを、学生一同は真剣に見ていた。

ふとその時、明久は右前方に座っている人物に気が付いた。

黒に近い紺色の髪をショートカットにした少女だ。

明久は首を傾げながらも

「虎綱さん？」

と呼んだ。

「はい？ ……あ、明久さん？」

「あ、やっぱり虎綱さんだった」

明久に呼ばれて振り向いたのは、明久の予想通りの人物

とらつなはるひ
虎綱春日だった。

小柄な体躯に、右目を隠す髪型

気弱そうな表情だが、そこからは予想出来なさそうな弓の腕を誇る

少女だ。

もちろんだが、謙信達の知り合いでもある。

彼女の家は武田家を主家に仰ぐ家系で、もちろん昔からの付き合い

だ。

だから、幼なじみメンバーを見て春日は笑みを浮かべた。

だが、雄二達の姿を見ると僅かに体を震わせた。

それを見て、幼なじみメンバー達は春日が人見知りだということ

思い出した。

「大丈夫ですよ、春日」

「こいつらは、俺達が今行ってる学校の級友だ」

「人柄は、保証します」

と信玄達が言うのと、まだオドオドしていたが

「と、虎綱春日です。よろしくお願いいたします」

と自己紹介した。

すると、雄二達は順番に

「俺は坂本雄二だ」

「……霧島翔子」

「木下優子よ」

「木下秀吉じゃ」

「……土屋康太」

と名乗りながら、握手した。

すると、信玄が

「一応言っておきますと、春日は二十一歳ですよ」

と言った。

それを聞いて、雄二達は目を見開いた。

小柄な体躯と可愛い服装と幼い顔立ちから、まさか年上とは思っていなかったからだ。

すると、春日は微笑みながら

「昔から、年下に見られてましたから、大丈夫ですよ」

と言った。

彼女、虎綱春日は武田家を主家と仰ぐ現虎綱家の当主だ。

現在は武田家守備の総責任者である。

「虎綱さんは、旅行？」

「はい、一泊二日の沖縄旅行です」

明久が問い掛けると、春日はそう答えた。

よく見ると、彼女の座っている席の右横には大きめのポストンバッグが置いてある。

恐らく、それが荷物なのだろう。

だが、春日の顔は僅かに悩んでるように見えた。

それに気付いて、信玄が

「春日、何かあったのですか?」

と問い掛けた。

その問い掛けに、春日は僅かに体を震わせてから

「あ、あの……実は……」

と語りだした。

なんでも、彼女は沖縄では民宿に宿泊する予定だったらしい。

しかし、今朝がたにその民宿でガス漏れが発覚したようだ。

その影響で、その民宿は緊急点検をしなければなくなり、泊まれなくなってしまうのだ。

それを知ったのは、那覇空港に着いた時だった。

那覇空港の待ち合わせ指定場所に向かい、迎えと思った人に話し掛けた時に説明されたのである。

それから春日は、取り敢えず事前の予定通りに観光しながらホテルを探していたのだが、中々見付からないでいて、途方にくれていたらしい。

その時に、明久達と偶然（作者によって）出会ったのだ。

その話を聞いて、信玄は少し考えてから

「明恵さん」

と明恵に視線を向けた。

そして明恵も、頷くと電話を始めた。

数分後

「春日ちゃん、私達が泊まってるペンションに来なさいな」

と明恵が言った。

それを聞いて、春日は

「え、よろしいんですか!?!」

と声を上げた。

すると明恵は、微笑みながら

「ペンションの方々も良いと言ってくれたし、何よりも、困ってる知り合いを放置するのは寝覚めが悪いしね」

と言った。

それを聞いても、春日はまだ悩んでる様子だった。

だが、信玄が

「春日、吉井家当主の奥方がああ言ってくださったのです。御厚意を示してくれたのです。甘えなさい」

と言った。

それを聞いて、春日は

「わかりました。明恵様の御厚意に甘えさせていただきます」と頭を下げた。

こうして、同行者が一人増えた瞬間だった。／

沖縄旅行 二日目2

ひめゆりの塔から出ると、明久達一行は次の目的地に向かった。次の目的地は、戦没者慰霊碑である。

「こんなに、亡くなったのか……」

「彼等のおかげで今の日本があるのを、忘れちゃいけないね……」

明久達はそう言いながら、手を合わせた。

そして、歩いていた時

「あ、この名前……」

と明久が、ある名前を見つけた。

その名前は《吉井颯劍^{よしいさうけん}》

それは、第二次世界大戦末に日本が世界に誇った世界最強の戦艦戦艦大和に参謀役の一人として乗船し、帰らぬ人となった。

先代当主の弟だった。

「見つけたわね、明久」

「この名前……先代当主弟の名前……」

明久がそう言うと、明恵は頷いてから明久の横に座った。

「そう……当時陸軍所属が多かった吉井家の中で、珍しく海軍所属だった人よ……」

明恵はそう言うと、手を合わせた。

そして、少しすると

「颯劍様はね、自ら立候補して大和に乗艦したそうよ……死ぬと分かっていたがね」

と語りだした。

「そして何よりも、天皇陛下に講和するように何度も上訴したそうよ……この戦争、もはや勝利は不可能って言ってね……それを、陸軍の突撃バカの上層部が断固拒否してね……結局、アレが日本に投下されてしまった……吉井家は以前からその情報を掴んで、警告してたのね……」

「原子爆弾……!」

世界で唯一、日本だけが被爆した兵器

現代呼称、核爆弾

当時呼称、原子爆弾

日本に二発投下され、その二発で直接被害では約二十万人が犠牲になり、二次被害や放射能汚染を含めると倍近くの人達が亡くなった禁断の兵器

日本はその教訓から、核兵器の非保持を掲げ、戦後約八十年近く経った今も守っている。

そして、世界に対して核兵器の廃棄を呼び掛けている。

核兵器は、あつてはならない兵器だと。

なお余談だが、その団体のスポンサーの一つに吉井家もある。

あのような戦争を、繰り返しさせないために

「原子爆弾が投下された後、陛下は酷く後悔されていたそうよ……早くに、吉井家の忠告を聞いて、講和すべきだったって……」

「そうなんだ……」

その話を、明久だけでなく全員が聞いていた。

当時の話は、歴史でしか知らない。

だから、当時のことを知る人から話を聞くとというのは貴重な体験だった。

その時だった。

「吉井家の方ですか？」

と声が掛けられた。

声のした方に向くと、そこに居たのは軍服を着た男性だった。

「貴官は？」

「自分は、海上自衛隊、沖縄基地所属の国木田一等海尉です」

明恵が訪ねると、男性はそう答えた。

一等海尉

つまりは、大尉相当である。

「その一等海尉さんが、なんの用かしら？」

明恵がそう問い掛けると、彼は

「基地司令が大事なお話があると、お呼びです」と伝えながら、ある方向を指差した。

その先には、一台の高機動車が停まっていた。
それを見て、明恵は

「……わかりました。私が行きましょう」

と言つて、立ち上がった。

すると、明久が

「待つて、母さんが行ったら、誰が車を運転するのさ」
と言つた。

すると明久は

「それなら、適役が居るじゃない」
と春日を指差した。

全員の視線が集中すると、春日は恥ずかしそうに

「えつと……私、免許持ってます」
と告げた。

「持つてたの!？」

「は、はい……」

明久達が驚くと、春日はオドオドしながらそう答えた。
そして、財布の中から免許証を取り出した。

ゴールド免許だった。

「一応、事故は無いです」

確かに、見せられたから分かる。

「じゃあ、道案内するから、お願いしても?」

明久がそう言うと、春日はコクリと頷いた。

そして、明久達は明恵と別れると車に乗った。

勿論だが、明久は助手席である。

そして、春日の運転だが、かなり丁寧だった。

やはり、本人の性格が大きいのだろう。

そうして、安全運転で港に到着

明久達は、西表島に向かう船に乗った。

そして、数十分後

「ほい、到着……つと」

明久達は、バスから降りた。

なお春日の荷物だが、意外にボストンバック一つだけだった。それに関して

「私、最低限しか持ってきてないから」と春日は、明久達に教えた。

これに関して、信玄が

「彼女は昔から、最低限しか荷物は持たないですから」と言った。

どうやら、性格的に必要最低限しか持たないらしい。

そして、ペンションに到着した。

すると、明日菜が

「お待ちしてました。そちらの方が、件の方ですね？ お部屋の用意は出来てます。こちらです」

「すみません。お世話になります」

春日はそう言うと、頭を深々と下げた。

そして、先導する明日菜の後に続いた。

明恵が帰ってきたのは、夕食が始まる直前だった。

帰りは海上自衛隊が、ヘリコプターで送ってくれたのだ。

そして、夕食が終わり明久は明恵の部屋に向かった。

「それで、海上自衛隊の基地司令が呼んだ理由はなんだったの？」

と明久が問い掛けると、明恵は傍らの台の上に置いてあった箱を取った。

かなり古い箱だった。

「この箱は？」

「問題は、中身よ」

明恵はそう言うのと箱の蓋を開けて、中身を取り出した。

それは、一冊の本だった。

その表紙には、《吉井颯劔》と書かれていた。

「それって!？」

「ええ……漁師の方が、小島の木の根っこに引っ掛かってたのを見つけたみたいなの……それで、警察から海上自衛隊に渡されたみたいね」

明恵はそう言うのと、その日記を箱に仕舞った。

「どうやら、中を読むつもりは無いらしい。」

「彼の遺物、少なかつたから……貴重な物ね」

明恵はそう言うのと、箱を大事そうにキャリーケースの底に仕舞った。

こうして、二日目も終わったのだった。

沖縄旅行 三日目

三日目

明久達は、朝食を食べ終わると荷物を部屋から運び出した。そして、ペンションの前に並ぶと

「ありがとうございます！」

と感謝の言葉を述べた。

すると明日菜は、微笑みを浮かべて

「いえいえ、またいらしてくださいね」

と言った。

そして明久達は、車に乗ってペンションから去り、西表島から去った。

そして沖縄本島に渡ると、最後の観光地に向かった。

その場所は、美ら海水族館である。

日本で唯一、ジンベエザメが居る水族館だ。

そこに訪れると、明久達はチケットを購入し、中に入った。

「うわぁ……凄い……」

「デカイね……ジンベエザメ……」

悠々と泳いでいるジンベエザメを見て、明久達は感心した声を上げていた。

約10mを誇る全長で、ゆったりと遊泳している。

それは寧ろ、一種の威圧感があった。

一般的に知られるサメは獰猛で、人にも襲いかかることで知られている。

しかしジンベエザメは、世界でも数少ないプランクトンを食べるサメなのだ。

動きもサメの中ではゆったりしており、常にその大きな口を開いていて、一種の愛嬌さを感じるだろう。

美ら海水族館の見所は、ジンベエザメだけではない。

間近で見れる海亀。

更に南方にある水族館故に、温暖な海の魚が中心となっている。

その時だった。

『間もなく、外の大プールにてイルカのショーが開催されます。よろしければ、お越しく下さい』

と放送が聞こえて、明久達は向かった。

入り口で雨合羽を受け取り、明久達は席に座った。

そして始まった、イルカショー。

イルカはインストラクターのサインを見て、次々とアクションを成功させていく。

それを見て、明久達は感嘆の声を上げた。

「凄いなあ……」

「イルカは、頭が良いからね……芸を覚えるんだよね」

「小さい指示でも、確実にやってるね」

「イルカの知能、人間並って聞いたことがあるな」

と話してる間にも、イルカは次々と成功させていく。

そのアクションの中で、イルカが高い位置まで跳躍

水面に着水した。

すると、大量の水が巻き上がって客席に届いた。

「なるほど……このための雨合羽だったのか」

「まあ、濡れるのも楽しみなんだろうが」

「濡れたら、着替えが大変ですな」

明久達は入り口で雨合羽を配っていた理由に気付いて、納得していた。

子供は大喜びだが、大人としては問題である。

明久達はもうすぐ帰るために、車の中に荷物がある。

しかし何らかのツアー客や、ホテルから直接来ている人達なんかは

着替えは工面出来ない。

濡れたままで車に乗れば、処理が大変だ。

それを防ぐために、雨合羽を配っていたようだ。

ショーが終わると、明久達は雨合羽を返却

そして、水族館を回るのに戻った。

それから明久達は、様々な魚を見て、おみやげを購入

そして、美ら海水族館から一路、空港に向かった。

車内は静かで、起きていたのは、運転していた明恵と助手席に座っていた明久だけだった。

「皆、寝てるみたいね」

「疲れたみたいだからね」

バックミラーで後方を見た明恵が言うと、明久が肯定した。

すると明恵は、横目で明久を見て

「明久、トラウマはどうかしら？」

と明久に問い掛けた

すると明久は、左手を見ながら

「大分、刀は握れるようになってきたね……けど、完全には無理かな……」

と答えた。

「そう……心の病だものね……簡単には行かないわね」

明久の返答を聞いて、明恵はそう呟いた。

実際、過去にはトラウマを完全に克服した者も居れば、一生悩まされ続けた者も居た。

それは一重に、本人の精神力次第と言える。

そう言う意味では、明久は高い方なのだろう。

でなければ、刀を握れるようになるわけが無いのだ。

少しすると、明恵が

「明久……あなたは恵まれてるわ……謙信ちゃんだけじゃない……あんなに、慕ってくれる友達が居るじゃない」

と言いながら、バックミラーで後ろを見た。

それに倣い、明久も後ろを見た。

全員、肩を並べて眠っている。

「それに、いざとなったら、私達親が居る……だから、明久は気にしないで突っ走りなさい」

「うん……ありがとう……」

明恵の言葉に、明久は感謝の言葉を述べた。

破天荒な性格の明恵だが、やはり親なのだ。

明久が心配だったのだ。

明恵は明久の顔を横目で見ると

(あの頃よりかは、険が無くなったわね……転校させて正解だったわ……)

と自分の決断を自画自賛した。

なにせ、孤独になってしまっていた明久に、かなりの人数の友達が出来たのだから……

そして数十分後、明恵が運転していた車は空港に到着。

明久達は、吉井家が用意した飛行機で本土に帰還した。

帰り際に、幼馴染みメンバー以外に明恵が用意したおみやげが渡されて、それぞれ用意された車で帰宅。

明久達も、用意された車で帰宅した。

なお、渡されたおみやげの中身にメンバーが驚いたのは、また別の話しである。

こうして、沖縄旅行は幕を下ろしたのだった。

殴り込み

旅行から帰ってきて、数日後。

明久達は学校に居た。

その理由は、登校日である。

なお、Aクラス教室にはAクラス生徒の他に、雄二、秀吉、武田兄妹、幸村、康太の姿もある。

Fクラスは現在、青空教室の真っ最中である。

具体的には、校庭。

その理由は、教室の改修工事だ。

原因不明によりFクラス教室の改修工事がなされておらず、調べた結果、予想以上に教室の損耗具合が酷かった。

それにより、当初予定していた期間よりも長い期間が必要となってしまうた。

それに伴い、予定外の青空教室と相成ったのだ。

Aクラスでは担任による点呼も終わり、後は解散自由の夏期講習が行われていた。

夏期講習とは言っても、それは名前だけの自習だった。

それにより、明久達は談笑していた。

「宿題の進み具合、どう？」

「数学は即行終らせた。自由研究も目下順調だ」

「お、同じ位だな」

男子陣は宿題の進み具合を確認しており

「……このオカズ、美味しい」

「どうやって作ったので？」

「それはですね……」

女子陣は料理談義していた。

その時だった。

「うるせー!!」

ハゲとモヒカン
と常夏が、乱入してきた。

その二人に全員の視線が一旦集まったが、すぐに

「僕は今回、これを自由研究のテーマにしました」

「む、随分と高度じゃのう」

「……俺は、カメラの歴史を」

「お前らしいわ」

「で、隠し味にレモンを入れるんです」

「ああ、なるほどねえ」

と会話を再開した。

つまりは、無視したのである。

「おいこらっ!？」

「無視するとは、いい度胸だな！ ああっ!？」

無視されたことに怒り、常夏は怒声を張り上げた。

すると、一堂は深々と溜め息を吐いて

「なんの用だ、常夏先輩」
ハゲとモヒカン

「こっちだって、暇じゃないんです」

「文化祭の件で、Fクラスに強制編入になった問題児」

「道徳の補習は終わったのか?」

と、怒涛の口撃（誤字に非ず）を繰り出した。

なお、この二人は優子が言った通り、文化祭の件でFクラスに強制編入されている。

そして、夏休み期間の八割は道徳の補習とボランティアが義務付けられたのだ。

「用件も何も、てめえら！ うるせえんだよ!」

「だから俺達が直々に、文句を言いに来たんだよ!」

常夏は明久達の口撃に一瞬尻込みしたが、直ぐに威勢よくそう言った。

すると今度は、クラス全体で溜め息が漏れて

「あんたら、バカか?」

「このAクラスから、お宅らのFクラスまでどのくらい離れてると思ってるのよ」

「しかも、防音設備がしっかりしてるこの学園で声が聞こえた? んなわけあるか、アホ」

「小学校からやり直せ、カス」

「あなた達の顔見ると吐き気覚えるから、二度と来ないで」
「つか、名前なんだったっけ?」

と口撃の嵐が殺到した。

流石にAクラス全員からの堪えたのか、常夏は涙目だった。

しかし、そこで諦める二人ではなかった。

Aクラス全員を見回すと

「てめえら! それが先輩に対する態度か!」

「俺達が教育してやらあ!!」

と怒声を張り上げて、袖を捲った。

それを見て、明久達も構えた。

その後

「何をしとるか、貴様ら!!」

「あだふっ!」

「べげっ!」

鉄人の拳が、二人の頭に振り下ろされた。

鉄人の拳撃を受けて、二人は暫くの間蹲った。

そして

「この、何しやがる!」

「教師が生徒に暴力を振るっていいのかよ!」

と鉄人に文句を言った。

すると、鉄人は二人をアイアンクロードで持ち上げながら

「今日貴様らは、学園清掃ボランティアをしている筈だと言うのに居ないから、探しに来たんだ!」

と言った。

どうやら二人は、ボランティアをサボっていたらしい。

そして動きが止まったからか、鉄人が二人を下ろした。

その時

「ちよいと待ちな」

と新たな声が聞こえた。

全員の視線が集まった先に居たのは、学園長の藤堂カヲルだった。

「学園長……」

鉄人が不思議そうに見ている中、カヲルはツカツカと床に倒れてる常夏に歩み寄り

「おら、起きな。ジャリ共」

と二人の横っ腹に、蹴りを叩き込んだ。

雑な起こし方だが、誰も違和感すら感じなかった。

「ぐほっ」

「うぼあ」

「とつとと起きな、クソジャリ共が」

カヲルがもう一度そう言うと、ようやく二人は起き上がった。

「なんか、懐かしい起こされ方されたぜ……」

「奇遇だな、俺もだ……」

二人は腹部を押さえながら、そう言った。

それを確認したからか、カヲルが

「さて、ちようどいいさね」

と言った。

それを聞いて、明久達は嫌な予感がした。

「ジャリ共、あんたらにAクラスに戻るチャンスをやるさね」

「なに!?!」

「本当か!?!」

カヲルの言葉を聞いて、二人は嬉しそうな表情を浮かべた。

よほど、Aクラスに戻りたいらしい。

「その条件は……お化け屋敷さね」

「……………はっ?」

カヲルの言葉の意味が分からず、ほぼ全員が首を傾げた。

その後のカヲルの話を要約すると、以下の通りとなる。

- 1、今現在、召喚獣の姿が調整によりオカルト面が色濃く出ている
- 2、この召喚獣を使い、変則的だが試召戦争を開催する
- 3、参加するのは、今現在学園に居る二年生と三年生
- 4、三年生が防衛側として、驚かせるか召喚獣を全員倒せば勝ちという物だった。

「んで、あんたらが勝ったら、特別にAクラスに戻してやる」

「その言葉、忘れんじやねえぞ！」

「まあ、勝ったも同然だがな！」

カヲルの言葉を聞いて、二人はそう意気込んだ。

その光景を見て、Aクラスに居た全員が

(取らぬ狸の皮算用)

と思った。

戦いは二時間後とされて、それまでに三年生は簡易的なセットを

二年生はペアをすることにした。

そして、突発的なイベントが始まったのだった。

始まり

そして約三時間後、双方共に準備が整った。

今現在、明久達は一年生の教室に居た。

数ヶ月前まで使っていた教室で、明久は懐かしさを感じていた。

一年生の教室は至って普通の教室だ。

しかも今居る教室は、明久と雄二が使っていた教室だった。

すると雄二は、自分が座っていた窓際の席

その机を撫でながら

「懐かしいな……」

と呟いた。

すると明久が、同意するように頷いて

「そうだね……雄二がそこで、僕がその隣で……何回か、大変だったよ

……根本君を殴りに行くって言った雄二を止めたりね」

と語りだした。

すると雄二は、頬をポリポリと掻きながら

「あつたな」

と肯定した。

そして少しすると、手を叩いて

「そーいやあ、召喚獣がどうなってるのか確認してなかったな」

と言った。

それを聞いて、明久はああと言って

「そう言えば、オカルト面が強く出てるんだっけ？」

と思いつくように言った。

すると、教室に居た西村が頷いて

「ああ、その通りだ。因みに、俺はこれだな。試獣召喚」

とキーワードを唱えた。

その直後、西村の足下で爆発が起きて、それが姿を現した。

色黒の肌、岩で出来た巨剣を持った大きめの召喚獣が。

その姿は

「へ、ヘラクレスだとう!？」

某運命に出てくる、最強の凶戦士だった
すると西村が、顛顛に手を当てながら

「どうやら、学園長が暇潰しにしていたゲームから、影響されたりし
い」

と言った。

それを聞いて、何人かのFクラス男子が

「じゃあ俺達は、青い剣士や槍使いだな！」

「試獣召喚！」

とキーワードを唱えた。

その直後現れたのは、緑色の肌に棍棒やボロい剣を持った醜い化け
物だった。

それを見て、康太が

「……ゴブリンだな」

と言うと、その男子達は両手両膝を突いた。

すると、何か気になったのか、姫路と島田が

「私達は、どうなってるんでしょうか？」

「召喚してみましょ」

と言うと、揃ってキーワードを唱えた。

その直後に現れたのは

「なにこれ？」

「……私には、分からないです」

二体の角の生えた女性だった。

姫路の前に居るのは、薄い布を被った尼を彷彿させる女性で、島田
の前には巻き角が特徴の女性だった。

それを見て、康太が

「……姫路のは、殺生院キ○ラ。島田のは、ティアマ○」
と言った。

「どういう奴よ？」

「教えてください」

と二人が問い掛けると、康太は目を逸らしながら

「……………とあるゲームの、巨悪」

と言った。

それを聞いて、二人は酷く落ち込んでいた。

なお、以下が明久達の召喚獣の今の姿である。

明久 試青い剣士

謙信 病弱剣士

雄二 剣士なのに、素手で殴る魔剣使い

秀吉 自己暗示で性別が変わる剣士

康太 侠客

信繁 青い槍使いの術師版

信玄 反逆の剣士

幸村 師匠

颯馬 教授

翔子 婦長

愛子 女海賊船長

優子 槍使いの竜少女

となっている。

そしてペアは

明久&謙信

雄二&翔子

康太&愛子

秀吉&優子

信繁&颯馬

信玄&幸村

以下略

となっている。

そして、最初に歩き出したのはFクラス男子ペアだった。

向かう先は、2年Fクラスの教室。

なお、驚いたかどうかの判定は、カメラを介して声量で判定する。

男子達が入ると、いきなり目前に提灯オバケが現れた。

しかし、男子達は驚くどころか

『ん？ これ、触れないな』

『召喚獣なら、イケるんじゃないかね?』

と会話すると、召喚獣を呼び出した。

そして、その提灯オバケを召喚獣に掴ませて灯り代わりに歩き出した。

それを、映像で見っていた明久達は

「なんつーか……」

「酷く、シユールな光景だな」

「それに、提灯オバケが逃げようと暴れてるのがまたね……」

と会話していた。

なお、明久の腕には謙信が抱き付いている。

やはり、怖いようだ。

そんな謙信を明久が撫でているが、何故か教室の端では姫路と島田が転がっている。

そうこうしている内に、進んでいた男子達の前に人影が現れた。

現れたのは、二人

襟に着いているバッジから、三年生と分かった。

Fクラス男子達は既に召喚していたので、三年生も召喚し戦闘になった。

しかし、勝負は一瞬で終わった。

なぜならば

「Aクラス生徒を、門番にしたのか……」

「まあ、順当だな……姫路と島田は……使えないか」

雄二は二人が転がっているのを見ると、舌打ちした。

どうやら、行かせる気だったらしい。

そして、少し考えると

「仕方ない。俺と翔子が倒しに行くか」

と言つて、翔子と一緒に向かった。

ふと画面を見た明久は、なぜ姫路と島田を行かせようとしたのかを察した。

教科が数学だったからだ。

確かに、姫路はともかくとして、島田は数学以外で役に立たな

い。
なお、一度入っても、失格にさえならなければ、何度でも出入りしていいらしい

だから、雄二と翔子が行ったのだろう。

なお、二人が行ったことにより、Fクラスは難なく突破。

次は、Eクラスに向かった。

なお、ルールによれば、一度勝利したクラスは素通りしていいらしい。

そして雄二と翔子の二人と入れ替わりに、また別のFクラス男子達がEクラスに入っていた。

Fクラス男子ペアは、お決まりのバカで脅かしをスルー。

大体、中間辺りだろうか。

そこに到着すると、そこには一人の女子が居た。

着物を着た女子が。

すると、その女子を見た康太が

「……小暮葵。Aクラス所属」

と言った。

邂逅した男子達は戦闘と思ったのか、身構えた。

しかし、一人では戦闘は出来ないはずである。

すると、その女子は

『私、これでも茶道部に所属しています』

と言った

それを聞いて、明久は内心で

(あ、だから着物着てたんだ)

と納得した。

すると、Fクラス男子達は

『だから何だってんだよ』

『力づくで通るぞ、こら』

と言った。

その言動は、完全にヤクザと言ったそれである。

しかし、小暮は意に介さずに笑みを浮かべたまま

『それと私』

と言いながら、着物の襟首を掴んだ。

そして、次の瞬間

『新体操部にも、所属していますの』

と言つて、一瞬にして着物を脱いだ。

その下に見えたのは、あの水着のような衣装だった。

その直後、対峙していた男子ペアは叫んだ。

興奮したからだ。

更に、待機していた男子達も次々と突入

叫んでいた。

それを、康太は冷静に

「……全員、失格」

と宣告した。

すると、雄二が

「あいつら……後で全員殴る」

と怒りを露わにしていた。

こうして、オバケ屋敷式の試召戦争が始まったのだった。

変態

「木下姉弟、頼んだ」

「分かったわ」

「心得たのじゃ」

雄二の頼みを聞いて、優子と秀吉が入っていった。それを見送ると、明久は

「なんで、あの二人にしたの？」

と雄二に問い掛けた。

すると雄二は、冷静に

「あの二人なら、並大抵の事態にも冷静に対処すると予想したからだ」と言った。

雄二の説明に、明久は納得した。

確かに、優子と秀吉はかなり冷静な性格だ。

並大抵の事態ならば、対処は可能だろう。

そして、雄二の予想とは違った形だったが、二人は切り抜けた。

秀吉も女の子扱いされて

『ワシは男じゃと……』

『はいはい、落ち込まないの』

肩を落としながら歩いてた秀吉に対して、優子はそう言いながら秀吉の頭を撫でた。

そう会話しながら、木下姉弟は歩き続けた。

途中途中でお化けが出たが、二人は華麗にスルー。

そのまま、奥に居るだろう番人の場所を目指して進んだ。

その時、不意に広い区画に出た。

しかも、暗くてお化けも見えない。

だが、二人は人の気配を感じているらしく、奥を見ていた。

その時不意に、その区画が一気に明るくなった。

そこに居たのは、夏ソフトモヒカン川ソフトモヒカンだった。

それを見た明久達は、もう常夏バカ共と戦うのか？

と首を傾げた。

しかし、そこに居たのは一人だけだった。

何をするのか分からず、木下姉弟は僅かに身構えた。

すると夏川は、懐から一枚の紙を取り出した。

それを見て、全員が首を傾げた。

すると、夏川はそれを読み始めたのだが……

内容は割愛させて頂くが、秀吉へのラブレターだった。

そして、明久達は後にこう語る。

『秀吉の本気の悲鳴を、初めて聞いた』

と……

数分後、秀吉は教室の端で泣いており、それを優子と信玄が慰めて
いる。

そして、教室の番人は既に信繁と幸村によって撃破された。

古典で、あの二人が負ける訳がなかった。

そして、次の教室に入った。

なお今回から、3ペア投入した。

その内2ペアはFクラス男子だが、1ペアはAクラスだ。

より多くの情報収集と、あらゆる事態に対処出来るようにだ。

そして一組目が、最短ルートで広い区画に出た。

『おい、誰か居るぞ』

『気配は……一人か』

どうやら、また妨害らしい。

どんな妨害なのか、そう身構えた直後に一気に明るくなった。

そして見えたのは……

ハゲ頭
常村の女装姿だった。

『ギヤアアアアアアアアアア!?!』

『やめくせあ、f j p m a、汗、ばくあ!?!』

それを直に見たFクラス男子ペアは、悲鳴を上げた。

なお、悲鳴を聞き付けて駆け付けた残りの2ペアも

『い、嫌だ! こんなの見たくない!』

『お、お助けえええ!!』

『帰る! 家に帰るううう!』

『イヤアアアアアア!!』

と悲鳴を上げた。

そして、待機教室も阿鼻叫喚の地獄だった。

中には、気絶した生徒すら居た。

すると、いち早く立て直した雄二が

「あの野郎……醜い絵面見せやがって……っ!」

と怒りの声を漏らした。

すると、一人の男子が

「坂本! 中に入った奴等の仇を!」

と声を上げた。

それに共鳴するように

「ムツツリーニと工藤を投入するんだ!」

「あいつに、地獄を見せてやって!」

と声が上がった。

そこから

「ムツツリーニ! ムツツリーニ!!」

「工藤! 工藤!!」

と二人の名前が叫ばれた。

それを聞いて、雄二は頷き

「康太、工藤! お前らが取れるあらゆる手段を以て、あの変態野郎を

排除せよ!」

と指示を出した。

そして数分後、二人は突入した。

そこから更に数分後

『確か、ここら辺だったよね……ムツツリーニ君、準備は?』

『……問題ない』

と二人の会話が聞こえた。

その数秒後

バン! ? 電気が点いた音

ドン!! ? ムツツリーニが姿見を置いた音

キラキラキラ ? 常村が吐いてる絵面(某世界を廻るバラエティー

番組風に)

「あ、あの鏡って」

「階段にある姿見だな」

と言ったのは、明久と雄二である。

信繁は吐き気を堪えている幸村と信玄に付いている。

「道理で、ゴロゴロって音が聞こえた筈だ」

「台車で運んでたんだ」

と二人が納得していると

『てめえら！　なんて物を見せやがる！　吐いたじゃねえか！』

と常村が怒鳴った。

すると

『……恥じるな、吐くのは道理だ』

『だね。立派なおカママみたいだよ』

と康太と愛子が言った。

それを聞いたからか、常村が

『ちくしょうっ！　道理で、メイクした奴が口元抑えてた訳だ……』

と肩を落としていた。

吐き気と戦っていたのだろう。

気持ちは分かる。

その時、カシャつとシャッター音が聞こえた。

すると、常村が

『待て、お前。何撮影してやがる！』

と愛子を指差した。

すると愛子は、悪びれずに

『ん？　海外のモノホンサイトにうPしようかと』

と言った。

すると常村は、顔を真っ赤にして

『やめろ、てめえ！　俺の人生が終わる！』

と叫んだ。

すると、康太が

『……よせ、工藤』

と愛子の肩を掴んだ。

そして、立て続けに

『……海外のモノホンさんが吐く』
と言った。

すると、愛子は手をポンと合わせながら

『そうだね。せめて、ネットに流す位にしようか』

と言って、操作を始めた。

『それもやめろおおお！ どちくしょうううう！』

愛子の言葉を聞いて、常村は泣きながら走り去った。

それを見送った二人は、顔をカメラのある方向に向けると、二人してピースサインをした。

それを見たクラスでは、雄叫びが上がった。

その後、愛子と康太によって番人は撃破された。

保健体育で、二人に敵う訳がなかった。

怒りの一歩

その後、二年生陣は順調に妨害と番人を突破。

そしてとうとう、Aクラスに到達。

すると雄二は、ある決断を下した。

それは

「これより、俺と翔子ペア！　そして、明久と上杉ペアが突入する!!」
というものだった。

それを聞いて、二年生陣は歓声を上げた。

満を持しての、最強戦力の投入。

二年生陣の気持ちは、ある一つの目的に集約されていた。
常夏を倒すこと

ここまで来たが、常夏は番人として現れていない。

妨害で出てきたただけだ。

そしてAクラスに戻るために、あの二人が出てこない訳がなかった。

だから雄二は、ここで出たのだ。

あの二人を倒すために。

「行くぞ、明久……戦意は充分か？」

「是」

雄二からの問い掛けに、明久はたった一言で返した。

たった一言

だが、その一言には計り知れない戦意を雄二は感じた。

なお、教室待機となった信玄が後に

『あれは正しく、剣聖の名に相応しい戦いでした』
と語る。

二組は中に入ると、別ルートを歩いていた。

「謙信、大丈夫？」

「ええ、大丈夫です。私は大丈夫です」

明久の問い掛けに、謙信はそう答えた。

それを聞いた明久は、内心で

(本当に大丈夫かな?)

と心配した。

謙信は、お化けが大の苦手である。それを知っている明久からしたら、今の謙信は強がりです保ってるようにしか見えない。

(さて、どうしようかな……こうなった謙信、意地でも退かないだろうし)

と明久が考え始めた。

その時

「む?」

「ひゃっ?」

突如、照明が音を立てて消えた。

「謙信、下手に動かないで」

「分かりました」

明久がそう言った直後、明久は周囲に多数の人の気配を感じた。

(これは……なにを?)

と明久が思っていると、少ししてから照明が点いた。

そして、状況を把握するために周囲を見回そうとした。

その時

「あ、明久?」

と声が聞こえた。

背後を見ると、そこには雄二の姿があった。

そして謙信が居た左を見たら、そこには、今まで無かった壁があった。

すると雄二が

「奴等、頭を使ったな……ペアを分断したのか」

と言って、携帯を出した。

そして、少し操作すると

「どうやら、上杉は翔子と一緒に居るみたいだな」

と言った。

そして、胸ポケットから生徒手帳とボールペンを取り出すと、何か

を書いてから天井のカメラに向けた。

その生徒手帳には

《ペア変更。上杉・翔子ペアと明久・俺ペア》

と書かれていた。

別に、ペアを入れ換えることはルール違反ではない。

なお、もし入れ換えずにどちらか片方の相方が失格になると、もう片方も失格になる。

それを未然に防ぐためだろう。

現場判断だが、ペア変更をしたのだ。

「明久、先に進むぞ。翔子と上杉も先に向かった筈だ」

「そうだね。行こうか」

雄二の提案に従い、明久は歩き出した。

そして、しばらく歩いていると

「ん？」

と雄二が携帯を取り出した。

すると

「どうやら、あっちが先に常夏と相對したようだな」

と言った。

それを聞いた明久が

「急ごう。近いみたいだよ」

と言って、早歩きで進んだ。

そして、ある程度進んだ時だった。

「でよ、お前ら。あんなバカで觀察処分者と腕つぶしだけの役立たず共から乗り換えねえか？」

「そうそう。そうすれば、未来は安泰だぜ？ 何せ、成績優秀者だしなあ？」

と常夏の声が聞こえた。

話の内容からして、ナンパしているようだ。

「あんな剣を振り回すしか能の無いバカや、喧嘩ばかりして補導された奴等なんか、どこにも就職出来ない」

「そんな役立たず共なんかより、俺たちみたいな成績優秀者の方が引

く手あまただろうよ。もしかして、将来に有名な科学者になるかもしれないぜ?」

と引き続き、常夏がナンパしていた。

その時

「……黙りなさい」

と謙信の声が聞こえた。

「あ? なんだった?」

「聞こえなかったな。なんだった?」

と常夏が催促した。

その後

「黙りなさいと言ったんです!」

と謙信が怒鳴った。

「うお!」

「な、なんだと!」

と常夏が驚いていると、謙信が

「あなた方のような、他人を思いやらない人と付き合う? 寝言は寝

ていいなさい! 自分勝手に他人の妨害をする人と近づくことなど、

こちらから願い下げです! もし、実家からそう言われても、私は死

んだ方がマシです! 明久は、誰かのために剣を取れる優しい人です

!」

と怒鳴った。

すると、それに続くように

「……私も、上杉に同意する。それに、雄二は優しい」

と言った。

すると

「こ、この生意気なガキ共がっ! つかおい、今のでこいつら、失格だ

ろ!」

「あ、ああ。そうだな」

と常夏が言った。

確かに、謙信の声の大きさはアウト判定になるものだった。

だからか、常夏は

「とつとと失せろ、この物好きなメスガキ共！」

「てめえらの顔なんざ、二度と見たくねえ！」

と言った。

すると、ザリツという足を動かした音がして

「それはこちらの台詞です。行きましよう、霧島さん」

「……うん」

という二人の会話が聞こえた。

一連の会話を聞いていた二人は

「ねえ、雄二。僕が優しいだつてさ。僕って結構、屑だと思つてたんだけどね？」

「何言つてやがる。明久が屑なら、世の中の半数以上が屑じゃねえか」と会話を始めた。

「それより、俺が優しいか……自分では、割かし悪人と思つてたんだがな」

「雄二が悪人なら、僕は悪人だよ」

と会話している二人だが、その言葉には怒気が少しずつ滲み始めていた。

「そうか？」

「そうさ」

と二人はそこで会話を止めると、小さく笑った。

恐らく、音量のルールが無かったら、大声で笑つていただろう。

そして笑い終わると、二人は顔を見合わせて

「それじゃあ、行こうか。雄二」

「そうだな。明久」

と言うと、ルートの手を見据えた。

そして、一歩踏み出して

「待つてろよ、先輩方。人の彼女を横取しようとした罪、償わせてやる」

と同時に言いながら、進み始めた。

その二人の目には、嘗て無い程に怒りの光が宿っていた。

決着

二人が歩き出して、数分後。

明久と雄二の二人は、常夏コンビと相対した。

その時点で、明久と雄二からは凄まじいプレッシャー圧プレッシャーが放たれていた。

それに気付かず、常夏は

「よう、バカ共」

「ここで会ったがなんとやらだ」

と言った。

だが、二人は無視。

常夏を睨んでいた。

すると常夏は、舌打ちして

「本当にてめえらは、可愛くねえ後輩だな」

「挨拶すらねえとはな」

と言った。

そのタイミングで、明久が

「御託はいいから、さっさと始めましょうか」

と言った、

すると、それに同意するように

「だな。こんなバカ騒ぎ、とつとと終わらせようぜ」

と雄二が言った。

その発言に苛立ったのか、常夏は額に青筋を立てて

「このバカのクソガキ共が！」

「いい気になってんじゃねえぞ、役立たずのゴミクス野郎共が！ て

めえらなんざ、俺達の糧にでもなればいいんだよ！」

と怒鳴った。

そして、二人して

「試獣召喚！」

とキーワードを唱えた。

だが、召喚獣は現れない。

すると、常夏の二人は苛立った様子で

「おい、どうなってやがる！」

「先公！ フィールド展開しろよ！」

と怒鳴った。

実はこの時、化学の教師はトイレに離れた直撃だったのだ。

そして、代わりの教師が向かっていった。

その教師は、空いていた教師の一人

西村だった。

西村は現れると

「すまんが、ここを担当していた中原先生が腹痛で離れたので、俺が代わりに来た」

と言った。

そして続けて

「それと、どうやらこの調整の影響なのか、今日俺が展開するフィールドは、教科がランダムで選ばれる」

と言った。

そして

「フィールド、展開！」

と言った。

それを聞いて、四人は

「試獣召喚！」

と同時にキーワードを唱えた。

そして、四人の召喚獣が現れてその上に点数が表示された。

古典

Aクラス

吉井明久 493点

&

Fクラス代表

坂本雄二 398点

VS

Fクラス

常村勇作 176点

&

Fクラス

夏川俊平 185点

どうやら、古典だったらしい。

表示された教科と点数を見て

「ちいっ！ 古典だど!？」

「それに、なんだよ。その点数は！ おい、鉄人！ カンニングだ!」
と叫んだ。

すると西村は

「カンニングはありえん！ この俺が立ち合っていたのだからな！」
と怒鳴って否定した。

それを見た明久が

「点数が負けてるからと、イチヤモンですか？ 程度が知れますね」
と冷ややかに言った。

すると常夏は

「このゴミクス共が!」

「ここで、消え失せやがれ!」

と怒鳴りながら、駆け出した。

すると、雄二が飛び出し

「行くぜ……点数が低いから、宝具は使えないが!」

と言いながら、常夏の二人を剣で打ち上げた。

それを見た明久は、召喚獣に構えさせた。

すると、剣が光輝き

「宝具……発動」

明久の囁くような言葉を合図に、光の奔流が放たれた。

空中に居た常夏の召喚獣達に、避ける術は無かった。

二体の召喚獣は光の奔流に吞まれ、死体を残すことなく蒸発した。

それを見た二人は

「バカな……」

「あり得ねえ……優等生の俺達が、こんな役立たず共に負けた……」
と言って、両膝を突いた。

そんな二人に、明久は近付いて

「優等生ならば、誰かを助けようと考えなかったんですか？ 誰かの為に、事を為そう。そう考えなかったのですか？」

と喋り出した。

そんな明久の目には、怒りの光が宿っていた。

「他人を見下し、学園の先の事を考えず、迷惑を掛けっぱなしのあんたらが、優等生？ ふざけたことを言うのも、大概にしろ」

そこから明久の声に、怒気が含まれ始めた。

それに気付いたのか、常夏の二人は反論することすら出来ないでいた。

「優等生ならばな、誰かの為に事を為せ。先を見据えろ。それが出来ないあんたらは、世界に要らないんだよ」

この時常夏の二人には、明久が異様に大きく見えていた。

すると明久が

「先輩方……あんたらの内申点、最早回復不可能だろうよ……このイベントの映像、先生方も見ているからな」

と言った。

すると、常夏の二人が

「なんだ?!」

「そんなことあるか！ 俺達は、成績優等生だぞ！」

と怒鳴った。

すると明久は、そんな二人を睨みつけて

「成績が良くても人間性がクズだったら、誰も受け入れる訳がないだろ！ この戯け！ 少しは倫理的に考えろ！ その頭は飾りか！

自分達本位で考えたから、こんなことになったんだろうが!!」

と怒鳴った。

そして、背中を向けると

「それと、先ほど泣かせただろう人達の名前を思い出せ……どっちにしろ、あんたらに先は無い……未来永劫、後悔するがいい」

と言って、そこから去った。

そして、少しすると

「……ちよつと、不味かつたかな？」

と首を傾げた。

すると、雄二が

「安心しろ。勝負が終わった時に、映像は止まったらしい」

と明久に言った。

「そつか……ま、言いたいこと言えたから、スッキリした」

明久はそう言いながら、軽く背伸びした。

こうして、学年対抗式変則型お化け屋敷戦争は終了。

この後、内装を一部変更し、一般用に開放したのだった。

なお、この後に常夏の二人はまず停学が決定した。

更にその後、出資していた一家の意向により、両親が呼ばれた。

呼ばれた二人の両親は、事の顛末を知ると深く謝罪した。

しかし、二人には更に霧島家と吉井家、上杉家、武田家

この家々を事実上敵に回したことにより、将来を閉ざされたと言っ

ても過言ではなかった。

特に、吉井家から来ていた明恵の圧は凄まじいものだった。

ほんの一瞬、常夏は自分達が死んだと錯覚した程だった。

そして、明恵は

『今後、大学に進学することも、マトモな職に就けるとも思うな』

とだけ言って、学園から去った。

こうして、今回の騒動は幕を下ろした。

復讐者

それは、着実に動いていた

少しずつ、復讐の機会を狙っていた

憎き相手を、確実に消すために

しかし、幾多の策を講じても全て失敗した

だからその復讐者^{アウエンジャー}は、自ら動くことにした

もはや、他人任せには出来ない

「やはり復讐は、自分でやらなければならぬわ……」

他人任せにしたのが間違이었다

「剣聖……絶望を貴方に送るわ……」

でなければ、自分の怒りは収まらない

絶望を

地獄を

それこそが、我が望み

彼の無念を晴らすことこそが、我が運命^{さだめ}と我は魂に刻んだ

そのためならば、悪魔に魂を売ろう

悪魔になろう

ああ、だから見ていてほしい

あの世で、私の偉業《復讐》を

我が半身よ

貴方の無念は、我が晴らそう

さあ、相手にとってのパンドラの匣を開けよう

絶対的な絶望を、相手に捧げよう

自ら死のうとしたら、それを邪魔し、相手の眼前で大事な半身を辱

しめて、無惨にその命を散らせよう

自ら殺してくれ、と懇願させるくらいに

そのために、準備は着々と進めた

後は、時が来れば動ける

我が復讐、必ず成就させる

でなければ、死んでも死にきれない

ああ、見ている

我が同志よ

我が半身よ

我々の原初の願いは、最早叶わない

その代わりに、この復讐だけは叶える

あの憎き相手に、ありつたけの絶望を叩き付ける

それが終わったら、我もすぐに其処に行こう

貴方の居ない世界に、ようなどない

貴方の居ない世界に、意味などない

あの日からずっと、そればかりを願っている

復讐を

復讐を！

復讐を！！

あの憎き相手に、復讐を!!!

我は復讐者

相手に絶望を叩き込む復讐者

さあ、復讐者の幕を開けよう

我が復讐を認めよ

相手の希望を奪い取ろう

あの家に滅亡を

栄華を許すな

幸福を許すな

繁栄を許すな

相応しいのは、絶望だけ

一切の希望無き、虚無の絶望を

止めようとする者達が居るのなら、その全てを粉碎しよう

その命を火にくべて、我が復讐の業火に変えよう

その業火で以て、相手の全てを焼き付くそう

我が復讐の業火に焼かれて、灰も残さず消え去るがいい

我が復讐の業火で、相手の全ての希望を灰塵に帰そう

我が命も業火にくべよう

復讐のためならば、我が命、惜しくなどない
我が復讐により、我を復讐者として記録せよ
今の我は、完全なる復讐者
復讐以外は望まない

復讐の成就以外は望まない

復讐の終わりは、我が命が終わる時

復讐者たる我に、先は不要

復讐は一度で終わらせる

でなければ、相手に生を許してしまう

でなければ、相手に希望を許してしまう

そんなこと、決して許すものか

「さあ、もう間も無くよ……あはははははははははは!!」

幕開け

「……招待状ね」

と言ったのは、その手に便箋を持った明恵である。

便箋には吉井明久様へ、と書かれており、差し出し人の名前が

「松永久秀……」

その名前を見て、明恵は目を細めた。

松永家。

それは代々、策謀を練ることを得意とする家柄だ。

そして、久秀。

これは、当主が名乗る名前である。

「……それで上杉や武田、真田にも招待状が？」

「はい、間違いありません」

明恵からの問い掛けに、一人の老人が答えた。

その老人は、第十八代目天城颯馬だ。

第十九代目は、貴久を狙った凶弾から貴久を守り死亡。

それにより、第十八代目が現在の天城家を動かし、颯馬の教育をした。

そういう意味でも、そして何より、その情報収集能力でも、明恵が最も信頼する人物である。

「それと、時間が掛かりましたが、判明しましたことがあります」

十八代目はそう言うと、懐から封筒を出して明恵に渡した。

明恵は中から紙を出すと、一読し

「……間違いないのね？」

と十八代目に問い掛けた。

その問い掛けに、十八代目は頷いて

「は……間違いありません」

と答えた。

それを聞いた明恵は

「……彼等に、何時でも動けるように伝えてくれる？」

と十八代目に告げた。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇ ◇

所は変わり、文月市。

朝から明久は、自室で夏休みの宿題を済ませていた。そして終わったらしく、ノートを閉じて背伸びした。そのタイミングでドアが開いて

「明久、お茶が入りましたよ」

と謙信が入ってきた。

「ん、ありがとう」

明久は湯飲みを受け取り、一口啜ると

「謙信、宿題は？」

と問い掛けた。

すると謙信は、自信満々といった様子で

「既に終わってます」

と答えた。

そして、明久を見て

「明久は、それで？」

と言いながら、首を傾げた。

すると明久は、頷いて

「うん。これで終わりだね」

と答えた。

八月上旬、明久と謙信は既に夏休みの宿題を終えた。

一応、自由研究がまだ残ってはいるが、そちらも終わりの目処は着いていた。

そして二人でお茶を飲んでいた時だった。

「ん？ 雄二？」

明久の携帯に、雄二から電話が掛かってきた。

明久は携帯を取ると

「もしもし、どったの？」

と雄二に問い掛けた。

『明久、今暇か？』

「うん、宿題も終わったしね。どったの？」

明久は雄二の問い掛けに、そう返した。
すると

『いや、なに。さつき翔子の親父さんから、招待券貰ったんだよ。遊園地の』

と言ってきた。

それを聞いて明久は

「つまり、お誘いってこと？」

『そうだな。今、連絡付いた奴等（一部無視）は全員誘った。どうする？』

明久からの問い掛けに、雄二はそう言ってきた。

それを聞いて、明久は

「少し待ってね」

と断り、謙信に視線を向けた。

「謙信、今日の予定は？」

と問い掛けると、謙信は微笑みを浮かべ

「大丈夫ですよ。準備しますね」

と言って、部屋から出た。

それを見送ると、明久は

「謙信も大丈夫だって。何処に行けばいい？」

と雄二に問い掛けた。

すると、雄二は

『そんじゃあ、翔子の家に三十分後に集合だ』

と言った。

「分かった、じゃあね」

明久はそう言うのと、通話を切って着替え始めた。

そして、三十分後

「これで、全員だな」

霧島家前に、何時ものメンバーが集まっていた。

「……車に乗って」

と翔子が指し示したのは、バスだった。

しかも、リムジンバス。

「まさか、また乗ることになるなんてね」

「何が起きるか、分からないもんだね」

と優子と愛子は言いながら、リムジンバスに乗った。

そして全員が乗ると、リムジンバスは静かに走り出した。

その時になって、ようやく

「何処に行くのさ？」

と明久は問い掛けた。

すると、翔子が

「……霧島財閥グループが建てた、埋め立て地式遊園地。フアンタジア」

と言った。

そして、約一時間後

「皆様、お気をつけてお下りくださいませ」

と添乗員に言われながら、一行は下りた。

そして翔子に先導される形で見たのは、中世ヨーロッパを彷彿させる巨大な門だった。

すると、翔子が

「……今日は、プレオープン。中に入れるのは招待された人達だけだから、ゆっくり回れる」

と言った。

確かに、駐車場には車が少ない。

「いいのですか？」

「……寧ろ、呼ばないほうが問題」

信玄が問い掛けると、翔子はそう答えた。

そして、翔子が先頭になって中に入った。

すると入口で、小型端末を渡された。

それは、遊園地のマップが見れるようになっていた。

更に、行きたい場所をタップすると最適なルートな行列具合が表示されるようになっていた。

「人数分渡されるんだね……」

「流石は、霧島財閥グループ……」

「……規模が半端じゃない」

と一同は口にした。

その端末ですら霧島財閥グループ製なのだから、末恐ろしい。

「……一応、泊まれるようにホテルもある」

と翔子は言いながら、端末を操作した。

すると、そのホテルの宿泊状況も表示された。

一体、幾ら注ぎ込んだのか。

それを考えて、金銭感覚一般人の明久は身震いした。

「それじゃあ、自由行動な。昼になったら、このレストランに集合だ」

雄二はそう言って、端末を全員に見せた。

こうして、ファンタジア巡りが始まった。

軍師の休息

「流石は、かの霧島財閥……凄いなあ」

「本当に」

明久が呟くように言った言葉に、謙信が同意した。埋め立て地丸々一つを使い建築されたテーマパーク。それが、フアンタジアだ。

どうやら中世ヨーロッパをモデルにしているらしく、建物から係員の服装に至るまでがそれである。

二人はジェットコースターに向かって歩いていた。

今は全員、それぞれペアに別れて行動していた。

明久・謙信ペア

幸村・信繁ペア

雄二・翔子ペア

信玄・秀吉ペア

愛子・康太ペア

優子・颯馬ペア

となっている。

そして、ジェットコースターに到着すると明久達は、列に並んだ。とはいえ、今回はプレオープンだ。

並んでる人数は少ない。

だから数分で、明久と謙信はジェットコースターに乗った。

場所が変わり、優子と颯馬は休憩エリアとして開放されている草原に来ていた。

二人が居るのは、静かな木陰。

そこで颯馬は、頭を振っていた。

「無理しないの、天城君。休んでて」

「すみません、木下さん。自由研究で少し手こずって、昨日は夜遅くまで起きていたもので……」

別れて行動していた時、優子は颯馬の顔色が悪いことに気付いた。だから、近くだった草原に来て颯馬を休ませることにしたのだ。

どうやら颯馬は、自由研究の宿題で時間が掛かってしまつて寝不足らしい。

優子は颯馬を木陰に座らせると、立ち上がり

「待つててね、飲み物買つてくるから」

と言つた。

すると、颯馬は

「だったら、お金を」

と言つて、財布を取り出した。

しかし、その財布を手ごと優しく包んで優子は

「流石に、体調が悪い人から巻き上げようだなんて、思わないわ」

と拒否した。

そして、颯馬に背中を向けて

「いいから、待つてなさい。お茶よね」

と言つて、離れた。

そして数分後、優子は右手にお茶、左手に自分の飲み物を持って戻つた。

そして、木陰に座つていた颯馬に

「お待たせ」

と声を掛けた。

しかし、返答は無い。

返事が無いことが気になり、優子は顔を覗き込んだ。

そして、納得した。

颯馬は穏やかに眠っていた。

それを見た優子は、微笑んで

「メガネ、外すわね」

と言つてから、颯馬が掛けていたメガネを外した。

そして、颯馬の腰に有つたポシェットからメガネケースを取り出して入れた。

そして隣に座ると、周囲を見回した。

今からやることを、知り合いに見られたら、優子はしばらくその人物達と顔を合わせる事が出来なくなる。

そんな確信があった。

そして、近くに居ないことを確認すると

「そつと……そつと、起こさないように」

と繰り返し言いながら、颯馬の頭をゆっくりと自身の膝に下ろした。

しかも、顔を上に向かせてだ。

はつきり言えば、颯馬は優子の好みだった。

少し幼い顔立ちに、小柄な体躯。

だが、時折見せる男らしさ。

いわゆる、ギャップ萌えになるのだろうか。

それが、優子の胸をときめかせた。

だからか、自分でも信じられない位に、そんな行動をしていた。

「今はおやすみ、颯馬君……」

優子はそう言いながら、颯馬が頭を優しく撫でた。

水族館エリア

「本当に凄いな……ここ」

「……父さんの肝いりだって」

感心したような雄二の言葉に、翔子はそう言った。

二人が居るのは、水族館エリアである。

その水族館エリアは、暖かい地域の魚や寒い地域の魚が泳いでいた。

その数は、関東随一らしい。

それだけの数、集めるのはかなりの金額が掛かったであろうことは明らかである。

「義父さんの？」

「……うん。このエリアは、御父さんが自ら監修したんだって」

雄二が問い掛けると、翔子はそう答えた。

その理由を翔子は知らなかったが、それは夫婦の思い出からだった。

二人は見合いをして結婚することにしたのだが、翔太は最後のプロポーズをある水族館で行ったのだ。

しかしその水族館は、不況の煽りを受けて閉館。

それを覚えていた翔太は、その思い出の水族館を再現することを決意していた。

そして漸く、そのチャンスが訪れたのだ。

故に翔太は、自身の記憶の中から出来る限り思い出の水族館を再現。

完全ではないが、思い出の水族館を甦らせたのだ。

そのエリアに、翔子と雄二は来ていた。

二人の他には、数人しか居ない。

だが魚達は、関係ないと優雅に泳いでいる。

時折、魚に反射しているのだろう、床や天井に光りが乱反射している。

それが天井の色と相まって、不思議なコントラストを奏でている。

雄二ですら、思わず

(ロマンチックだな)

と思ったほどだ。

確かに、こういう状況下でプロポーズすれば、成功率は高いだろう。雄二は翔子の手を掴み、ゆつくりと水槽の前を歩いた。

水槽の中では、ダイバースーツを着たダイバーが魚にエサを与えていた。

二人が見ていると、そのダイバーが手を振ってきた。

翔子が振り返すと、そのダイバーはゆつくりと上がっていった。

それを見送った二人は、更に先に進んだ。

その先にあったのは、トンネル式の水槽だった。

前後で分けられているらしく、前半にはアザラシやカメが泳いでいた。

そして後半には、小さい種類のサメが泳いでいた。

床は移動式になっていて、上を見ることに意識を集中出来るように配慮されている。

そのエリアを越えると、次は小さい水生生物のエリアだった。

「これは、タツノオトシゴか」

「……こっちは、グッピー」

二人はゆつくりと歩きながら、様々な水槽を見た。

「うお、こいつ気色悪いな」

「……ダイオウグソクムシ。百年近く生きる生物」

雄二が少し驚くと、翔子がそう補足した。

そして更に歩くと、イルカを見れるエリアに入った。

一つの大きな水槽の中に、四種類程のイルカが泳いでいた。

「やっぱ、人に慣れてるんだな。窓ガラス越しとは言え、近寄ってくるな」

「……元々、イルカはコミュニケーションが得意らしいから」

雄二が窓ガラスに手を突くと、そこにイルカが集まってきた。

それは、どこか愛くるしさを覚える。

そのエリアを抜けると、ペンギンが見えるエリアに入った。

ペンギンがヨチヨチと岩場を歩き、プールに飛び込んだ。

「ペンギンって、本当は足の骨、長いんだよな」

「……約二倍近くある」

二人はそう会話しながら、様々な種類のペンギンを見た。

すると、飼育員がエサを持ってきた。

ペンギンがその飼育員の周りに集まり、エサをねだっている。

飼育員はバケツの中から小魚を取り出すと、一羽ずつに与えていった。

ペンギンは鳴きながら、その小魚を丸飲みにしていった。

二人はそれを見ながら、歩き続けた。

そして二人は、次の場所に向かった。

軍師と弓使い

優子は、颯馬が起きるまで膝枕し続けていた。

どれほど時が経っただろうか。

ある時、颯馬が目を覚ました。

「ん……眼鏡……」

やはりマトモに見えないのか、颯馬は眼鏡を探そうと右手を伸ばした。

その直後、優子も大分油断していたから反応が遅れた。

その結果、颯馬が伸ばした右手は優子の慎ましい胸に当たった。

「ひゃあ!?!」

「え」

颯馬も寝ぼけていたのだろう。

それが最初はわからなかったらしい。

数秒間は触っていた。

すると颯馬は、素早く右手を動かして優子が仕舞った眼鏡ケースを取り出した。

そして、眼鏡を掛けると

「ゆ、優子さん!?!」

と驚きながらも、一気に離れた。

この時、二人は互いに顔が真っ赤だった。

互いに、羞恥からだ。

優子は胸元を両手で隠し、颯馬はアワアワと両手を動かしていた。

そして、どれ程時間が経ったか。

優子が深々と溜め息を吐いて

「完全に油断してたわ……」

と呟いた。

その直後、颯馬は深々と頭を下げて

「すみませんでした!」

と謝罪した。

すると優子は

「天城くんは寝ぼけてたんだし、いいわよ」
と言った。

だが颯馬は、納得出来ないらしく
「ですが……」

と言いつい淀んだ。

すると、優子が右手の人差し指を立てて

「だったら、私のお願いを一つ聞く。で、どう？」
と提案した。

それを聞いた颯馬は、頷きながら

「分かりました。僕に出来ることなら、最善を尽くします」
と言った。

それを聞いた優子は

「だったら、今日は一日付き合いなさい。それでどう？」
と言った。

それを聞いた颯馬は、軽く目を見開いてから

「僕でよければ、最後まで」
と返した。

それを聞いた優子は、満足そうにしながら立ち上がろうとした。

だが、ガクンと膝が曲がって倒れそうになった。

だがそれは、素早く颯馬が抱き止めて阻止された。

「足、痺れてるんですね？」

「ええ……」

颯馬の問い掛けに、優子は端的に答えた。

それを聞いた颯馬は、少し考えると

「よっ」

と気合いを入れて、優子をお姫様抱っこで持ち上げた。

「あ、天城くん!？」

「そのベンチに行きましょうか」

優子が顔を向けると、颯馬は微笑みながらそう言った。

そして颯馬は、優子が返事をする前に歩き出した。

この時、優子は

（わっわっわっ！ 初めてののお姫様抱っこだ！ 恥ずかしい!! とうか、天城くんが予想以上に力がある!?)

とパニック状態だった。

そしてもし知り合いに見られたら、彼女は暫く立ち直れないかもしれない。

そうこうしている間に、颯馬は近くのベンチに優子をゆっくりと座らせた。

「ありがとう……」

「いえ、大丈夫ですよ」

優子がお礼を言うと、颯馬は軽く首を振った。

そして、周囲を見て

「少し、待っててください」

と言って、離れた。

そして、少しすると

「どうぞ」

と優子にソフトクリームを差し出した。

どうやら、近くの売店で買ってきたらしい。

「あ、ありがとう」

「いえ。僕も、お茶を買ってもらいましたからね」

優子がお礼を言うと、颯馬はそう返した。

しかも気づけば、颯馬は優子が買ったお茶を持っていた。

恐らく、ソフトクリームを買いに行った時に回収したのだろう。

そして颯馬は、優子の隣に座るとお茶を飲み始めた。

優子は優子で、ソフトクリームを食べ始めた。

そして、優子がソフトクリームを食べ終わると二人は移動を始めた。

次の場所に向けて。

帰路へ

そして入ってしばらくすると、明久達はレストランエリアに集まった。

約束の時間になったからだ。

だから明久達は集まり、昼食を食べていた。

「この料理、凄い美味しいー!」

「本当ですね」

と言ったのは、優子と颯馬である。

すると、翔子が

「……聞いた話では、世界を回って修行してきた元帝国ホテルの料理長だつて」

と言った。

それを聞いた明久は、内心で

(あれ、なんか聞き覚えがあるような?)

と首を傾げた。

そんな明久を、謙信が目を細めて見ている。

そして昼食を食べ終わると、外に出て

「……この後は、どうする?」

と翔子が問い掛けた。

その問い掛けに、全員が唸っていると

「だったらさ、団体向けやってみないか?」

と雄二が言った。

全員が視線を向けると、雄二は端末を操作して

「ここだ」

と一ヶ所を指差した。

情報を見ると、そこは団体向けのアトラクションだった。

最低で、二人から。と書かれている。

「面白そうだし、行ってみようか」

明久のその一言で、決定した。

明久達が行った先のアトラクションは、最新技術の網膜投影を使っ

たものだった。

その内容は、特殊なヘッドセットを装着すると、何も無い広大なフィールドがバトルフィールドになると言う物だ。

プレイヤー達は力を合わせて現れる敵を撃破し、ゴールを目指すと、なっている。

明久達は武器を選択すると、フィールドに入った。

すると、最初は何も無かった広大なホールが一瞬にして廃都市に変わった。

「定番の廃都市か」

「だね」

雄二と明久がそう言った数秒後、近くの廃車の陰ながらからゾンビが現れた。

「んで、相手もまた定番だな」

信繁はそう言うのと、選んだ武器。

ライフルを構えて、撃った。

信繁が撃った弾は、見事ゾンビの頭を撃ち抜き、ゾンビは消滅した。それを皮切りに、次々とゾンビが現れる。

その数は、優に50は越えている。

明久は、左手に持った刀で真正面のビルを指し示し

「行くよ、目指すは前方のビル！」

と宣告。

それを聞いた他のメンバーは、鋭い眼光で武器を構えた。

そして、明久が

「雑魚に構わず、必要最低限を処断。突撃！」

と言って走り出した。

それを追うように、全員が動いた。

この時の明久達の動きを、見ていた開発メンバーは後に

『まさか、一撃も入れられないとは思いませんでした。しかも、最速記録まで……一層開発に尽力します』

と語る。

そしてこのアトラクションは後に、ファンタジアの目玉アトラク

シヨンとなる。

アトラクシヨンから出ると、明久は大きく背伸びして

「いやあ、動いたね!」

と言った。

「結構楽しかったな」

「そうですね」

「颯馬くん、ありがとうね」

「いえいえ」

そして明久達は、時計を見た。

時間は、間もなく三時になる。

「さて、この後はどうするか」

「……ホテル、泊まる?」

雄二の言葉を聞いて、翔子はそう提した。

すると明久が

「今回は、泊まり掛けは無しにしようか」

と言った。

そして続けて

「一部の人が、宿題危ないかもだし」

と言った。

すると、秀吉と康太の二人が目を逸らした。

それを見て、優子が秀吉の肩を掴み、愛子が康太の肩を掴んだ。

その光景を見て、数人が笑ってから

「んじゃ、明日は全員で宿題やるか」

「ですね」

と話し合った。

こうして、明久達はファンタジアから帰ることになった。

日常とは、儂いもの。

何時唐突に終わるのか、分からない。

明久は、そう思ったのだった。

進展

翌日、明久達は霧島家の一室にて全員で集まって勉強会をしていた。

すると、先に終わらせていた信繁が

「秀吉、大丈夫か？」

と優子と颯馬に挟まれてる秀吉に、視線を向けた。

すると秀吉は、頭を掻いてから

「まあ、なんとかのう」

と答えた。

その直後、優子と颯馬が

「秀吉、そこ違う」

「そこは、こうです」

と指摘した。

それを聞いて、秀吉は修正に入った。

そして指摘した二人は、自分の宿題もやっている。

何時見たんだ、と信繁は思った。

すると、ドアが開いて明久が

「皆、御飯出来たよ」

とカートを押して、入ってきた。

すると、それを見た雄二が

「なんで、明久が作ってるんだ？」

と首を傾げた。

それに対して、翔子が

「……厨房の人が、吉井の腕を知りたいって」

と言った。

その料理人は、明久の調理を見て何かを得たのか、素早くノートに何かしら書いていた。

これが後に、料理人虎の巻、という本になり、料理人を目指す若人達の教科書になるが、それはまた別の話だ。

明久が料理を運んでくると、一同は勉強会を中断。

昼食を始めた。

「今日はシーフード重視だな」

「いい材料が揃ってたからね」

料理を一口食べた信繁が言うと、明久がそう返した。

明久が作ったのは、パエリア、マリネ、ミネストローネである。

男子女子、双方に好評らしい。

全員美味しそうに食べている。

そして食べ終わると、明久は食器類をまたカートで運んだ。

その後を、謙信も付いていった。

どうやら、手伝わつもりらしい。

謙信の宿題は、もう殆ど終わっているからだ。

そして勉強会を再開した優子は、何か分からないのか首を傾げて

「天城くん。ここ、分かるかしら？」

と颯馬に問い掛けた。

問い掛けられた颯馬は、優子のノートを見て

「ああ、そこはこうした方がいいですよ」

と教えた。

すると優子は

「ああ、なるほど！　ありがとうございます」

と微笑んだ。

それを見ていた信玄が

「兄さま……颯馬と木下さんですが……」

と信繁に視線を向けた。

すると、信繁が

「茶々入れるなよ……ああいうのは、本人達次第だ」

と言った。

その頃、厨房では

「明久、颯馬のことですが」

「昨日、優子さんと何かあったんだろうね。初々しい雰囲気だね」

と明久と謙信が会話していた。

明久が洗い、謙信が水気を切り、棚に置いている。

慣れているのが、動きがスムーズである。

「まあ颯馬は、昔から僕達の世話みたいなことをして忙しそうだからね。いいんじゃないかな？」

「そうですね」

明久の言葉に同意するように、謙信は頷いた。

実際、颯馬は昔から明久と謙信のカバーに奔走していた。

その忙しさの中で、自身も勉強していた。

それにより、颯馬個人の時間というのが中々無かった。

それを知っている二人からしたら、少しもどかしい気持ちがあった。

だから今回の進展は、二人からしたら嬉しいことだった。

だから二人は、静かに颯馬と優子の進展を見守ることにした。

そして戻ると

「あ、秀吉には僕と謙信が教えるよ」

「優子さん、自身の勉強をしてください。颯馬、優子さんのフォローを」

と提案した。

すると優子と颯馬が

「あ、うん。分かったわ」

「で、では。不肖ですが、僕が」

と近づいた。

二人の顔は、僅かに赤くなっている。

かなり初々しい雰囲気である。

そして明久と謙信は、秀吉に教え始めた。

その甲斐あったのか、優子は颯馬に分からないところを積極的に聞いていた。

その問い掛けに、颯馬も丁寧に教えていた。

それを視界の端で見守りつつ、明久と謙信は秀吉の間違いを指摘。

秀吉の宿題も進んだ。

雄二と翔子は、二人で互いに宿題を進めている。

信繁は、信玄と幸村の二人を見守りつつ、自身の宿題を終わらせて

いった。
そうして全員は、宿題を進めていった。

最終章

招待

翌日、明久は実家に来ていた。

母親に呼ばれたからである。

「で、呼んだ理由は？」

「これよ」

明久が問い掛けると、明恵は封筒を明久に差し出した。

明久は受け取ると、中から便箋を取り出して一読。

そして

「松永家主催のパーティー……」

「そう。それに、明久を招待するって書いてあるわ」

明久の言葉を聞いて、明恵はそう言った。

そして明恵は

「はつきり言っつて、松永はいい話なんて聞かないわ。あの家は、策略を得意とする家だしね」

と言った

その話は、明久も知っていた。

明久の知っている話でも、松永家の行っていた後ろ暗さは人一倍だった。

しかし、それら全ては日本を守るために行ったこと。

その中には、もし世間に流れたら時の政治家達の評価が一気に地に落ちること、間違いなしの事まである。

吉井が表ならば、松永は裏。

それが、両家を知るもの達の評価である。

「本音を言えば、貴方には出てほしくないわ。でも……」

「出るよ。次期当主としてね」

明恵が最後まで言う前に、明久はそう言った。

すると、明恵は

「貴方なら、そう言うと思ったわ」

と言った。

すると明恵は、一枚の紙を机から取り出して

「これ、持ってなさい」

と明久に渡した。

それは

「これ……帯刀許可証！」

かつて明久が返却した、帯刀許可証だった。

「今の貴方なら、大丈夫な筈よ」

「……わかった」

明恵の言葉を聞いて、明久は帯刀許可証を懐に仕舞った。

そして当日、明久は指定された場所に来た。

某県の、松永家の邸宅である。

その邸宅は、かなり広い。

その広さは、翔子の家に匹敵する。

「流石、表向きは政治家か……」

松永家の邸宅を見上げて、そう呟いた。

松永家は表向き、長年政治に関わってきた政治家の家系である。

その当主は代々、久秀を名乗ることになっている。

そして、今代当主は女性だと聞いている。

「ようこそ、いらつしやいました」

と言ったのは、入口に居た老執事だった。

「既に、他の方々は中に居ります」

「案内してもらっても？」

「どうぞ」

明久の言葉を聞いて、老執事はそう返して歩きだした。

少し歩くと、大きなドアの前に着いた。

そして老執事は、壁のスイッチを押した。

すると、ドアがゆっくりと開いた。

そこは広いホールで、多くの男女が集まって談笑していた。

そして一番奥には、濃い紫色の髪をツインテールにした小柄な女性が居た。

それが、現松永家当主

松永久秀だった。

「貴女が、松永久秀さんですね？」

「初めまして、吉井家次期当主。吉井明久さん」

明久が声を掛けると、久秀は優雅に名乗った。

それは正しく、政治家としての振舞いだった。

だが明久は、久秀の目に暗い光を見た。

その時だった。

「明久」

と声が掛けられた。

振り向くと、謙信達が居た。

「謙信、信繁、信玄、幸村……」

「やっぱ、明久も呼ばれてたか」

「明久、分かっていますね？」

信玄の言葉を聞いて、明久は

「うん……この場所、嫌な気配がする」

と言った。

それは、このホールに入ってから感じていたことだった。

周りに居るのは、明久達でも分かるほどに鍛えられた人達ばかり

だった。

恐らくは、全員が達人級だろう。

それは、立ち姿から分かる。

何故ならば、達人ならではの体重移動というのがあるからだ。

相手はそれを、微塵も隠していなかった。

そして何よりも、明久達に向けられる殺意。

全員ではないだろうが、明久達に向けられる殺意の密度が半端では

なく高い。

「……覚えは、一つしかないかな」

明久はそう言いながら、近くの机の上から料理を取った。

そして、パーティーは始まった。

始動

明久が到着して、少しした後

「皆様、よくお出でくださいました」

と、松永久秀が壇上に上がった。

その姿は、和服を着た美少女にしか見えない。

実質、性格以外は美少女だろう。

だが、その腹の内では何を考えてるのか分からない。

「此度は、私の誕生日パーティーに来ていただき、感謝いたします……

今日は、程よく楽しんでくださいませ」

久秀がそう言うと、拍手が起きた。

その中で、明久達だけが真剣な表情を浮かべていた。

その後、明久達は追加された料理を食べ始めた。

それから数十分は、何事もなく静かに過ごせた。

しかし明久達は、気が気ではなかった。

いつ、松永が動くか分からなかったからだ。

だが既に、松永の策は発動していた。

「ん……」

「明久？」

「ごめん、なんか、少し眠い……」

謙信が明久に声を掛けると、明久はそう答えた。

すると、信繁が

「このパーティーに来てから、ずっと気を張り積めてたからな……疲れ
れてきたのかもな」

と言った。

それを聞いて、謙信が

「すいません。彼が、疲れてきたみたいですので、お部屋をお借りして
もよろしいでしょうか？」

と近くに居た給仕係に声を掛けた。

すると、その給仕係は松永に耳打ちした。

松永は微笑みを浮かべながら、その給仕係に返答。

すると、その給仕係が帰ってきて

「客室でよければ、ご案内します」

と言ってきた。

それを聞いて、謙信は

「はい、そこでもいいです」

と頷いた。

そして明久は、謙信の付き添いと共に客室に案内された。

そして、明久は上着を謙信に預けてベッドに横たわった。

明久が寝たのを確認した後、謙信も眠くなり眠ったのだった。

そして、明久達が眠り始めてから約小一時間後、明久達が居る部屋のドアがゆっくりと開いた。

そこから数人の人影が静かに入り込み、ベッドと椅子に静かに近寄った。

そして、その数人は銀色に輝く物を抜いて構えた。

その直後、布団が勢いよく上がった。

それに侵入者達が驚いて固まった瞬間、素早く明久が動いた。

ベッドから出た明久は、上着の背に隠されていた刀を抜刀。

侵入者達を全員、峰打ちにした。

そして起きたのは、明久だけではなかった。

謙信もだった。

謙信は起きると同時に、袖の中から小太刀を素早く抜刀。

明久と同じように、峰打ちで次々と撃破した。

そして、相手が全員動かなくなったのを確認すると

「明久、大丈夫ですか？」

と謙信は明久に問い掛けた。

すると、明久は刀を収めながら

「大丈夫だよ、謙信」

と答えた。

そして明久は、上着の内ポケットからある紙を取り出した。

それは、帯刀許可証だった。

「まさか、また持てるようになるなんてね……」

明久がそう呟くと、謙信が

「明久……この者達は、全員松永の手の者のようです」
と言った。

それを聞いて、明久は

「分かった……僕達は、信繁達と合流を目指そう」

と言って、客室から出た。

松永に反撃するために。

復讐者の宴

明久と謙信は、部屋から出ると廊下を見渡した。

そして、気付いた

「なんか、誰かに見られてるね……」

「ええ、この気配は……誰か居ますね」

その廊下に、誰か居ることを。

そして、ゆつくりとだが進んでいた。

その時だった。

「疾！」

「殺！」

と両手に短刀を持った黒づくめの二人が、上から現れた。

しかし、明久と謙信は慌てず

「逆巻き！」

「斬月！」

と迎撃。

襲撃者達の武器を破壊し、襲撃者達を無力化した。

そして二人は、床に倒れ伏している襲撃者達を見て

「本性を現しましたか、松永……」

「僕に対する復讐か……」

と呟いた。

そして二人は、奥に向かった。

その奥から、二人

特に、明久に殺気が向けられていたからだ。

だから二人は、その殺気に導かれるように奥に進んだ。

そして到着したのは、あのパーティー会場だった。

ドアを開けて中に入ると、信繁、信玄、幸村の三人が囲まれていた。

「明久！」

「無事でしたか!!」

「行幸でした！」

と三人が言うと、明久達に近かった相手が振り向いて構えた。

すると、一番奥に居た松永が

「ふふふ……やはり、あの程度の障害は突破してきましたね……流石は、剣聖ですね」

と言った。

どうやら、一応は賞賛しているらしい

しかし、その声音には憎しみが隠しきれていなかった。

だから明久は

「松永さん……なぜ、こんなことを？」

と問い掛けた。

すると松永は、声を押し殺して笑って

「もちろん、復讐よ……貴方に殺された、私の義兄のね！」

と告げた。

それを聞いて、謙信が

「貴女の義兄とは、まさか……」

と問い掛けた。

すると、松永は

「そうよ……三年前、貴方に斬殺された高岡茂樹……彼は、私の義兄あに」
と答えた。

「我が松永家は、策謀を担ってきた家柄……故に、外敵が多い……そんな松永家を守る、武の家が幾つかある……その一つが、高岡家……」
松永が語り始めたが、語っていくと周りの憎しみが上がっていく。

「高岡茂樹は、その高岡家の次期当主にして、父違いの兄だった……」
それを聞いて、明久は一瞬息を飲んだ。

「そして我が松永家と高岡家には、共通した目的があった……両家は長い間、裏で活動した家だった……だから我らは、それぞれ武と知で頂点に立つと誓いあった……しかし、義兄は貴様に殺された！」

その言葉を聞いて、明久は固まった。

しかし松永は、そんな明久を無視して

「だから私は、義兄の無念を晴らすためにあらゆる手段を尽くした……貴様が通っていた学園の教頭を買収し、裏から操り、何回も貴様

を排除しようとした……だが、あの教頭は無能だった……自分が高学歴だからと威張り散らし誰かを操るだけのね……だから、切り捨てた……役立たずは、要らない」と言った。

つまり、学園での教頭の策謀

その全ては、松永が操っていたのだ。

「それに、あのFFF団？ あいつらや島田って奴らにも、色々と手を貸したのに、全て失敗した……やはり、バカは使えないわね……」

それを聞いて、信繁が

「まさか、あいつらの武器やあの遊園地にバイトとして入っていたのは……」

と問い掛けた。

すると、松永は

「ええ、そうよ……私の手下を通してね」

と肯定した。

「だから、私は最後の手に出たわ……やはり、自分でやらないとダメね」

松永はそう言うと、明久を睨み

「さあ、剣聖……貴方の罪を償って……ここで死ね」

と憎しみの籠った声で告げた。

こうして、復讐の宴が幕を上げた。

絶体絶命

「行きなさい！」

『応!!』

久秀の指示に従い、彼女の部下とかつての男の部下達数人が明久と謙信に襲い掛かった。

しかし

「八華燈籠！」

「旋風！」

二人の技で、一撃で倒れた。

それを見て、久秀は

「劍聖……そう言えば貴方は、刀を持ってなくなったと聞いてましたが……」

と漏らした。

すると明久は

「確かにね……一時期は、あらゆる刃物が持てなくなったよ……だけどね、何時までも放置する方が問題でしょ？」

と言った。

つまり明久は、PTSDをほぼ克服したことになる。

それを聞いて、久秀は小さく舌打ちした。

(まさか、精神的な弱点を克服するなんて……あいつの精神力を甘く見たわね)

しかし久秀は、すぐに

「それは予想外だったけど、そんな玩具で戦えるのかしら？」

と言いながら、二人の持っている刀を指差した。

今回、二人が隠し持ってきたのは仕込み刀だった。

仕込み刀は携帯に便利で、ある程度は隠し持って動ける代物である。

しかし、欠点として耐久性が著しく低かった。

その耐久性に関して、ある人物が

『まるで、玩具だ』

と酷評していた程だ。

実際問題、明久と謙信が使っていた仕込み刀もたった三撃でヒビが入っていた。

もはや、使い物にならないのは明白である。

しかし、二人は慌てずに

「だからどうしたの？」

「武器ならば、こんなにも有るではないですか」

と言いながら、持っていた仕込み刀を捨てて、足下に落ちていた棒と小太刀を拾った。

それを見てか、数人が明久と謙信に飛び掛かった。

皆様は、達人は武器を選ばずという言葉をお聞きだろうか？

これは、種類を問わずに武術を修めた使い手は武器が変わろうとも問題なく戦えるという意味合いである。

これは、一流の使い手なら特に顕著らしい。

例えば武器の種類自体が変わろうが、捕捉範囲リリーチが変わろうが、一瞬に適應するのだ。

次の瞬間

「変形、秋水！」

「亜種、極光！」

二人は技を放ち、飛び掛かってきた数人を難なく倒した。

それを見て、相手に動揺が広がった。

飛び掛かった相手は、今居る中ではそれなりの武術の使い手だったのだ。

それがまるで、相手にならなかった。

「久秀様！」

「こいつら、強いです！」

部下の内数人が情けない声で報告すると、久秀は苛立った様子で舌打ち。

そして、右手を掲げて

「波十一陣！ 畳み掛けなさい！」
と指示を出した。

それを聞いて、一気に十人程が明久と謙信に突撃していった。その攻めは、正しく怒濤と言えた。

一人の攻撃を受け流したと次の瞬間、その後ろに居た別の一人が攻撃を繰り返す。

それを避けたのと同時に、その相手の背後から、暗器が飛んでくる。息つく暇すらなく繰り返し出される攻撃に、明久と謙信の二人は防戦一方になった。

その秘訣は、一番前で攻撃した人物にある。

攻撃した人物は、すぐに離脱。

そして、形成されている列の一番後ろに回るのである。

これにより、間断ない攻撃が可能となるのだ。

その様子は、正しく波である。

例えば1つ1つは小さくとも、連続して襲い掛かれば集中力と体力を奪っていく。

そして最後には、波に飲倒まれる。

それが、波十一陣である。

その怒濤の連撃を、明久と謙信の二人は連携して防いでいく。

だが、それにも限界があった。

明久達相手に、優に数十人の相手。

正しく、数の暴力。

途中まで防げていた攻撃が、掠り始めた。

そしてとうとう、一人の蹴りが明久に直撃。

その明久を受け止めようとして動きが止まった謙信を、一人が殴り飛ばした。

そして二人は、囲まれた。

信繁達は今だに耐えていたが、フォローに回れる余裕は無かった。

二人の絶体絶命。

それを見て、久秀が

「ああ……ようやく……ようやく……ようやく、私の復讐が成就する……」

と歓喜に打ち震えたながら、自身の体を抱き締めた。

それは、勝利を確信したからに他ならない。

明久と謙信は、互いに背中を預けて相手と対峙していた。
正しく、勝利は絶望的。

しかし、二人はまだ諦めてなかった。
希望を

「フッフ…何を希望にしているか分からないけど、今の状況の貴方達に勝利は無い…」

久秀はそう言って、右手を高々と上げた。

それを見て、部下達は全員構えた。

明久達を、確実に仕留めるために。

そして久秀は

「さようなら、劍聖、軍神…これで、両家は終わりです」
と言いながら、手を

推参

久秀は明久と謙信にトドメを刺す指示を出そうと、手を振り下ろそうとした。

その時だった。

窓ガラスが割れて、数人の人影が突入してきた。

その人影を見て、久秀は舌打ちした。

「七聖剣っ！」

突入してきたのは、吉井家・上杉家両家最強武闘家集団

七聖剣だった。

その後、更に数人入ってきた。

それは

「よう、明久。俺達の力はいるか？」

雄二達だった。

「ゆ、雄二!？」

雄二達が来たのが予想外で、明久は目を見開いた。

すると、久秀が

「彼等もヤリなさい！」

と言った。

それを聞いて、十人程が雄二達に飛び掛かった。

しかしその時、飛び掛かった相手に窓の外から次々と矢が直撃

倒れた。

すると、久秀は外に視線を向けて

「あの杉の木か!？」

と50m程先の大木に、その射手が居ると推測した。

そして、久秀の推測は正解だった。

高さ20mはある杉の木のある枝に、優子が立って構えていたのだ。

『第二射、行くわ』

優子はそう言うのと、矢を立て続けに放った。

その数は5本。

そして優子が放った矢は、全て命中した。
しかし、どうやって狙っているのか。

実は、一緒に突入した颯馬が通信で、何番目の窓からどれくらい離れてるかを伝えていたのだ。

それを聞いて優子が、狙いを修正、放ったのだ。

すると、颯馬が

「明久様！ 謙信様！ これをー！」

と二人に向けて、細長い物を投げた。

それを見た二人は、近くに居た相手をそれぞれ蹴り飛ばして道を切り開いてそれを取りに行った。

途中で何人かが邪魔しに動いたが、それは

「おらあつー！」

「……はっ！」

雄二と康太によって、阻止された。

そして明久と謙信は、颯馬が投げた物。

ヘッドセットを掴み、耳に装着した。

すると

『はあい。明久、謙信ちゃん。無事よね』

と明恵の声が聞こえた。

『今、二人の位置も確認したわ。二人とも、お届けものがあるわ。ちやんと、取ってね？』

明恵がそう言った数秒後、割れた窓の所を何かがあった。

それを見た二人は、明久は高く飛び、謙信は一歩前に出て、それを掴んだ。

それは、二人の刀だった。

「真打ち・明光！」

「永影泉宮！」

なんとその二本は、松永家屋敷の外

堀の外側から、空気圧を使って飛ばしたのである。

そして気付けば、久秀の部下は半分近くまで減っていた。

特に、七聖剣の撃破速度が凄まじい。

次々と、相手を無力化していつている。

そして気付けば、三割にまで減っていた。

「松永さん……確かに、僕は君の義兄を殺してしまった……だけど、この命……失う訳にはいかないんだ」

明久がそう言うのと、久秀は音が鳴る程歯を食い縛り

「そんなこと、許す訳にはいかないのよ!!」

と言って、懐からそれを抜いた。

黒く塗られた小さい凶器

拳銃だった。

「そんな物まで!？」

「貴方を殺すために、闇ルートで入手したのよ」

明久が驚愕すると、久秀はそう言った。

そして、照準を定めた。

謙信に

「謙信!」

久秀の狙いに気付いて、明久は謙信の前に出た。

その瞬間、鈍い炸裂音が鳴り響いて、明久が押し飛ばされるように倒れた。

それを見て、誰もが明久が死んだと思った。

だが

「成功した……」

と、明久が起き上がった。

そして明久は、刀を掲げた。

よく見ると、明久の持つてる刀の鏢

そこに、銃弾がめり込んでいた。

「へ、変則防御っ!」

それは、吉井家が得意とする防御方法だった。

過去には、柄尻で槍の突きを受け止めたとする記述が文献にあったらしい。

それを明久は、土壇場で成功させたのである。

すると、久秀が

「だったら、当たるまで撃つまでっ！」

と言って、狙いを定めた。

その時

「させません！」

と颯馬が、小刀を投げた。

颯馬が投げた小刀は、久秀の持っていた拳銃の銃口に突き刺さった。

それを見て、久秀は引こうとしていた人指し指を止めた。

もし撃てば、銃口爆発が起きるからだ。

そうなれば、大怪我は必至だ。

確かに久秀は、復讐に全てを賭けた。

しかし、明久を殺すことなく重傷を負ったら目的を成すことが出来ない。

その躊躇が、久秀の行動を鈍らせた。

その隙を突く形で、明久達が動いた。

七聖剣や明久達は移動歩法の奥義、縮地で相手に肉薄。

雄二達は、手近な相手に掛かった。

僅か数秒で、七聖剣により残っていた久秀の部下は全滅。

明久は久秀に肉薄。

久秀が持っていた拳銃の上半分を、切り飛ばした。

「終わりだよ、松永さん……君の復讐は、ここまでだ……」

明久はそう言いながら、刀を突きつけた。

そして久秀は、諦めたように俯いた。

そうして、一人の復讐劇は終わりを告げた。

エピローグ 未来へ

その後久秀は、殺人未遂及び殺人教唆の罪で逮捕された。そして、警察に連行されながらポツリと

「もしかしたら、止めてほしかったのかもしれないわね……」
と呟いていた。

その後明久達は、吉井と上杉、武田の三家が用意した車で帰路にいった。

そして明久達は、その後もドタバタしつつも学園で過ごしていた。

それから時は経ち、数年後

『これより、吉井明久と上杉謙信の結婚式を執り行いたす』
学園を卒業して明久と謙信は、大学に進学。

その大学も卒業した後に、結婚式を挙げていた。

その結婚式には、家族だけでなく友人達も全員招いていた。

なお、文月学園卒業後の友人達の進路だが

雄二、霧島財閥直系企業に就職

それと同時に、翔子との婚約を発表。

今は、若き課長としてその腕を奮っている。

翔子、敢えて雄二と同じ霧島財閥直系企業に就職

今現在、雄二の部下として支えている。

秀吉、学園卒業後は大学に進学し、芸能科へ進む

更に、有名な劇団に所属し、今では知らぬ者は居ない若手俳優となっている。

優子、学園卒業後、考古学系の大学に進学

そこで所属した弓道サークルで、一気にその名を馳せる。

今や女性弓道家では、他の追隨を許さぬ存在として知られている。

なお、文月学園三年生時に、颯馬に告白

以後は颯馬を支える重要な存在となっている。

康太、文月学園卒業後は表向きはフリーカメラマンとして活動を開始

風景や動物の写真で一躍有名となり、今やその手の中では有名なカメラマンとなり、世界中を駆け回っている。

しかし実際は、吉井家お抱えの諜報員となり、世界中から様々な情報を入手している。

近い内に、一部隊隊長になる予定。

颯馬、文月学園卒業後は優子と同じ考古学系大学に進学

今や、若き助教授として活動

猫と共に考古学会に出ては、様々な説を発表

日本考古学会の若頭として活躍を期待されている。

優子と付き合い始めてから、かなりスケジュールに余裕が出るようになったとか

謙信、上杉家の当主となりその勤勉さから政治家として頭角を現す

無所属だが、幅厚い年齢層からの信任厚い市議として活動中

近い内、市長選に出馬予定

明久、文月学園卒業後は料理学校に進学

歴代最高の成績で資格を得て、小さいが料理店を開店

口コミから知られて、その価額からは予想出来ない絶品料理を提供する店として、日本中から客が来店

二時間待ちの列が出来るのが日常となる

しかし、友人達の誕生日は貸し切りにして誕生パーティーを開く。

更には、新しく開校された料理学校の教科書に明久の料理ノートが採用される。

まさに、日本料理界のカリスマとして知られることになる。

信玄、武田家当主になり、先代から会社を継ぐ

瞬く間にそのカリスマ性から、見事に会社を発展させる

最近、ある俳優と付き合い合っているとか

信繁、信玄を輔佐する秘書官になる

なお、学園卒業と同時に幸村と結婚

今や、一児の父親

休日には、家族サービスをする立派な父親

幸村、学園卒業と同時に信繁と結婚

大学在学時に出産

大学卒業後、意外にも専業主婦になる

しかしその傍らで始めたブログが人気となり、時々テレビに出演するようになる

しかし過去に一度、愛する子供が拐われた時、愛用の十文字槍を持って突撃

無傷で、子供を救出した

その時の三人の犯人は、幸村の世話により更正

今は、立派な警官になったとか

そして、今日この日

純白のスーツとドレスを着た二人が、新たな門出を迎える

そして二人は、神父の言葉に頷き唇を重ねた